女鑑

第十四年
第三号

發行 明治二十五年三月十二日 第三種郵便物認可

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金三圓六十錢 以上各種

一羽衣コート乙種金壹圓九十錢

御望の方は御報次第説明書并に直段書を呈す



一呉服物一式 其外御禮式御衣裳

其他新規仕立日本衣服品々

一男女御袴 寸尺區別種々調製有之候

發賣元 萬長呉服店

東京市麻布區飯倉町四丁目

電話新橋千百六十七番

御披露

此立田洗粉は世間有りふれたる品と同一視する勿れ能書より御試用の上其効の顕著なるを知られたし、何卒皆様も立田洗粉位にて是れ此通り美人となる事なれば彼是れと氣をもみしでなく「リボン」の商標と御尋ね一日も早く小川商店の清き流れに身を洗ひ給へかし

尚年始、年末の御贈物として高尚優美他に比類なし



注意 近頃弊舗の意匠に擬したるものある販賣所至る所の和洋小間物店、化粧品店及藥舗に有之候間特と右紅葉の登錄商標に御注目の上御購求あらん事偏に奉願上候

東京市神田區岩本町二十二番地

貝々舍

立田洗粉製造發賣元 小川商店

電話本局百十六番

女鑑 第拾四年第參號 目次



第五回内國勧業博覧會褒状
價格比極て低廉なることを以て主眼と致します
小町印
帝都斯學界
唯一の受賞袴
小町印學生袴發賣元
卸問屋
永井本店
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店
電話浪花壱八四壱





西太后

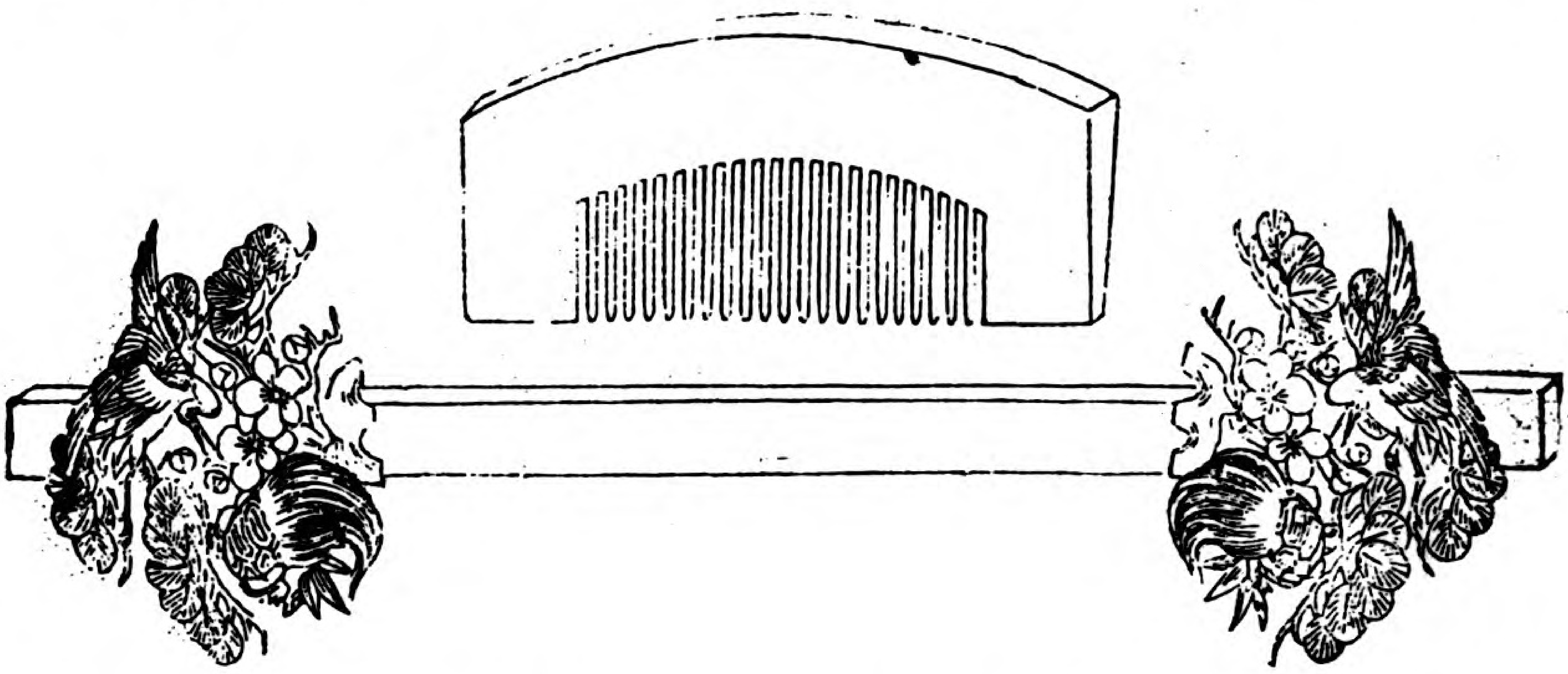
皇后陛下

皇帝陛下

清國皇帝陛下及皇族

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御祝儀用櫛笄



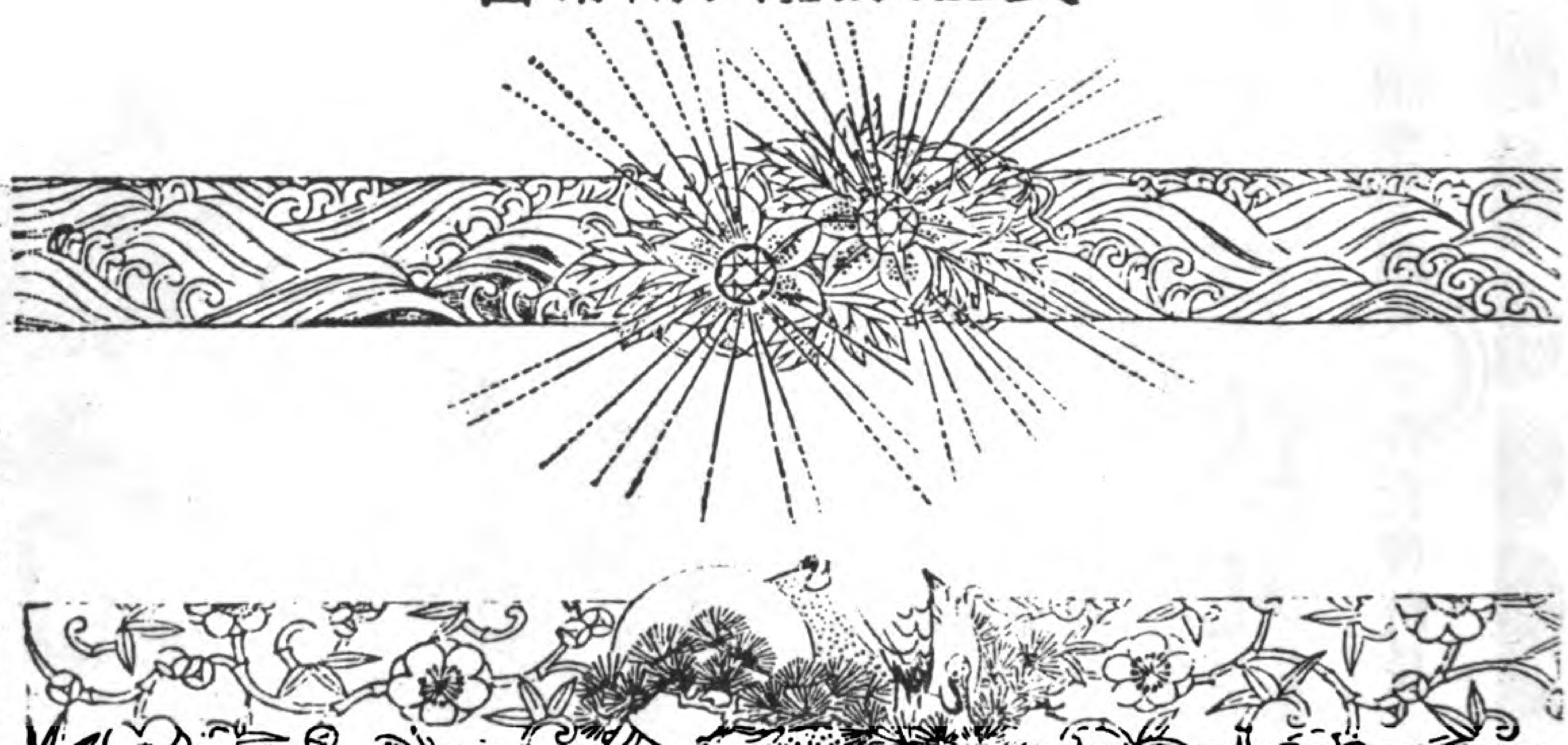
上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳ならざる物少からず此品は鼈甲中の最良質な精選して巧き工の手に成りたる物なれば透明にして狂も生ぜず浮など起さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製一組之價（金三十圓　五十圓　七十五圓　一百圓　一百五十圓　二百圓　二百五十圓以上）

四方張製一組之價（金八圓　十圓　十五圓　十八圓　二十圓　二十五圓　三十圓　三十五圓以上）

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御来車の上見品御高覧の栄を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覧に可供候地方より御注文の節に御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日限は市内一週間地方は里程の遠近に不拘二週間以内は代金又は他品と御交換可致候

貴金製附具帯留



花も鏡も夫々の似合せありてこそすべての價あれ如美はしくとも帯佳なこれは装ひとゝのはず茲に本店新製の帯留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅燻銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を嵌入し紐は繻瀬地の縫に取り又は金襴緞朱珍等いづれも美術の精巧を極めたる品なれば霞の帯の引もきらざる御注文あらんことを

金製彫刻金具付價（十二圓　十九圓　廿圓　卅圓以上六十圓迄）

寶石入金具付之價（二十圓　二十五圓　五十圓以上一百圓迄）

銀赤銅朧銀並彫刻金具付價（三圓　五圓　六圓　八圓以上十圓位迄　各種）

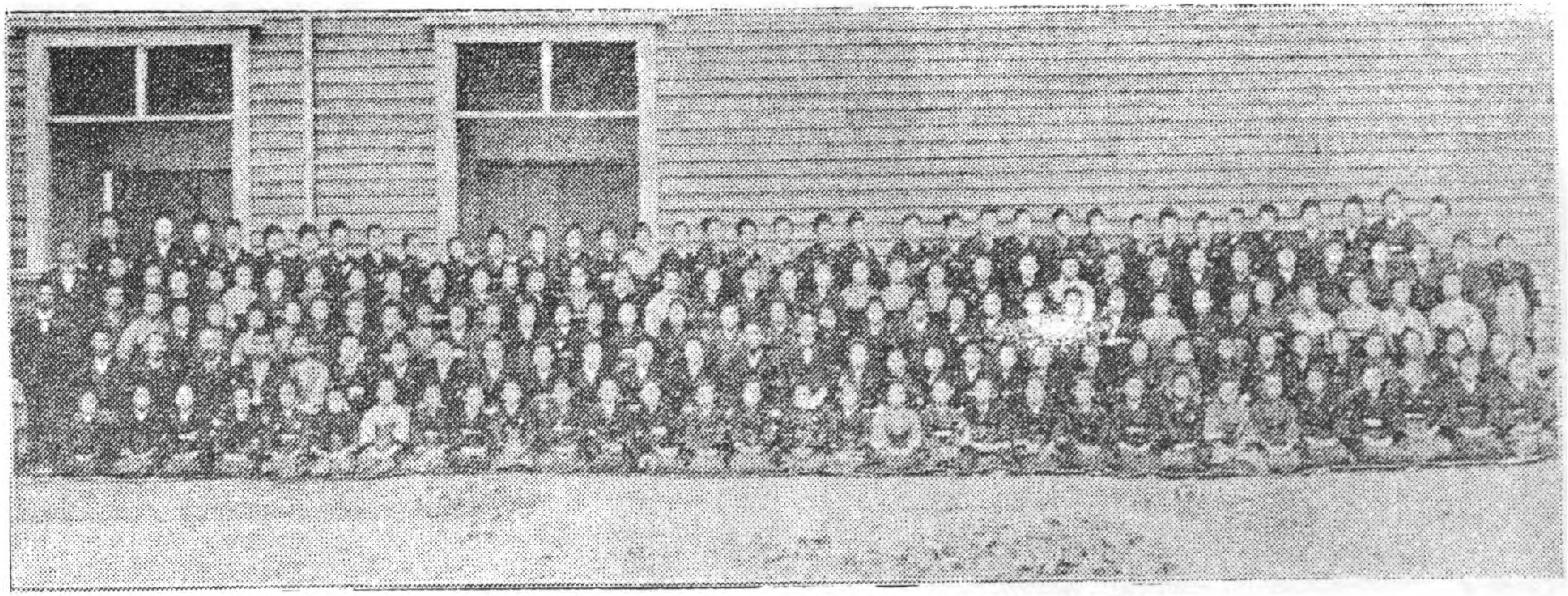
（本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候）

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

電話新橋五五一番



長野縣下伊奈高等女學校職員並生徒

女鑑兼題投稿優等者



椎野秀子



八尾いへ子

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

!!

大町桂月著 **常磐御前**

國府犀東著 **靜御前**

長田偶得著 **顏世御前**

小林雨塔著 **勾當内侍**

濱田廉著 **袈裟御前**

各四六倍判三一切洋装
定價十三錢郵税二錢

!!

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

定價卅五錢 郵税六錢

清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との紛乱の消長よりして椒房の光景を叙し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章を ば内外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕遊習製作の動根に及び往生要集によりて時代精神を陳べ天臺宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を叙し又小説としての源語を許し縱れて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神劇と紫女が源語と比較せり

現今諸名家撰述〇女鑑編輯局編纂

新編 **ひめかゝみ**

近世女子教育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも稱すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を主として重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何を顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨すること久し仍て本書を編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は實なり花あり實ありてこそ始て完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を兼ね備へ玉はんことを

菊版美装全一冊
定價金二拾五錢
郵税金四錢

家庭歌訓 杉谷正隆編

修身百首

菊版洋装
定價二十錢
郵税四錢

發兌元 東京築地 株式會社 **國光社**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

福本日南著

筑前誌

總クロース金字入美本全壹冊

定價壹圓貳拾錢小包料金拾錢

筑前は九州の要衝に當り上世凮に太宰府の置設せられし處應神帝以來鎭西の治と外交の政とを綜統せり爾後郡督府鎭西府探題奉行府等皆此に於てせざる無し日南先生此地に生れ高遠の見と該博の識とを以て研究多年遂に此著あり志たる七篇曰く氣飛曰く國志曰く地名考曰く都邑曰く古歌曰く雜記曰く入筑記而して氣風は九州人の天潰に溯りて人種の本源より發起し其説は實に天荒を破り國志は神武天皇より筍田六輔に至り其間の內政外交治亂興廢偉人桀士碩學名匠包括網羅せざる無し地名考は從來和漢學者の謬妄を一排し前人未發の見を立て都邑は博多福岡の沿革を叙して掌を指ずが如く古歌千載の葩藻を發し併して史誌の參考とす可く讀みて雜記に至れば百貨の市に遊ぶが如く古今に出入し東西に徵證し制度文學風尙博物彙該して遺さず入筑記は先生歸鄕の作凮に傳稱する所なり先生の本志を著す和鋼の遺制再興し益軒の事業を大成するに在り其志の在る故と其書の價値と兩ながら察す可し是れ筑前志たると同時に九州志たり史學文學家は固より論なく政事家事業家敎育家殊に九州の人士は必ず一讀せざる可らざる新著也

▲佐倉孫三著

臺風雜記

菊判大和綴
定價三十錢
郵稅四錢

澁谷愛著

萬國女子風俗

四六版洋裝
定價廿五錢
郵稅四錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十洲翁序
三輪田女學校長 女子大學校講師 三輪田眞佐子著
第拾五版

女子の本分

定價金二十五錢
郵税金六錢 郵券代用一割増

本書初版發刊以來既に十四版に及び發刊冊數數萬部の多きに上れるも購讀者の數依然として衰えず又以て本書が婦女子間に高評を博せるを知るべきなり今や第十五版成る希くは世の未だ本書を閲讀せられざる人々は速に一本を購はるべし若し遲延せば忽ち賣盡して求むるべからざるに至らん

八版
三輪田眞佐子著

女子處世論

定價二十錢
郵税四錢

堀内新泉著

家庭の鑑

三版
菊判洋裝
定價十八錢郵税四錢

本書は章を親子兄弟夫婦繼母嫂養子師弟主從朋友寡婦の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀む人をして感奮興起感極つて泣かしめむとするものあり

生田目經徳編

雅文消息集

菊判洋裝
定價廿五錢
郵税四錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

棚橋絢子刀自著

新刊

女道叢話

著者棚橋絢子女史の現今女子教育界に於ける位地、名望及學識の如何は世の熟知せらるゝところなり、本書は女史が女子道に對する抱懷を記されたるものにして、女學生は勿論兒女を有する父母の必ず一讀せざるべからざる良書たるはまた多言を要せざるべし。

弊社は三輪田眞佐子刀自の『女子の本分』及び『女子處世論』と共に本書を出版して女性諸子に紹介するを以て大なる光榮と信ずるものなり。

菊判和裝美本
定價金三十錢
郵税金 六錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

明治三十七年一月十五日發行　每月二回一日十五日發行　第拾四年第貳號　明治廿五年二月二十日第三種郵便物認可

恭賀新年

明治參拾七年一月一日

◎山葉製風琴洋琴大販賣所
◎舶來洋琴風琴ヴァイオリン大販賣所
◎鈴木製ヴァイオリン大販賣所
◎樂隊用陸軍軍樂隊用樂器大販賣所
◎和洋音樂書大販賣所



東京市京橋區竹川町十二番地

共益商社樂器店

電話新橋五二九番　電信略號キヨ

東京築地株式會社國光社印刷

女鑑

第十四年

第三号

發行 明治二十五年三月十二日 第三種郵便物認可

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金三圓六十錢
一羽衣コート乙種金壹圓九十錢 以上各種

御望の方は御報次第說明書幷に直段書を呈す



一呉服物一式並に御禮服式御衣裳

其他新規仕立日本衣服品々

一男女御袴

寸尺品別種々調製有之候

東京市麻布區飯倉町四丁目

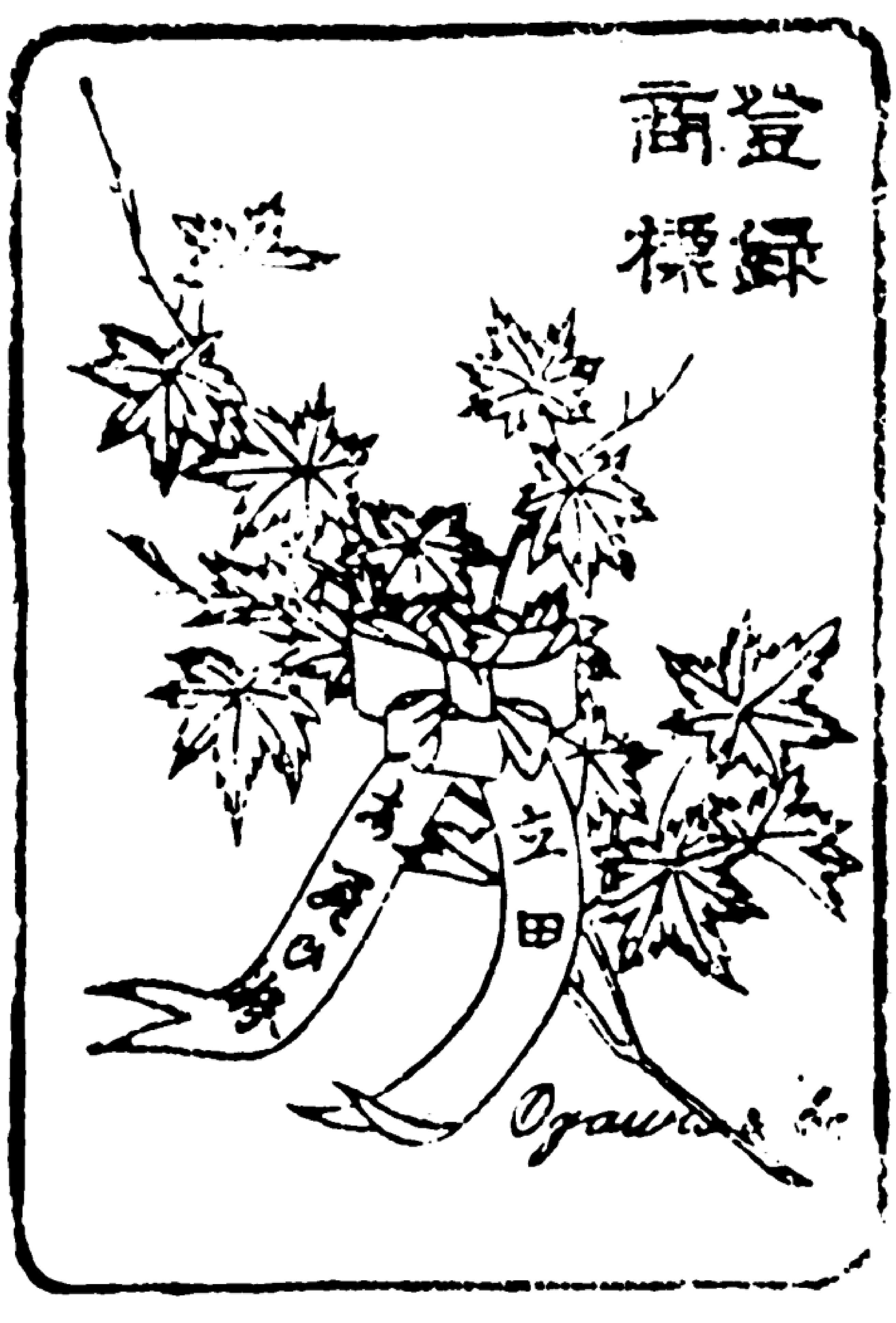
發賣元 萬長呉服店

電話新橋千百六十七番

御披露

此立田洗粉は世間有りふれたる品と同一視する勿れ能書より御試用の上其効の顯著なるを知られたし、何卒皆様も立田洗粉位にて是れ此通り美人となる事なれば彼是れと氣をもみしでなく『リボン』の商標と御尋ね一日も早く小川商店の淸き流れに身を洗ひ給へかし

尙年始、年末の御贈物として高尙優美他に比類なし



注意 近頃弊舖の意匠に擬したるものある販賣所至る所の和洋小間物店、化粧品店及藥舖に有之候間特と右紅葉の登錄商標に御注目の上御購求あらん事偏に奉願上候

貫々舍

東京市神田區岩本町二十二番地

立田洗粉製造發賣元 小川商店

電話本局百十六番

女鑑 第拾四年第参號 目次


第五回內國勸業博覽會褒狀
價格比極て低廉なるを以て主眼と致します
小町印
商標
帝都斯業界
唯一の受賞袴
東京神田區南神保町二番地
卸小賣部
永井支店
小町印學生袴發賣元
卸問屋
永井本店
電話浪花壹八四壹





西太后

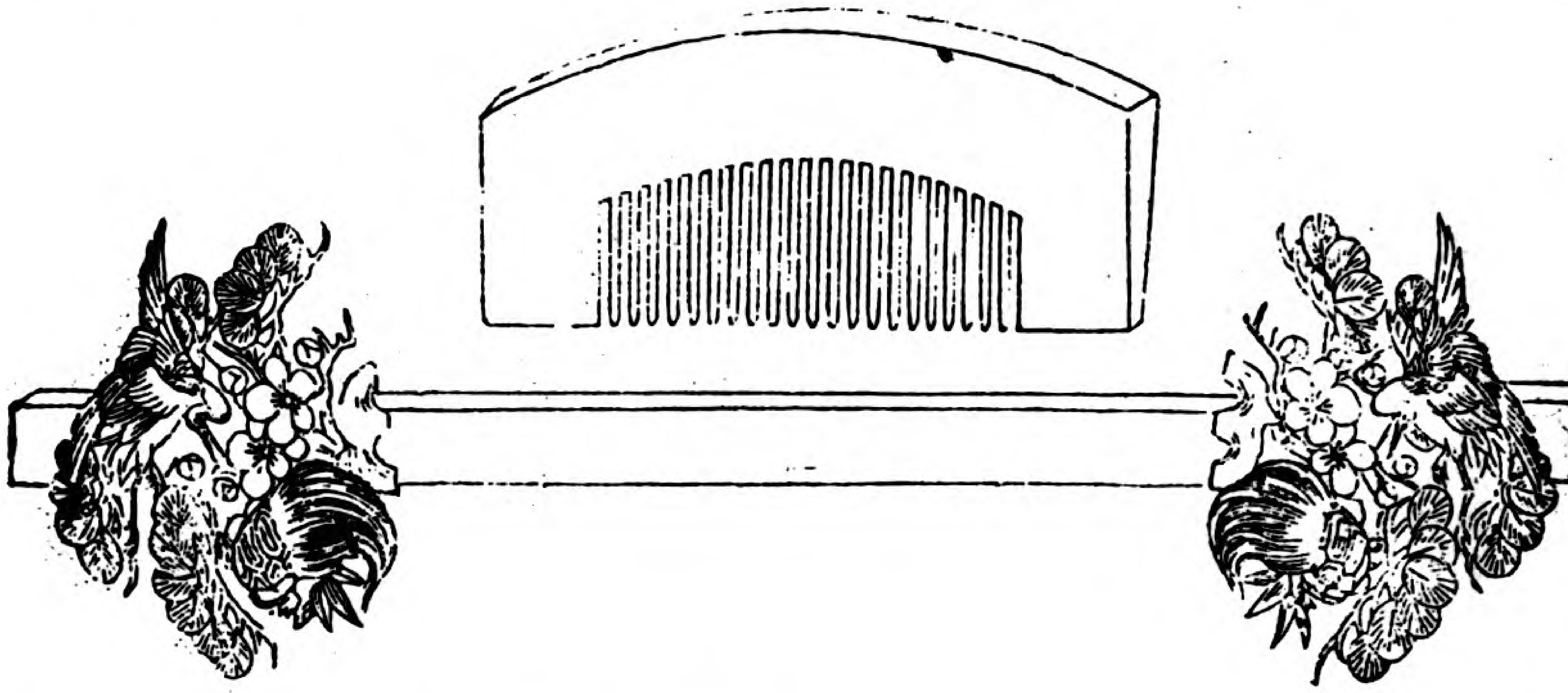
皇后陛下

皇帝陛下

清國皇帝陛下及皇族

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御祝儀用櫛笄



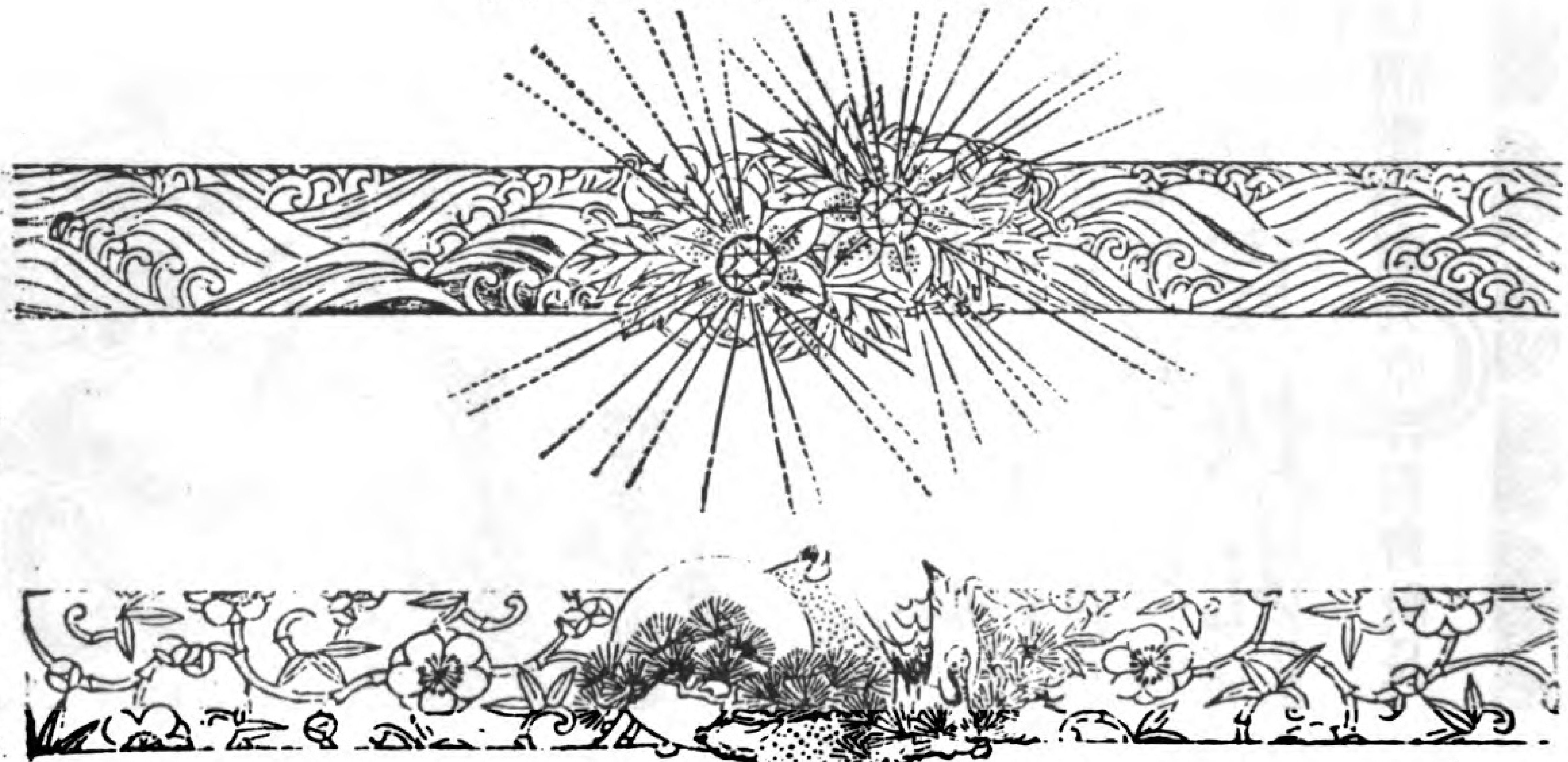
上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て隨一となせど鼈甲の中にも品質の佳ならざる物少からず此品は鼈甲中の最良質の精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず汚などさすが幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製一組之價（金三十圓 五十圓 七十五圓 一百圓 百五十圓 二百圓 二百五十圓以上）

四方張製一組之價（金八圓 十圓 十五圓 十八圓 二十圓 二十五圓 三十圓 三十五圓以上）

右の外御婦人装飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品等種取揃へ居候間何卒御來車の上見品御高覽の榮を賜り度候市内は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節に御用品詳細に御認め代金御送り被下候へば御注文に應じ多數の内より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包懸用致し御便利御取扱可申上候交換日限は市内一週間地方は其程の遠近に不拘二週間以内は代金又は他品と御交換可致候

貴製金具附帶留



花も飾も夫々の取合せよりてこそすべての價あれ美はしくとも帶佳ならざれは裝ひとゝのはず茲に本店新製の帶留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を插入し紐は鳴瀬地の縫に取り又は金襴繻珍等いづれも美術の精巧を極めたる品なれば霞の帶の引もきらざる御注文あらんことを

金製彫刻金具付價（十二圓 十九圓 廿圓 卅圓以上六十圓迄）

寶石入金具付之價（二十圓 二十五圓 五十圓以上一百圓迄）

銀赤銅朧銀並彫刻金具付價（三圓 五圓 六圓 八圓以上十圓位迄 各種）

（本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候）

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

電話新橋五五一番

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

輕便 瓦斯の煮燒 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて専賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に専用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

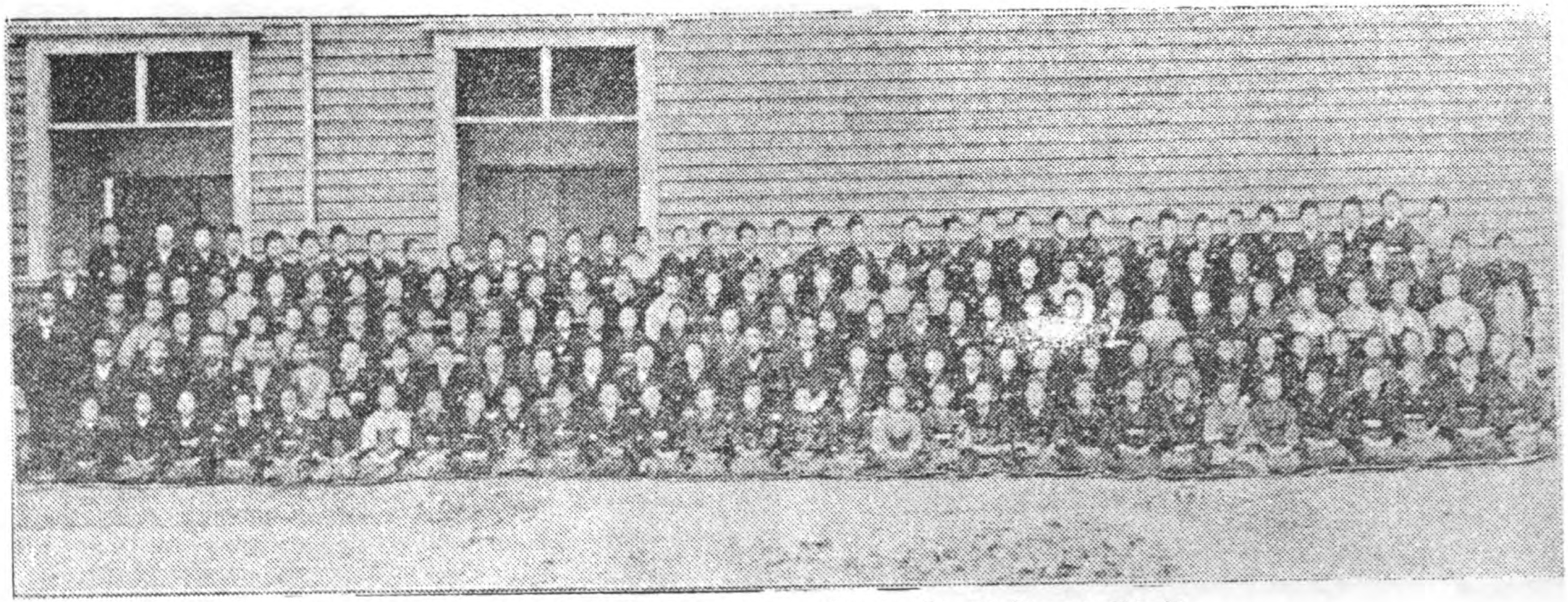
尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座所等へ陳列縦覽に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番、五四八番 二三〇三番



長野縣下伊奈高等女學校職員並生徒

女鑑兼題投稿優等者



椎野秀子



八尾いへ子

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

和氣靄々春風の如き家庭を望む人は必らず本書を讀むべし

慶應義塾教授菅緑陰先生閲
渡部竹蔭君著
最新刊

明治の家庭

（總ふりがな付）

洋裝美本定價廿五錢郵税四錢

いくら多くの富を重ねても、大なる名譽を負ふても、家庭が圓滿で無ければ、其人は最大不幸の人と言はねばならぬ、いくら學校教育は完備しても、家庭が不規則では、茲に養育される子女は皆腐て了ふ。本書は我國現今の、不完全、不規則極まれる家庭を矯正せんが爲めに生れたので、己にも家庭を作られた紳士や奥さんは勿論、苟も將來理想の家庭を作らふと云ふ青年淑女は是非一讀せざる可らざる處の珍書であります且本書の如き家庭書は進歩したる新春の贈答品として最も趣味あるものと考へます

久津見蕨村君著
大好評增訂六版

家庭 子供のしつけ

洋裝瀟洒艶麗々一冊　定價廿五錢郵税四錢

本書は著者が該博の識と多年の實驗に依り家庭教育の仕方を十三章百六十餘條に說き示されたる者なれば婦女子にても容易に理解せられ直に實際に試むることを得べきやう記述せられたる近來稀に見るの好著なり

宮中御歌所寄人中邨秋香先生著
訂正三版

新編書簡法式
新編女書簡法式

總クロース金文字入　定價五拾錢　郵税六錢
洋裝古今無類の美本　定價六拾錢　郵税六錢

書簡文の法式男女に別ちて大成せる者は、古來未だ曾てあらず、蓋し書簡に法式のなかるべからざるは、尚人に禮儀の缺くべからざるが如く、苟も人に禮儀なく、書簡に法式なからんか、其人如何に貴しと雖も、又いかに富めりと雖、一日も交際場裡に立つこと能はざるべし、中邨先生深くこゝに感ぜられ、今日の現状に依り、舊新を對照して以て、時の宜しきに從ひ、適當の式を設けられしものなり、故に人間處世には一日も欠くべからざるは勿論、苟も筆を書簡に把る人は、瞬時も座右を放つべからざる要書なり。

增訂四版

新撰 文章の錦

菊大判三百卅頁餘和裝　無類の美本　定價五拾錢　郵税八錢

本書は現代の文豪中邨秋香先生が該博の識を以て、古學復興以來今代に至る家庭の文中、男女學生の摸範となるべき、美文、記事、紀行、論說、消息、物語、體等、無慮數百編を撰出せられ、之に加ふるに上欄には、雅語數萬を載せ、作習の摸範と應用とに供せられたるは他に其比を見ざるなり、故に師範學校、高等女學校、其他國文學研究の學生諸君は勿論、家庭の御夫人方も作文の摸範として此上もなき良書なり。

發兌元　東京市日本橋區箔屋町十六番地　前川文榮閣

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

傳染病研究所

養生園

東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎**消毒** 傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎**防臭** 便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く惡臭を止む

◎**洗濯** 衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎**入浴** アルボース石鹼を入浴の時用ひよアセボニキビ等を治す

◎**頭髮** 禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の拔けるを防ぐ

◎**毒蟲** 蚤蚊蜂等に刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎**植物** アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

◎**疵所** 突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹼大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地

扇橋製藥株式會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京　博文館發行　本町

女學世界

二月五日發行　第貳號　正價廿錢　郵稅二錢

書畫手本
▲郊外雪景、初午　三宅克己筆
▲稻荷祭…………跡見花蹊筆
▲定家卿鳥花歌……多田親愛筆
▲消息文…………三宅花圃筆

◉女性服論……本田博士
◉女子教育私議……青柳有美
◉新家庭……巖谷小波
○貴婦人の嗜好……中村鈴子
○洋書手ほどき……三宅克己
◉婚禮のはなむけ……島田法學士
◉兒童の天性……鶯溪女史
◉世話女房……戸板關子
◉家政二十四時……河西璞
◉一日醫者……糸左近
◉熱の話……島田濱子
◉滿洲の動物……佐藤禮介
◉英語實習……藤生貞子

口繪
危機一髮、戰塵看護婦、西比利亞の鷲、露國皇后陛下、軍國多事、離別、サガレン島婦人の家庭其他…

◉青年に對する希望……黑岩氏談
○女生徒修養論……永廻鱸江
◉紅葉山人昔がたり……田中夕風
◉露西亞小言……櫻塘山人
◉下女の汽車旅行……江見水陰
◉ハムレット物語……佐藤柳揚
◉米國大統領の家庭……松浦政泰
◉落合直文先生を憶ふ……國分操子
◉簡易西洋料理▲衞生顧問▲戰爭と婦人の覺悟▲軍人と家庭▲技藝十二種▲圖案等

定價　四册七十五錢　八册一圓四十五錢　十六册二圓八十錢　郵稅一册二錢

東京 博文館 本町

刺繡術專門
磯村大次郎君著

實用刺繡術

著者は從來斯術に於て經營慘憺幾多の經驗を積みて現に百餘名の子弟を教導しつゝあるが故に初學者の短所何處に在るやに於て發明する所鮮かならずされは一ト度本書を繙くものは未だ其道を窺はざるの素人と雖も容易に練習して花鳥山水心のまゝに刺繡し得るの良書なり希くは愛讀を給へ

▲全一册　菊判洋裝美本　挿圖數十個入
正價金廿五錢　郵稅四錢

鹽田吳服店主任小岩井君　同鹽田君　共著

●實用裁縫全書

正價五十錢　郵稅八錢

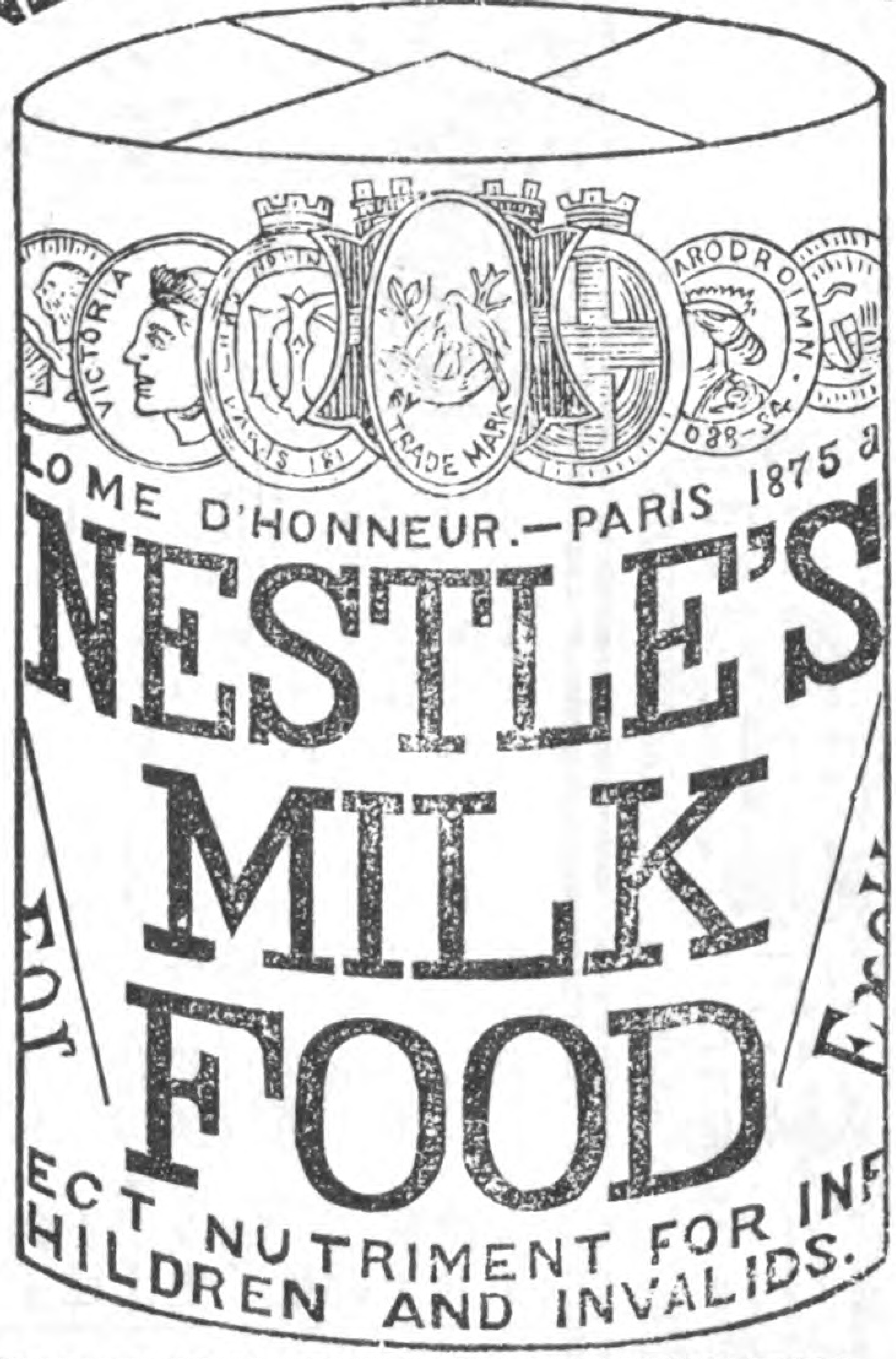
〈裁縫書としては眞に空前の良書なるべく其說く處最も詳しく毎節密圖を加へて精細に縷述せるもの蓋し裁縫の寶典也〉

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下候度

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



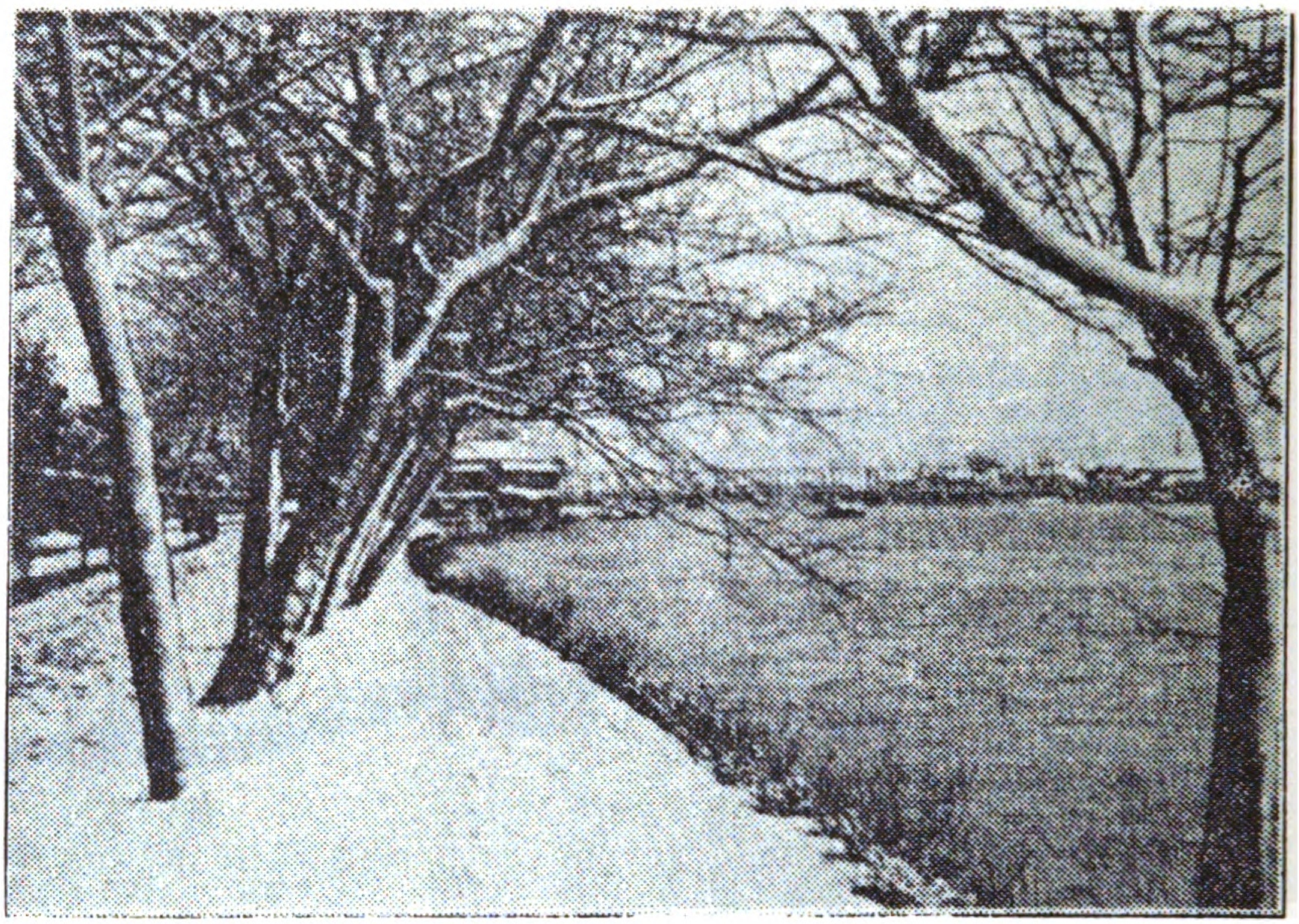
各國帝室御用品
各國醫科大學大病院
醫學博士ノ賞讃ヲ恭フス

（全國洋食品店及藥舗にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

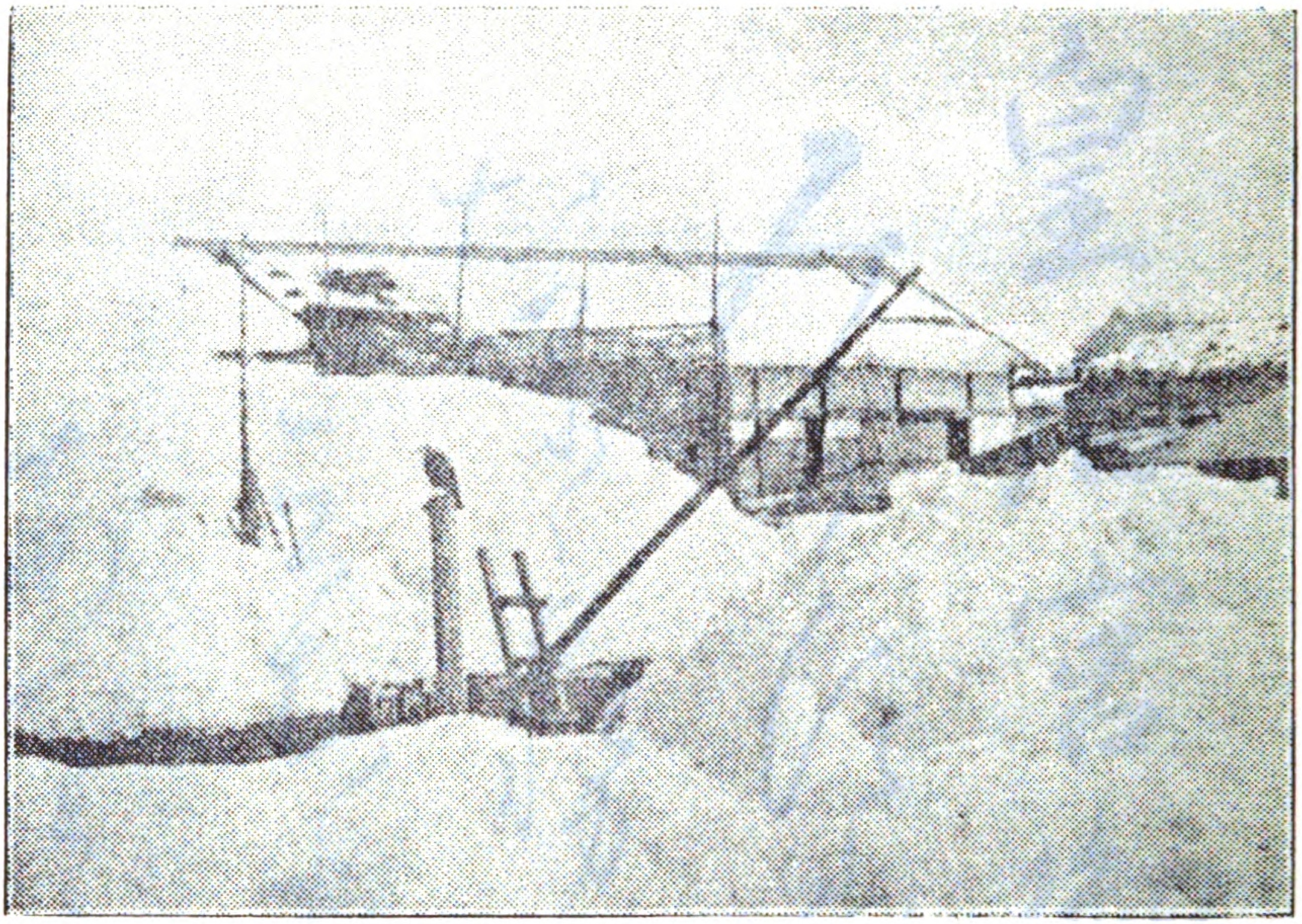
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり



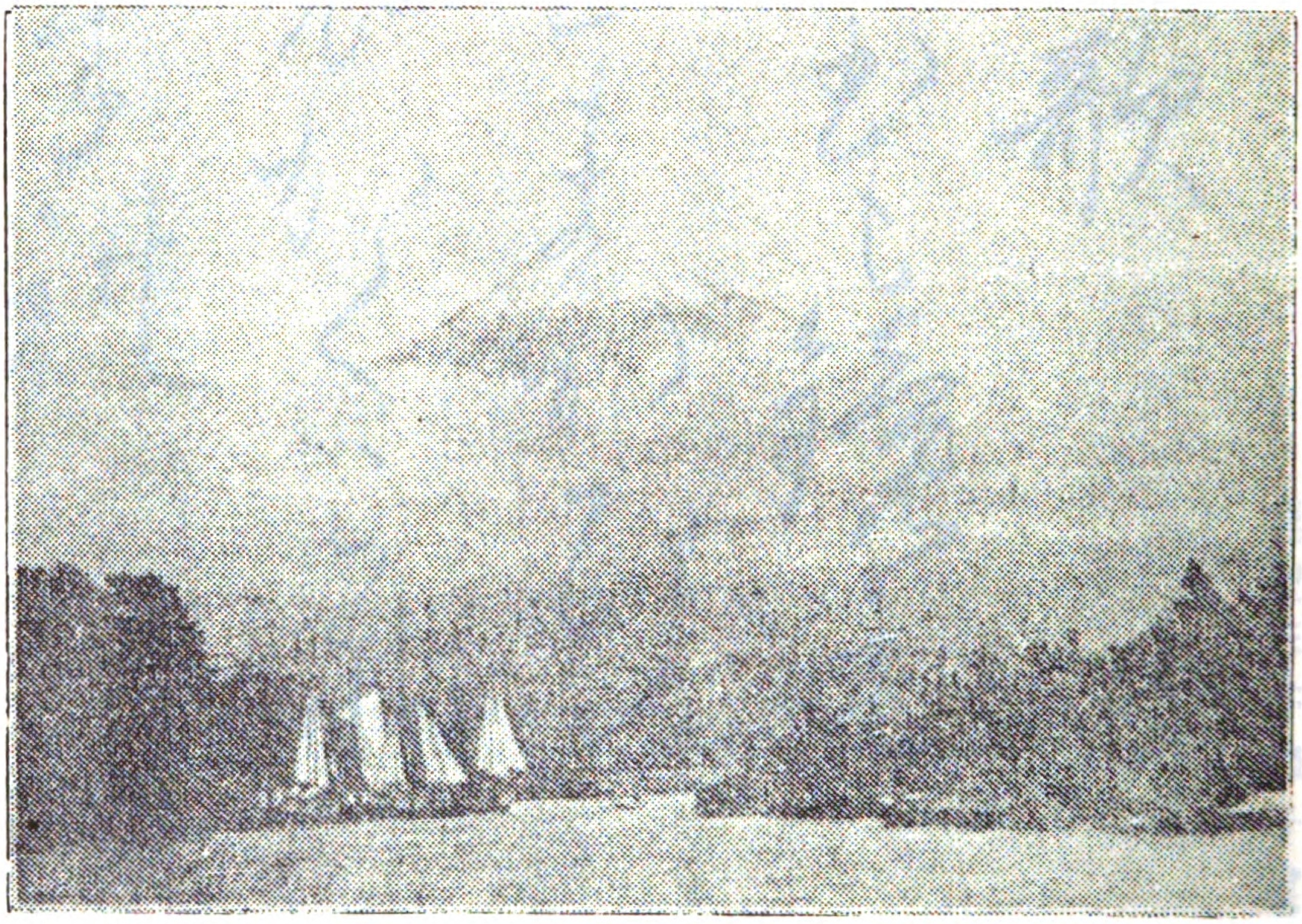
雪中の隅田川



江東の梅林



青森の雪景



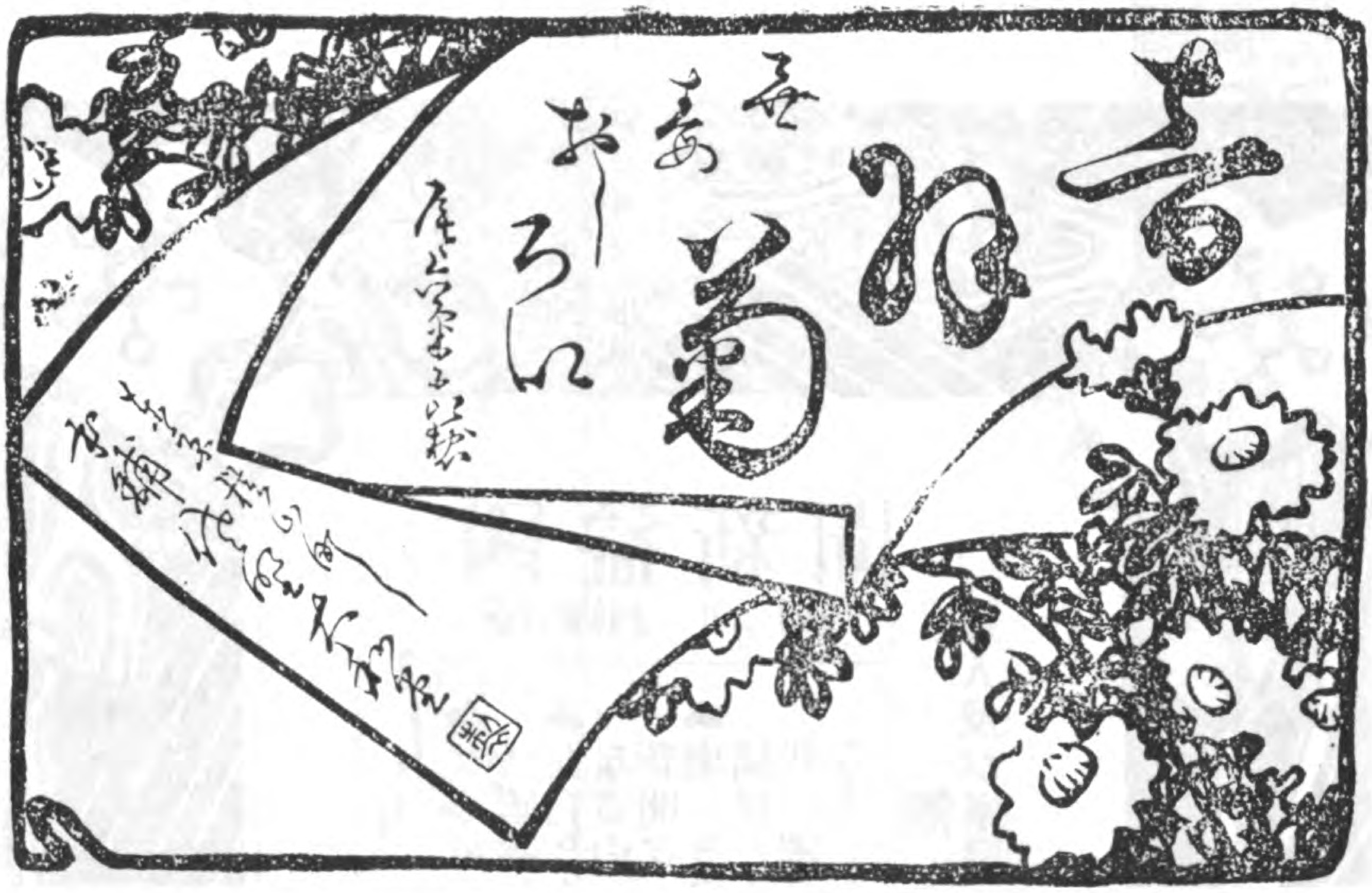
冬の富士山　（富士川より望む）

皇后宮御歌

みかゝすは玉も鏡も
なにかせむまなひの
道もかくこそ
ありけれ

宮里三木枝子書

御注文の節は本鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金二十錢

女鑑
第拾四年
第柒號

改良と擴張

水主青眼稿

明治廿四年八月八日を以て、始めて初號を發刊したる女鑑は、明治三十七年二月十一日を以て、その十數年來持續し來りし毎月二回の發刊を改めて、更に之を一回の發兌と爲したり、是れ進歩といふを得べきか、將た退歩ならざるべきか。而して之と同時に、紙面と記事とに改良を加へて、紙數其他を擴張し、殆んど從來の二倍以上に増大したるは、是れ退歩といふを得べきか、將又た進歩といふべからざるか。

吾が社中に於ても、此事に就きては、議論兩派に岐れて、容易に决する能はざりき。發兌の回數を減縮するは、取も直さず退歩を意味するものなれば、體面上より觀るも、寧ろ増回することそ當然なれ、何を苦

んで、減縮するを要せむや。況んや近時女子敎育と女子問題との俄然盛昌の域に進み、之に關する各種新聞雜誌の如き、やうやく其の進運を見るに至り、女鑑も亦次第に其の發兌部數を增して、兩三年前の景況に比較するときは、二倍三倍の多きを加へ、今後益々盛大の勢あるに際し、今却つて發兌の回數を減縮するが如きは、讀者に對して、其の好意に酬ゆる所以の道にはあらざるべし、といふ者あり。又た假令ひ回數に於て減縮するも、紙數其他に於て、之を增大擴張すれば、雜誌其物の外觀を美にするのみならず其の內容たる記事をも精選して各方面に渉るを得べきが故に、一部購讀の人々にありては、その一冊に値する完全なる智識を博し得べく、又た連續購讀の人々に於ても、前號未だ讀み盡さざるに、後號の早く來るあれば、その間新きを迎へ、舊きを送るの繁もありて、自ら疎漏に流るゝの憂あるを免かれざるが常なるに、今之を減縮するときは、朝夕學科若くは家事の閑暇に於ても、優に本月分を讀み了りて、來月分の來るを待つの餘裕あるべければ、事實に於て、小さき二冊は、大なる一冊に及ぶべくもあらずして、その便、その益、殆んど同日の論にあらざるべし、若し發兌回數の減少を以て退歩なりといはゞ、此の退歩は紙數の增大と、記事の增加とを以て償うて餘りあるにあらずや。といふ論者もありて、議論容易に極まるべくもあらざりき。

是に於て、此の疑議を決せんには、讀者の公論によりて、之が裁決を求むるの尤も穩當なる手段たるを感じ、乃ち之を去年十二月以來の誌上に公掲して、愛讀諸子の公評を仰ぎしに、熱心なる讀者諸子は、速かに之が公平なる裁決を與へられ、前號讀者の回答の項に揭げたるが如く、一回說は、二回說に比して、

稍々多數なるの結果を現じたれば、讀者の意向を容るゝに吝かならざる予輩は、此の公平なる裁決に隨ひて、遂に十三年來墨守したる二回の發兌を改めて、今や斷然之を一回の發兌となしたり。

新聞雜誌の進步が、單にその發兌の回數を增加するにありとせば、此擧や洵に女鑑の退步といふを得べきも、若し公議に依り、輿論に隨ひて、凡ての問題を決するを以て、文明社會の通狀なりとせば、女鑑の此擧や或意味に於て、大なる進步といはざるべからず。若又た紙數を增し、記事を多くするを以て、改良と擴張との實を擧ぐるに必要なる條件なりとすれば、今後の女鑑がその紙數を倍大にし、その記事の材料を各方面に求めて之を增加するは、大なる改良を施し、大なる擴張を行ふたるものと自稱するも、敢て過言にあらずと信ず。

又序でながら、玆に記し置くべきは、女子及び女子敎育に對する女鑑の主義方針のことなり。或者は女鑑を目するに、純粹なる日本古來の女子道を唱道して、毫も文明の何たるを解せざるものゝ如くに誤解し、又或人は、日本主義より急劇なる變化を爲し、今は專ら西洋の主義によりて、女子問題を解決せんとする者の如く思惟するもありて、共に極端の見解を以て、女鑑を誣ゆるの傾きあるは、甚だ其意を得ざること、いふべし。勿論女鑑は日本在來の貞淑典麗なる女子道を重んずるものなり。されど之を重んずるが故に、之を主義として、日新の今日に於ける萬事に處せんと欲するが如き守株迂遠の說を唱ふるものにあらず。又た女鑑は智識ありて快活なる西洋女子を嘉ぶものなれども、之を嘉ぶが故に、一切萬事を西洋主義に據りて、解決せんとするが如き膠柱愚陋の論を主張するものにもあらざることは、兩三年來の社論其他の

記事を一讀せば、何人も之を詳知するに難からざるところなるべし。畢竟するに、女鑑が創刊の初めに於ては、時勢の趨向と、社會の現狀とに鑑みて、盛んに婦德を唱道し、主として日本在來の主義を振張せんと試みたると、近ごろに至り、又た時勢の進步と、社會の趨勢とに據りて、西洋婦人の學藝、智識、及び處世の方法等、採て以て我の短所を補ふべきものを選びて、讀者の參考に供したるとは、かゝる誤解を招きたる原由なるべく、今の謂ゆるハイカラ一派の眼には、數年前の女鑑が頑固一方なるが如くに見え、又た守舊派一流の人々の考へにては、今日の女鑑が、偏ら西洋主義を鼓吹するが如くに思はるゝも無理とのみは言ひ難かるべきが。されど是は全く斯く見るものゝ過ちなり、斯く思ふものゝ誤りなり、罪は女鑑にあらざるは言ふ迄もなきことなれば、わが熱心なる讀者諸子のかゝる誤解に陷ゐられざるは固よりのことなれども、世間往々にして誤見の爲に眞相をあやまるもののあるを以て、こゝに一言辯じ置くも、復た全く無用の辭にはあらざるべし。

兎もあれ、女鑑の今回の擧が、果して、進步なるか、退步なるか、又た改良ならざるか、擴張ならざるかは、議論の爭ひにあらずして、事實の判斷ならざるべからざれば、予輩は讀者諸子に向ひて、敢て將來の誌上に於て、公平なる判決を仰ぐと共に、主義方針といふものゝ如きも、亦た將來の記事、論說に據りて、卜知せられむことを求めざるべからず。要するに、雜誌の編輯また容易の業にあらず。駑馬幸ひに諸子の鞭撻に據りて、重荷を千里に擔ふを得ば、乃ち始めて初志に酬ゆるに足らむのみ。

論叢

日本婦人果して無勢力なりしか

棚橋絢子談

社會上若くは家庭上に於ける、婦人の勢力と云ふ事に付て云つて見ると、歐米諸國の婦人は、誠に絶大なる勢力を有す、間々有髯男兒をして、後に瞠若たらしむる如き模樣があるので、我國に於ける皮相の女權論者は、一見之に眩惑せられ、日本從來の女流は卑屈である、無勢力である、唯だ單に男兒の奴隷たるに過ぎざるものであつたと云つて、一概に排斥し去るのが、此頃思潮界に於て、一の流行となつて居るかのやうに思はれます、ソコデ私は考ふるに、我國從來の女兒は、果して其れ程卑屈で、其れ程無勢力であつたであらふか、是等の事は吾々の深く研究すべき問題であらふかと思ひます。

私の見る所では、我國從來の女兒は、ソンナ卑屈無勢力のものではなく、先づ其家庭に於ては、充分なる勢力を保有して居たものに相違ないと思ひます、既に家庭に於て充分なる勢力を占めて居たとすれば、家庭の集合體たる、社會上に勢力を保つて居たのは、當然疑ふ可からざる事です、昔時に在つて、中流

以上の家庭の、嚴肅にして能く整齊して居た事は、今日から追想すれば、實に欽美に堪へざる次第で、現今腐敗を極めて居る、所謂る紳士社會なるもの丶、亂脈な家庭の有様などは、當時の裏店社會にも劣つて居るやうに思はれます、斯の嚴肅にして神聖なる家庭は、抑も如何なる者の力に依つて形作られたのでしようか、开は謂ふ迄も無く、武士道に依つて打ち固められたる、主人公の力多きに居れど、重もなる主働力は其主婦たる、人の働らきに因つて成されたものです、斯の時代に於て、主婦の家庭に於ける陰然たる勢力は、實に侮る可からざるものであつて、其の子女の薫陶は固より、召使ふ所の奴僕の輩に至る迄、皆な悉く之に感化されたもので、其有様は丁度適當に評すれば紺屋の藍瓶などの如く、一度其中に這入れば、忽ち其色に染まつて仕舞ふと云ふやうなものでした。

然るに其主働力たる處の主婦なるものは、當時如何なる教育を受けて、斯くの如く完全なる家庭を形作くる事が出來たのでしようか、昔時の女子教育と云へば、形式上よりすれば殆んど教育と名づく可きものも無い位ひであつた、寺小屋などに通ふて修業するのは、習字が重もなる學課で、讀書と云つては、女大學や烏丸帖などを唯一の教科書として、素讀を授かる位ひに過ぎなかつたのである、之を今日の教育制度が德、智、體育の三科に分つて、教導誘掖の道至れり盡くせるものに比すれば、殆んどお話しになりません、然るに其教育の結果は如何でしようか、今日完全なる女子教育を受けられた人々の中には、隨分貞淑なる女德を備へ、天晴れ人の妻としては良妻たり、人の母としては賢母たるに足る可き人物もありませう併しながら私の見る所では、概して當世の女學生あがりと云ふものにはお轉婆が多く、一家の主婦として、家庭を能く治むるに適當なる人物は少ないやうに思ひます、成る程、當時の學校出は、讀書、習字、算術などは固より、外國語も出來れば、裁縫も出來、音樂も出來、家庭經濟は固より、庖厨の事迄一切心

得て、誠に重寶に出來て居ります、其の重寶なる點よりすれば、昔しの不完全なる教育を受けた婦人に比すれば、一家を整理するの伎倆は、遙かに卓越して居なければならぬ筈です、然るに其の實際はどうであるかと云ふに正反對です、斯の奇異なる結果は、何に基いて、來るかと云ふに、全く今時の教育の仕方は單に形式計りに流れて、實用と云ふ事に適しないからです、昔しの教育は、前申した通り不完全でした、併しながら家庭の『シッケ』方が能く行屆いて、其主婦たるもの丶、子女を薫陶するの道が宜しきを得て居たから、一家を整理すると云ふ事に付ては、殆んど遺憾なきを得たのです、しかのみならず、其の所謂る薫陶なるものは、單に形式上の事のみに限らず、品性の陶冶など云ふ事に付ても、十分の力を盡したものですから、概して昔時の婦人は、今日の婦人に比すれば、操行の點に於ても遙に卓越してる處があります

私の考へでは、女子の教育は、セメテ十六七歳を限りとし、其年齢以上に達したるものは、成る可く其家庭に於て實地に家事を習はせた方が宜しからふと思ひます、殊に又其學科の如きも、今日の有様では、餘まり多端に渉るやうですから、も少し科目を減し、家庭に極々必要な事のみを學ばしむると云ふ風にしたいのです、今日の父兄たちは、餘まり學校教育に重きを置き過ぎて居るからいけません、間には又學校に通學させて居る間は、餘まり家事などを手傳はせぬ方が宜しいなど丶云て、少しも家事に立障はらせない向もありますが、是等は必竟するに、學問は實地に基づくものであると云ふ事を知らないからです、女子がどれ程學問を深くしても、實務に遠かつて、一家の取締りも十分に出來ないやうでは、決して滿足な婦人とは申されません。

說いて茲に到れば、婦人の勢力と云ふ事に付いて、更らに大いに論せねばならぬ事があります、一は西洋諸國の婦人の如く、常に交際社會を飛び廻はり、男兒同樣の働らきをなして、其勢力を揮ふのと、一は又

日本舊來の婦人の如く、所謂る內助と云ふ事を專務とし、其家庭を圓滿に整理して、子女は固より、奴僕の輩に至る迄、己の德に感化せしむるのと、其の社會に及ぼす所の勢力は、孰づれが偉大でありませうか試みに其大小輕重を比較して御覽なさい。

外に向つて事をなすは陽氣で華やかです、之に反して、細心に內を守るのは、陰氣で餘まり目に立ちません、陽氣で華やかな方は、非常に勢力ある如く、陰氣で目に立たぬ方は、至つて卑屈で、無勢力に見ゆるのは、世間普通の情態です、併し乍ら是は極々皮相の觀察で、其內情を能く穿つて見ると、無勢力のもの反つて絕大なる勢力を有し、表面勢力有る如く見ゆるもの、其實は案外勢力の無いものです。

家を治むると云ふ事は一寸考ふれば、誠に造作もない事のやうです、けれど、其實是れ程六づかしい事は無いので、儒教では天下を治めんと欲せば、先づ其家を治めよと說いてある位ひで、其意は家を治むると天下を治むるとは、其間に唯だ大小の差あるのみで、其理は同一であると云ふのです、是れ程家を治むると云ふ事は困難である、故に是は到底男兒一人の力では十分に出來ない、主人公たる處の男兒は外に向つて事をなし、主婦たる處の婦人は內を守つて、所天を助くると云ふ工合に行けば、始めて圓滿に家庭が治まり、從つて自づから家道の繁榮を來たすものです、然れども若し之に反して、其主婦たる處の者が、主人の爲すが如くに交際社會を飛び廻はり、外部に向つての事のみを經營するやうになつたなら、其家庭は圓滿に治まる事が出來ませうか私の考へでは、如何なる伎倆ある人でも、內をお留守にして、外を飛び廻はるやうでは、困難なる一家の整理は迚も十分に行屆くまいと思ひます、ソンナ人の考へでは、家の事は夫れ〳〵雇人に任かせてあるから、別に顧慮するに足らぬと云ふ了簡かも知れませんが、是が大きな間違ひで、家庭不整理の原因は、何時も斯んな心得違ひから起るものです。

一家庭の不整理と云ふ事は、單に其家庭の不幸のみに止まり、社會には別に何等の影響をも及ぼさゞるやうに思はれますが、中々そうではありません、前にも申しました通り、人間社會なるものは、多くの家庭の集合して形作られたものですから、其分子中に不健全な一家庭があれば、其れ丈けは社會の實質に、不健全なる汚點を印せられて居る譯です。

斯くの如く、家庭の整理不整理は、延ひて社會の盛衰に關係を及ぼすものですから、決して之を輕々に看過する事は出來ません、私は平生節儉と云ふ事に能く心を用ひ、物を麁末にする事が大嫌ひで、どんな物でも、一度用ひたるものは、能ふ可き限りは再び之を用立つ事を心掛けて居ります、今其一例を擧げて見ると、私は先日鎌倉の方に旅行をして居りました、其時私へ宛てゝ來る書簡は、太抵附箋つきで旅行先きへ送られました、其の小いさい附箋の紙片すら、私は決して之を麁末にせず、一々丁寧に剝がして保存して居ります、之は又折を見て、何かの用に立つる積りです、斯くの如く私は、一枚の反古でもあだ疎そかに思はず、一度用に立つた者は、成る可く之を二度用に立て、愈々何の役にも立たぬやうになつてから、始めて之を反古籠に葬むるやうにして居ります、又着物などを大切にする事と云つたら、其れは非常なもので、平日保存の仕方が丁寧ですから、ゾンザイにする人のに比ぶると、タシカニ二三年は長く持ちます、私が平生斯んなに物事をつゞまやかにするのは、强がち一家の經濟から計り打算して然るのではありません、一物の微と雖ども、一度用に立つたものを二度用立つるは、一國の經濟に取つて、どれ丈けの儉約になるか、先づソンナ事から目安を立たので、今單に之を私一個人の事と見れば、誠に些少なものでしよう、併し乍ら、德孤ならず必ず隣あつて、私の流義が一人から十人に及び、十人から百人千人終ひに全社會に及んで來たら、其の社會全體の經濟上に及ぼす所の稗益は、實に恐る可きもので

あらふと思ひます。

斯んな工合で、一家の整理不整理は、どうしても社會の盛衰に關係を及ぼさぬ事は出來ません、只今申した事は、單に經濟上に付ての事のみですが、道德上の事も矢張り其れと同じ事で、家庭に於て道德が能く行はるれば、家庭の集合體たる社會に於ても、能く行はるゝ道理です、されば今日社會上に於て、道德の頽敗其極度に達し、人心の腐敗殆んど救ふ可からざるに至つたのは、其原因何處に在るかと云へば、全く個人の家庭に於て、道德の行はれざる結果であつて、個人の家庭さへ振肅して行けば、社會の道德は自づから行はるゝやうになります。

家庭の整理と云ふ事を煎じ詰めて見れば、實に斯の通りむづかしい問題となります、而して其責任者は誰であるかと云ふに、其家の主婦細君なるものが、即ち其れです、故に人の家の細君として、適當に其任務を盡くすのは決して容易の事ではありません、今日の女權論者などの如く、家事萬端は雇人任かせにして己れは外のみを飛び廻はつて居るやうでは、迚も滿足に家庭を治むる事は出來ません。

私が今日婦人社會に向つて、殊更らに望むのは外でもない、家政と云ふ事に付て、十分尊重の意を寓して貰らひたいのです、今日の婦人は動やともすれば、家に在つて齷齪家事を務むるのを、極めて意氣地無きものゝやうに思ひ、其れよりもイッソ、月給取りにでもなれば、はるかにエライものゝやうに思ふ風があります、是等は飛んでもない間違つた了見です、抑も婦人が家に在つて家政を執るのは、唯だに己の天職を盡くすのみならず、矢張り社會に於ける一部分の仕事を經營するので、其仕事の善惡良否は、直接に一家の幸不幸となるのみならず、間接は一社會の盛衰興廢に關係を及ぼすものですから、充分其仕事に尊重の念を置いて務めねばなりません。

昔時の婦人は、今日の婦人に比すれば、家庭の治め方は遙かに上手であつて、其秩序井然として居た事は迚も今日文明の敎育を受けた婦人の企て及ぶ所ではありません、故に昔の婦人は、唯だ温順貞淑を旨として居りましたけれど、其家庭に於ける陰然たる勢力は、今日の婦人よりもはるかに多く保有して居りました、唯だ男兒の命令に能く服從して居たから、一見卑屈のやうでした、けれど、其中には又凛然犯かす可からざる所があつて、男兒と雖も容易に侮り難き、所謂る一節さむらふとも云ふ可き氣節を備へて居た事は、今日の婦人の見掛けに似ず柔弱にして屈撓し易きに比すれば、迚も同日の談ではありません、故に其社會上に於ける勢力の如きも、華やかに際立つて發現された事は少かつたに相違無けれど、陰然たる大勢力が、婦人の手に存じて居た事は掩ふ可からざるの事實だと思ひます。

歐米諸國の婦人の如く、天晴れ鬚眉男兒をも凌駕すべき有益事業を企畫して、社會の表面に活躍するは、兎に角大勢力たるには、相違ありません、然れども开は唯だ其中に傑出せる有數者のみの働らきであつて、之を一般の婦人が能く其家庭を整理して、社會に貢獻する所の大勢力に比すれば、誠に九牛の一毛たるに過ぎません、此理を深く究めずして、世間の皮相論者が、唯だ一概に舊來の日本婦人は卑屈であつた、無勢力であつた、男兒の奴隷たるに過ぎないのであつたと罵倒し去るは、誠に片腹痛い事だと思ひます、萬事文明國の美風に則るのは善い事には相違ありません、併し其の模倣の仕方は、長を採り短を捨つると云ふ手加減を誤らないやうにせないと、飛んでもない間違ひが起るものです。

（をはり）



良妻第一の實學

リギヨル博士談
前田越嶺記

婚姻するが爲に免狀が要ると云ふ事は、近頃の流行であります、昔は家政を司り、家庭に樂しく暮す爲に免狀が斯くまで必要とは思ひませんでした、勿論心得て居らなければならぬ事は一通り學びましたが學んで了へば直ぐに退きました、免狀々々とそんなに大騷ぎしませんでした、學び得た所は直に實行するやうに務め、學問した事を鼻に懸けるやうな事はなかつたやうであります、學問を實行すると學問を鼻に懸けるとは大變違ひます、今日では學校で學ぶ事で、實用上何の役にも立たぬ事は如何ほどあるか分りません、兎に角役に立つ事で、學ばない方が必ず多からうと思ひます。

モンテーキユが申すに、『最も實用になる學問にして、又最も家庭の母に取りて貴重なる道は、家政學なり、我は年來の經驗によりて、結婚せる婦人に萬德に越えて要求するものは、家事經濟の道なり。』と、家運の消長は婦人の家政如何に依る所大なるものであります、今日は設令免狀の世の中でありましても、男子が妻を娶らうとするときに、第一に考ふる所は、貞操敬虔の次ぎに、先づ其の家政如何と云ふ事でありませう、是れ實に婦人第一の學問であります。

朋友から愛されて居る事や、人から貴ばれて居る事や、下女から能く事へられて居る事などは、家を善く整理する事ほど大切ではありません、西洋では此の如く善く整理のついて居る家には『神宿る』と申します、家運は蓋し之に依りて繁榮するものであります。

史家の言に據れば、那破翁第一世の母は先見と家政の道には最も堪能であつたと申します、家運全盛の時代にも、屢々語つて曰ふには、『此等（榮耀榮華）も皆終局がある、其時になつて我が兒等は果して如何になるべき、全盛の今日には馬鹿らしき義俠を誇つて、金錢を湯水の如くまき散らすのは、前後を考へぬ話である、後日無一物になつたならば、屹度母の許に泣きついて來るであらう、然し母に助を願ひに來るのは人に哀を乞ふよりもまだましである云々』と、如何にも富貴榮華は終局がありました、那破翁及び其の兄弟は傾倒してしまひました、母は難を羅馬に避け、法皇擁護の下に、其の年來の貯蓄を以て生活し八十八歳にして死にました、或人那破翁に問ふて曰ふには、『帝は何處に政治を學び給ひしや』と、那破翁答へて『予は之を母の家に學べり』と、いふたとのことである。

獨逸には庖厨の道は富豪貴顯なる女子にも其の教育の一部分となつて、高貴の姫君でも之を學びます、佛國ルイピリプ王の皇太子は獨逸の皇女でヘレーヌと申す當時淑德美質の聞え高き方を娶りましたが、この年少の御夫婦は屢々儀式儼しき宮庭を出で、都府〔巴里〕の近郊を步行で徘徊なされたのでありますが、或日の事田舍道の眞中に激しき暴風雨に遭ひ、急いで一軒の懸絕てる茅舍に驅込み、風雨の息むを待つて居りましたが、中々息みさうもありませんでした、其内御兩人共空腹になつて堪りません、茅舍の主婦に何か食べる物はないかと云ふに、脂肉と鷄卵の外、生憎何も持合せがないと答へた、妃殿下は斯くと聞くや直に主婦に蔽膝をかしてくれと仰せられ、之れを胸前に懸け、兩の袖を腕までまくりあげ、皇太子殿下の驚き見て居る前で、世にも珍らしきオムレツトを自らおこしらへ遊ばされたと云ふ事であります、其時の御食事の甘味かつたことは言はずもがな、皇太子殿下の仰せらるゝには『我は斯くの如く甘く食べたことは、未曾て一度もない』と厚く御禮を述べさせられたさうであります、其内に雨やみ風靜まりました

から、手厚き謝儀を茅舍の主婦に遺し、御兩人又復た歩行で途に就かれましたので、田婦は兩殿下の御質朴と御健全なのには一驚を契したと申します。

今日女子が文學を知らなくても、理化學を知らなくても、歴史、美術等を知らなくても、事は立派に行はれて往きます、但だ如何にして調理すべきかと云ふ事は少しく之と違ひます、食べる事は是れ人生第一の道であります、勿論之を萬事の上に置くほど貴ぶ譯でもありませんが、今日の實際に益なき學問などに比しては大に之を尊重しなければなりません。

世の細君の中には、良人が家を出で、外で飲食して樂むといつて、嘆息する方がある。勿論此の場合に於ては先づ良人が惡いのであるが、然し細君にもまた罪なしと謂はれませうか、多くの細君は家に於て其の良人を樂ましめる術を知りません、男子が家に在つて第一に希望して居る樂みの中には、確に家事經濟と食膳の調理が主要の位置を占めて居るに相違ありません。

此點に就き大々的奬勵をなすと云ふのは、一寸考へ物であります、少しくいやしい方でありますから…乍併『調理巧なる婦人は啻に良き友を作るのみならず、亦實に良き夫を作るものなり』と云ふは眞理であります、西洋でも、亦日本でも。

〔をはり〕



女子教育新論

岸本家道

一

日本の女子教育は歴史的に秩序的に施さねばなるまい。日本の女子教育はサウ突飛に出來るもので無いばかりでは無くて、我が國固有の美風特點が有るので有るから、それを失はぬ樣に、益發達進步する樣に、教育せねば成るまいと考へる。日本の女子教育の目的は、男女同行して一家を經營し、國家に對して男子と共々に力を盡すとに有ると思ふのである。男女同行とは夫婦相助け合うて、影と爲り形となり實力を以て事を爲すことで、一家を經營するといふことは、趣味あり健全なる家庭を造ることである、我が國古來男女の間柄は同行比肩で、男子が健全にして、實力あると同時に女子の方も矢張り健全にして實力が有つた、男女同行は女子教育の最大なる目的、實力を養成し、國家のために盡す上の目的で、此の最大目的を達するには、其の方法として健全にして趣味ある家庭を造るのが必要である。幾ら男女同行して國家の爲に盡さうとしても、家庭常住に於て趣味無く健全でなければ、幾多の辛勞も水泡に歸して魂魄をして、空しく消散せしむるに至るで有ります、それで女子教育は健全で趣味ある家庭を造るに足るべきものを養成する方法が非常に肝要なことと思ひます、女子をして將來健全にして趣味ある家庭を造らしめ、賢婦賢母たるに耻ぢざらしむるには特別の良方法を以て德育を施さねば成るまい。

二

今日の女子社會は隨分多忙になつた。因循姑息なる我が國の女子を改善せんことは容易の事では無い。無能無氣力なる我が日本の婦女子を見上げる程のものにまで進步發達せしめることは、到底一朝一夕の能くす可き事では無からう。春草の一時に萌え出づるが如き觀ある女子教育をして、燦たる花を着け郁

たる薫を放たしめ、遂に人生の福祉に供すべき收穫の秋あらしむるを得べきか、若し幾とせの春秋を經へ、幾とせの星霜を重ね、花も實も無く、たま〳〵人生を害する雜草の蔓々と茂るを見んか、失望も悔悟も何の効も無い、故に女子教育を論議し關係するものは、將來如何なる女子を作り、如何なる結果を見るべきかを洞察して、今日より其の道程に進行せねば成らぬ。

男子教育も女子教育も同じことで、人間として立派なる品格を備へて國家に有用の人物を養ふにありますが、其の方法に於ては男子教育と女子教育とは非常に違ふので、其の中で最も違ふのは德育なので有ります。

女子は生きた菩薩のやうな德光を持たねば成りませぬ。女子の德操は超然男子の上に立つて世の男子をして羞死せしめる程にエライもので無ければ成りませぬ。是れは女子の體質の上からや、心性の上からばかり云ふのでは無い。天の女子に賜はつた品位で有りますから、世の婦女子方は此の得難い天與の賜を放棄しては成りませぬ。恐るべきは婦女子の墮落で有る。

三

女子は實に心の脆いものである。シエークスピアが處女が其の口頭にて拒む所は其の心中に於て許さんと欲する所なり。彼れそれ一點羞耻の念に抑留せられて然かも其の實は直ちに迫り取られんことを希ふのみと云ひ、女子が男子に迫害されるのは啻に腐敗せるものゝみでは無く、女子全般が其の弱點あるを免れない。故に世の女子は此の弱點を有たぬやうに男子の爲に裝ふと云ふやうなことの無いやうに、卓然其の品格を保たねばならぬ。奴隸の如く、玩弄物の如くならぬやうにせねばならぬ。近來娼妓の自由廢業をして正業に就く者の有るのは喜ばしい現象で有る。

男女の間に高低の差有つてはならぬ。男女の間は密接圓滿であるべきは啻に子孫繁殖のためのみでは無

く、社交上にも國家の安寧秩序を保つ上にも極めて必要なことで有るが、男女交際の上から時として過度の戀愛の熱情が發することが有つて、往々婦女子を迷はせるので、女子は之が爲に一大醜陋を見の果は生命財産を奪はれるのである。女子の立脚地を固めるには此の過度の戀愛と云ふ惡魔を退けなければならぬ。

女子德育の目的は男女を論ぜず、凡ての人間の行爲をして悉く善に出でしめんと期するので有るから尠くとも女子自らが誤るとか、男子の侮辱を受けるとか、斯樣な弱點を持たぬやうにし、男女同行して其の天賦たる兒子教養の任を完うし得可き女子を造るのが、先第一の急務と考へます。

四

女子は男子と異なり情感に於て特種なる傾向を有する。女子の德育中情育には最も注意を要することゝ考へる。女子の情育不完全なる時は女子其のものを誤るのみでなく、男子をも誤ることである。世の女子教育者は此の情育に注意せられ、女子の情緒をして調和清健ならしむるとに務められたいのである、從來の女子の情育は單に柔順なれと教へ立てたので女子は男子の奴隷の如く、甚しきは玩弄物の如く取扱はれ、其の害や女子の靈活を缺かしむること大なるものがあつた。今日の女子には勇氣あり働らきのある人物を要する時代である。女子は一面に於ては生菩薩のやうで、一面に於ては國家の柱となる男まさりのところが無ければならぬ。たゞ情愛の深いばかりではいけぬ。或時は熱するが如く、或時は冷却水の如く、そうして男子の上に立ち毅然として德風を有たねばならぬ。女子の情育には種々な情念の發育を要する。

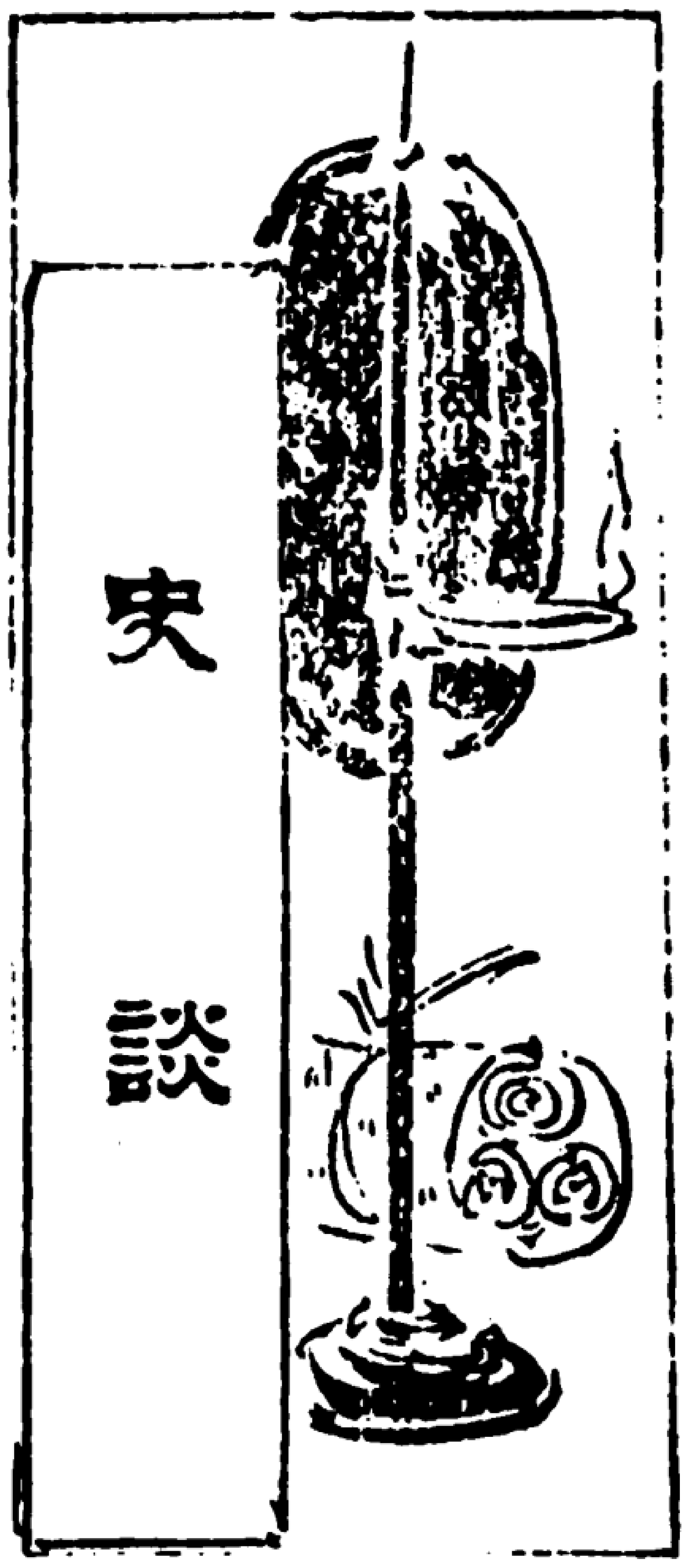
五

女子の德育には忍耐、恭謙、貞操等の諸德を養成するのが最も大切であるが、女子は社會風紀の淵源で高潔で有らねば成らぬから、男子よりも一層情慾を節しなければならぬ。色慾は最も謹まねばなら

ぬことは明かである。女子は此の體慾をば最も愼まねばならぬので、これを缺けば片輪同前であるから此の點に就ては男子とは身體の組織が全く別物で有ることをよく知らせねばならぬ。交際の慾、人は此の慾有るが故に、長短相補ひ艱難相救ひ、其の幸福を增進すること少なからぬ。歐米にては男女交際の道進步し、極めて圓滑の風あれど、我が國の風古來男女の交際は戀愛の情より多く行はれたので有るから、今日に於ても極めて危險千萬のことで有る。併し廣く舞踏會も追々には行はれやうし田舍では盆躍も絕えないだらうから、男女の交際を穩健にする樣に善き習慣を造らねばなるまい。愛の情、これは己と對手との間を和げ朋友家族の間も之が爲に親愛懇篤の交りをなし、一國一社會の間も調和するので、此の情を有つて母らしくし妻らしくし女らしくするのが女子の本分である。恐怖の情、女子は男子よりも此の情旺んなるものであるから世の敎育者は此の情を減却せしめることに注意せねば成るまい。地震などのために死ぬのは女子が男子よりも多いので有るから。忿怒の情。女子此の情殊に強く、俗に云ふ八ツ當りを爲すとか多い。女子には克己心を養はねばならぬ。同情、人の苦痛を見ては之を憐み、恰も我が身に苦痛有るが如くし、又人の快樂を見て之れを喜ぶこと、恰も我が身に快樂あるが如き感を起すことを云ふので、俗に人情の厚薄といふのは此の情の厚薄を云ふのです。女子は愛情と同情とは最も深く持たねば成らぬのであるから、敎育者は之を喚起して社會に藹然たる和氣を充滿せしめなければ成らぬ。是等の諸情を制限し伸暢せしめるのが私の女子德育論の骨子なので有ります。

（完）





阿新丸

倭翁

父は忠臣たり、子は孝子たり、誠に憐れにも健氣なる一條の物語あり、その功蹟は楠子の如く花々敷からねば、自然人々の注意を引くとの淺けれども、それは地位出處の異なれるによりてなり、同じく世の鑑みとなりて、勝れ劣りはありません。

頃は、人皇九十五代後醍醐天皇の御宇に當りて鎌倉執權職北條高時が無道にして天下の政を失ひましたから、陛下には御誅伐遊ばさるゝ思召にて日野の中納言資朝、藏人右少辨俊基、四條中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相成輔等腹心の公卿へ御相談に相成まして、内々軍の御企てがありました、時に同志の一人であつた土岐頼員と申す腰ぬけ武士が、その女房へ物語いたした所から、大事が世間へ漏れまして日野中納言を始め味方の面々何れも北條の爲に召捕られました。

日野中納言は若し天子樣が御關係遊ばしたと云つたら、承久のむかし後鳥羽院を遠島し奉つた先例もありますから、陛下の玉體へ如何なる御災難が降りかゝるかも知れません恐れがあるので、何處までも此中納言が發頭人である、思ふ存分に成敗せよと、云張られましたから、トー／＼資朝卿を佐渡が島へ流人といたしました。

爰に資朝卿の一子阿新丸と云ふは、當年取て十三歳の少年でしたが、九歳の時から學問修行の爲に聖護院の宮樣へあがりましたが、容姿美しく人に優りて悧發な生れであつたから、宮樣の御寵愛深く日夜お側を放し給はず、勉强させられました、

然るに今度不慮のことで、父の卿は召人となり給ひ、母上は居宅を召上げられ、仁和寺の邊りに身を忍び給ひしより、阿新も一先づ宮樣から御暇を戴き安して仁和寺の隱家へ歸り、母上を勞り慰め只管父上の安否を待つて居りました。

所が鎌倉の評議が變りまして、一旦流罪に處した中納言を、更に死刑に處することゝ相成まして佐渡の守護職本間山城入道へ下知を傳へたり。

阿新丸は父の卿がいよ〳〵斬られ遊ばすよしを聞て、無念に堪へません、せめて父上御存生の内に今一度お目にかゝり、且つ御最後の程をも見奉らんものと思ひつめて、泣く〳〵母上へ相談いたしました、母上には、先きに資朝卿と訣れさせられ、今は又一人の子に生訣れなさることゝて、その悲み歎き給ふこと極りなかりしが、さりとて子供ながらも阿新が健氣なる精神を思ひやれば、嬉しくもあり、氣も引立ちて、此時まで只一人付き參れる家來非上助太夫と申すものを副へて、はる〴〵佐渡へ下さるゝことゝなりました。

かくて、阿新丸は母上のゆるしを得ましたから、聖護院へ參りて宮樣へ御暇乞ひ申上げたら、宮樣もその孝心の深きに感じさせ給ひ、母の義は我よきに取計ふ程跡の事は案ずるなかれと、有難き仰せで厶りましたから、悦び勇んで出立いたしました、さて乘るべき馬もなければ、履きなれぬ草鞋を踏しめて、多くの山坂峠を打ち越へ、十日計りかかりて、越前の國敦賀の港まで辿り着きました、明治の少年少女が志を立てゝ、滊車や、滊船で遊學に出掛けるとはことかはり、殿上人の公達が荒き風にも當つたことのない身でありながら、只々父上に御遇ひ申たいといふ孝子の一念で、海山越へて長途の旅び、その憂苦艱難思ひやるさへ涙がこぼれる程であります、この敦賀の港から小さき商船に便船を得て、日本海の荒波にゆられ〳〵て五月の初頃に、恙なく佐渡が島へと渡りました、阿新丸は船の着くとすぐ本間が舘へ參りまして、

都より遙る〲渡海せし一部始終を述べて、取次を頼みましたら、本間家には鞋をぬがせ、足洗はせ、衣物着かへさせなどいたし、一間へ請じて休足させて、諸事粗略な取扱ひも致しません、阿新はかく情ある待遇を嬉しと思ふにつけ、一刻も早く父の卿に御目にかゝりたやと、待ちこがれて居りました。

本間入道は、今日明日に斬るべき人に會せては黄泉の障害ともなりはせぬか、それは兎もかく、鎌倉への聞へも如何あるべきと遠慮して、容易に父子の對面を許しません。

さて中納言のおはします牢と云ふは、本間が館より四五町ばかり隔てたる竹の一村茂りたる所で、堀を堀りまはし、高塀構へて、行通ふ人も稀である、かく父は禁籠せられ、子は未だ稚なければ、縦ひ一所においたとて、何程の恐れがあろう、情知らぬ本間が計ひかなと、阿新丸が恨み歎けるも尤もであります。

五月廿九日に至て中納言の卿を牢より出し申して御行水させました、中納言は久しく牢居せられども未だ一度も湯をさへ仕はせざりしに、俄に行水せよとは、早や斬らるべき時なりと思ひ給ひ、嗚呼うたてきことよ、我最後の樣を見んとて、遙る〲と尋ね下りし阿新を一目も見ずして終ることかとて、其後は何事も仰られなかつた。

夜深けたれば輿さしよせて乘せ參らせ、爰より十町計ある河原へ連れ申し、輿舁き据へたれば、中納言少しも臆したる氣色もなく、敷皮の上に居直られました、何分陛下が隨一の御力と頼み遊ばされ、大事をお打明け給ひたる程の卿でありますから、瀕死の際になりても、聊か未練の樣子があらう筈は厶りません、是れが奉公の終りかとて、心に都の方を伏し拜み、只管皇運の長久を默念し給ひて、徐に辭世を書せられたり。

五蘊假成形　四大今歸空
將レ首當ニ白刃一　截斷一陣風

年號月日の下に名字を署して筆を擱給へば、創手本間三郎秀高お後へ廻るよと見えたが、御首は敷皮の上に落ちまして、骸は端然としてなほ坐せらるゝまゝでありました、此時日頃伺候して、法談など致して居た御坊が、中納言の亡骸を取おさめて、煙となしまゐらせ、弔供養を心徐に營みすませ、夜明けてから、本間が館へ參り、遺骨を阿新丸へ贈りました、阿新丸それを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の御對面終に叶はずして、かはり給へる白骨を拜することよと、シヤクリ上げ／＼悲憤の涙に暮れました、實に理りせめて憐れなることでありました。

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、先づ父上の遺骨は、都より召連れたる助太夫に持せて、高野山の奥の院へ納めよとて、先きへ都へ上せ置き、我身は勞はるよしにて本間方に居殘りました。

かくて本間入道に對面し、父上の御最後によつて歎きの餘り、心地すぐれねば、今しばし逗留したしそれに付ても佛間へ籠りて、父上の菩提を弔らはさせられよと、賴みました、山城入道大に感じて靈魂死して七日の間は其家を去らずと申すことでもあり、誠に御菩提を弔ひなさるゝ御志感じ入申した、何時までも御逗留あつて御追善遊ばさるべしと申しましたから、阿新は乃ち帶び居たる刀を取て入道へ預けおき、それより佛間に入りて、日夜怠りなく讀經しました。

うらめしきは山城入道が心である、今生で父上の御顔を拜せざる殘念さよ、嘸ぞ父上の尊靈も草葉の影でこれのみ思召すことならん、此欝憤を晴らさねば、何とて父上の聖靈へ手向けられうとは、此頃阿新丸が所存でありまして、人知れず髮さか立ち眦さけることもありました、そのゝちは病重しとて、晝は終日臥し居り、夜は忍びぬけ出でゝ本間が寢所の樣子など細々と伺ひおき、隙きあらば、入道父子のうち一人さし殺して、腹切らんも

のと、只管その機を待ちて居りました、或夜雨風烈しく宿直する郎等ども皆遠侍に臥ましたから、これ願ふてもなき幸ひと、本間が寝所へ忍び寄りましたが、今夜は入道常の寝所をかへて何處に居るやら見えません、所が次の間に燈の影が見えますから、是れ入道が子息の寝所ならん、それなりとも討て恨みを晴さんと、忍び入て見ると、それさへ此處に居なくて、中納言を斬りました三郎秀髙が只一人臥て居りました、是れも時に取ては親の敵なりと、思案をきめて走りかゝらんと致しましたが、阿新はもと身に寸鐵なく、敵の武器を奪はねばならぬのであります、然るに燈が殊に明いから、立よらば軈て驚き目醒むることもあらんかと、危ぶんで躊躇いたして居りますと、折節夏のことでありましたから、燈の影を慕て蛾が數多明り障子に取付て居たから、是れ究竟のこと、障子を少し引明けますと、此虫われ一と内に入て、やがて燈火を打ち消しました。

今はかうと嬉しく、直に三郎の枕元に立寄て探ぐるに、太刀も短刀もあつて、三郎は寐入ばなと見えたり、是れ天の助けと、靜に短刀を取て腰にさし、太刀を拔て三郎が胸もとに指當てましたが、さて寐たるものを殺さば死人に同じければとて、則ち足にて枕をバッタと蹴りました、蹴れて喫驚する所を、一の太刀にて臍の上を疊までもと突き通し、返す刀に喉ぶへを指切て、悠々と後の笹原の中へ身を隱しました。

三郎が一の太刀に胸を通されて、アッと云つた聲に番衆ども驚き騷ぎ、火を燃して見れば、血の付きたる小さき足跡あり、さては阿新丸の所爲なり堀の水深ければ木戸より外へはよも出まい、捜出して打ち殺せと、手に〳〵松明を燃し、木の下、草の陰まで、殘る隈なく探しました。

阿新丸は竹藪の中に隱れながら、今は何處へ逃げられう、人手にかゝつて殺さるゝより、自害せんものと一度は決心しましたが、まて暫し、惡い〳〵

と思ふた父の仇を討た上は、如何にもして命を全ふし、君の御用にも立ち、父の素志をも達するこそ、忠臣、孝子の義ならん、一先づ落ちらるゝだけ落ちて見んものと思ひ返しまして、堀を飛び越へようとすれども、何分堀の巾は貳丈もあり、深さは一丈に餘れることゝて、中々工夫も思案も付兼て、途方に暮れて居りました。

所が、その隠れてる竹林は、脊丈け永々と延びた竹計りでありましたから、イザ之を橋として渡らんものと、堀の上へ靡きたる太き竹の梢へ、さらさらと登りましたら、竹の末が向ふの堀岸に靡き伏して、案外やす〳〵と越へられました、何んでも夜の明けぬ間に、一足でも湊の方へと志して野となく山となく盲ら滅法に走りました、されど湊の方角さへ未だ知れぬうちに、夜は早や明けはなれましたから、若し人に認められては悪しゝと思ひまして、麻や蓬の生茂れる中へ身を忍ばせて居た處が、追手らしきもの共百五十騎計り馳せ散て、この邊を十二三才計りの子供は通らぬかと、道行合ふ人々に尋ね〳〵て過ぎ行きました。

その日は麻の中にて日を暮らし、夜に入りて何處ともなく只心當りに行く程に、忽ち年老た一人の山伏に行合ました、山伏は阿新が此處あたりに見なれぬ子供と思へるにや、訝しげに何處より何處へ御渡りなさるかと、尋ねましたから、阿新は隠すことなくありのまゝを語りました、山伏は義に富める者でありましたから、お心丈夫に思召せ湊に多くの商船が有ますから、乘せまゐらせて、越後か越中のうちへお送り申しませうとて、足がたるめば、手を引て呉れたり、肩にのせて呉れたりして程なく湊に出ました。

時に湊の船は皆な出帆した後で、遙か沖にかゝつて居た一艘の大船も、檣を立て、笘をまき、急ぎ、出帆の最中でありますから、山伏は手を揚げ便船呉れよと、聲をかぎりに呼立てましたが、知らぬ振りして湊の外へ漕出したから、山伏大に腹

を立て、沖の船に立向ひ、誦球さら〳〵と押揉で、
『一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者猶如薄伽梵………………明王の本誓あやまらずば權現金剛童子、天龍夜叉、八大龍王その船此方へ漕戻させ給へ』
と跳上り〳〵肝膽を碎て祈りました。
行者の祈り神に通じて、逆風俄に吹き起り、此船忽ち覆らんといたしましたから、舟人共慌て騒ぎ、山伏の御坊助け給へと、一心に船を此方へ漕戻しまして、汀近くなると、直に船頭舟より飛下りて、阿新を負ひ山伏の手を引きて屋形の内へ入れましたれば、風は又もとの如くに直りまして船は勇ましく湊を出帆いたしました。
然るに、この時追手百四五十騎馳來りて、遠淺に馬を控へ、その船までと招きましたけれども、順風に帆を揚げて、ひた駛りに走ましたから、其日の暮方に越後に着まして、阿新はこゝに始めて虎口を遁れました。

この阿新丸こそ、後に國光中納言と稱へられ、父資朝卿のお志を繼いで、天晴れ忠義を抽んでなされまして、長へに我國忠臣の鑑と、仰がれなされた方であります。

（をはり）

那翁皇帝の母

菊地雪子

レチシア、ラモリノ。ボナパルト夫人

マリア、レチシアは、西暦一千七百五十三年八月コルス島のアジヤクシオに生れぬ、父をラモリノと呼びけるが、其頃外寇頻りに國を亂し、國内多端の折柄なるに、ゼヌに抗して又しても戰起りてければ、太刀取る身の恥ぞと、勇み〳〵て戰場に出でしが、遂に果敢なくも道芝の露と消え了んぬ。母君の悲しさ遣瀬なく今よりは纖弱き女の手一ツにて、いかにして朝夕の煙を立つべきか、娘は容色優れたる花の蕾なるに、女の業をし修めさせで、世の少女に劣らんはうしろ

めだやと、ひたすら深き思に沈みけり、か丶りし程に、人の語らひによりてフエスク大尉と契を結びたれば、レチシアを膝下はなさず訓へ育てけり、レチシア養父の家に在りし間、母はまた男子を分娩してジョゼフと名付けしが、後日この異父の姉弟にして、一人は皇帝の母公に、一人は大僧正の榮位に上りて宗教界に、政事界に、名聲芳ばしからしめしとは、人慮り知りなんや。

こぼる丶ばかりの愛を含みたる眼元、笑を帶びたるその口元開けば花瓣二ッ搖ぐ標緻のよさ、そぞろ男子の心動かして、はかなき空想をも畫かしむ、レチシアが十三歳の花の春、そが身にか丶る一事こそ起りたれ。

シャール、ボナパルトと呼べる十八の美少年、資質の美さへ世に絕れたるが、若き血の湧きけるにはあらで、ゆかしの眞心より、レチシアの父母に其愛娘を我れに賜ひねと、やがて約して我のみ眺めて花を人な手折りそ、來ん年は髮上げさせて、新郎新婦と月の夕、花の朝はれらかに世を送りなんなど聞こえけるに。はや佳辰を卜して嘉禮を擧げぬ。嫋かに咲き誇りたる花いとしや雨風に曝されんは、若き妻母三の產褥にこたびやうやう男子擧げたるを歷び、ジョゼフと名付けたり、これ實にボナパルト家の嫡子にして、後にエスパギウ王の位に登りたる主人なりき。

されど未だ戰爭の斷間なかりき。コルス人の愛國心強固なるに、防禦嚴にして之拔くべからざれば、ゼヌ軍退き、佛兵交迭しぬ。コルスにてはパスカル、パオリ軍を督せば、島民應じて屍を野山に曝らすとも敵にな降りそ、後ろをな見せぞ、寧ろ獨立の旗下に死して榮とせよ、一致協同奮つて敵兵に當りたる其の勇氣鋭鋒恐るべかりし、包圍月を渉れど陷るを得ざりき、シャールボナパルト副將となり、帷幄に於て企計を巡す間、夫人は何處までも苦樂をともにせんと、赤兒を腕に抱かへ、產期に近き重き身を、矢玉霰と降る中に、山越え野路の草枕、流を渡り、

森に彷徨ひ、ほづゝの響きもゝのかはと人々を勵ましゝかど、勇猛なるコルス兵も遂に佛軍に破られ、將軍パオリ英國に逃走しけり、されどシャール、ボナパルトは、夫人の歎願によりて本國に止まりぬ。

那翁の誕生。――家庭敎育

頃は一千七百六十九年八月十五日なりき、空朗かに靑葉若葉を照らす日の光あざやかなるに鐘鳴りて、其音空に渡り、水に響き、餘韻コルス人の胸に通ふらん、この島が佛領となりし祝祭捧ぐる御寺の鐘平和を齎す餘音裊々たり、市内は生花と靑葉とをもて飾られ、人々新衣翠粲を着て祝ひ合ふてぞさまよひぬ、かゝりける時にアジヤクシオの大堂に年若き女來りて祈禱を捧ぐるありけるが、これなんボナパルト夫人なりしよ。

聖祭未だ終らざるに、卒爾に腹痛を覺えたれば、急ぎ家に歸れるが、數時を經て英才ナポレオン出生しぬ。三十二才までなほ三人の男子ルシアン、ゼローム、ルイと、三人の女子エリザ、ポリヌ、カロリヌを產みけるが、夫はかりそめに病より遂に歸らぬ世の人となりぬるぞ憐なる。

饒にもあらざりし家財をもて、八人の子を養育することの難ければ、伯父君なる大僧正ルシアン、ボナパルトに管理萬端を依賴したり、伯父君は殊更ナポレオンに意を用ゐて敎育し給へば、母君は針とる業を勤めつゝ、そが側に侍りて聞き居たり、母君も讀書習字などを自ら授け給ひて、秋の夜長の物語、長閑なる春の逍遙にも、智を磨き、德を養ふべかりし敎訓をのみし給ふも、他の兒女にはさしも見受けざることとなりき。

那翁童なりし頃、隣村の農夫彼を見て夫人に言ひけるは、「若旦那は長命なされば世界第一の人になり給ふべし」と、あらず、絕倫の英雄は三十有餘にして世界第一の人と、其の名を轟かしぬる、農夫の言を追想すれば、母君老いての樂みは是に過ぎたるものはなかりしなり。

勇氣ある夫人は愛に溺れず、時には嚴にして兒女を

よく服從せしめ、幼少より僞を言はせず、秩序を守るべく敎ゆれば、那翁幼時に感染したるこの習慣は、成年の後にも天性と化したりき、固執にして躁暴不遜なる那翁は、我意を張らんと常に兄弟朋友と爭ひたり、墻を越えて隣家の木の實を取るとあれば、母君いみじう懲らしたまひき。げに賞罰兩つながら公平にしたまふ母君の誡は、未來の大英雄の那翁をして敬服せしめぬ、母は常に劍、大砲などの玩具を賞として那翁に與へ、幼少の頃より勇敢の氣を鼓舞せしめしも、蓋し後日那翁を那翁たらしめし所以なるべし。

伯父君は特に那翁を慈み給ひて、臨終の時云ひけるは、『那翁に財產分與するは無益なり、彼は自ら財寶を造らん、ジヨゼフよ、汝は嫡子に生るれども、那翁汝の上に權を有つべし』と、母君の資性を受けたる甥の將來は、伯父君預め知り給ひし所にや。

那翁二十二才にして砲兵中尉に昇進しけるが、戰場に臨める時も必ず母君の意見を覗ひ、一度だに失敗せし事なし、コルス島が佛國の配下に屬してより、二十年を經てパオリ英兵を率ひて來たり、海陸勢を合せ進んで城下に迫る、夫人は怯する色なく、我等悉く佛國の國民なりと言ひ遣りぬ。

敵兵四面より合擊し火を放ちければ、夫人は兒女を伴ひて山頂に逃れたり、かくて眼下に我家の燃ゆるを瞰し憤激に堪えず、叫びて言ふ、『佛國萬歲……我等は一層美麗なる家を造らん』と、將來を自信して斷乎として言ひし、嗚呼この女丈夫よ、一夜の灰に燼滅したる都下を離るれば、遙か、冲の方より佛國の艦隊岸を指して來り、那翁の其艦に乘込み居たるを見る、海原隔てゝ互に見合す顏と顏、那翁母弟妹の恙なきを見るより默し兼ね、小舟に移らんも心もとなしとて直に海に飛び込み、山と高き浪を凌いで岸邊に着き、母子涙にくれて打喜びぬ。

分け行く跡の白浪と故鄕を遠くよそにして、佛蘭西のマルセイユに上陸し、此處に地を卜して住ひけり、さてもボナパルトの寡婦は夫死して後、氣丈に

も八人の子を養育せしが、パオリ黨に組せざるをもて、家さへ財さへ取り棄て、他鄕に來たりしが、或る貴族の好意を受け、細き煙を立てたり、かく逆境に身を潜むれとも、夫人は鋭意兒女の躾方を勸めたり、曉告ぐる鷄の聲と共に寢床を離れ、一日の家事を整へて、三人の娘に分擔し、姉は市に行きて物買ふべく、中は食物を調理すべく、末は計算掛となり、又殘食を門乞ふ者に施すべく、それ〲務を配當しぬ。夜は母子相集りて紡績、裁縫を勉むる間、中なる娘に新聞雜誌などを讀ましめ、母君は歷史、物語の類、特に父君愛國の功蹟を語り給ひたり。

幸福の光

那翁は連戰連勝ツウロン市が嘗て英人に陷れられしを奪ひたれば、其の功により砲兵中尉より一躍大將に昇進し、ボーハルネ未亡人ジョゼフィヌと婚を結び、嫡男ジョゼフはマルセイユ市の一商富豪の娘を娶り、長女エリザは將軍バクオシーに、次女ポリヌは將軍レクレルリに嫁すべく約整ひたりき。

猛烈なる那翁は兵を勵し、軍を麾き、アルプの嶮岨を越え伊太利に侵入し、大に戰ひて之を降したり、勝利の報一度マルセイユに達するや、市民は歡々として祝賀し、子の代理に勝利の枝を母公に送り、その大功を賞し合ひぬ。

那翁は埃及遠征を企て、艦隊を率ひて途に上りたるに、ルシアン、ポリヌ、ジョゼフィヌ等はパリに止まりたれば、夫人も共に在しき、されど、ジョゼフィヌは輕噪奢侈の婦人にして、華々しく外見をのみ裝ひければ、質素に慣れし母公と自ら嗜好の齟齬、感情の衝突を來すこともありて、姑嫁の間さほど睦ましからざりき。

皇帝の母君

那翁皇帝云はく『兒の將來は全く母による、我が財寶は母君の賜なり、そは母君我を奬勵し、勇氣を鼓舞し給ひたればなり』と、斯くて英偉の君は母公に對する尊敬と報恩との念厚かりき。

那翁は母公と共に在すべく歎願すれども、頓の榮華

を貪るは、先見秀れたる失人のつゆ喜び給はぬ所なれば、獨り自ら華美快樂と遠ざかり、閑靜質樸の地に赴き、一家團欒の時のみ宮中に在はすを、こよなき慰とし給ひたり。

那翁ジョゼフィヌを娶りたるを母君喜び給はざるに其の女オンタンスさへルイに嫁したるは不快なり、と母公常に思召し給ひぬ。さるにルシアンは那翁の拒めるをも聞かで、マダム、ジュルベドッウと結婚しければ、那翁大に憤りてルシアンを宮中より逐ひ出し、兄の名を辱めしとて國外に放逐しけり、那翁次で總督政府を顛倒し、モロー將軍を逮捕せしめ、アンジアン公を銃殺せしめしなどは、母公の心をいたく悲しませたりき。

かくてルシアンは妻と手を携へ羅馬に到れば、母公もルシアンを憐み苦痛に堪えられず、自らも日ならず其の地に赴き給ふ、那翁大に怒りて『兄に從はぬ弟を特愛する道やおはする』とて母公を責む、されど母公云ふ『八人の子の内にいとも不幸なる兒こそ尤も不愍なれ』と仰せ給ひて、羅馬に行きて歸られず

一千八百○四年八月二日那翁即位の式を行はんと、敎皇ピオ七世に臨御戴冠を請ひたれば、國民足を空に騷ぎ立ち喜びて。那翁亦母公の臨駕をも請ひたれども、ルシアンの勘當免されざる上は、盛式に臨ませらるゝを欲せずとて、同月廿日パリに歸り給へりまことや那翁不滿の餘り、母公をして遂に大后の位に上らしめず、母公殿下として一生を送らしめたり翌年五月廿二日勅令を發し、十萬金を母公宮殿建築費に充て、貴婦人等に命じて侍らしめたり、母公は廣大なる家屋、眺望勝れたる土地を好ませ給へば、那翁はボン、スール、セーヌに光輝灼爛たる宮殿を造らせ、近衞隊に護衞せしめて、御幸せさしめき。

母公は動作言語凡てに質素を守り給ひ、慈愛厚く、貧者を憐み給ふこと深かりしかば、はやくもボン市民に尊敬せられたり、金銀を出して困窮者に施し給へば、數月を經ざるに家々賑はひ、人々太平を謠ひて皆其の德に懷きぬ。母公はまた慈善會の總裁と成

らせ給ひ、屢々病院に御幸あられ、親しく患者を慰藉し給ひたり。パリに入らせ給へば、ブリエンヌの宮殿に在しき、皇帝は諸種の儀式に母君たるの資格をもて、華々しく臨御せらるゝを欲し、鄙びたる言語擧動を廢し、都の風俗に習ひ給へと乞へど、ゆめ聞かせ給はねば、那翁は堪えずして『お母さんは、ほんたうに田舍者で困ります』と云ひたりき、兄弟集いたる時皇帝云ひけるは『母君は朕をナポレオンナポレオンと呼び給へど、我はそを好まず、兄君よ御身よりかくと母君に仰せ給へよ』と、皇兄ジヨゼフに依頼しけり、母公これを聞きて云ひけるは『我が兒が一國の皇帝、歐洲全國の主領と成りたることは感歎す、されど、我に於て、兒は泣き叫びて生れ來れる時と、今もなほ異なる事なし』、とて、猶もナポレオン、ナポレオンと呼ばせ給ひき。

政事多端なるに從ひて、那翁は往日のこと、母公の意見を覗はず、皇后ジヨゼフィヌの離婚、弟妹の娶嫁をしも皇帝獨斷に定めたれば、母公痛く憂ひ給ひて、『人我を世の幸ひ人と稱ふれど、我が一生は憂愁致命の連鎖なりと』。深く歎じ給へり。

其後那翁澳地利の皇女マリ、ルイズを皇后に迎へ、いよ〳〵驕傲を極めたり、或日皇帝母子兄弟集りたるに、那翁己が手を母公の前へ出し接吻せしめんとせり、母公そを見るより直に突き反したり、那翁母公に云ひけるは『朕は汝の皇帝にあらずや』、と、母公答へて『我こそは汝の母にあらずや』、と仰せ給へば、那翁一言だになく、默して母公の手に接吻しけり、此處に於て母公威儀を正しいと嚴に『陛下は皇帝にして、我は臣下なれば、我公然汝を尊敬すされど個人的に云はしめよ、我は汝の母なれば、汝が是なりと云はんとき、我は非なりと云ふことあるべし』。と仰せられき。

子を思ふ親の情の深ければ、惡しき弊を矯正せんと叱責し給ふこと屢々なり、華美に漸染し、侍臣等の諂諛に狂酔せる兒女の心のはかなさを輕んじ給ひて母公は志溢れず、行驕らず廉直にいませり、母

公曾て、大に歎息して、『吁、わが言に從ひなば、兒等はかゝる逆境に逢はざるべきを』、と、其の記錄に記せり。

母公いみじく節倹せらるれば、那翁これを喜ばず、『母君よ、一ケ年十萬の金額を費し給ふとも、我はそを奉るべければ、餘り倹素になおはせそ』、と云ひけり。母公笑みて『そはいと易きことなり、さらば汝は我にその二倍を與ふべし』、と云はれき。『現在の寳をもて、將來を救ふべく我は勸むるなり、嗚呼』とばかりに仰せられし。

げに那翁エルバ島を出奔して再擧を計る折、母公は貯蓄せし多額の金を與へ、ヴアテルロに破れし後も悉く殘金を與へたれば、罪せられて數月間黑麵麭をのみ食はせられしが、甘じて一言をだに不平の言を出だされざりき、母公の心の中は如何ならん、思ふに大望の血は脈中に熱してけん。

公の儀式に御幸せらるゝには、必ず或る慈善の條件を付けざるべからず、母公はジヨゼフイヌの子ウゼヌをば生の子にも劣るまじく情をかけ給ひ、そが婚禮の式に臨ませ給ふにも歸るさに兵營を見舞ひ給ひたりき。

帝國の末年。――那翁、母公、敎皇。
――エルバ島。――母子の會見

輝く朝日の光と那翁の權威日に月に隆んなること雙なし、澳太利の皇女と姻を結びて、皇帝多年渴望したる皇太子を擧げければ、帝國の幸福は最高度に達し、歐羅巴全州に羨慕せられたり、廣大なる帝國に蟠りて皇帝は數多の王國を兄弟に分配し、王冠を授けたりき、ジヨゼフはエスパギユ王に、ゼロムはヴエヌファリ王に、ルイはオランド王の位に上り、二人の娘は公爵に、末なるカロリヌはナプル王の后に成り、母公の榮また晃々として類なかりき。

我が世とぞしもおもふなる時世の榮華に、幸多き年月送りけんと人の思ふべけれど、我が心を割きて見ば、喜よりは憂勝れりと云ひしも、ルシアンが世運を悲しみ、いかにもして兄弟を和睦せしめんと力

を盡せしが、那翁遂に許さゞりけり、オランド王も兄と不和を生じ、母公によりて罪を謝すれども免されず、王位を奪はれたり、エスパギユ王ジョゼフ皇太子洗禮式を行はせらるゝに臨席せざりしは、國人那翁皇帝を憎惡したるゆゑにして、兵亂起らんことを母公ひそかに怖れ給ひき。

母公と友愛厚かりし異父弟なるジョゼフ、フエスク大僧正は、皇帝權を弄して、即位の時戴冠せられたる、ピオ七世を捕へ幽囚したるを諫めければ、即ち國外に逐はれたりき。こは痛く母公を悲ましめければ、輕侮して云ひしことあり『子は神の嚴しき罰を免れじ』、また弟君たる大僧正に哀願して『母の哀訴をきかせ給へ』と、眞心込めて云ひ遣りたれば、敎皇も母公の誠心に感じ、やがて講和を承諾し給へり皇帝と敎皇との和議はフオンテヌブロ宮殿に行ふべかりし、敎皇はフエスク大僧正の臨席を求めたれば皇帝は叔父君の大僧正司祭等を伴ひて當日來給ふやら招待せられぬ。さるに敎皇は未だ獄屋に在せし間

那翁アルマギユに威を示さんと兵を擧げ、レプチーの戰に破れたり、一千八百十三年四月六日讓位し同月二十日エルバ島に竄流せられたり、敎皇は羅馬に護送せらるれば、母公とフエスク大僧正とはリオン市より敎皇の還御を遙拜して謝意を表し、急ぎ逃遁しけり、旭日の昇る勢もて、昨日までは衆を服したるボナパルトの一族も、今は嵐に誘はるゝ木の葉のごとく、散りに散りてぞ落ち行きぬ。

敎皇の意を奪ふべくもあらずして、一室に幽せし後羅馬に還らせまつりしは、全く那翁レプチーに於て敗軍したるためなりき、母公羅馬に赴き敎皇に謁すれば、敎皇はいと懇に待遇し給ひけり、ルシアンゼロムルイも、羅馬に隱家を求めたり、敎皇は獄屋を出でゝ日淺きも、暴虐者の家族に隱家を與へ慰撫し給ひたりき。

母公はエルバに赴き那翁を見んと切におぼし給ひてかくと云ひ遣りければ、那翁諾がひ八月二日英國の便船にて渡航しぬ。

母公ボルト、フェラジオに着すれば、將軍市長等奉迎し、六頭馬車に召さしめ、行列護衛をもて敬意を表し、家に入らせ奉りぬ。されど那翁茲に在らざりければ、母公不快に思はれ給ひて那翁に會ひ、其の出迎に來ざりしを責め給へり、十一月ポリヌもこの島に來ぬ。

この時英雄那翁は帝國を侵略せんと血氣勃々たり。千鳥友よぶ島の夕、草さへ眠りて、あたり閑寂たるに、那翁跫然高く庭園を急ぎ歩みけるが俄に止まり、母上に『企得ざらめやは』と叫びぬ。母公へと後に扣へしが、『そはいかなる秘密なるか、語られよ』と云い給へ。ば、那翁しばしためらひて答へけるは、『さなり、母上に語るべし、されど人にな洩し給ひそポリヌにすら秘し給へ我は今夜出發せん。――何處を指して行かるゝにか。――パリに行かん、母上いかにおぼし給ふか。――吁、我れ情に堪えず暫し待たれよ……よし、さらば出發し天運に委せよ』。

ウアテルロ－の敗北。――皇帝母子の離別。――サント、エレナ島。

皇帝夜に乘じて島を逃れ、航して佛國に赴き、先づカンヌを陷いれ凱戰してパリに入りければ、將士等四方より馳せ集りたり、母公もやがてパリに行かんと、島を出立ち、歸途ナプルに赴き三女なる皇后カロリヌに會見し、六月一日パリの宮殿に入らせ給へり、十八日を經て那翁ヴアテルロ－に敗北し、續て敵軍パリに侵入し、再び讓位を求め、那翁皇帝を大西洋の孤島サント、エレナに遠流せんとす、那翁行きて母公に別れを告ぐ、母公悲哀に堪えず、涙を流し『さらば、我子よ。――母上さらば』。母子相抱きぬ。歸らぬ旅の別路と思る親子の胸いかならん母公はフエスク大僧正とパリを去り、伊太利指してぞ落ち行きける、シエンヌに居を定めんとせしが、トスカヌ公拒みけり、さるを敎皇深く憐みて羅馬に止め、厚く遇せしめ、敎皇も屢母公を訪れ慰め給ひたり。

母公は片時も那翁の上を忘れ給はず、慈愛のあまり

行きて自ら炊掃の勢を取らんと言ひ遣りたれど、那翁遂に諾はず、母公己が資金を示して悉くそを送らんとせしが、那翁聽かざりき、母公は金銀を盡して與へなば赤貧に陷るべしと云ひし者あり、母公答へて『我れはそを厭はず、さらば我れ手に杖を持ちて那翁の母のために物乞はんのみ』と云ひ給へり。大陸同盟の君主悉くエキス、ラ、シャッペルに集りたるを聞き、母公一書を送りて哀を請ひたり、其の文に云ふ。

拜啓兼て各國皇帝國王陛下御集會遊ばされ候由承り居り候へば各陛下の御慈仁により悲歎に沈む母が哀訴を御聞届け下さるべくと偏に待上奉り候次第に御座候

扨那翁皇帝は多年の間大西洋の孤島に竄流の身と御成り居り候へども今度の御議會には各陛下寛大の御心にて往時の友たる那翁の上に宜敷やう御相談下され候御事と推し上げ候敵國の大度に一身を委ねて英吉利國の腕に縋りたる皇帝を苦悶せしめてあはれ孤島に空しうせんと思召され候や噫我が兒は舅なるアルマギユ皇帝に倚るべかりしを亞歷山帝は廣き御心もて昔日の同盟を追想し必ず我が兒を保護し給はれ候ひしならんさるを英吉利皇帝は彼に信用を示したる者を惡しきに取り計らはれ候べきや御伺申上候

那翁皇帝は財も兵も殲滅致し候て今まで神が授け給ひたる勢力さへ無く健康次第に衰へて不具者同樣に相成候へば恐怖遊さるゝべき者には無之候

我が命にも代へまほしく兒を思ふなる母の情溢れ溢れて一書を陛下に呈し候事御推察下され度願ひ奉り候兒が苛酷に遇せられしより數多の星霜をも經過致し候へば母に免じて兒を膝下に御返し下され度候皇帝國王陛下よ君は全善なる神の代理者におはし候へば我が兒を苦ましむるを止め給ひて兒に自由を與へ給へ國法に

も制限有之べくと存せられ候右の願御聞届け下され候はゞ子々孫々永く陛下の徳を感謝しまつるになん

一千八百十八年八月二十九日　那翁の母　謹言

皇帝國王陛下

かゝるけ高き手紙を送りたるも返詞なくして、敵國は母公の擧動出入などを監視せしめければ、母公は児女の訪ひ來る時ならでは人に接見し給はざりき、佛王ルイ十八世は教皇那翁の母公を優待せらるゝをもて、屢使者を遣し云ひけるは、母公は佛國のボナパルト黨と好を通じ且つコルス人を煽動して兵を擧んとすと詰問せり、教皇止むを得ず、カルヂナル大僧正に命じ行きて母公に問はしむ、母公端然として答へけるは『願はくは教皇をして佛王に斯く云はしめ給へ、我れに徒黨を煽動せん財なし、若し我れに金ありとせば、我は直に艦隊を裝ひて那翁を奪はんためサント、エレナに向ふべし』と云ひ遣りぬ。

春は來れども花咲かず鳥も歌はぬ孤島にて、破れし胸のうさ、つらさ、誰に語らふ人もなく、あはれ悶の子、那翁は司祭もがな、かつては汚れし世の塵に驅り狂ひて身の慾を逞しうせし、あゝ我れ愚なりしよ、顧みれば永遠命ある魂我にあり、神は憐しの年月を我れに假し給へり、さなり、魂を潔うしてこそ我は永遠に樂しまん、かくて那翁は母公に書を送りて牧師の來たるを乞ひければ、母君はフエスク大僧正に計りて、コルス人なる二人の牧師ブナヴイタとヴギアリとを遣し、九月十三日二人は孤島に着きぬ、時正に一千八百十九年なりき。

皇帝は病癒ゆべうも見えず、侍醫一人、牧師二人を側離さず、護らしめしが、病勢危篤に赴きけり、母公頻に熱情溢るゝ手紙を認め、英吉利皇帝をはじめ權勢ある人々、はては皇后マリ、ルイズ等に清潔なる地に皇帝の住居を移さんことを求めたれど、聽されず、兒を救はんためには、我は出來得る丈力を盡さんと、悲哀に沈める母の叫びに天も地も默してけ

るにか、七月二十二日使來たりて、一千八百二十一年五月五日遂に那翁皇帝崩せりと母公に告げぬ。崩御の凶報を聞き、餘りの悲しさに母公は前後も知らず倒れ伏す、あらゆる悲境に際してすら、勇氣撓まぬ女丈夫なれど、那翁が孤島の冷き病床に最後を遂げしと聞きたる母公は脈中の血液たゞ凍れるがごとくなりき。牧師と侍醫とは歸りて、皇帝臨終の樣を落ちもなく母公に聞こえたれば、基督信者の務を果して死しけるよといみじう安堵し給ひぬ。

逐放の末年。――母公薨ず

皇帝崩御の後母公は悲歎にうち沈めり。『我が命は皇帝のそれと共に終れり、我は凡てを抛ちぬ』。と其の記錄に見えたるぞ哀れなる。

子に先立たれ、母公悲しき中にも身分に從ひて生活すべしと思ひ給ひ、昔を偲びて紡績の業を勸め、家事を監理し、兒女に儉約を勸め給ひたり、常に那翁を手本に兒女を勵して云ひけるは『我が兒は勉强によりて皇帝の位に上り、兄弟に王位を分てり』。と語られ給ひき。

崩御の翌年エリザ死せり、次でウゼヌ、ポリヌ死し程なく母公の特に親愛せられし后クラリ（ジヨゼフの妻）崩せり、そが後を追ひて多年まめやかに勤めたりし乳母サヴアリアさへ歸らぬ世の人となりにしかば、母公はいよ〳〵悲しみに沈ませられ、一室に閉居してゐるかなきかに日を送り、寺院に赴き給ふほかは外に出で給はざりき。

風に搖らがる灯影かすかに、母公の生命いまは長かるべくもおもほえざるに、眼霞みて物見えねば、那翁皇帝の事蹟を記したる書物を人に讀ませ聞き給へり、或日人來りて那翁皇帝の像をヴァンドームに設置せんとて、其の圖案を示せるに、母公之を見ることも難ければ、指を觸れ『我は指もて圖案を見む』と云はれたり。

那翁の嫡子レスクスタド公薨せりと聞き、母公の悲しみこよなかりき『噫兒は逝き、孫は死し、我れ誰によりてか餘命を送るべき』。と歎かせ給ふも哀なり

年號月日の下に名字を署して筆を擱給へば、創手本間三郎秀高お後へ廻るよと見えたが、御首は敷皮の上に落ちまして、骸は端然としてなほ坐せらるゝまゝでありました、此時日頃伺候して、法談など致して居た御坊が、中納言の亡骸を取おさめて、煙となしまゐらせ、弔供養を心徐に營みすませ、夜明けてから、本間が館へ參り、遺骨を阿新丸へ贈りました、阿新丸それを一目見て、取る手もたゆく倒れ伏し、今生の御對面終に叶はずして、かはり給へる白骨を拜することよと、シャクリ上げ〳〵悲憤の涙に暮れました、實に理りせめて憐れなることでありました。

阿新未だ幼稚なれども、けなげなる所存ありければ、先づ父上の遺骨は、都より召連れたる助太夫に持せて、高野山の奧の院へ納めよとて、先きへ都へ上せ置き、我身は勞はるよしにて本間方に居殘りました。

かくて本間入道に對面し、父上の御最後によつて歎きの餘り、心地すぐれねば、今しばし逗留したしそれに付ても佛間へ籠りて、父上の菩提を弔らはさせられよと、頼みました、山城入道大に感じて靈魂死して七日の間は其家を去らずと申すことでもあり、誠に御菩提を弔ひなさるゝ御志感じ入申した、何時までも御逗留あつて御追善遊ばさるべしと申しましたから、阿新は乃ち帶び居たる刀を取て入道へ預けおき、それより佛間に入りて、日夜怠りなく讀經しました。

うらめしきは山城入道が心である、今生で父上の御顏を拜せざる殘念さよ、嘸ぞ父上の尊靈も草葉の影でこれのみ思召すことならん、此欝憤を晴らさねば、何とて父上の聖靈へ手向けられうとは、此頃阿新丸が所存でありまして、人知れず髮さか立ち眦さけることもありました、そのゝちは病重しとて、晝は終日臥し居り、夜は忍びぬけ出でゝ本間が寢所の樣子など細々と伺ひおき、隙きあらば、入道父子のうち一人さし殺して、腹切らんも

のと、只管その機を待ちて居りました、或夜雨風烈しく宿直する郎等ども皆遠侍に臥ましたから、これ願ふてもなき幸ひと、本間が寝所へ忍び寄りましたが、今夜は入道常の寝所をかへて何處に居るやら見えません、所が次の間に燈の影が見えますから、是れ入道が子息の寝所ならん、それなりとも討て恨みを晴さんと、忍び入て見ると、それさへ此處に居なくて、中納言を斬りました三郎秀高が只一人臥て居りました、是れも時に取ては親の敵なりと、思案をきめて走りかゝらんと致しましたが、阿新はもと身に寸鐵なく、敵の武器を奪はねばならぬのであります、然るに燈が殊に明いから、立よらば軈て驚き目醒むることもあらんかと、危で躊躇いたして居りますと、折節夏のことでありましたから、燈の影を慕て蛾が數多明り障子に取付て居たから、是れ究竟のこと、障子を少し引明けますと、此虫われ一と内に入て、やがて燈火を打ち消しました。

今はかうと嬉しく、直に三郎の枕元に立寄て探ぐるに、太刀も短刀もあつて、三郎は寐入ばなと見えたり、是れ天の助けと、靜に短刀を取て腰にさし、太刀を拔て三郎が胸もとに指當てましたが、さて寐たるものを殺さば死人に同じければとて、則ち足にて枕をバッタと蹴りました、蹴れて喫驚する所を、一の太刀にて臍の上を疊までもと突き通し、返す刀に喉ぶへを指切て、悠々と後の笹原の中へ身を隱しました。

三郎が一の太刀に胸を通されて、アッと云つた聲に番衆ども驚き騒ぎ、火を燃して見れば、血の付きたる小さき足跡あり、さては阿新丸の所爲なり堀の水深ければ木戸より外へはよも出まい、捜出して打ち殺せと、手に／＼松明を燃し、木の下、草の陰まで、殘る隈なく探しました。

阿新丸は竹籔の中に隱れながら、今は何處へ逃げられう、人手にかゝつて殺さるゝより、自害せんものと一度は決心しましたが、まて暫し、惡い／＼

と思ふた父の仇を討た上は、如何にもして命を全ふし、君の御用にも立ち、父の素志をも達することそ、忠臣、孝子の義ならん、一先づ落ちらるゝだけ落ちて見んものと思ひ返しまして、堀を飛び越へようとすれども、何分堀の巾は貳丈もあり、深さは一丈に餘れることゝて、中々工夫も思案も付兼て、途方に暮れて居りました。

所が、その隠れてる竹林は、脊丈け永々と延びた竹計りでありましたから、イザ之を橋として渡らんものと、堀の上へ靡きたる太き竹の梢へ、さらさらと登りましたら、竹の末が向ふの堀岸に靡き伏して、案外やす〳〵と越へられました、何んでも夜の明けぬ間に、一足でも湊の方へと志して野となく山となく盲ら滅法に走りました、されど湊の方角さへ未だ知れぬうちに、夜は早や明けはなれましたから、若し人に認められては悪しゝと思ひまして、麻や蓬の生茂れる中へ身を忍ばせて居た處が、追手らしきもの共百五十騎計り馳せ散て、この邊を十二三才計りの子供は通らぬかと、道行合ふ人々に尋ね〳〵て過ぎ行きました。

その日は麻の中にて日を暮らし、夜に入りて何處ともなく只心當りに行く程に、忽ち年老た一人の山伏に行合ました、山伏は阿新が此處わたりに見なれぬ子供と思へるにや、訝しげに何處より何處へ御渡りなさるかと、尋ねましたから、阿新は隠すことなくありのまゝを語りました、山伏は義に富める者でありましたから、お心丈夫に思召せ湊に多くの商船が有ますから、乗せまゐらせて、越後か越中のうちへお送り申しませうとて、足がたるめば、手を引て呉れたり、肩にのせて呉れたりして程なく湊に出ました。

時に湊の船は皆な出帆した後で、遙か沖にかゝつて居た一艘の大船も、檣を立て、笘をまき、急ぎ、出帆の最中でありますから、山伏は手を揚げ便船呉れよと、聲をかぎりに呼立てましたが、知らぬ振りして湊の外へ漕出したから、山伏大に腹

を立て、沖の船に立向ひ、誦球さら〳〵と押揉で、『一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者猶如薄伽梵……………明王の本誓あやまらずば權現金剛童子、天龍夜叉、八大龍王その船此方へ漕戻させ給へ』と跳上り〳〵肝膽を砕て祈りました。

行者の祈り神に通じて、逆風俄に吹き起り、此船忽ち覆らんといたしましたから、舟人共慌て騒ぎ、山伏の御坊助け給へと、一心に船を此方へ漕戻しまして、汀近くなると、直に船頭舟より飛下りて、阿新を負ひ山伏の手を引きて屋形の内へ入れましたれば、風は又もとの如くに直りまして船は勇ましく湊を出帆いたしました。

然るに、この時追手百四五十騎馳來りて、遠淺に馬を控へ、その船までと招きましたけれども、順風に帆を揚げて、ひた駛りに走ましたから、其日の暮方に越後に着まして、阿新はこゝに始めて虎口を遁れました。

この阿新丸こそ、後に國光中納言と稱へられ、父資朝卿のお志を繼いで、天晴れ忠義を抽んでなされまして、長へに我國忠臣の鑑と、仰がれなされた方であります。（をはり）

那翁皇帝の母

菊地雪子

レチシア、ラモリノ。ボナパルト夫人

マリア、レチシアは、西暦一千七百五十三年八月コルス島のアジヤクシオに生れぬ、父をラモリノと呼びけるが、其頃外寇連りに國を亂し、國内多端の折柄なるに、ゼヌに抗して又しても戰起りてければ、太刀取る身の譽ぞと、勇み〳〵て戰場に出でしが、遂に果敢なくも道芝の露と消え了んぬ。母君の悲しさ遣瀨なく今よりは繊弱き女の手一ツにて、いかにして朝夕の煙を立つべきか、娘は容色優れたる花の蕾なるに、女の業をし修めさせで、世の少女に劣らんはうしろ

めだやと、ひたすら深き思に沈みけり、かゝりし程に、人の語らひによりてフエスク大尉と契を結びたれば、レチシアを膝下はなさず訓へ育てけり、レチシア養父の家に在りし間、母はまた男子を分娩してジヨゼフと名付けしが、後日この異父の姉弟にして、一人は皇帝の母公に、一人は大僧正の榮位に上りて宗教界に、政事界に、名聲芳ばしからしめしとは、人慮り知りなんや。

こぼるゝばかりの愛を含みたる眼元、笑を帶びたるその口元開けば花瓣二ッ搖ぐ標緻のよさ、そぞろ男子の心動かして、はかなき空想をも畫かしむ、レチシアが十三歳の花の春、そが身にかゝる一事こそ起りたれ。

シャール、ボナパルトと呼べる十八の美少年、資質の美さへ世に絕れたるが、若き血の湧きけるにはあらで、ゆかしの眞心より、レチシアの父母に其愛娘を我れに賜ひねと、やがて約して我のみ眺めて花を人な手折りそ、來ん年は髮上げさせて、新郎新婦と

月の夕、花の朝はれらかに世を送りなんなど聞こえけるに。はや佳辰を卜して嘉禮を擧げぬ。嫋かに咲き誇りたる花いとしや雨風に曝されんは、若き妻母三の産褥にこたびやうやう男子擧げたるを慶び、ジヨゼフと名付けたり、これ實にボナパルト家の嫡子にして、後にエスパギウ王の位に登りたる彼人なりき。

されど未だ戰爭の斷間なかりき。コルス人の愛國心強固なるに、防禦嚴にして之拔くべからざれば、ゼヌ軍退き、佛兵交迭しぬ。コルスにてはパスカル、パオリ軍を督せば、島民應じて屍を野山に曝らすとも敵にな降りそ、後ろをな見せぞ、寧ろ獨立の旗下に死して榮とせよ、一致協同奮つて敵兵に當りたる其の勇氣銳鋒恐るべかりし、包圍月を涉れど陷るを得ざりき、シャールボナパルト副將となり、帷幄に於て企計を巡す間、夫人は何處までも苦樂をともにせんと、赤兒を腕に抱かへ、產期に近き重き身を、矢玉霰と降る中に、山越え野路の草枕、流を渡り、

森に彷徨ひ、ほづゝの響きもゝのかはと人々を勵ましゝかど、勇猛なるコルス兵も遂に佛軍に破られ、將軍パオリ英國に逃走しけり、されどシャール、ボナパルトは、夫人の歎願によりて本國に止まりぬ。

那翁の誕生。――家庭敎育

頃は一千七百六十九年八月十五日なりき、空朗かに靑葉若葉を照らす日の光わざやかなるに鐘鳴りて、其音空に渡り、水に響き、餘韻コルス人の胸に通ふらん、この島が佛領となりし祝祭捧ぐる御寺の鐘平和を齎す餘音裊々たり、市内は生花と靑葉とをもて飾られ、人々新衣翠粲を着て祝ひ合ふてぞさまよひぬ、かゝりける時にアジャクシオの大堂に年若き女來りて祈禱を捧ぐるありけるが、これなんボナパルト夫人なりしよ。

聖祭未だ終らざるに、卒爾に腹痛を覺えたれば、急ぎ家に歸れるが、數時を經て英才ナポレオン出生しぬ。三十二才までなほ三人の男子ルシアン、ゼローム、ルイと、三人の女子エリザ、ポリヌ、カロリヌを產みけるが、夫はかりそめに病より遂に歸らぬ世の人となりぬるぞ憐なる。

饒にもあらざりし家財をもて、八人の子を養育することの難ければ、伯父君なる大僧正ルシアン、ボナパルトに管理萬端を依賴したり、伯父君は特更ナポレオンに意を用ゐて敎育し給へば、母君は針とる業を勤めつゝ、そが側に侍りて聞き居たり、母君も讀書習字などを自ら授け給ひて、秋の夜長の物語、長閑なる春の逍遙にも、智を磨き、德を養ふべかりし敎訓をのみし給ふも、他の兒女にはさしも見受けざることなりき。

那翁童なりし頃、隣村の農夫彼を見て夫人に言ひけるは、「若旦那は長命なされば世界第一の人になり給ふべし」と、あらず、絶倫の英雄は三十有餘にして世界第一の人と、其の名を轟かしぬる、農夫の言を追想すれば、母君老いての樂みは是に過ぎたるものはなかりしなり。

勇氣ある夫人は愛に溺れず、時には嚴にして兒女を

よく服從せしめ、幼少より僞を言はせず、秩序を守るべく敎ゆれば、那翁幼時に感染したるこの習慣は、成年の後にも天性と化したりき、固執にして躁暴不遜なる那翁は、我意を張らんと常に兄弟朋友と爭ひたり、墻を越えて隣家の木の實を取るとあれば、母君いみじう懲らしたまひき。げに賞罰兩つながら公平にしたまふ母君の誡は、未來の大英雄の那翁をして敬服せしめぬ、母は常に劍、大砲などの玩具を賞として那翁に與へ、幼少の頃より勇敢の氣を鼓舞せしめしも、蓋し後日那翁を那翁たらしめし所以なるべし。

伯父君は特に那翁を慈み給ひて、臨終の時云ひけるは、『那翁に財產分與するは無益なり、彼は自ら財寶を造らん、ジヨゼフよ、汝は嫡子に生るれども、那翁汝の上に權を有つべし』と、母君の資性を受けたる甥の將來は、伯父君預め知り給ひし所にや。

那翁二十二才にして砲兵中尉に昇進しけるが、戰場に臨める時も必ず母君の意見を覗ひ、一度だに失敗せし事なし、コルス島が佛國の配下に屬してより、二十年を經てパオリ英兵を率ひて來たり、海陸勢を合せ進んで城下に迫る、夫人は怯する色なく、我等悉く佛國の國民なりと言ひ遣りぬ。

敵兵四面より合擊し火を放ちければ、夫人は兒女を伴ひて山頂に逃れたり、かくて眼下に我家の燃ゆるを瞰し憤激に堪えず、叫びて言ふ『佛國萬歲……我等は一層美麗なる家を造らん』と、將來を自信して斷乎として言ひし、嗚呼この女丈夫よ、一夜の灰に盡滅したる都下を離るれば、遙か、冲の方より佛國の艦隊岸を指して來り、那翁の其艦に乘込み居たるを見る、海原隔てゝ互に見合す顏と顏、那翁母弟妹の恙なきを見るより默し兼ね、小舟に移らんも心もとなしとて直に海に飛び込み、山と高き浪を凌いで岸邊に着き、母子涙にくれて打喜びぬ。

分け行く跡の白浪と故鄕を遠くよそにして、佛蘭西のマルセイユに上陸し、此處に地を卜して住ひけり、さてもボナパルトの寡婦は夫死して後、氣丈に

も八人の子を養育せしが、パオリ黨に組せざるをもて、家さへ財さへ取り棄て、他郷に來たりしが、或る貴族の好意を受け、細き煙を立てたり、かく逆境に身を潜むれとも、夫人は鋭意兒女の躾方を勸めたり、曉告ぐる鷄の聲と共に寢床を離れ、一日の家事を整へて、三人の娘に分擔し、姉は市に行きて物買ふべく、中は食物を調理すべく、末は計算掛となり、、又殘食を門乞ふ者に施すべく、それ〲務を配當しぬ。夜は母子相集りて紡績、裁縫を勉むる間、中なる娘に新聞雜誌などを讀ましめ、母君は歷史、物語の類、特に父君愛國の功蹟を語り給ひたり。

幸福の光

那翁は連戰連勝ツウロン市が嘗て英人に陷れられしを奪ひたれば、其の功によりて砲兵中尉より一躍大將に昇進し、ボーハルネ未亡人ジヨゼフイヌと婚を結び、嫡男ジヨゼフはマルセイユ市の一商富豪の娘を娶り、長女エリザは將軍バクオシーに、次女ポリヌは將軍レクレルリに嫁すべく約整ひたりき。

猛烈なる那翁は兵を勵し、軍を麾き、アルプの嶮岨を越え伊太利に侵入し、大に戰ひて之を降したり、勝利の報一度マルセイユに達するや、市民は煕々として祝賀し、子の代理に勝利の枝を母公に送り、その大功を賞し合ひぬ。

那翁は埃及遠征を企て、艦隊を率ひて途に上りたるに、ルシアン、ポリヌ、ジヨゼフイヌ等はパリに止まりたれば、夫人も共に在しき、されど、ジヨゼフイヌは輕噪奢侈の婦人にして、華々しく外見をのみ裝ひければ、質素に慣れし母公と自ら嗜好の齟齬、感情の衝突を來すこともありて、姑嫁の間さほど睦ましからざりき。

皇帝の母君

那翁皇帝云はく『兒の將來は全く母による、我が財寶は母君の賜なり、そは母君我を奬勵し、勇氣を鼓舞し給ひたればなり』と、斯くて英偉の君は母公に對する尊敬と報恩との念厚かりき。

那翁は母公と共に在すべく歎願すれども、頓の榮華

を貪るは、先見秀れたる失人のつゆ喜び給はぬ所なれば、獨り自ら華美快樂と遠ざかり、閑靜質樸の地に赴き、一家團欒の時のみ宮中に在はすを、こよなき慰とし給ひたり。

那翁ジョゼフィヌを娶りたるを母君喜び給はざるに其の女オンタンスさへルイに嫁したるは不快なり、と母公常に思召し給ひぬ。さるにルシアンは那翁の拒めるをも聞かで、マダム、ジュルベドッウと結婚しければ、那翁大に憤りてルシアンを宮中より逐ひ出し、兄の名を辱めしとて國外に放逐しけり、那翁次で總督政府を顚倒し、モロー將軍を逮捕せしめ、アンジアン公を銃殺せしめしなどは、母公の心をいたく悲しませたりき。

かくてルシアンは妻と手を携へ羅馬に到れば、母公ルシアンを憐み苦痛に堪えられず、自らも日ならず其の地に赴き給ふ、那翁大に怒りて『兄に從はぬ弟を特愛する道やおはする』とて母公を責む、されど母公云ふ『八人の子の内にいとも不幸なる兒こそ尤も不愍なれ』と仰せ給ひて、羅馬に行きて歸られず

一千八百〇四年八月二日那翁即位の式を行はんと、敎皇ピオ七世に臨御戴冠を請ひたれば、國民足を空に騷ぎ立ち喜びて。那翁亦母公の臨駕をも請ひたれども、ルシアンの勘當免されざる上は、盛式に臨ませらるゝを欲せずとて、同月廿日パリに歸り給へりまことや那翁不滿の餘り、母公をして遂に大后の位に上らしめず、母公殿下として一生を送らしめたり

翌年五月廿二日勅令を發し、十萬金を母公宮殿建築費に充て、貴婦人等に命じて侍らしめたり、母公は廣大なる家屋、眺望勝れたる土地を好ませ給へば、那翁はボン、スール、セーヌに光輝灼爛たる宮殿を造らせ、近衞隊に護衞せしめて、御幸せさしめき。

母公は動作言語凡てに質素を守り給ひ、慈愛厚く、貧者を憐み給ふこと深かりしかば、はやくもボン市民に尊敬せられたり、金銀を出して困窮者に施し給へば、數月を經ざるに家々賑はひ、人々太平を謳ひて皆其の德に懷きぬ。母公はまた慈善會の總裁と成

らせ給ひ、屢々病院に御幸あられ、親しく患者を慰藉し給ひたり。パリに入らせ給へば、ブリエンヌの宮殿に在しき、皇帝は諸種の儀式に母君たるの資格をもて、華々しく臨御せらるゝを欲し、鄙びたる言語擧動を廢し、都の風俗に習ひ給へと乞へど、ゆめ聞かせ給はねば、那翁は堪えずして、『お母さんは、ほんたうに田舎者で困ります』と云ひたりき、兄弟集いたる時皇帝云ひけるは、『母君は朕をナポレオンナポレオンと呼び給へど、我はそを好まず、兄君よ御身よりかくと母君に仰せ給へよ』と、皇兄ジョゼフに依頼しけり、母公これを聞きて云ひけるは、『我が兒が一國の皇帝、欧洲全國の主領と成りたることは感歎す、されど、我に於て、兒は泣き叫びて生れ來れる時と、今もなほ異なる事なし』、とて、猶もナポレオン、ナポレオンと呼ばせ給ひき。

政事多端なるに從ひて、那翁は往日のこと、母公の意見を覗はず、皇后ジョゼフィヌの離婚、弟妹の娶嫁をしも皇帝獨斷に定めたれば、母公痛く憂ひ給ひて、『一人我を世の幸ひ人と稱ふれど、我が一生は憂愁致命の連鎖なりと』。深く歎じ給へり。

其後那翁澳地利の皇女マリ、ルイズを皇后に迎へ、いよ〳〵驕傲を極めたり、或日皇帝母子兄弟集りたるに、那翁己が手を母公の前へ出し接吻せしめんとせり、母公そを見るより直に突き反したり、那翁母公に云ひけるは、『朕は汝の皇帝にあらずや』、と、母公答へて『我こそは汝の母にあらずや』、と仰せ給へば、那翁一言だになく、默して母公の手に接吻しけり、此處に於て母公威儀を正しいと嚴に『陛下は皇帝にして、我は臣下なれば、我公然汝を尊敬すされど個人的に云はしめよ、我は汝の母なれば、汝が是なりと云はんとき、我は非なりと云ふことあるべし』。と仰せられき。

子を思ふ親の情の深ければ、惡しき弊を矯正せんと叱責し給ふこと屢々なり、華美に漸染し、侍臣等の諂諛に狂醉せる兒女の心のはかなさを輕んじ給ひて母公は志溢れず、行驕らず廉直にいませり、母

公嘗て、大に歎息して、『吁、わが言に從ひなば、兒等はかゝる逆境に逢はざるべきを』、と、其の記錄に記せり。

母公いみじく節儉せらるれば、那翁これを喜ばず、『母君よ、一ヶ年十萬の金額を費し給ふとも、我はそを奉るべければ、餘り儉素になおはせそ』、と云ひけり。母公笑みて『そはいと易きことなり、さらば汝は我にその二倍を與ふべし』、と云はれき。『現在の寶をもて、將來を救ふべく我は勸むるなり、嗚呼』とばかりに仰せられし。

げに那翁エルバ島を出奔して再擧を計る折、母公は貯蓄せし多額の金を與へ、ヴアテルロに破れし後も悉く殘金を與へたれば、罪せられて數月間黑麵麭をのみ食はせられしが、甘じて一言をだに不平の言を出だされざりき、母公の心の中は如何ならん、思ふに大望の血は脈中に熱してけん。

公の儀式に御幸せらるゝには、必ず或る慈善の條件を付けざるべからず、母公はジヨゼフイヌの子ウゼヌをば生の子にも劣るまじく情をかけ給ひ、そが婚禮の式に臨ませ給ふにも歸るさに兵營を見舞ひ給ひたりき。

帝國の末年。――那翁、母公、敎皇。
――エルバ島。――母子の會見

輝く朝日の光と那翁の權威日に月に隆んなること雙なし、澳太利の皇女と姻を結びて、皇帝多年渴望したる皇太子を擧げければ、帝國の幸福は最高度に達し、歐羅巴全州に羨慕せられたり、廣大なる帝國に隣りて皇帝は數多の王國を兄弟に分配し、王冠を授けたりき、ジヨゼフはエスパギユ王に、ゼロムはヴエヌファリ王に、ルイはオランド王の位に上り、二人の娘は公爵に、末なるカロリヌはナプル王の后に成り、母公の榮また晃々として類なかりき。

我が世とぞしもおもふなる時世の榮華に、幸多き年月送りけんと人の思ふべけれど、我が心を割きて見ば、喜よりは憂勝れりと云ひしも、ルシアンが世運を悲しみ、いかにもして兄弟を和睦せしめんと力

を盡せしが、那翁遂に許さゞりけり、オランド王も兄と不和を生じ、母公によりて罪を謝すれども免されず、王位を奪はれたり、エスパギュ王ジョゼフ皇太子洗禮式を行はせらるゝに臨席せざりしは、國人那翁皇帝を憎惡したるゆゑにして、兵亂起らんことを母公ひそかに怖れ給ひき。

母公と友愛厚かりし異父弟なるジョゼフ、フェスク大僧正は、皇帝權を弄して、即位の時戴冠せられたる、ピオ七世を捕へ幽囚したるを諫めければ、即ち國外に逐はれたりき。こは痛く母公を悲ましめければ、輕侮して云ひしことあり『子は神の嚴しき罰を免れじ』、また弟君たる大僧正に哀願して『母の哀訴をきかせ給へ』と、眞心込めて云ひ遣りたれば、敎皇も母公の誠心に感じ、やがて講和を承諾し給へり皇帝と敎皇との和議はフォンテヌブロ宮殿に行ふべかりし、敎皇はフェスク大僧正の臨席を求めたれば皇帝は叔父君の大僧正司祭等を伴ひて當日來給ふやう招待せられぬ。さるに敎皇は未だ獄屋に在せし間

那翁アルマギュに威を示さんと兵を擧げ、レブチーの戰に破れたり、一千八百十三年四月六日讓位し同月二十日エルバ島に竄流せられたり、敎皇は羅馬に護送せらるれば、母公とフェスク大僧正とはリオン市より敎皇の還御を遙拜して謝意を表し、急ぎ逃遁しけり、旭日の昇る勢もて、昨日までは衆を服したるボナパルトの一族も、今は嵐に誘はるゝ木の葉のごとく、散りに散りてぞ落ち行きぬ。

敎皇の意を奪ふべくもあらずして、一室に幽せし後羅馬に還らせまつりしは、全く那翁レブチーに於て敗軍したるためなりき、母公羅馬に赴き敎皇に謁すれば、敎皇はいと懇に待遇し給ひけり、ルシアンゼロムルイも、羅馬に隱家を求めたり、敎皇は獄屋を出でゝ日淺きも、暴虐者の家族に隱家を與へ慰撫し給ひたりき。

母公はエルバに赴き那翁を見んと切におぼし給ひてかくと云ひ遣りければ、那翁諾がひ八月二日英國の便船にて渡航しぬ。

母公ポルト、フェラジオに着すれば、將軍市長等奉迎し、六頭馬車に召さしめ、行列護衛をもて敬意を表し、家に入らせ奉りぬ。されど那翁茲に在らざりければ、母公不快に思はれ給ひて那翁に會ひ、其の出迎に來ざりしを責め給へり、十一月ポリヌもこの島に來ぬ。

この時英雄那翁は帝國を侵略せんと血氣勃々たり。千鳥友よぶ島の夕、草さへ眠りて、あたり闃寂たるに、那翁跫音高く庭園を急ぎ歩みけるが俄に止まり、母上に『企得ざらめやは』と叫びぬ。母公へと後に扣へしが、『そはいかなる秘密なるか、語られよ』と云ひ給へ。ば、那翁しばしためらひて答へけるは、『さなり、母上に語るべし、されど人にな洩し給ひそポリヌにすら秘し給へ我は今夜出發せん。——何處を指して行かるゝにか。——パリに行かん、母上いかにおぼし給ふか。——吁、我れ情に堪えず暫し待たれよ……よし、さらば出發し天運に委せよ』。

ウアテルローの敗北。——皇帝母子の離別。——サント、エレナ島。

皇帝夜に乘じて島を逃れ、航して佛國に赴き、先づカンヌを陷いれ凱戰してパリに入りければ、將士等四方より馳せ集りたり、母公もやがてパリに行かんと、島を出立ち、歸途ナプルに赴き三女なる皇后カロリヌに會見し、六月一日パリの宮殿に入らせ給へり、十八日を經て那翁ヴアテルローに敗北し、續て敵軍パリに侵入し、再び讓位を求め、那翁皇帝を大西洋の孤島サント、エレナに遠流せんとす、那翁行きて母公に別れを告ぐ、母公悲哀に堪えず、淚を流し『さらば、我子よ。——母上さらば』。母子相抱きぬ。歸らぬ旅の別路と思ふ親子の胸いかならん母公はフエスク大僧正とパリを去り、伊太利指してぞ落ち行きける、シエンヌに居を定めんとせしが、トスカヌ公拒みけり、さるを敎皇深く憐みて羅馬に止め、厚く遇せしめ、敎皇も屢母公を訪れ慰め給ひたり。

母公は片時も那翁の上を忘れ給はず、慈愛のあまり

行きて自ら炊掃の勢を取らんと言ひ遣りたれど、那翁遂に諾はず、母公己が資金を示して悉くそを送らんとせしが、那翁聽かざりき、母公は金銀を盡して與へなば赤貧に陷るべしと云ひし者あり、母公答へて『我れはそを厭はず、さらば我れ手に杖を持ちて那翁の母のために物乞はんのみ』と云ひ給へり。大陸同盟の君主悉くエキス、ラ、シャッペルに集りたるを聞き、母公一書を送りて哀を請ひたり、其の文に云ふ。

拜啓兼て各國皇帝國王陛下御集會遊ばされ候由承り居り候へば各陛下の御慈仁により悲歎に沈む母が哀訴を御聞屆け下さるべくと偏に待上奉り候　次第に御座候

扨那翁皇帝は多年の間大西洋の孤島に竄流の身と御成り居り候へども今度の御議會には各陛下寛大の御心にて往時の友たる那翁の上に宜敷やう御相談下され候御事と推し上げ候　敵國の大度に一身を委ねて英吉利國の腕に縋りたる

皇帝を苦悶せしめてあはれ孤島に空しうせんと思召され候や噫我が兒は舅なるアルマギユ皇帝に倚るべかりしを亞歷山帝は廣き御心もて昔日の同盟を追想し必ず我が兒を保護し給はれ候ひしならんさるを英吉利皇帝は彼に信用を示したる者を惡しきに取り計らはれ候べきや御伺申上候

那翁皇帝は財も兵も殲滅致し候て今まで神が授け給ひたる勢力さへ無く健康次第に衰へて不具者同樣に相成候へば恐怖遊さるゝべき者には無之候

我が命にも代へまほしく兒を思ふなる母の情溢れ溢れて一書を陛下に呈し候事御推察下され度願ひ奉り候　兒が苛酷に遇せられしより數多の星霜をも經過致し候へば母に免じて兒を膝下に御返し下され度候　皇帝國王陛下よ君は全善なる神の代理者におはし候へば我が兒を苦ましむるを止め給ひて兒に自由を與へ給へ國法に

も制限有之べくと存せられ候右の願御聞届け下され候はゞ子々孫々永く陛下の徳を感謝しまつるになん

一千八百十八年八月二十九日　謹言

那翁の母

皇帝國王陛下

かゝるけ高き手紙を送りたるも返詞なくして、敵國は母公の擧動出入などを監視せしめければ、母公は兒女の訪ひ來る時ならでは人に接見し給はざりき、佛王ルイ十八世は敎皇那翁の母公を優待せらるゝをもて、屢使者を遣し云ひけるは、母公は佛國のボナパルト黨と好を通じ且つコルス人を煽動して兵を擧んとすと詰問せり、敎皇止むを得ず、カルヂナル大僧正に命じ行きて母公に問はしむ、母公端然として答へけるは『願はくは敎皇をして佛王に斯く云はしめ給へ、我れに徒黨を煽動せん財なし、若し我れに金ありとせば、我は直に艦隊を裝ひて那翁を奪はんためサント、エレナに向ふべし』と云ひ遣りぬ。

春は來れども花咲かず鳥も歌はぬ孤島にて、破れし胸のうさ、つらさ、誰に語らふ人もなく、あはれ問の子、那翁は司祭もがな、かつては汚れし世の塵に驅り狂ひて身の慾を逞しうせし、あゝ我れ愚なりしよ、顧みれば永遠命ある魂我にあり、神は暫しの年月を我れに假し給へり、さなり、魂を潔うしてこそ我は永遠に樂しまん、かくて那翁は母公に書を送りて牧師の來たるを乞ひければ、母君はフエスク大僧正に計りて、コルス人なる二人の牧師ブナヴイタとヴギアリとを遣し、九月十三日二人は孤島に着きぬ、時正に一千八百十九年なりき。

皇帝は病癒ゆべうも見えず、侍醫一人、牧師二人を側離さず、護らしめしが、病勢危篤に赴きけり、母公頻に熱情溢るゝ手紙を認め、英吉利皇帝をはじめ權勢ある人々、はては皇后マリ、ルイズ等に淸潔なる地に皇帝の住居を移さんことを求めたれど、聽されず、兒を救はんためには、我は出來得る丈力を盡さんと、悲哀に沈める母の叫びに天も地も默してけ

るにか、七月二十二日使來たりて、一千八百二十一年五月五日遂に那翁皇帝崩せりと母公に告げぬ。崩御の凶報を聞き、餘りの悲しさに母公は前後も知らず倒れ伏す、あらゆる悲境に際してすら、勇氣撓まぬ女丈夫なれど、那翁が孤島の冷き病床に最後を遂げしと聞きたる母公は脈中の血液たゞ凍れるがごとくなりき。牧師と侍醫とは歸りて、皇帝臨終の樣を落ちもなく母公に聞こえたれば、基督信者の務を果して死しけるよといみじう安堵し給ひぬ。

逐放の末年。――母公薨ず

皇帝崩御の後母公は悲歎にうち沈めり。『我が命は皇帝のそれと共に終れり、我は凡てを抛ちぬ』。と其の記錄に見えたるぞ哀れなる。

子に先立たれ、母公悲しき中にも身分に從ひて生活すべしと思ひ給ひ、昔を偲びて紡績の業を勤め、家事を監理し、兒女に儉約を勸め給ひたり、常に那翁を手本に兒女を勵して云ひけるは『我が兒は勉强によりて皇帝の位に上り、兄弟に王位を分てり』。と語られ給ひき。

崩御の翌年エリザ死せり、次でウゼヌ、ポリヌ死し程なく母公の特に親愛せられし后クラリ（ジョゼフの妻）崩せり、そが後を追ひて多年まめやかに勤めたりし乳母サヴアリアさへ歸らぬ世の人となりにしかば、母公はいよゝ悲しみに沈ませられ、一室に閉居してゐるかなきかに日を送り、寺院に赴き給ふほかは外に出で給はざりき。

風に搖らがる灯影かすかに、母公の生命いまは長かるべくもおもほえざるに、眼霞みて物見えねば、那翁皇帝の事蹟を記したる書物を人に讀ませ聞き給へり、或日人來りて那翁皇帝の像をヴァンドームに設置せんとて、其の圖案を示せるに、母公之を見ることも難ければ、指を觸れ『我は指もて圖案を見む』と云はれたり。

那翁の嫡子レスクスタド公薨せりと聞き、母公の悲しみこよなかりき『嗟兒は逝き、孫は死し、我れ誰によりてか餘命を送るべき』。と歎かせ給ふも哀なり

異父弟フェスク大僧正は日々に來たりて母公を慰め給へり。ルシアン、ゼロム母公を見舞はんと羅馬に來たり數月留まりたり「二十年以前我は母公殿下と仰がれしを、今は古のマダム、レチシアに復れり』と、むべ常に變らぬマダム、レチシアにして一生を修飾したる美事なりき。

后カトリヌ（ゼロムの妻）崩せりと聞き、母公頓に衰へ給ひ、發熱して病烈しかりき、一千八百三十六年二月二日フエスク大僧正より聖式を受け靜かに御魂を神に歸し給ひぬ。

（をはり）



貧窮問答歌評釋

文學士　境野天華

本文

かぜまじり、雨ふる夜の、雨まじり、雪ふる夜は、すべくもなく、寒くしあれば、堅鹽を、取りつゞしろひ、糟湯酒、うちすゝろひて、しはぶかひ、鼻びしびしに、しかとあらぬ、ひげ搔き撫でゝ、あれををきて、人はあらじと、ほころへど、寒くしあれば、麻ふすま、引かゞふり、布肩衣ありのことごと、きそへども、寒き夜すらを、我よりも、貧しき人の、父はゝは、飢え寒むからむ、妻子どもは、こひてなくらむ、此の時は、いかにしつゝか、なが世はわたる」「天つちは、ひろしといへど、あがためは、さやくなりぬる、日つきは、あかしといへど、あがためは、照りやたまはぬ、人みなか、あのみやしかる、わくらばに、人とはあるを、人なみに、あれもなれるを、綿もなき、布かた衣の、みるのごと、わわけさがれる、かゞふのみ、肩に打ちかけ、ふせいほの、まげいほのうちに、ひたつちに、藁解き敷きて、父母は、枕のかたに、妻子どもは、あとのかたに、かくみ居

と思ふた父の仇を討た上は、如何にもして命を全ふし、君の御用にも立ち、父の素志をも達するこそ、忠臣、孝子の義ならん、一先づ落ちらるゝだけ落ちて見んものと思ひ返しまして、堀を飛び越へようとすれども、何分堀の巾は貳丈もあり、深さは一丈に餘れることゝて、中々工夫も思案も付兼て、途方に暮れて居りました。

所が、その隠れてる竹林は、脊丈け永々と延びた竹計りでありましたから、イザ之を橋として渡らんものと、堀の上へ靡きたる太き竹の梢へ、さらさらと登りましたら、竹の末が向ふの堀岸に靡き伏して、案外やす〳〵と越へられました、何んでも夜の明けぬ間に、一足でも湊の方へと志して野となく山となく盲ら滅法に走りました、されど湊の方角さへ未だ知れぬうちに、夜は早や明けはなれましたから、若し人に認められては悪しゝと思ひまして、麻や蓬の生茂れる中へ身を忍ばせて居た處が、追手らしきもの共百五十騎計り馳せ散て、この邊を十二三才計りの子供は通らぬかと、道行合ふ人々に尋ね〳〵て過ぎ行きました。

その日は麻の中にて日を暮らし、夜に入りて何處ともなく只心當りに行く程に、忽ち年老た一人の山伏に行合ました、山伏は阿新が此處わたりに見なれぬ子供と思へるにや、訝しげに何處より何處へ御渡りなさるかと、尋ねましたから、阿新は隠すことなくありのまゝを語りました、山伏は義に富める者でありましたから、お心丈夫に思召せ湊に多くの商船が有ますから、乗せまゐらせて、越後か越中のうちへお送り申しませうとて、足がたるめば、手を引て呉れたり、肩にのせて呉れたりして程なく湊に出ました。

時に湊の船は皆な出帆した後で、遙か沖にかゝつて居た一艘の大船も、檣を立て、笘をまき、急ぎ、出帆の最中でありますから、山伏は手を揚げ便船呉れよと、聲をかぎりに呼立てましたが、知らぬ振りして湊の外へ漕出したから、山伏大に腹

を立て、沖の船に立向ひ、誦球さら〳〵と押揉で、
『一持秘密呪、生々而加護、奉仕修行者猶如薄伽梵……………明王の本誓あやまらずば權現金剛童子、天龍夜叉、八大龍王その船此方へ漕戻させ給へ』
と跳上り〳〵肝膽を碎て祈りました。此行者の祈り神に通じて、逆風俄に吹き起り、此船忽ち覆らんといたしましたから、舟人共慌て騒ぎ、山伏の御坊助け給へと、一心に船を此方へ漕戻しまして、汀近くなると、直に船頭舟より飛下りて、阿新を負ひ山伏の手を引きて屋形の内へ入れましたれば、風は又もとの如くに直りまして船は勇ましく湊を出帆いたしました。
然るに、この時追手百四五十騎馳來りて、遠淺に馬を控へ、その船までと招きましたけれども、順風に帆を揚げて、ひた馳りに走ましたから、其日の暮方に越後に着きまして、阿新はこゝに始めて虎口を遁れました。

この阿新丸こそ、後に國光中納言と稱へられ、父資朝卿のお志を繼いで、天晴れ忠義を抽んでなされまして、長へに我國忠臣の鑑と、仰がれなされた方であります。

（をはり）

那翁皇帝の母

菊地雪子

レチシア、ラモリノ。ボナパルト夫人

マリア、レチシアは、西暦一千七百五十三年八月コルス島のアジヤクシオに生れ、父をラモリノと呼びけるが、其頃外寇迺りに國を亂し、國内多端の折柄なるに、ゼヌに抗して又しても戰起りてければ、太刀取る身の譽ぞと、勇み〳〵て戰場に出でしが、遂に果敢なくも道芝の露と消え了んぬ。母君の悲しさ遣瀨なく今よりは纎弱き女の手一ッにて、いかにして朝夕の煙を立つべきか、娘は容色優れたる花の蕾なるに、女の業をし修めさせで、世の少女に劣らんはうしろ

めだやと、ひたすら深き思に沈みけり、かゝりし程
に、人の語らひによりてフェスク大尉と契を結びた
れば、レチシアを膝下はなさず訓へ育てけり、レチ
シア養父の家に在りし間、母はまた男子を分娩して
ジョゼフと名付けしが、後日この異父の姉弟にして、
一人は皇帝の母公に、一人は大僧正の榮位に上りて
宗教界に、政事界に、名聲芳ばしからしめしとは、人
慮り知りなんや。
こぼるゝばかりの愛を含みたる眼元、笑を帶びたる
その口元開けば花瓣二ッ搖ぐ縹緻のよさ、そぞろ男
子の心動かして、はかなき空想をも畫かしむ、レチシ
アが十三歳の花の春、そが身にかゝる一事こそ起り
たれ。
シャール、ボナパルトと呼べる十八の美少年、資質
の美さへ世に絕れたるが、若き血の湧きけるにはあ
らで、ゆかしの眞心より、レチシアの父母に其愛娘
を我れに賜ひねと、やがて約して我のみ眺めて花を
人な手折りそ、來ん年は髪上げさせて、新郎新婦と
月の夕、花の朝はれらかに世を送りなんなど聞こえ
けるに。はや佳辰を卜して嘉禮を擧げぬ。嫋かに咲
き誇りたる花いとしや雨風に曝されんは、若き妻再
三の産褥にこたびやうやう男子擧げたるを慶び、
ジョゼフと名付けたり、これ實にボナパルト家の嫡
子にして、後にエスパギウ王の位に登りたる其人な
りき。
されど未だ戰爭の斷間なかりき。コルス人の愛國心
強固なるに、防禦嚴にしてえ拔くべからざれば、ゼ
ヌ軍退き、佛兵交迭しぬ。コルスにては、パスカル、パ
オリ軍を督せば、島民應じて屍を野山に曝らすと
も敵にな降りそ、後ろをな見せぞ、寧ろ獨立の旗下
に死して榮とせよ、一致協同猶つて敵兵に當りたる
其の勇氣鋭鋒恐るべかりし、包圍月を渉れど陷るを
得ざりき、シャール、ボナパルト副將となり、帷幄に
於て企計を巡らす間、夫人は何處までも苦樂をともに
せんと、赤兒を腕に抱かへ、産期に近き重き身を、
矢玉霰と降る中に、山越え野路の草枕、流を渡り、

森に彷徨ひ、ほづゝの響きもゝのかはと人々を勵ましゝかど、勇猛なるコルス兵も遂に佛軍に破られ、將軍パオリ英國に逃走しけり、されどシャール、ボナパルトは、夫人の歎願によりて本國に止まりぬ。

那翁の誕生。——家庭敎育

頃は一千七百六十九年八月十五日なりき、空朗かに靑葉若葉を照らす日の光わざやかなるに鐘鳴りて、其音空に渡り、水に響き、餘韻コルス人の胸に通ふらん、この島が佛領となりし祝祭捧ぐる御寺の鐘平和を齎す餘音裊々たり、市内は生花と靑葉とをもて飾られ、人々新衣翠粲を着て祝ひ合ふてぞさまよひぬ、かゝりける時にアジャクシオの大堂に年若き女來りて祈禱を捧ぐるありけるが、これなんボナパルト夫人なりしよ。

聖祭未だ終らざるに、卒爾に腹痛を覺えたれば、急ぎ家に歸れるが、數時を經て英才ナポレオン出生しぬ。三十二才までなほ三人の男子ルシアン、ゼローム、ルイと、三人の女子エリザ、ポリヌ、カロリヌを産みけるが、夫はかりそめに病より遂に歸らぬ世の人となりぬるぞ憐なる。

饒にもあらざりし家財をもて、八人の子を養育することの難ければ、伯父君なる大僧正ルシアン、ボナパルトに管理萬端を依賴したり、伯父君は特更ナポレオンに意を用ゐて敎育し給へば、母君は針とる業を勤めつゝ、そが側に侍りて聞き居たり、母君も讀書習字などを自ら授け給ひて、秋の夜長の物語、長閑なる春の逍遙にも、智を磨き、德を養ふべかりし敎訓をのみし給ふも、他の兒女にはさしも見受けざることとなりき。

那翁童なりし頃、隣村の農夫彼を見て夫人に言ひけるは、「若旦那は長命なされば世界第一の人になり給ふべし」と、あらず、絶倫の英雄は三十有餘にして世界第一の人と、其の名を轟かしぬる、農夫の言を追想すれば、母君老いての樂みは是に過ぎたるものはなかりしなり。

勇氣ある夫人は愛に溺れず、時には嚴にして兒女を

よく服從せしめ、幼少より僞を言はせず、秩序を守るべく敎ゆれば、那翁幼時に感染したるこの習慣は、成年の後にも天性と化したりき、固執にして噪嘩不遜なる那翁は、我意を張らんと常に兄弟朋友と爭ひたり、墻を越えて隣家の木の實を取るとあれば、母君いみじう懲らしたまひき。げに賞罰兩つながら公平にしたまふ母君の誠は、未來の大英雄の那翁をして敬服せしめぬ、母は常に劍、大砲などの玩具を賞として那翁に與へ、幼少の頃より勇敢の氣を鼓舞せしめしも、蓋し後日那翁を那翁たらしめし所以なるべし。

伯父君は特に那翁を慈み給ひて、臨終の時云ひけるは、『那翁に財產分與するは無益なり、彼は自ら財寶を造らん、ジヨゼフよ、汝は嫡子に生るれども、那翁汝の上に權を有つべし』と、母君の資性を受けたる甥の將來は、伯父君預め知り給ひし所にや。

那翁二十二才にして砲兵中尉に昇進しけるが、戰塲に臨める時も必ず母君の意見を覗ひ、一度だに失敗せし事なし、コルス島が佛國の配下に屬してより、二十年を經てパオリ英兵を率ひて來たり、海陸勢を合せ進んで城下に迫る、夫人は怯する色なく、我等悉く佛國の國民なりと言ひ遣りぬ。

敵兵四面より合擊し火を放ちければ、夫人は兒女を伴ひて山頂に逃れたり、かくて眼下に我家の燃ゆるを瞰し憤激に堪えず、叫びて言ふ、『佛國萬歲……我等は一層美麗なる家を造らん』と、將來を自信して斷乎として言ひし、嗚呼この女丈夫よ、一夜の灰に燼滅したる都下を離るれば、遙か、沖の方より佛國の艦隊岸を指して來り、那翁の其艦に乘込み居たるを見る、海原隔てゝ互に見合す顏と顏、那翁母弟妹の恙なきを見るより默し兼ね、小舟に移らんも心もとなしとて直に海に飛び込み、山と高き浪を凌いで岸邊に着き、母子涙にくれて打喜びぬ。

分け行く跡の白浪と故鄕を遠くよそにして、佛蘭西のマルセイユに上陸し、此處に地を卜して住ひけり、さてもボナパルトの寡婦は夫死して後、氣丈に

も八人の子を養育せしが、パオリ黨に組せざるをもて、家さへ財さへ取り棄て、他郷に來たりしが、或る貴族の好意を受け、細き煙を立てたり、かく逆境に身を潜むれとも、夫人は鋭意兒女の躾方を勤めたり、曉告ぐる鷄の聲と共に寢床を離れ、一日の家事を整へて、三人の娘に分擔し、姉は市に行きて物買ふべく、中は食物を調理すべく、末は計算掛となり、又殘食を門乞ふ者に施すべく、それ〴〵務を配當しぬ。夜は母子相集りて紡績、裁縫を勉むる間、中なる娘に新聞雜誌などを讀ましめ、母君は歷史、物語の類、特に父君愛國の功蹟を語り給ひたり。

幸福の光

那翁は連戰連勝ツウロン市が嘗て英人に陷れられしを奪ひたれば、其の功によりて砲兵中尉より一躍大將に昇進し、ボーハルネ未亡人ジョゼフイヌと婚を結び、嫡男ジョゼフはマルセイユ市の一商富豪の娘を娶り、長女エリザは將軍バクオシーに、次女ポリヌは將軍レクレルリに嫁すべく約整ひたりき。

猛烈なる那翁は兵を勵し、軍を麾き、アルプの嶮岨を越え伊太利に侵入し、大に戰ひて之を降したり、勝利の報一度マルセイユに達するや、市民は熙々として祝賀し、子の代理に勝利の枝を母公に送り、その大功を賞し合ひぬ。

那翁は埃及遠征を企て、艦隊を率ひて途に上りたるに、ルシアン、ポリヌ、ジョゼフィヌ等はパリに止まりたれば、夫人も共に在しき、されど、ジョゼフイヌは輕噪奢侈の婦人にして、華々しく外見をのみ裝ひければ、質素に慣れし母公と自ら嗜好の齟齬、感情の衝突を來すこともありて、姑嫁の間さほど睦ましからざりき。

皇帝の母君

那翁皇帝云はく『兒の將來は全く母による、我が財寶は母君の賜なり、そは母君我を奬勵し、勇氣を鼓舞し給ひたればなり』と、斯くて英偉の君は母公に對する尊敬と報恩との念厚かりき。

那翁は母公と共に在すべく歎願すれども、頓の榮華

を貪るは、先見秀れたる夫人のつゆ喜び給はぬ所なれば、獨り自ら華美快樂と遠ざかり、閑靜質樸の地に赴き、一家團欒の時のみ宮中に在はすを、こよなき慰とし給ひたり。

那翁ジョゼフィヌを娶りたるを母君喜び給はざるに其の女オンタンスさへルイに嫁したるは不快なり、と母公常に思召し給ひぬ。さるにルシアンは那翁の拒めるをも聞かで、マダム、ジユルベドッウと結婚しければ、那翁大に憤りてルシアンを宮中より逐ひ出し、兄の名を辱めしとて國外に放逐しけり、那翁次で總督政府を顚倒し、モロー將軍を逮捕せしめ、アンジアン公を銃殺せしめしなどは、母公の心をいたく悲しませたりき。

かくてルシアンは妻と手を携へ羅馬に到れば、母公ルシアンを憐み苦痛に堪えられず、自らも日ならず其の地に赴き給ふ、那翁大に怒りて『兄に從はぬ弟を特愛する道やおはする』とて母公を責む、されど母公云ふ『八人の子の内にいとも不幸なる兒こそ尤も不愍なれ』と仰せ給ひて、羅馬に行きて歸られず

一千八百〇四年八月二日那翁即位の式を行はんと、敎皇ピオ七世に臨御戴冠を請ひたれば、國民足を空に騷ぎ立ち喜びて。那翁亦母公の臨駕をも請ひたれども、ルシアンの勘當免されざる上は、盛式に臨ませらるゝを欲せずとて、同月廿日パリに歸り給へりまことや那翁不滿の餘り、母公をして遂に大后の位に上らしめず、只公殿下として一生を送らしめたり翌年五月廿三日勅令を發し、十萬金を母公宮殿建築費に充て、貴婦人等に命じて侍らしめたり、母公は廣大なる家屋、眺望勝れたる土地を好ませ給へば、那翁はポン、スール、セーヌに光輝灼爛たる宮殿を造らせ、近衛隊に護衛せしめて、御幸せさしめき。

母公は動作言語凡てに質素を守り給ひ、慈愛厚く、貧者を憐み給ふこと深かりしかば、はやくもポン市民に尊敬せられたり、金銀を出して困窮者に施し給へば、數月を經ざるに家々賑はひ、人々太平を謳ひて皆其の徳に懷きぬ。母公はまた慈善會の總裁と成

らせ給ひ、屢々病院に御幸あられ、親しく患者を慰藉し給ひたり。パリに入らせ給へば、プリエンヌの宮殿に在しき、皇帝は諸種の儀式に母君たるの資格をもて、華々しく臨御せらるゝを欲し、鄙びたる言語擧動を廢し、都の風俗に習ひ給へと乞へど、ゆめ聞かせ給はねば、那翁は堪えずして、『お母さんは、ほんたうに田舍者で困ります』と云ひたりき、兄弟集ひたる時皇帝云ひけるは、『母君は朕をナポレオンナポレオンと呼び給へど、我はそを好まず、兄君よ御身よりかくと母君に仰せ給へよ』と、皇兄ジョゼフに依賴しけり、母公これを聞きて云ひけるは、『我が兒が一國の皇帝、歐洲全國の主領と成りたることは感歎す、されど、我に於て、兒は泣き叫びて生れ來れる時と、今もなほ異なる事なし』、とて、猶もナポレオン、ナポレオンと呼ばせ給ひき。

政事多端なるに從ひて、那翁は往日のこと、母公の意見を覗はず、皇后ジョゼフィヌの離婚、弟妹の娶嫁をしも皇帝獨斷に定めたれば、母公痛く憂ひ給ひて、『人我を世の幸ひ人と稱ふれど、我が一生は憂愁致命の連鎖なりと』。深く歎じ給へり。

其後那翁澳地利の皇女マリ、ルイズを皇后に迎へ、いよ〳〵驕傲を極めたり、或日皇帝母子兄弟集りたるに、那翁己が手を母公の前へ出し接吻せしめんとせり、母公そを見るより直に突き反したり、那翁母公に云ひけるは、『朕は汝の皇帝にあらずや』と、母公答へて『我こそは汝の母にあらずや』、と仰せ給へば、那翁一言だになく、默して母公の手に接吻しけり、此處に於て母公威儀を正しいと嚴に『陛下は皇帝にして、我は臣下なれば、我公然汝を尊敬すされど個人的に云はしめよ、我は汝の母なれば、汝が是なりと云はんとき、我は非なりと云ふことあるべし』。と仰せられき。

子を思ふ親の情の深ければ、惡しき弊を矯正せんと叱責し給ふこと屢々なり、華美に漸染し、侍臣等の諂諛に狂醉せる兒女の心のはかなさを輕んじ給ひて母公は志溢れず、行驕らず廉直にいませり、母

公嘗て、大に歎息して、「吁、わが言に從ひなば、兒等はかゝる逆境に逢はざるべきを」、と、其の記錄に記せり。

母公いみじく節儉せらるれば、那翁これを喜ばず、『母君よ、一ヶ年十萬の金額を費し給ふとも、我はそを奉るべければ、餘り儉素になおはせそ』、と云ひけり。母公笑みて『そはいと易きことなり、さらば汝は我にその二倍を與ふべし』、と云はれき。「現在の寶をもて、將來を救ふべく我は勸むるなり、嗚呼」とばかりに仰せられし。

げに那翁エルバ島を出奔して再擧を計る折、母公は貯蓄せし多額の金を與へ、ヴアテルロに破れし後も悉く殘金を與へたれば、罪せられて數月間黑麵麭をのみ食はせられしが、甘じて一言をだに不平の言を出だされざりき、母公の心の中は如何ならん、思ふに大望の血は脈中に熱してけん。

公の儀式に御幸せらるゝには、必ず或る慈善の條件を付けざるべからず、母公はジョゼフィヌの子ウゼヌをば生の子にも劣るまじく情をかけ給ひ、そが婚禮の式に臨ませ給ふにも歸るさに兵營を見舞ひ給ひたりき。

帝國の末年。——那翁、母公、敎皇。
——エルバ島。——母子の會見

輝く朝日の光と那翁の權威日に月に隆んなること雙なし、澳太利の皇女と婣を結びて、皇帝多年渴望したる皇太子を擧げければ、帝國の幸福は最高度に達し、歐羅巴全州に羨慕せられたり、廣大なる帝國に隣りて皇帝は數多の王國を兄弟に分配し、王冠を授けたりき、ジョゼフはエスパギユ王に、ゼロムはヴエヌフアリ王に、ルイはオランド王の位に上り、二人の娘は公爵に、末なるカロリヌはナプル王の后に成り、母公の榮また晃々として類なかりき。

我が世とぞしもおもふなる時世の榮華に、幸多き年月送りけんと人の思ふべけれど、我が心を割きて見ば、喜よりは憂勝れりと云ひしも、ルシアンが世運を悲しみ、いかにもして兄弟を和睦せしめんと力

を盡せしが、那翁遂に許さゞりけり、オランド王も兄と不和を生じ、母公によりて罪を謝すれども免されず、王位を奪はれたり、エスパギユ王ジョゼフ皇太子洗禮式を行はせらるゝに臨席せざりしは、國人那翁皇帝を憎惡したるゆゑにして、兵亂起らんことを母公ひそかに怖れ給ひき。

母公と友愛厚かりし異父弟なるジョゼフ、フエスク大僧正は、皇帝權を弄して、即位の時戴冠せられたる、ピオ七世を捕へ幽囚したるを諫めければ、即ち國外に逐はれたりき。こは痛く母公を悲ましめければ、輕侮して云ひしことあり『子は神の嚴しき罰を免れじ』、また弟君たる大僧正に哀願して、『母の哀訴をきかせ給へ』と、眞心込めて云ひ遣りたれば、敎皇も母公の誠心に感じ、やがて講和を承諾し給へり皇帝と敎皇との和議はフオンテヌブロ宮殿に行ふべかりし、敎皇はフエスク大僧正の臨席を求めたれば皇帝は叔父君の大僧正司祭等を伴ひて當日來給ふやう招待せられぬ。さるに敎皇は未だ獄屋に在せし間

那翁アルマギユに威を示さんと兵を擧げ、レプチーの戰に破れたり、一千八百十三年四月六日讓位し同月二十日エルバ島に竄流せられたり、敎皇は羅馬に護送せらるれば、母公とフエスク大僧正とはリオン市より敎皇の還御を遙拜して謝意を表し、急ぎ逃遁しけり、旭日の昇る勢もて、昨日までは衆を服したるボナパルトの一族も、今は嵐に誘はるゝ木の葉のごとく、散りに散りてぞ落ち行きぬ。

敎皇の意を奪ふべくもあらずして、一室に幽せし後羅馬に還らせまつりしは、全く那翁レプチーに於て敗軍したるためなりき、母公羅馬に赴き敎皇に謁すれば、敎皇はいと懇に待遇し給ひけり、ルシアンゼロムルイも、羅馬に隱家を求めたり、敎皇は獄屋を出でゝ日淺きも、暴虐者の家族に隱家を與へ慰撫し給ひたりき。

母公はエルバに赴き那翁を見んと切におぼし給ひてかくと云ひ遣りければ、那翁諾がひ八月二日英國の便船にて渡航しぬ。

母公ボルト、フエラジオに着すれば、將軍市長等奉迎し、六頭馬車に召さしめ、行列護衛をもて敬意を表し、家に入らせ奉りぬ。されど那翁茲に在らざりければ、母公不快に思はれ給ひて那翁に會ひ、其の出迎に來ざりしを責め給へり、十一月ボリヌもこの島に來ぬ。

この時英雄那翁は帝國を侵略せんと血氣勃々たり。千鳥友よぶ島の夕、草さへ眠りて、あたり閑寂たるに、那翁跫音高く庭園を急ぎ歩みけるが俄に止まり、母上に『企得ざらめやは』と叫びぬ。母公へと後に扣へしが、『そはいかなる秘密なるか、語られよ』と云ひ給へ。ば、那翁しばしためらひて答へけるは、『さなり、母上に語るべし、されど人にな洩し給ひそボリヌにすら秘し給へ我は今夜出發せん。――何處を指して行かるゝにか。――パリに行かん、母上いかにおぼし給ふか。――吁、我れ情に堪えず暫し待たれよ……よし、さらば出發し天運に委せよ』。

ウアテルローの敗北。――皇帝母子の離別。――サント、エレナ島。

皇帝夜に乘じて島を逃れ、航して佛國に赴き、先づカンヌを陷いれ凱戰してパリに入りければ、將士等四方より馳せ集りたり、母公もやがてパリに行かんと、島を出立ち、歸途ナプルに赴き三女なる皇后カロリヌに會見し、六月一日パリの宮殿に入らせ給へり、十八日を經て那翁ヴアテルローに敗北し、續て敵軍パリに侵入し、再び讓位を求め、那翁皇帝を大西洋の孤島サント、エレナに遠流せんとす、那翁行きて母公に別れを告ぐ、母公悲哀に堪えず、涙を流し『さらば、我子よ。――母上さらば』。母子相抱きぬ。歸らぬ旅の別路と思る親子の胸いかならん母公はフエスク大僧正とパリを去り、伊太利指してぞ落ち行きける、シエンヌに居を定めんとせしが、トスカヌ公拒みけり、さるを敎皇深く憐みて羅馬に止め、厚く遇せしめ、敎皇も屢母公を訪れ慰め給ひたり。

母公は片時も那翁の上を忘れ給はず、慈愛のあまり

行きて自ら炊掃の勞を取らんと言ひ遣りたれど、那翁遂に諾はず、母公己が資金を示して悉くそを送らんとせしが、那翁聽かざりき、母公は金銀を盡して與へなば赤貧に陷るべしと云ひし者あり、母公答へて「我れはそを厭はず、さらば我れ手に杖を持ちて那翁の母のために物乞はんのみ」と云ひ給へり。

大陸同盟の君主悉くエキス、ラ、シャッペルに集りたるを聞き、母公一書を送りて哀を請ひたり、其の文に云ふ。

拜啓兼て各國皇帝國王陛下御集會遊ばされ候由承り居り候へば各陛下の御慈仁により悲歎に沈む母が哀訴を御聞屆け下さるべくと偏に待上奉り候次第に御座候

扨那翁皇帝は多年の間大西洋の孤島に竄流の身と御成り居り候へども今度の御議會には各陛下寛大の御心にて往時の友たる那翁の上に宜敷やう御相談下され候御事と推し上げ候敵國の大度に一身を委ねて英吉利國の腕に縋りたる皇帝を苦悶せしめてあはれ孤島に窓しうせんと思召され候や噫我が兒は舅なるアルマギユ皇帝に倚るべかりしを亞歷山帝は廣き御心もて昔日の同盟を追想し必ず我が兒を保護し給はれ候ひしならんさるを英吉利皇帝は彼に信用を示したる者を惡しきに取り計らはれ候べきや御伺申上候

那翁皇帝は財も兵も盡滅致し候て今まで神が授け給ひたる勢力さへ無く健康次第に衰へて不具者同樣に相成候へば恐怖遊さるゝべき者には無之候

我が命にも代へまほしく兒を思ふなる母の情溢れ溢れて一書を陛下に呈し候事御推察下され度願ひ奉り候兒が苛酷に遇せられしより數多の星霜をも經過致し候へば母に免じて兒を膝下に御返し下され度候皇帝國王陛下よ君は至善なる神の代理者におはし候へば我が兒を苦ましむるを止め給ひて兒に自由を與へ給へ國法に

も制限有之べくと存せられ候右の願御聞届け下され候はゞ子々孫々永く陛下の徳を感謝しまつるになん

一千八百十八年八月二十九日　謹言

那翁の母

皇帝國王陛下

かゝるけ高き手紙を送りたるも返詞なくして、敵國は母公の擧動出入などを監視せしめければ、母公は兒女の訪ひ來る時ならでは人に接見し給はざりき、佛王ルイ十八世は敎皇那翁の母公を優待せらるゝをもて、屢使者を遣し云ひけるは、母公は佛國のボナパルト黨と好を通じ且つコルス人を煽動して兵を擧んとすと詰問せり、敎皇止むを得ず、カルヂナル大僧正に命じ行きて母公に問はしむ、母公端然として答へけるは『願はくは敎皇をして佛王に斯く云はしめ給へ、我れに徒黨を煽動せん財なし、若し我れに金ありとせば、我は直に艦隊を裝ひて那翁を奪はんためサント、エレナに向ふべし』と云ひ遣りぬ。

春は來れども花咲かず鳥も歌はぬ孤島にて、破れし胸のうさ、つらさ、誰に語らふ人もなく、あはれ悶の子、那翁は司祭もがな、かつては汚れし世の塵に驅り狂ひて身の慾を逞しうせし、あゝ我れ愚なりしよ、顧みれば永遠命ある魂我にあり、神は暫しの年月を我れに假し給へり、さなり、魂を潔うしてこそ我は永遠に樂しまん、かくて那翁は母公に書を送りて牧師の來たるを乞ひければ、母君はフエスク大僧正に計りて、コルス人なる二人の牧師ブナヴイタとヴギアリとを遣し、九月十三日二人は孤島に着きぬ、時正に一千八百十九年なりき。

皇帝は病癒ゆべうも見えず、侍醫一人、牧師二人を側離さず、護らしめしが、病勢危篤に赴きけり、母公頻に熱情溢るゝ手紙を認め、英吉利皇帝をはじめ權勢ある人々、はては皇后マリ、ルイズ等に清潔なる地に皇帝の住居を移さんことを求めたれど、聽されず、兒を救はんためには、我は出來得る丈力を盡さんと、悲哀に沈める母の叫びに天も地も默してけ

るにか、七月二十二日使來たりて、一千八百二十一年五月五日遂に那翁皇帝崩せりと母公に告げぬ。崩御の凶報を聞き、餘りの悲しさに母公は前後も知らず倒れ伏す、あらゆる悲境に際してすら、勇氣撓まぬ女丈夫なれど、那翁が孤島の冷き病床に最後を遂げしと聞きたる母公は脈中の血液たゞ凍れるがごとくなりき。牧師と侍醫とは歸りて、皇帝臨終の様を落ちもなく母公に聞こえたれば、基督信者の務を果して死しけるよといみじう安堵し給ひぬ。

逐放の末年。——母公薨ず

皇帝崩御の後母公は悲歎にうち沈めり。『我が命は皇帝のそれと共に終れり、我は凡てを抛ちぬ』。と其の記錄に見えたるぞ哀れなる。

子に先立たれ、母公悲しき中にも身分に從ひて生活すべしと思ひ給ひ、昔を偲びて紡績の業を勤め、家事を監理し、兒女に儉約を勸め給ひたり、常に那翁を手本に兒女を勵して云ひけるは、『我が兒は勉强によりて皇帝の位に上り、兄弟に王位を分てり』。と語られ給ひき。

崩御の翌年エリザ死せり、次でウゼヌ、ポリヌ死し程なく母公の特に親愛せられし后クラリ（ジョゼフの妻）崩せり、そが後を追ひて多年まめやかに勤めたりし乳母サヴアリアさへ歸らぬ世の人となりにしかば、母公はいよゝ悲しみに沈ませられ、一室に閉居してゐるかなきかに日を送り、寺院に赴き給ふはかは外に出で給はざりき。

風に搖らがる灯影かすかに、母公の生命いまは長かるべくもおもほえざるに、眼霞みて物見えねば、那翁皇帝の事蹟を記したる書物を人に讀ませ聞き給へり、或日人來りて那翁皇帝の像をヴァンドームに設置せんとて、其の圖案を示せるに、母公之を見ることも難ければ、指を觸れ、『我は指もて圖案を見む』と云はれたり。

那翁の嫡子レスクスタド公薨せりと聞き、母公の悲しみてよなかりき『噫兒は逝き、孫は死し、我れ誰によりてか餘命を送るべき』。と歎かせ給ふも哀なり

異父弟フェスク大僧正は日々に來たりて母公を慰め給へり。ルシアン、ゼロム母公を見舞はんと羅馬に來たり數月留まりたり『二十年以前我は母公殿下と仰がれしを、今は古のマダム、レチシアに復れり』と、むべ常に變らぬマダム、レチシアにして一生を修飾したる美事なりき。

后カトリヌ（ゼロムの妻）崩せりと聞き、母公頓に衰へ給ひ、發熱して病烈しかりき、一千八百三十六年二月二日フェスク大僧正より聖式を受け靜かに御魂を神に歸し給ひぬ。

（をはり）



貧窮問答歌評釋

文學士　境野天華

本文

かぜまじり、雨ふる夜の、雨まじり、雪ふる夜は、すべくもなく、寒くしあれば、堅鹽を、取りつゞしろひ、糟湯酒、うちすゝろひて、しはぶかひ、鼻びしびしに、しかとあらぬ、ひげ掻き撫でゝ、あれををきて、人はあらじと、ほころへど、寒くしあれば、麻ぶすま、引かゞふり、布肩衣ありのことごと、きそへども、寒き夜すらを、我よりも、貧しき人の、父はゝは、飢え寒むからむ、妻子どもは、こひてなくらむ、此の時は、いかにしつゝか、なが世はわたる、「天つちは、ひろしといへど、あがためは、さやくなりぬる、日つきは、あかしといへど、あがためは、照りやたまはぬ、人みなか、あのみやしかる、わくらばに、人とはあるを、人なみに、あれもなれるを、綿もなき、布かた衣の、みるのごと、わわけさがれる、かゞふのみ、肩に打ちかけ、ふせいほの、まげいほのうちに、ひたつちに、藁解き敷きて、父母は、枕のかたに、妻子どもは、あとのかたに、かくみ居

て、うれひさまよひ、かまどには、けぶり吹き立てず、こしきには、蜘蛛のすかきて、飯炊く事も忘れて、ぬえとりの、のどよび居るに、いとのきて、みじかきものを端きると、云へるが如く、しもと取る、里をさが聲は、ねやどまで、きたちよばひぬ、かくばかり、すべなきものか、世の中の道。

反歌

世の中をうしとやさしとおもへども、飛び立ちかねつ、鳥にしあらねば。

富み人の家の子どものきるみなみ、くだしすつらむ、きぬわたらはも。

あらたへの、布衣をだにきせかてに、かくやなげかむ、せむすべをなみ。

語釋（一）長歌

かたしほ。和名抄に石鹽一名白鹽、又有二黒鹽一今按俗呼二黒鹽一爲二堅鹽一。とあり、固まりたる鹽を云ふ。

とりつゝしろひ。「とり」は口中に取り入れるなり「つゝしろひ」は「つゝしり」と云ふ語を伸べて云へるにて、口中に入れて小かく嚙み砕くを云ふ。

かすゆさけ　酒の糟を水に入れ、煎立てたるを云ふ。

うちすゝろひ。「うち」は云ひ起こす詞、「すゝろひ」は「すゝり」を延べて云へるなり。

しはぶかひ　咳息(しはぶき)の延ばりたる詞

はなびしびしに　萬葉古義には「はなびはなびし」とありしを斯く誤りたるにあらざるかと疑へり、語の意味は糟湯酒にむせて鼻塞り、はなび(嚏)を起こすとなり。

しかとあらぬ。さもあらぬ、しかともなきなど云ふ詞と同じくはかゞしからぬ意なり。

ほころへど　誇り顔なれどなり、例の延りたる詞
かゝぶり。被りの古言。
あさぶすま麻にて製せる夜具、貧者の用ゆるもの、
ぬのかたきぬ。木綿にて製し袖はなく肩斗りにかけて着るものにして、後世武家の禮服なる肩衣の名は此等より出でたるか、其の始めは貧者の身に着け慣れたるものなりしなるべし。
ありのことごと。有る丈、有る限りと云ふ意。衣服の有る限りなり。
きそへども。身に襲け着れどもなり。
寒さよすらを　寒き夜であるのにと云ふが如し。
こひてなくらん。衣食の缺乏を訴へて泣くならんと貧者をあはれむ詞。
なかよはわたる。汝はいかにして生活渡世を爲すかと問ふなり。
わくらはに　たま〳〵と云ふ意、古今集行平朝臣の歌に「わくらはにとふ人あらば須磨の浦に、藻塩垂れつゝわぶと答へよ」とあり、此處にては偶然にも生を人間に受けたるにと云ふ意なり。
あれもなれるを　なれるは人に生れた事を云ふ。又宣長の説につくると讀ませて人並々に田畠を作ると云ふ方に取れるもあり。
みるのごと　（海松）は海に生ずる植物にして、其の枝數多に分れたり。
わゝけさがれる　衣服の襤れ敗れたるを云ふ、海松にたとへたり。空穗物語に「かたびらのわゝけさがれる」とあり。
かゞふ。「かゞふ」は際と云ふ字これにあたり、字鏡には際殘帛也、也不禮加々不とあり、布帛の敗れつゞれたるを云ふ。
かたにうちかけ。肩衣なれば斯く云ふ。
ふせいほ。伏屋など云ふに同じく、賤しき片ばかりの住居を云ふ。
まげいほ　曲り歪みたる賤しき家。
ひたつち　床などもなく直接に土に藁など敷きたる貧家のさまなり。

かくみゐて　一處に寄りあひ、額をあつめ嘆き居る樣なり。

うれへさまよひ　心に悲しみあるを口に洩らし嘆息するを云ふ。

こしき　飯を炊く器、古の器は瓦製にして形圓く、底に細き穴あり。今のは木製にして底に竹の簀を敷く、俗にせいらうとも云ふ。

くものすかきて。すかきて巣を作るなり、飯炊くことも絶えたれば自ら蜘蛛などの巣つくるなり。

ぬえ鳥の　冠詞。

のどよびをる　ぬえ鳥の如く咽に音を立てゝ嘆き悲しぶを云ふ。

いとのきて　いとゞと云ふに同じ。やが上になり。

しもとゝる。「しもと」は笞杖なり、笞杖を持して責め立つるは此處の村里の長にして、租税などの澁滯せるを責むるなり。

さとをさ　孝德天皇紀に五十戶爲レ里とあり、又戶令に毎里置二長一人一とある即ち是なり。

すべなきものか　奈何ともせんすべなく、情なくつれなきもの哉と嘆息す。

よのなかのみち　世話渡世の道。

語　釋　（二）短歌

うしとやさし　厭やだと思ひ、又かくして生活するは恥しと思ふなり、やさしの用法少しく異なれるを注意すべし。

きるみなみ、着る身なみなり、衣多くて一々は着るに堪へぬと云ふ意。

くだしすつらむ　着るに及ばずして腐爛せしめ、果ては棄つるに至らむと云ふ意。

きぬわたらはも　絹布の輕き衣、綿の入りたる厚き衣にして、らはなどなり、富みたる人には餘るほどの衣服もあるものをと嘆息せるなり。

あらたへ。古語に和布と對して云ひ、同じ麻にて作りしものも細かにして品よきを「にぎたへ」と云ひ、粗雑にして品惡しきを「あらたへ」と云ふ。藤皮にて作れるものは一般に目あらきが故に「あら

たへの藤」とつゞけらるゝこと多し。

通　解

(長歌) 吹く風の身にしむばかりか、雨まで降り加はりて居る夜の寒むさ。雨ばかりでなく、雪まで降り加はりて居る夜の寒むさ、どうして此の寒むさを凌いだものであらうか、外に方法とても無い處から、酒の肴に取り出して堅鹽を少量づゝ口にてかみ砕き、酒はと云つても別に結構なものでもない　只糟湯酒、これでなりと温まりて寒むさを防ごうと思つて、打ち傾け打ちすゝりして居れば、酒にむせてか、寒にひへたが爲めか、しきりにくさめを催す、其度に、澤山も無いひげを掻き撫でゝ、自分ほどの者世にあらうかと云ふ氣位になつて、頻りに元氣を付けて見たが、根が所謂附け元氣の事で一向に面白く無い、寒むさは一層身にしみて覺ゆる、其處で仕方もなく麻の衾を引き被むり、又布の肩衣をある丈け出して着て見たがまだまだ寒むさは身にこたへて覺へる。が思うて見れば寒い寒いとは云つて居ても、自分の身はまあ幸福なもので、世の中には、自分よりもつと、もつと貧窮して居る人があつて、此の夜の寒むさを何程つらく感じて居るであらうか、多くの貧しい人達の中には此の寒むき夜にありて、御飯も碌に食べず、衣裳も充分には無い爲に、兩親にひもじい目寒むい目を見せ、妻子は其の苦痛を訴へて泣くと云ふ果敢ない、情ない身分の人もあらう、此のやうなる人達はどうして此の寒夜を過ごして居るだらう、どうして世を渡りて行くのであらう(以上貧者の上を思ひ遣りて問を起こせるなり。以下貧者の方より是れに答へたる體に作れり。題を貧窮問答とせるも是れが爲めなり。)此の天地は廣大無邊の物と云ふことを聞いては居ますが、それも私共のやうな貧賤な者には誠に狹ま苦るしく思はれて、殆んど生きて居る餘地は無いやうに思はれます。又日月は公平無私何時も此の世界を照覽ましますと云ふことも聞いては居るが、それ

も貧しい私共の身には恵みの光りが及ばぬと云つて宜いと思はれる。世間の人皆斯く困難をして居るのでしようか。左もなくて只自分ばかり此の不幸を見るのでしようか。偶〻生を有り難い人間に享けて人と生れて來て居るのに、其の甲斐も無く又人並々に田畠も作りて働いては居るが、不幸な自分共の此には、綿の入りた肩衣も衣れず、着て居る衣はと云へば、情けない、見る影も無くつゝれて手もあてられぬ程に成つて居る。其の様子は宛も海松を身に纏うて居るやうである。襤褸の衣を肩に引き懸け、形ばかりの賤が伏屋のむさくるしく、頽れ懸つて居る中に、床も無いからして、ぢかに土地の上に藁などを散らし、敷き擴ろげて其の中に父母妻子住み暮らして居る。彼方に父母此方に妻子、狹まくるしき處に群れ合ふて、憂ひ嘆きて居ると云ふ哀れな容體、元より時から時とは食事も出來ぬので、竈の下には火の氣も絶え、い、こしきの中には久しく用ゐぬ爲めに、蜘蛛が巣を

作りて居ると云ふ哀れさ、息ずゝりをして悲しみどうにかしたいと思つて居る時〻時、揃てゝ加へて、丁度いとゞ短い處を、其の端を切つて取ると云ふやうに、泣面に蜂、官への納物も濟まぬ爲めに、村の長になつて居る人が、遠慮斟酌もなく、笞杖を携へて來て、聲高く責め立て、居るのが、家の内まで鳴り渡つて聞えるつらさ、世渡りと云ふものは、如斯迄も六ケ敷、苦しいものであるか實に情けない事である。

（短歌一）　世の中はうるさい、つまらぬ、から貧しい生活をして居のは恥しい事だと思つ見ても、鳥でない自分にはそれかと云て、地上を飛び離れる譯にも行かず、相變らず、うるさい、つまらぬ、恥しい生活を續けて行かねばならぬ苦しさ。

（短歌二）　有餘るほど蓄へのある富豪の人達は手を通さずに其儘腐らして仕舞ふ勿體ない衣裝も絹とか、綿の厚く入たのか、數へ切ない程あらうが、世界はどうしてかく迄も不公平に出來居るのか、

襤褸の外には一枚も無い自分共の身が怨めしい。

（短歌三）　身に着ける衣裳と云つたら、粗末な布の一枚も自由にならぬ自分共である。それかと云つて外に仕方もない、只身の不幸を歎き居るより外の方法は無い。

餘　説

此の篇の作者山上憶良は萬葉集の中の作家の中にても殊に著名な作家であつて、大伴家持と共に柿本人丸、山邊赤人に亞ぐ名手として尊まれて居る此の篇は萬葉集の第五卷に載りて居る有名なる作である。萬葉集には固より是れに勝さりた長歌、短歌があるに違ひない。然し此の篇の如く、平民の爲めに同情を注ぎ、平民の爲めに泣き、滿腔の熱血を捧げて國民の爲めに歌ひ、國民の感情を表はしたものは少ない。凡て詩歌は只個人の思想感情を云ひ表はしたものでは無く、國民に代りて其の思想感情を云ひ表はしたもので無ければならぬ。此の點から見る時は此の篇の如きは萬葉集中稀れに見る處の作であつて他の區々たる相聞（戀歌）や、挽歌（哀傷）の諸篇より遙に價値があるやうに思はれる。是れ予が玆に萬葉集の中から此の一篇を選み出して、不完全なる解釋を試みた所以であつて、憶良時代よりもつともつと貧富の懸隔劇しい現代にありて、此の篇は是れを讀む者に更に更に痛切なる感動を與ゆべき筈である。（完）

支那古代の詩（上）

林　恒　山

支那の詩といふものは、我邦に歌のあると同じことで、人々の心に感じたる所を言ひあらはしたものであるし古代の詩といふものは、上に用ゐられたのもあるし又下々に行はれたのもあり、都に傳つたのもあるし鄙に唱へられたのもある、其言ひ方の立派なるのもあり卑いのもあり、長いのもあり、短かいのもあり六ケ敷のもあり、容易のもある、其澤山なる詩を孔

子が撰り分けて、其中から敎へになるものを三百十一丈採つて子弟に敎へられた、今は三百五丈傳はりて居るが、之を詩經と稱へて、支那では申すに及ばず、我邦でも維新前迄は漢學者の尊んで五經の一はとして研究した書である、夫故其註釋の仕方なども頗る六ケしく種々の說があつて、云はゞ隨分八ケ間しき書物の一ッであつた、今日となつては、斯いふ詮議をする必要もないが、唯々古代の詩といふものが何んなものであつたかといふこと位は知つて居ても宜からう、其處で何れを話したら宜からう、前にも言ふた通り、種々のがあるが、先づ容易い短いのとせう、

桃之夭々。灼々其華。之子于歸。宜其室家。

桃の木といふものは、梅の木の樣に角立ちたる枝ぶりのものではなく、又曲りくなりするものでもなくすらりと伸びて居るもので、云へば木の中でも柔しく優しいものである、人でいふと男より女の方である、夭は假借字で、本字は妖で、若木の事であるが草でも木でも若いのを形容して、夭々と書いてあるのが多い、又人の若いことにも、手足の若く見えることなどにもつかつてある、總て同じい文字を二つ重ねて形容の詞とすることは、日本語でも同じい事で、美しい事にテラ〳〵して居る、惡らしい事をニクニクしいなといふ、灼々も灼はカヾヤクといふ字で二字重ねてキラ〳〵と光ることを云ひ、桃の花といふものは遠桃山下を燒くなどゝいつて、他の花とは違つて、燒立つ樣に見えるものである、此二句を一口にいふと、桃の木はスラりと若々しく其花はテラ〳〵と美しいといふ事で、是は年若き女子の姿のスラリと優しく顏のテラ〳〵と美しいといふことである、之子とは始めて比より實事に入りていつたので、斯る美しい女子が、子といふは親のあることが分かる、于は助字で意味なく、讀む時にコ、ニといふまで、、歸はトツグと讀みて、女は夫に嫁して其

家の人となるから、歸の字を嫁入する事につかふので、室家は室は奥をいひ、家は外をいふとあつて外とはお表といふことで、下々のものには奥の表のといふ差別はないが、大家にはお奥といひ、お表といひ、お奥は女中衆の居らるゝ處、お表は臣下の參向する處としてある、初めの二句の比を受けて容貌の美しい方が嫁入して後はお奥の女中衆にも、お表臣下達にも受けがよく、誰一人褒めぬものもなからう、ないにきまつて居るといふ事である、

桃之夭々。有蕡其實。之子于歸。宜其家室。

初めの句は前章と同じく、蕡は墳と同じとあつて、墳は土塊をいふとある、土のカタマリといふ事で、土のカタマリの樣なと形容詞につかつたので。シッカリしたる重い程に出來た桃の實があるといふ事で此二句は前章と同じく比へて、一口にいへば桃の木の若々しいのに大なる實が出來て居るといふ事で、前章の比は専ら容貌の美しい事のみをいつたのであるが、此章では心立を加へたので、花は容貌、實は德義として、立派なる實といふのは、心情に於ての何一ッ缺點といふものゝないといふ事を比へたので人は容貌ばかり美しくても、心が宜しくなければ、矢張り人に賤まるゝものであるから、此度は德義心も充分であるといつて、下の二句は前章と同じく、嫁入して後はお表にもお奥にも褒め噺やさるゝであらう、夫れに相違はないといふ事である、前章には室家とあるを家室としたのは、詩には韻といふがあるから、其韻に合はすためである、

桃之夭々。其葉蓁々。之子于歸。宜其家人。

前の二句は前章に同じく、蓁は茂るといふ字にて蓁蓁は其葉のコンモリと澤山重り合ふて居るを形容したので、此二句も前章と同じく比で、桃の木の若々して其葉の生茂りて居るといふのは、前章に於て容

貌と徳義心とを比べたからして、此章では行儀振舞の立派なる事を比へたので、容貌といひ徳義心といひ、又行儀振舞といひ、花を容貌、實を徳義心、葉を行儀振舞と三段に分けて、葉のコンモリとして居るを見るのを、行儀振舞の美しいのを見るに比べ、下の二句は前章と同じく斯る女子ゆゑ嫁入して後お表お奥の差別なく、一般に其人を仰ぐであらう、夫れに極つて居るといふ事で、前章の家室とあるを此章にては家人とせしまでにて、是れには別に意味なく唯々韻を踏まんが爲めにしたのである、

此詩は若き女子の容貌もよく、心立もよく、行儀もよく、嫁入して一般に宜しいといふ事をいつたのであるが、斯る宜しい娘が出來たのは、之を育てたる母が宜しいからといふ事が分るから、文王の姫君達を美たもので、即其母なる文王の后妃の致す所として、直に后妃太姙の敎化宜しきを得たるを美め事になる、之を周の時代にては娘の嫁入する時、里方に於て酒宴を催す節に、其祝に歌ふたものであらうといつてある、試にお芽出度詩である、



MRS. HAMA TEI IN BESIEGED TIENTSIN.

By A. Miyamori.

> "'Tis true fortitude to stand firm against
> All shocks of fate, when cowards faint and die
> In fear to suffer more calamity."

It was in the last year of the nineteenth century that the anti-foreign sentiment of the Chinese culminated in the Boxer outbreak. It is still fresh in everyone's memory what cruelties and outrages the Boxers perpetrated towards foreigners and Chinese connected with foreigners. Some European missionaries and hundreds of native Christians were murdered in the vicinity of Peking. Baron von Ketteler, the German Minister at Peking, and the Secretary of the Japanese Embassy fell victims to the misguided patriotism of the Chinese. The legations of the different powers at Peking and the Concession at Tientsin were besieged and a most deadly fire was poured in on them day and night; and it was after about two months' gallant defense and indescribable hardships that a relief army delivered the besieged from the dread fate of murder. It was during the siege of the Tientsin Concession that a Japanese lady distinguished herself in deeds of fortitude and self-sacrifice.

Mrs. Hama Tei, the wife of Mr. Nagamasa Tei, late Japanese consul at Tientsin, has long been noted for her purity of soul and fortitude. During her residence in Tientsin, the Boxer trouble broke out, and the Concession was surrounded by the pigtailed horde. The Chinese troops began bombarding the Concession on June 17th. The foreign residents were in a desperate situation, having to defend themselves with less than 3000 troops, including 130 Japanese marines. Consul Tei and his staff exerted themselves to the utmost for the defense of the consulate, wherein a large number of Japanese had sought refuge, among whom were found about a dozen women. The bombardment became severer and severer; and now and then a shell exploded in the compound of the consulate. Things went from bad to worse. The women, cowed by the noise of cannon-balls and the flash of swords, trembled for their safety and could render no help to the men. But Mrs. Tei with remarkable self-possession worked as helper of her husband.

"My dear," said she to her husband, "I don't consider my own safety but I am very anxious about that of the ladies. Some of them are pregnant. What

would you say to sheltering them for a time in the excavation under the veranda? I think the fire will abate when it gets dark."

"Oh, yes!," replied Mr. Tei, "I was thinking the same thing. Let us convey into the excavation the pregnant ladies first of all."

Then all the ladies and children were taken into the hole; but even there they were not quite free from danger. Mr. Tei was at a loss what to do next. Just at this moment came Lieutenant-colonel Aoki.

"How do you do, Mrs. Tei?" said he, "How hot the fire is! Ha! ha! How brave it is of you not to hide in the hole!"

"Well, Mr. Aoki," returned Mrs. Tei, "I am trying to withstand danger. But the ladies——, Mr. Aoki, is not there any safer place for them?"

"Well, I have come about that. Since you are so brave, I will be frank with you. I think we cannot long continue in this state, judging from the present situation. Unless a relief army arrives in a day or two from Taku or elsewhere, we shall——. I cannot tell this to the other ladies. I hope you will keep it a secret. Since the Japan-China War the Chinese soldiers have become stronger and their commanders have made much progress in tactics; so if a great number of them make a rush upon us, we shall not be able to make stand against them with our present force."

"Do you think they will make a rush?" asked Mrs. Tei.

"We are not yet sure on that point, but it is usual to make a rush after such a heavy fire. We are afraid the Chinese may resort to this expedient. So after much discussion we have decided to make a last stand at the British Engineering Bureau building. The women and children of the different powers are to be taken to the bureau. So will you please go there with all the Japanese ladies?"

On hearing this Mr. Tei said, "That's a good idea. They say there is a large strong cellar in the British Engineering Bureau; I think it would be a safe refuge for the ladies."

"You would better take the ladies to the cellar," said Mrs. Tei, "but I wish to stay here in the consulate.

"Why?" inquired Mr. Tei.

"Why? The ladies can go there; but can I do the same who am the wife of a consul? If I should leave

the consulate now that the worst is not come yet, our countrymen would laugh at me. Moreover, if all the women leave the consulate, I think the inmates of the consulate will suffer great inconvenience in every way. So I want to remain here. Indeed a woman like me cannot fight with a gun, but I want to discharge a woman's duty by nursing the wounded if any happen to be wounded."

Mr. Tei was silent for a while, struck with admiration of this manly resolve of his wife, though such things had been common with her. Then he said, "Well, it is quite natural that you think so. But if you do not go, the ladies will surely hesitate to go. Should all the ladies stay at the consulate, they would be obstacles in our way in an emergency. So you must move, for the time being, with all the ladies. As your spirit is well known to everybody, none will say you have fled from the consulate."

Lieutenant-colonel Aoki advised her to consent to her husband's request; on which she made a moment's reflection and said, "Well, my dear, it would be wrong of me not to listen to such an earnest request of yours; so I will do as you say and go with all the ladies."

Then Mrs. Tei, with all the Japanese women, proceeded to the British Engineering Bureau. There she found a great many women and children of the different powers taking shelter. All of them looked sorrowful and tears stood in the eyes of some of the women. The bureau was a spacious building containing a theatre. The stage and boxes were all crowded with these foreign ladies. Mrs. Tei said to the Japanese women, "Ladies, as all the foreign ladies are noticing everything you do, I hope you will always keep your presence of mind, so that you may not impair the reputation of the Japanese." Not content with thus exhorting them to courage, she acted bravely in every way. Inspired by her example, none of them uttered a cowardly word.

Mrs. Tei, having quartered all the Japanese women in the cellar, returned to the consulate where she found confusion and fuss reigning. This was because one wounded sailor after another was being carried in on a stretcher.

(To be continued)

天津籠城中の鄭夫人

宮森麻太郎

「懦夫は不幸に際會せば更に大なる不幸に陷らんことを恐れて憂慮の餘り死に至れども眞の勇者は如何なる危難に遭むも毅然として動かず」

淸國人の排外的感情が激して遂に團匪の事變と成りたるは實に西暦一千九百年の事なりき。當時團匪が如何なる暴行を外人及び外人に關係ある淸國人に加へたるかは今尙ほ世人の記憶する所なり。北京附近に於て數名の歐洲宣敎師と數百名の淸國基督敎信徒とは虐殺せられ、北京駐劄獨逸公使ケテレル男爵及日本公使館書記も亦彼等暴徒の爲めに殺されたり。淸國兵は更に北京の各國公使館及天津の居留地を圍みて晝夜激烈なる砲擊を加へたり而して籠城者は凡そ二ケ月の間勇敢なる防禦を爲し且つ名狀すべからざる困苦を嘗めたる後漸く救援軍來りて彼等を虐殺の非運より救ひ出せり。而して一人の日本婦人が身命を犧牲に供し勇敢なる働を爲せるは此天津籠城の際にありたり。

前天津駐在日本領事鄭永昌氏の夫人鄭濱子氏は夙に貞淑と沈毅とを以て名あり、同夫人が天津に居住せられたる際團匪事變起り居留地は豚尾隊に圍まれたり、淸兵の居留地を砲擊し始めしは六月十七日なりしが居留外人は日本海軍の陸戰兵百卅名を合して僅々三千名足らずの兵卒を以て防禦せざるを得ざる有樣にて實に危急の場合に際せり。鄭領事及部下の領事館員は力の限り領事館の防禦に從事せり此時領事館には多數の日本人避難し居り其中に十數名の婦人も居たればなり。敵の砲擊は愈猛烈となり彈丸は時々領事館構内に落下破裂するに至り形勢愈非なり。婦人は砲聲劍光に膽を奪はれて戰慄し男子に助力し得るものなし。獨り鄭夫人のみは良人の股肱となり泰然として防禦に從事せり。夫人は良人に向ひ、「あなた、私は自分の事は厭ひませんが外の御婦人達の身の上を案じます。御婦人方の中に身重の方もあります。婦人方を一時椽の下の穴へ御入れなさッたら如何でせう。日が暮れたら此樣に烈しくは打つまいと思ひます。」

鄭領事「そうじや。已れも今そう思つた所じや。先づ身重な婦人から入れるが好い。」

斯くて婦人と小兒とを其の穴に入れたれども其中に居ても中々危險なりき。恰も此刹那靑木中佐は來れり。鄭氏は此に於て如何はせんと策に盡き居たり。

靑木中佐「如何です奥さん。隨分砲擊が烈しいですねアハヽヽ。流石にあなたは穴へ御這入りになりませ

んな。

鄭夫人「ハイ私は堪へて居ますが、外の御婦人方が………靑木さん何處かモット安全な場所は厶いますまいか」

靑木中佐「サア私は其事で來たのです。あなたですから隱さずに御話しますが、今の有樣では迚も長く持ちこたふることは出來ますまいと思ひます。爰一兩日の中に太沽方面から救援軍が來ないと迚も…………。此は外の御婦人には御話し出來んです。唯あなたの腹の中におゐて下さい。支那兵も日淸戰爭以來中々强くなつたし、又、彼等の指揮官も戰術に長けて來たから若し彼等にして大擧突擊して來るやうなことがあると如何も現在の兵力では防戰は出來ますまい。」

鄭夫人「では突擊して參るでせうか。」

靑木「それはまだ確かとは分らぬですが大砲を斯の樣に猛烈に發つた後で突込んで來ると云ふ事は通常やることです。支那人が此方略をやりはせぬかと氣遣ひます。そこで種々評議の上英國の工部局を以て最後の防戰所と決定しました。それで各國の婦人子供などは其處へ移す筈です。それですからあなたは日本婦人を殘らず連れて工部局へ行て下さらんか。」

之を聞て鄭領事は云へり、

「其れは好い考です。英國の工部局には堅固で大きな穴藏があるそうだから、其處に這て居たら大丈夫じやろうと思ふ。

鄭夫人「外の御婦人は穴藏へお入れ申したがよいでせうが私は領事館に居たう厶います。」

鄭領事「何故、」

鄭夫人「何故と被仰つて、外の御婦人は行てもよろしいが領事の妻たる私は行けますまい。未だ危急に迫つたと云ふでもないのに領事館を去ては本國の人に私は笑はれますよ。又、女が殘らず領事館を去つてしまうとあなた方は萬事につけて御不自由でせうと思ひます。其故私は領事館に居たいと思ひます。眞逆私の樣な女は鐵砲を以て働くことは出來ませんが負傷者でも出來たらば看護して女の義務を盡したいと思ひますは。」

と今に始めぬことながら夫人の雄々しき決心に鄭領事は我が妻ながら感歎して暫し默然たりしが良あつて云へり、

「成るほどお前のそう思ふのは尤だ。併しお前が行かないと他の婦人は遠慮して必ず行くまい。皆領事館に居ることゝなつてはスワと云ふ場合に足手纏ひになつて困るから、是非婦人を連れて一時移つて吳れ。お前の氣質は誰も知て居るから領事館を逃げ出

したと云ふものはない。」

青木中佐は夫人に勸むるに鄭領事の言に從ふべきことを以てせしかば夫人は暫し勘考して云ひけるは、

「あなたがそれほどに被仰るに聞入れぬと云ふは私が惡ふムいますから仰せに從て外の御婦人と一緒に行きませう。」

是に於て鄭夫人は日本婦人を悉く卒いて英國の工部局に赴けり。至れば許多の各國の婦人小兒は其處に避難し居れり。何れも皆愁然として中には涙汲んだる婦人も居たり。工部局は廣大なる建物にして其內に一箇の劇場あり。其の舞臺にも棧敷にも諸外國婦人充滿せり。鄭夫人は日本婦人に向ひて云ひけるは「皆さん。外國婦人の見て居る中ですから何卒お心を確かに持つて日本人の名譽を傷けぬ樣にして下さい」。

斯く勵したるのみにては足れりとせず更に夫人は自から萬事雄々しく行ひけり。其の行に勵まされて誰一人として女々しきことを言ふものなかりき。

鄭夫人は日本婦人一同を工部局の穴藏へ入れたる後領事館に歸りけるに領事館は此時混雜を極め居れりそは此時負傷水兵を續々擔架に載せて搬び入れつゝありたればなり。

（未了）

社會

◎英皇孫と家庭教師

英皇孫エドワード親王は其年少なるに似ず頗る鋭敏なる性質を有し或る時家庭女教師が聖書を教へて未來に幸福なる世界あることを説き其世界にては老若男女となく皆同等なる幸福を受くべしと話したるに皇孫は暫らく考へたる後「其世界では誰も彼も本當に同じ幸ひがあるの？」と問ひ教師は「左樣です」と答へたるに再び「本當に同じことなの？」と繰返して問へり教師は重ねて同樣に答へたるが「御祖母さん（故女皇の事）も私達も同じに？」と又も繰返して問ひ教師は「曾祖母さんでも、誰方でも同じことです」と云ひしに愛らしき皇孫は「それでは御祖母さんは何うしても御承知なさらないきつと御承知なさらない」と賢くも故女皇の氣質を推し得たりとなり

◎世界中最大の學校

紐育教育局が今回同府に設立する小學校々舍は世界第一にして百二十四の教場を有し優に四千五百人の兒童を收容するに足り大教場は一時に千六百人を容る可く校舍は六階の建物にして電氣昇降器を附し別に食堂浴室裁縫室等を設け此處には婦人を傭入れて學課以外の世話を爲さしむる筈なりと。

◎世界一造船業者の至寶

英國のハーランド、ウオルフ會社の長ピルリー氏が平生無二の至寶として大陸大洋到る所に懷中する一物あり开は英蘭銀行の通帳ならんと想像するは大に誤れり實は慈母の手簡を集めたる一冊子なりと云ふ斯かる心掛は今日の實業家一體に持たしめたきものなり。

◎倫敦紐育間の電話

紐育サン新聞に達したる倫敦發の報に據れば此程倫

敎に於て電信機械の一大發明あり此發明の結果として今後三個月以内に倫敦紐育間は電信中繼所を要することなく如何程電信の輻輳せる場合にも自在に通信を爲し得ることゝなるべしと又此器械に依りて非常なる長距離に電話を通じ得べく恐らく一年の後には倫敦紐育間に電話開通するに至るべしと云ふ。

◎前代未聞の大手術

露國ドルパット大學の敎授マントイッフェル博士は外科手術に於て同國第一の名手と稱せらるゝ人なるが、頃日心臟の負傷を治療して其盛名に一段の光彩を添へたり、罹災者は一少女にして過誤のために其心臟を射拔かれたりとて同博士の許に携へられしものなるが、博士は直ちにコロヽホルムを用ひて昏酔せしめ、胸部を切開したる上、心臟を摘出して檢査せしに、幸にも彈丸は心臟の外壁中に止まり、心室を射貫居らざりしにより、丸子を拔き取り相當の手續を了したる上切開せし部分を縫合せしに、成績甚だ佳良にして十數日の後全癒の快報に接するを得たりとぞ。

◎腦骨の不足を補ふ

之も前項と類似せる話題なるが、頃者澳都維納の名醫アイセルスベルグ氏腦骨の不足を接合せしめたる珍話あり、患者は青年學生にして、十ケ月サロニカに於いて鐵丸のために腦骨を挫かれしにより、即時治療を施して患者を全癒せしめしが、近頃に至りて前額の一部に銅貨大の缺所あるを發見せしかば、アイセルスベルグ氏に就て治術を受けしが、氏は患者脛骨の一部を削ぎ來りて、之を額部の缺所に塡充するの手術を行ひしに驚くべし斯術功を奏して該青年は全く以前の身體に復し得たりと。

◎濠洲の總選擧と婦人選擧權

去月十六日メルボーン發の通信によれば、過般執行されたる濠洲聯邦議會の第一回總選擧には婦人選擧權の實行されしため、當選數の豫想と實際とに大差を來たし多年政界に出入せる人々すら意外の感に鎩たれたりといふ婦人選擧者の大部分は一團となりて

勞働黨に投票し一切他事を顧みざりしにより勞働黨の議員は俄然多數となりて同地の二大黨派たる保護貿易派（政府黨）及自由貿易派（反對黨）の間に介立して僅に政界を三分するの一大要素となれり殊にヴイクトリア洲に於ける前年の選擧には、勞働黨の失敗甚だしかりしも、今回は目覺しき勝利を占めて先回の耻辱を雪ぎ得たり尙ほ總選擧の結果に就ては未だ精確なる報告わらざるも大躰に於て勞働黨の勢力を增せしにより保護派の領地は大に侵害されたり女子勢力の侮る可らざるを見るべし。

◎手の實用

手の形狀を一見して、此手は如何なる業務に適せんと斷するは、殆んど不可能の事に屬するかと、思はるゝが、近頃歐洲の學者が歐洲に於て手を利用したる大家則ち音樂家美術家外科醫等の手を檢したる結果は、驚くべき巧妙なる技術を演じたる手は驚くべき醜くして、且つ非實用的と見らるゝ手多く存することを發見せり、假令ば外科手術に於て大名を博したるチエルニーベルヒマンミ、クリッツの手の如きは、何人に見せしむるも、此の如き指の短き不格好なる手は箸を持つだも不自由を感ずべしと思はれ此手を以つて數千の驚くべき巧妙なる手術を施し得たりとは夢にも想像し得ざる處なり、其他有名なる美術家音樂家の手を觀察するに美なる手少なくして醜き手甚だ多し、然れども、血管筋肉皮膚等は尤もよく發達したるものなることを發見せり、されば人の見て美と爲す手は必ずしも實用的の手ならず、其反對の醜き手は必ずしも非實用的の手ならざるを知るべし此理を尤も能く證明し得るものは、男女の差別なき世上のすべての尤も巧妙なる手の働きによりし產物は、殆んど男子の手に依つて成りしものにて、男子の手は則ち女子の手よりも、不格好なること云ふ迄もなし、されば手の形狀に依つて其人の精神的能力を斷ずること能はず、手の働きは畢竟精神にありと云ふの外なきに至る。

◎人造大理石

丁抹には大理石を產出すること極めて稀にして、常に供給の不足を告ることとなるが、此程同國の一化學者は極めて精巧なる人造大理石の製法を發明したり其製法は發明者之れを公にせざるも、頗る簡單なるものにして、資本金僅に三百五十圓を以て其製造所を起すことを得べく、此製法によりて製したる大理石は恒久力に於て毫も眞の大理石に異ることなく又如何なる形にても製することを得て其價は眞の大理石の十分の一にも足らず、容易に眞僞を區別し能はざる程なりと云ふ。

◎喫煙家のチヤンピオン

佛國のセイヌのカエーと云ふ一小村に住する喫煙家は三十年間に三十キロメートル即ち約十九哩を蔽ふに足るべき卷煙草を吹かしたり此を數にて現はせば八十萬本にて一日に八十本を吹かしたる勘定なり此に奇なるは此のチヤンピオン先生醫師より禁煙せざれば其生命にも及ぼすべしと切りに勸告を受けたる結果之を容れて爾來全く禁煙黨となりしが其後身體の工合甚だ宜しと云ひ居れり。

◎理想の男子

米人は過度に婦人を尊敬し之を以て文明なりと密かに誇るの傾あるが最近の某新聞は同國少女の理想の男子たるべき者を具備す可き要件六ケ條を掲げたり其一に、婦人に接する道を知る者即ち婦人の爲めに椅子を運び又婦人の爲めに戶を開閉する者其他婦人の爲めには如何なる勞をも辭せざる人其二に、相手の婦人が己れと談話を好むや否やを識別するの明ある人、他の四ケ條は至つて平凡なれど此二ケ條こそ大切なりと知る可し兎に角米國婦人の理想の男子たる亦難哉と云ふべし。

◎未婚婦と獨身者の數

英蘭及び威斯の國勢調査に據れば未婚の女子は其年齡の區別に於けると同樣地理的區別に配分されあるを見る、即ち倫敦市にては一般に未婚婦の數獨身者の數に超過す尙此地方には重なる工場に勞働する者に女子多しサレイにては未婚の女子約一萬二千人あ

りて獨身者に超過し南威斯にては獨身者の數一萬八千四百二十九人にて未婚婦の數より超過しケントウキルトシャイア、ルッランド、リンコルンシャイア、ハンツ等の農業地方には未婚婦の數少し即ち未婚者は工業地方に多くして農業地方に少なき勘定なり。

◎世界の最も寒き場所

露國のヤクックは世界に於て最も寒き地方にて水銀時として零度以下七十三度に降ることありと。

◎鐵道馬車の馭者

最近の調査に據るに、澳都維也納に於ける鐵道馬車の馭者中に四百人のナイト爵約五十八人の男爵及び四人の伯爵あり貧乏華族が生活の競爭に餘義なくせられて下等の勞働を取ると哀れなる次第といふべし。

◎バナヽ樹の効用

バナヽは啻に其菓實を採りて莫大の收入を得るのみならず其の葉は荷造りに用ゆべく尚葉の下部には貿易品として重要の位置を占むる蜜蠟を得べし而してマット編み細工及び最も美麗なる織物たるレース手巾等を製するマニラ麻はバナヽ樹の莖より得るものなりジャマイカ島及び西印度にては此有用の果樹を栽培すること夥だしと云ふ。

◎最適當の溫度は六十四度

ドクトル、ベンジャミン、ワード、リチャードソンは多年の經驗と實行とに依り心を使ふ人々に適する最適當の溫度は華氏の六十四度なることを發見したり若し溫度此より降るときは心神睡眠を催ほし且つ不活潑となるべく又此より昇るときは身體も心も倦怠を覺え漸次に疲勞して作業に堪ふる能はざるに至るべし尤も此に注意すべき大切なる條件は部屋の何れの部分にても同一の溫度を保つことにありと云へり。

◎アイスクリームの發明者は誰れ？

アイスクリームは一千七百七十四年或る佛國の料理人がジャルトル公爵の食膳に供したのが始めてだと云ふ事だが此れより前き英國のベーコン卿は雪と鹽とを以て物を氷らす方法を知つて居つたさうだが併

し此れは唯だ科學應用上から學問的にやられたので一切の食物に試みられたと云ふわけでは無かつたのだそうだ、其れから又酒を氷で冷やしたり氷水を飲んだりする事は、今より一世紀半も前から佛國の贅澤家には知られて居つたが、此れは東洋から輸入された風習だと云ふ事だ、佛蘭西では斯う云ふ風だが英國と云ふ國は少し異つて居て、終ひ此間迄斯う云ふ人工的の飲料を取らず今でさへ氷で冷やした膓詰は誰れにも歡迎されないと云ふ風だそうだ。

◎六十二年間に子孫一千人

今から六十二年前に妻と十人の子供を連れて米國のケンタツキーからデードといふ所へ移住したジョースといふ人が此程エバートンといふ所で一家一門を悉く會した所が、當日の來會者即ち其十人の子供から生れた子、孫、玄孫の數が實に一千十九人あつたそうです。

◎勞働者の生活調査

米國聯合勞働局で二千五百六十七戸の勞働者の戸別に就て調査した結果によると一戸を構へて居る勞働者のうちで一ケ年二千四百圓の收入のある者は最上等の部で勞働者の家族の平均數は五人三一あり千九百一年の平均收入は一千六百五十四圓三十八錢內平均支出は一千五百三十七圓八錢でしかも其うち六百五十三圓八十錢は食費でこの食費は千八百九十九年には六百二十九圓四十錢であつたものが千八百九十二年には六百八十九圓二十二錢となつたそうです。

◎卅歳まで無病者は長壽

醫家の唱ふる所に依れば人其の齡三十歳に到るまで格別大病に罹らず自體各部の發育平均に發達せば少くとも七十三歳までは健全なりと。

◎萬國兒童生活博覽會

未だ曾て催されたることなき萬國兒童生活博覽會は舊臘十二日露都聖彼得堡のタウライド宮に於て其開館式を擧げ國務大臣、陸海軍武官、各高等官及び列國外交官等臨席して頗ぶる盛會を極めたり同博覽會には殆んど世界各國より出陳せられしが露國の

出品其大部を占め米國の出品最も少なかりき此博覽會の特色は兒童の衞生及び生理上の發達を一目の下に瞭然たらしむる點にありて小兒誕生の注意育兒法の標本、玩具の意匠及び小兒敎育法等は最も興味に富む者なり大出品物には學校及び遊戲場の標本あり或る室には圖畫を以て兒童の生活を描きたる者あり歷史的に兒童の勇者の生活を描ける者あり又兒童に就ての種々の發見及び人類學上より觀たる各國兒童の特質を區別したる者あり開館式に當り米國費府のブラウムバウフ敎授は米國兒童の事を記せる一書を露國太后に贈呈したり此博覽會の開期は二ケ月間なりと云ふ。

◎一家庭を賣る

ウオークソツプと云ふ處にて一家庭の賣買行はれたる椿事あり开は一人の獨身者隣家の妻君の容色に懸想し大膽にも其亭主に向つて賣買の談判に及びしところ亭主之を快諾し其の妻君及び三人の子供を十シルリングにて賣り渡したり其の賣買行はるゝと同時に妻君は快よく獨身者の妻君となり子供を引連れて隣家に行きたりと云ふ。

◎英佛獨米の女子と結婚

佛の女子は假令地位資產なく共美男子と結婚するを喜び、獨米兩國の女子は男子の風采如何を問はずして、專ら其位置と資產とを標準に結婚し、英の女子は男子の性格に重きを措きてゼントルマンたるを得るや、否やを標準として結婚すると云ふ。

◎女子の活動に關する露帝の意見

露帝は未だ男子を有せざるより、長女に帝位を讓るの意あり而も同國の皇室典範に於て之を許さゞるより密に憂慮し居ることは隱れなき事實なるが帝は此程露國駐在の澳國大使にして帝の親友なるセルジアウオルクホッスキー伯は女子に對する帝の意見を開陳し予は女子の活動を妨ぐる種々なる制度が諸國に設けられあるは極めて不正なる事なりと信ず予は何故に男子が女子の充分名聲を博し人類を益すべき方面に於ても其活動を許さゞるかを怪しむなり予の意

見にては女子は種々なる職業殊に商業に於ては充分之に與るべき力を有し教育ある婦人は政治上の事にも干與し得ざる理由なしと信ずるなり勿論婦人が公共の事に干與する場合には上流の婦人に限るべきことなれども婦人が全く政治の事に干與する能はざる理由は之を見出す能はざるなり予の娘等は秩序的に政治及び時事問題に關する知識を教授し國家の事に深き興味を有するに至らしめ主權者の義務の幾分を知らしめんとすと述べたる由なり然るに皇后は帝位繼承の事に關しては帝と意見を異にすと傳へらる帝の長女オルガ親王は愛らしき九歳の少女なれども毎朝六時に起きて右の如き教育を授けらるゝため普通の少女の二倍餘の勤勞にして常に二十四人の警吏は皇女の身邊を護衛し居ると云ふ。

◎米國婦人が歐洲に持去る金額

此程英國のロックバルグ公と結婚して公爵夫人となりたる米國のゴーレット孃は持參金として二千萬圓を携帶したる由なり從來此の如く米國婦人が歐洲の有爵者と結婚して之が爲に米人の資産が歐洲人の有に歸したる總金額は實に莫大なるものにして概算凡そ四億圓なり今其内英國に於て知名なる人々の持參金を擧ぐればマンチエス公爵夫人二百萬圓マーボロー公爵夫人二千萬圓印度總督カーゾン卿夫人一千萬圓ランドルフ、チヤーチル卿夫人百萬圓ベレスフオード卿夫人六百萬圓ヤーマス伯爵夫人二百萬圓等にして歐洲大陸諸國にてはコロンナ公爵夫人五百萬圓カステーレン伯爵夫人三千萬圓ハツワフエルト公爵夫人四百萬圓フエステチックス伯爵夫人四百萬圓ポニアトウスキー公爵夫人二百萬圓等なりと云ふ。

◎英國小學校長の俸給

英國にては公立小學校長の年俸は千八百七十年には平均九百九十一圓四錢であつたのが、現今では一千二百九十九圓三十六錢に增加し、女子の校長は五百七十五圓五十四錢であつたのが、八百六十九圓九十錢に增加して居るさうです。

◎風呂附きの小學校

瑞西では今後新設するすべての小學校へ風呂場を設け、各級の生徒は冬期夏期を通じて二週間毎に一回宛必ず入浴さする事としたが湯は温浴冷浴との二つに分ち、石鹼なども備へつけてゐるさうだ。

◎持參金三億五千萬圓の婚姻

近頃亞米利加の迷誤烈妬と云へる令孃がコックスブルグと云ふ公爵と結婚したが此令孃は非常な金滿家で此度の結婚にも其夫に三億五千萬圓の大金を持參として送つたそうだが此婚姻は其式も仲々盛大で式に列する賓客無慮二千と註せられ然かも此二千人も皆富豪連の顏揃で其贈物も亦大したものであるそうな、今其一二の例を云ふて見ればヴアンダービルト氏は金剛石の腕環を送つたが其價は五百萬圓、アストル氏も亦同じく腕環を送つたが其價は三百五十萬圓だと云ふ事だ此結婚式の裝飾に使用したる花の價も大したもので其額も五十萬圓に達したと云ふ事だが斯る贅澤な結婚は米國にも初めてだと云ふ事である。

◎三十二年前の指輪

合衆國代議院議長ジヨセフカンノン夫人は今より三十二年前に結婚紀念の指輪を紛失せしが近頃同國イリノイス州タスコラの土中より發見せしと。

◎滑稽な離婚訴訟

英國の一水夫は今より二年前に己が妻を置去りにして何處へか姿を隱したるが其妻は夫に棄てられたるを理由として此程同國エデンボラ裁判所に離婚請求の訴訟を提起したり判官即ち問ふて曰く「其後何も消息無きや」妻は答へて「三週間前に無名の電報を受取りたり」判官重ねて問ふ如何にして夫よりの發電たるを知りしか「妻は要なき問と言はぬ計りの顏付にて勿論手蹟にて……。



演壇

人の幸福

矢島楫子演說

斯の一篇は、客冬十二月二十五日、本郷壹岐坂教會に於ける、女子學院長矢島楫子先生の演說筆記なるが、更らに先生に乞ふて其趣旨を敷衍せしものなり。

人生の幸福は何であるかと云ふに、私の考へでは、健康なる身體を以つて、平和に暮らすのが第一の幸福だと思ひます、一身の健康は己に關する事で、平和と云ふのは人に對しての事です、己れの身に健康を保つには、害になるものと、防いで益になるものを取つて行くと云ふ事が肝要で、人に對して平和を保つには、平和を保つ能はざる原因に溯つて、未然に防げば保たれない事は無いのです。

更らに一歩を進めて、國家に付ての幸福は何であるかと云ふに、是れも矢張り人身と同じく、天災時變などの不健康なくして、外國との交際が平和に行けば、是れ程結構な事は無いのです、併し乍ら、人と人との間に平和が破ぶれ、喧嘩をした場合には、假令勝つたものでも、不名譽を來たす事は免かれないのです

が、國家と國家との喧嘩はそうでない、之を戰爭と名づけ、打勝つたものは非常の名譽を得ます、ア、戰勝、凱旋、誠に目出度い文字で、何人も之に對して、不吉の文句を並らぶる事は出來ないやうですが、併し又翻つて、名譽ある戰勝の裏面を觀察して見ると、私どものやうな淚もろい者は、幾分か不十分だ氣の毒だと思ふ觀念を起さゝる事を得ないのです、故に私は國家に對しても、何處迄も平和を希望するのです。

身體の健康を保つ事に付ては、是處に會せられて居る婦人諸君に向つて、殊更らに御注意を願ひたき事があります、外でも無い、諸君の家庭に於て、健康の大敵たる、酒と烟草を嚴禁せられたき事です、其身には絶へず健康を祈りながら、健康の大敵たる、酒と烟草を近づけ、其一身は固より、子孫に迄も害毒を遺す事を悟らざるは實に愚の至りと云はねばなりませぬ、併しながら、人の此害物を愛するのは、實に不思議なもので、第五博覽會などの模樣でも、廣告などの盛大な事は、酒、煙草の二品に如くものは無かつたやうですが此大勢に反抗して、禁酒、禁煙を唱ふるのは、恰かも一塊の土石を以つて、滔々たる横流を止めやうとするが如きもので、誠に心細そい話ですけれど、併し、人々が追々、衛生上の事を注意するにつけて、私どもの旨趣も、自づから貫徹せらるゝであらふと思ひます。

禁酒、禁烟の事をお話し申すに付けては、先づ私の經歷より申上げませう、私は元と大酒家の家庭に育つたもので、酒の爲めには非常の困難を致しました、一家の中に大酒家があれば、唯だに其大酒をするもの計りが、健康を損ずるのみでなく、家庭の規律が總べて亂れ、起臥飲食などの事が不規律にして、宜しきを得ぬやうになりますから、一家中の者が皆な健康を失し、終ひに之が爲めに疾病を起すやうな事となります、現に私なども、幼少の折り、之が原因となつて、重い病に罹つた事がありました、其れより

私はシミ〳〵酒と云ふものが嫌やになり、健康の大敵だと深く信じて、終に今日禁酒と云ふ事を、人にも說き勸むるやうになりました。

凡べて人間には二つの大敵があつて、其の一は心を賊するもので、其の二は肉體を害するものだと申しますが、酒は常に此の二つを兼ねて、人身を襲擊するものです、酒の人心を賊ずるのは實に恐ろしいもので多くの犯罪の原因を取調べて見ると、飲酒に關係のないのは殆んど少く、太低は皆な直接か間接に、酒が手傳ふて居ります、其れは其の筈です、酒は純然たる毒物で、之に酔ふのは、即ち其毒に感ずるのです、故に人一たび酔へば、先づ第一に腦髓が麻痺して來る腦髓が麻痺すれば、知覺其常を失するは當然の事で終には如何なる亂暴の事でもするやうになる、其間の行爲は狂人と少しも選ぶ所は無いのです、飲酒と犯罪の關係の密接なのは無理もありません。

生理上の事は、專門家でないから能く分かりませんが、併し血行機に及ぼす害、呼吸機に及ぼす害、消化機に及ぼす害、神經系に及ぼす害等は、極めて明瞭なる事實であつて、是等は一般の人の能く認むる處です、又其子孫に及ぼす處の害も恐る可きもので、概して飲酒家の子孫は身體の發達が不完全で元氣が乏しく、記憶力が鈍ぶいやうです。

殊に又少年が酒を飲むなどの事は、家庭の取締りをなすものが、常に能く〳〵注意して嚴禁す可き事で、身體の發達に妨げを來たすは固より、精神上にも亦た恐る可き危害を與ふるものです、幼年者喫煙の事は嚮きに法律で禁ぜらるゝやうになりましたが、私は禁酒のことも是れと同じく禁嚴せられん事を希望します。

又飲酒に付て危險な事の一は、之を飲む人の酒量が段々に增加し來る事です、是は體內に在る所の酒精の

力で增加するので、終には酒を飲みさへすれば、他の食物を要せぬやうになります、たから、飲酒は始めより斷乎として嚴禁すべきもので、少し宛だから宜しからうなど、云つて飲み始めると、終には恐る可き大酒家となつて、殆んど救ふ可からざる厄介物となります、能く〳〵注意すべき事です。

更らに又喫烟の事に付て白狀致しますれば、私は元と非常の喫烟家でした、處が或る時、大病に罹りました、其病中は身體の工合で、どうしても煙草が吸へませんから、永い間止めて居りました、段々身體が舊に復するにつけて、イロ〳〵吸つて見たくなり、或る日、床の中で少し計りやつて見ましたが、久しく止めて居たものですから、其の感じ方が頗ぶる酷く、二三服やると、忽ちシンと胸にこたへ、やがてグラグラするやうな氣持ちを感じました、此時始めて私は、烟草の人身に害ある事を覺りました、此の胸に酷く感ずるのは、決して病後のみに限らず、平生でも矢張り其の通りなのですが、平生は習慣となつて居るから、感じ方が鈍ぶいので、腦髓を刺衝する點は、少しも變らないのです。

烟草の中には、ニコチンと云ふ毒が含まれて居ります、其れが唾液の爲に溶けて、胃の中に這入りますと恐ろしく胃を弱くするもので、つまる所、食物と胃液とまざる所の、捏ね廻はす力を保つ事が出來なくなります、煙草を吸ふ人の胃弱に難澁するのは之が爲めです、又喫烟は鼻や、咽喉や、及び空氣を肺に導く細い管の軟かい裏皮を害するものです、煙草の煙の充滿して居る空氣は、呼吸するに極々不適當ですが、煙草を呑む人は、自分の煙で、自分の呼吸す可き空氣を不潔にします、是等は自分で自分の不養生をするのだから、致し方もありませんが、尤も不都合と感ずるのは、滊車の中などで何の遠慮も無く、煙草を吹かし、人を煙攻めにする連中です、是等の人は全く公徳と云ふ事を知らない人だと思ひます。

喫煙の効能を說く人が能く煙草は憂さ晴らしで、人に愉快平穩の感を生せしむるの効ありなど申します

が、是が大きな間違ひで、喫煙の爲めに人が左樣の感念を起すのは、全く毒素の爲めに、神經を麻痺されて、或る局部を不感覺となしたる結果で、其人體に害を及ぼす事どれ丈けか知れません。

殊に身體の機能の、十分に發達せざる少年に於ける喫煙の害は、實に恐る可きもので、獨逸國での調査に依ると、少年に取つては、飲酒よりも喫煙の方に反つて害が多いやうです、故に我國でも未丁年者喫煙の事は、法律を以つて禁じてありますが、此法も實際には餘り効力がないやうです、故に斯んな事は、家庭に於て十分の取締りをなしたいものです、小兒は大人の父で、婦人は社會の母であると云ふ諺もありますから、健全なる未來の大人を得んとするには、今日の小兒を健全に養成せねばなりません、而して其養成の任に當るものは、重もに婦人方ですから、私は殊更らに婦人方に御注意を願います。

且つや私等の唱導する、禁酒禁煙なるものは、國家經濟の上に取つて、非常の稗益を與ふるものです、我國での酒類釀造高を官報によつて見ますと、去る三十三年の造石高は、實に四百八十七萬六千二百二十一石の多きに上ぼつて居ります、是の外に又外國よりの輸入もありますが、是等の酒類は、太低我國人の腹の中に葬られて仕舞ふのです、又煙草は如何にと云ふと、我國に用ふる煙草の量は、毎年千〇八十一萬千九百三十二貫目で、之を代價に積もると、少くとも三千六百五十萬圓計りとなります、是等は唯だ一片の煙と消へて去るのです、故に若し我國民にして、酒と煙草を禁する事を得たならば、其れ丈けの金は餘まる算當となります、國家經濟より打算すればどれ丈けの利益となるか知れません。

（なはり）

音樂と樂器

東京音樂學校長　大島義脩君談

音樂に關する技術上の事、理論に關する事、樂器に關する事等に就いて、公衆の知識といふものを、モウ少し增して貰ひたいといふやうな考があるのですけれども、それ等の事は專門家でないといふと、本統の話といふものは出來ぬのであるからして、專門家以外の者の見る所といふものを、私はお話しやうと思ふのであります。

今音樂を學ぶ所の人といふものは、其目的から見て、凡そ三通りあるのです、一つは專門の技術家とならうとする人、一つは音樂の敎員となつて行かうといふ者、又一つは嗜として音樂を心得て、居らうといふだけの人と、此三通りあるのです、そこで前の二つの種類に屬する所の人は、共に音樂を以て身を立てやうといふ考の者であるのです、それ等の者のことは今暫らく措くとして第三の種類に屬する者、即ち必ずしも音樂といふものを以て自分の身を立てやうといふ考ではないのであるが、併ながら一つの嗜として、又は身に備へた藝として、音樂を學ばうといふ側の事をお話しやうと思ふのです。

日本普通敎育では、音樂といふものが、段々に重んぜられて來ては居るやうだが、未だ充分に其適當な價は與へられて居らないやうである、先づ普通一通りの智識技能を備へた立派な敎育ある人とならうといふには、音樂といふものは、どうしても別に學ばなければならぬやうなことになつて居ます、で私の管理して居る學校でも、さういふやうな目的を以て音樂を學びに來る者が極めて多數であつて、又近頃段々と增加して來るやうであるのです、さういふ者の增加するのは、洵に歡ぶべきことであつて、家庭に於け

る音樂とか、社會に於ける、音樂とかいふやうなものは、無論專門家の力に倚ることは多いのであるけれども、又斯の如き種類の人の殖えるに依て、擴まつても行き、又進んでも行くと云ふことは、非常に大きなことなのであります。

でそれ等の人がどう云ふものを多く學ぶかと云ふと、今日の所で、最も人の擇ぶ所のものはピヤノであります、是は至極尤もなことであると思はれるといふものは、樂器としてのピヤノは或點から言ふと、あらゆる音樂を代表することが出來ると云ふやうな力を有つて居るものであつて、又誰が學んでも一と通りの音を出すことには、ソンナに苦心を要しないやうな點もある、其缺點としては音が速かに消えて行くと云ふやうな事があつたり、或は其嵩が大きい爲めに、日本の如き小さい住ゐには適當しないと云ふやうな虞もあつたり、又高價であると云ふが爲めに、どうも手に入り惡いと云ふやうなこともあるやうであるのです、併ながら其音の消え行くと云ふやうなことは、ピヤノの有する他の澤山の長所を以て之を償ふて餘有ると思ふし、又嵩が大きいと言つた所で、大きな物は別として足臺の客室用の物杯は、日本普通の家に据附くることも容易であるだらうと思ひます、其價の如きも今日の中流以上の生活程度に鑑みて、決して不相應に高價だとは言へまいと思ふのです、そして隨分之に依て人々の趣味を高めて行き、家庭の快樂等を增すと云ふやうな大いなる利益がある、今日の如き自轉車にさへも、二百圓、三百圓と云ふやうな金を出す人の非常に多い時であつて見れば、ピヤノの如き高價の樂器だと言つて、日本の家庭又は社會に不釣合と云ふやうなこともなからうと思はれるのです。

それからピヤノに次で、人氣の向くものはヴワイオリンであるやうです、このヴワイオリンは樂器の手輕なのと、携帶に便利で、音色に變化の多いのとで、最も歡迎されるものゝやうに見受けられます、併なが

ら是は又學ぶことが非常に困難であると云ふやうな困つた事情が一つ伴つて居ます、成程之を専門として充分に治めやうと云ふには、困難であるけれども、樂みとして之を用ゆるに於ては、さういふ點に餘り心配をしないで、甚だ都合の好いものであらうと思はれるのです。

是に次では歌を唄ふことが、専門家以外の音樂としては、最も適當なものであらうと思はれるです、是は聲の音樂であつて、樂器が有つて居らぬ所の澤山の變化と、妙處とを現はすことが出來る、且つ器械器具を借らず誰れでも何時でも出來ると云ふものである、而して多勢のものが一緒になつて歌を唄ふことは、互に樂みを交換し、又其精神上の一致といふやうなものを輔けるに非常に効が有ると思ふのです、近頃種種の學校生徒及び卒業生或は色々な團體に於て、唱歌の組合といふやうなものを拵えて、互に唄ひさうして樂むといふやうなことが、段々に出來て來るやうであるが、さういふやうなものを擴げて又地方抔にもさういふやうな組合の旺に興るといふことは、甚だ喜ばしいことゝ思ふのです、段々人が忙しくなつて社會の事情が複雜して來るに從つて、其暇をぬすみ精神を慰め、身體を休めるといふ上に於て、高尚な快樂といふものが、必要になつて來るのでありますが、先づ多くの人が共同をすることが出來、加ふるに益があつて、害が無く、同時に高尚の思想趣味を養ふといふやうなことは、是等の樂器、又は唱歌といふやうなものに依てやるのが、一番の宜い方法ではないかと考へられる。

右に申した外に、西洋の樂器で、我國に最も廣く行はれて居るものは、オルガンであるだらうと思はれるのです、是は小學校始め各種の學校に用ゐられ、又敎會抔でも用ゐられて居る、併ながら音樂としてオルガンといふものを知らうといふには、非常に大きな樂器及び複雜なる技術を要することであつて、パイプの裝置のあるオルガンといふものは我國に極めて其數が少いのであつて、又演奏者も乏しいのであります

東京の音樂學校の如きに於ても、パイプオルガンといふものを備付けやうとして、多年苦心をして居るのであるけれども、まだ之を持つて居らぬと云ふやうな體裁であるのです、それ故に多少簡易にして、高尚なる音樂と云ふものを廣く知らせやうと云ふには、前に擧げた二つの樂器及び聲の音樂と云ふものが、最も適當の物であると思はれるのです、併ながら音樂と云つても、單に其家庭に於て、又は小さい集會に於て、僅な者が演奏すると云ふやうなもの許りでなくして、大いなる集りに於て、大いなる合奏と云ふ樣な者が、是から澤山起らなければならぬと思ふのです、是は音樂許りでなくして總ての美術なり、又其他のものは、皆個人的から社會的に進んで行くと云ふ樣な、今日の狀態でありますから、音樂も先づ其一つに外ならぬ限りは、右に言ふやうな進路を取りたいで、我國に於て西洋音樂の合奏と云ふやうなもの丶出來るのは宮內省の音樂師と陸海軍の樂隊と、其外に我音樂學校があるだけであります、そして音樂の合奏と云ふものも年々勉めて進步と云ふものを謀つて居るのであつて、管絃各種の樂器と云ふもの丶種類も年々增し、又演奏者と云ふものも、段々增して行つて居るのであるけれども、之を西洋の大きな合奏に比すると云ふと、まだ實に小さいものであつて、又樂器の種類の如きも、我國にはまだ這入つて來て居らないものが、隨分あるのです、是等の樂器の中には、獨立して演奏すると云ふやうなことの困難な物、或は極めて罕なと云ふやうな物があつて、又一つには今の社會に於てさう云ふやうな、大きい合奏と云ふものが盛に行はれる譯でもないのであるから、それ等の樂器を以て獨立して身を立てると云ふやうなことは、隨分困難な事情がある、それ故專門家以外詰り音樂を以て身を立てやうと云ふやうな者でない所の人が、それを特別の慰みとでもして、さう云ふ種類のものを修め、さうして合奏の組に加はると云ふやうなことを悦び、或は進んで之を一つの名譽とすると云ふやうな風になつて來たならば、大に音樂の興るを希望することが出來るであろうと思ふのです。

（をはり）

池邊義象氏
增田于信氏　合著　紙數四百七十八頁　總クロース金模樣入

美姫遺蹟

全壹冊
定價　金壹圓卅五錢

青山紅葉の裏殘烟荒草の間に一片の古碑を搜りてその香魂眞魄を弔ひ以て一代の歷史を說き起したる本書の內容いかに趣味ある讀物ならむ本書は小鷹狩(宇多帝皇后藤原胤子)常磐杜(常磐御前)戀塚(袈裟御前)嵯峨野(小督局)往生院(祇王祇女)法輪寺(横笛)福原(建禮門院)寂光院(同上)鶴岡(靜御前)裾野露(虎御前)浦の烟(尊良親王妃)吉野花(辨內侍)の十二篇に分ち何れも現在の遺蹟よりして過去の歷史を說き凡て裏面に涉りてその詳細を悉したれば啻に十二美姫の詳傳たるのみならず平家の盛衰源氏の興亡南北の爭亂等一貫して書き盡されたれば中古歷史の精しき物として讀まるべくまた地理歷史の參考としても見らるべし況や兩先生の筆まことに艷麗雅鍊たる今更喋喋を要せざれば閨秀諸媛の讀物としては恐くは天下またこの書に超ゆるものなからむ實に趣味ある家庭の讀本なり殊に裝釘の雅致美麗なるは優に坐右を飾るに足るべし乞ふ陸續御購求あらんことを

◎發兌元　東京市日本橋區本町三丁目十七番地
電話本局三〇二(特)本局一六一七
金港堂書籍株式會社



川村伯の母堂

滄浪生

去る十一月の中旬に此世を去れたる川村伯の母堂は、武士的女子の典型として、稀に見るところの御方であつた。

一、川村家

水の流にても其末の清いのは必らず其源が澄んで居る、凡べて可い人が先に立つて居て其人の後に立つものは必ず可いに違いない。あゝ母、母に賢良なる御方があれば、其子は必らず立派なる發達を爲すものである。

川村家とは。明治十年西南戰爭の當時參軍として威望を天下に博したる伯爵川村純義氏の家である。閑か而して近頃伯は漸く年老い國家の元老として。に花鳥風月の樂を盡し得らるゝ筈なるに畏くも廸宮、淳宮　兩殿下の御養育を仰付られて居らるる、一介の武人より仕上たる薩摩隼人の家庭に於て斯る重大なる而も尊き御役目を仰付られたるは實に人臣として名譽の極といはねばならぬ。而して、これ皆川村伯及び同家庭が他に比ひなきほど美しく、此人ならば此家ならばと上下に信望せらるゝからである。而して斯る人及び斯る家庭の出來たる源は何である乎といへば、實にその母堂其人の力であると斷定せざるを得ない。

二、八十六の高齡

亡くなられし母堂名は由嘉子といひ齡八十六であつた。人生五十を定命とすれば、これより生延びたこと三十有六年斯く榮へたる家庭に斯く高齡を保ちたるは甚だ御芽出度い事である。

長命するものは、長命する丈に、必らず善行がある。それは自分の身體を自ら克く節制し、且つ他に對して善行があるからである。

他に對して善を爲すので、いつも心が嬉しく、自分も克くいろ〳〵の人たる本分を全うするから其身を處して往く間に自然に適度の節制となるものである。怠惰たり、飲食を過して、運動が不足であつたりしては、決して長命は六かしい。而して自分から自分に省みて、何とも疚しい所のない人は其遺傳的に病體とか弱體とかでさへなければ、道理上長壽を保つ筈である。川村伯の母堂は、確かに其の證據とすべしである。

三、幼時

母堂が御幼少の歴史は、甚だ痛はしいことである併し梅花は霜雪を經て開くと同じく總て香ばしい人は、必らず其始めは痛はしい歴史がある。

母堂は川村家を繼ぐ可く生れたる令嬢であつた。けれども、生れて後久しからずして、御兩親に先立たれて柱とも杖ともなるべき父母ともに無くなられてから、他人の乳を求めて呱々の聲を揚げることゝなつたのは、何とも痛はしい譯であつた。

併しかゝる不幸の中にも御親戚が七十五萬石の大守島津家の家中にて、家老職を勤めたる、日置左衛門といふ堂々たる武家であつたため父母の亡くなられた後に同家に引取られて、此處にて生家の如く養育せられて、後長じて川村家に歸り、年頃に及びて、御養子を迎へられたのである。

四、學問

鹿兒島といふ所はいふまでもなく武張つた土地で小さいスパルタとでもいふべき所である。

それ故男子は非常に武藝を勵みて文あるものは必らず武ありの方面から、即はち可い眞の武士は、文字もあつて治亂興廢の由つて來る所を知るの要ありとて、武に進むと同時に文字にも勉めたのであるが、婦人には、學問の要なしとせられ、一時は女に學問あるを却て耻とせられて居たのである。

斯る風俗の中に人となられたため、母堂も始めより學問といふ學問はせられなかつた、固より一通りの手紙を書くとか女の道を辨へる位は學ばれたに相違ないが、三十一文字を並べて風月に懷を寄するなどの嗜はなかつたのである。

五、維新の際

日本の大革命といはるゝ御維新の際には、令息純義氏即はち今の伯爵が西鄕大久保等と一緒に國事に奔走せられたのである。

其時は母堂は主義とか意見とかいふものよりは、元より學問が深くないから、かういふ政治上の意味よりは助言もし敎戒もしなかつたけれども、武士といふ本領からは、秋霜烈日の意氣を皷して令息を勵まされたのである。

けれども氣丈なる御方であつたから、其家庭は丁度霜の深い日に梅の綻びて居るやうで、令息氏は自ら立派な奥床しい武士であつたため、母堂は紛々たる革命の渦中に投じ居る子に向つて、格別の懸念もせられなかつた。

六、母堂の特色

母堂が如何なる女であつたかといへば、氣丈なる方で、その嚴肅なることゝいつたら誰でも及ばないといふべき人である。

ソンナラ時々癇癪でも起すかといふと、それは首が切れても、苦々しい顔を見せないほどの堅忍で、思慮は何處迄も深く、其二三十年以來の友達でも一たび母堂の濁つた顔や、驚いた風を見たことのないといふ位である。

身體は小形の御方であつたが、氣丈なることは大丈夫も及ばぬため、傾城一落此人の爲に動くといふほどであつた。

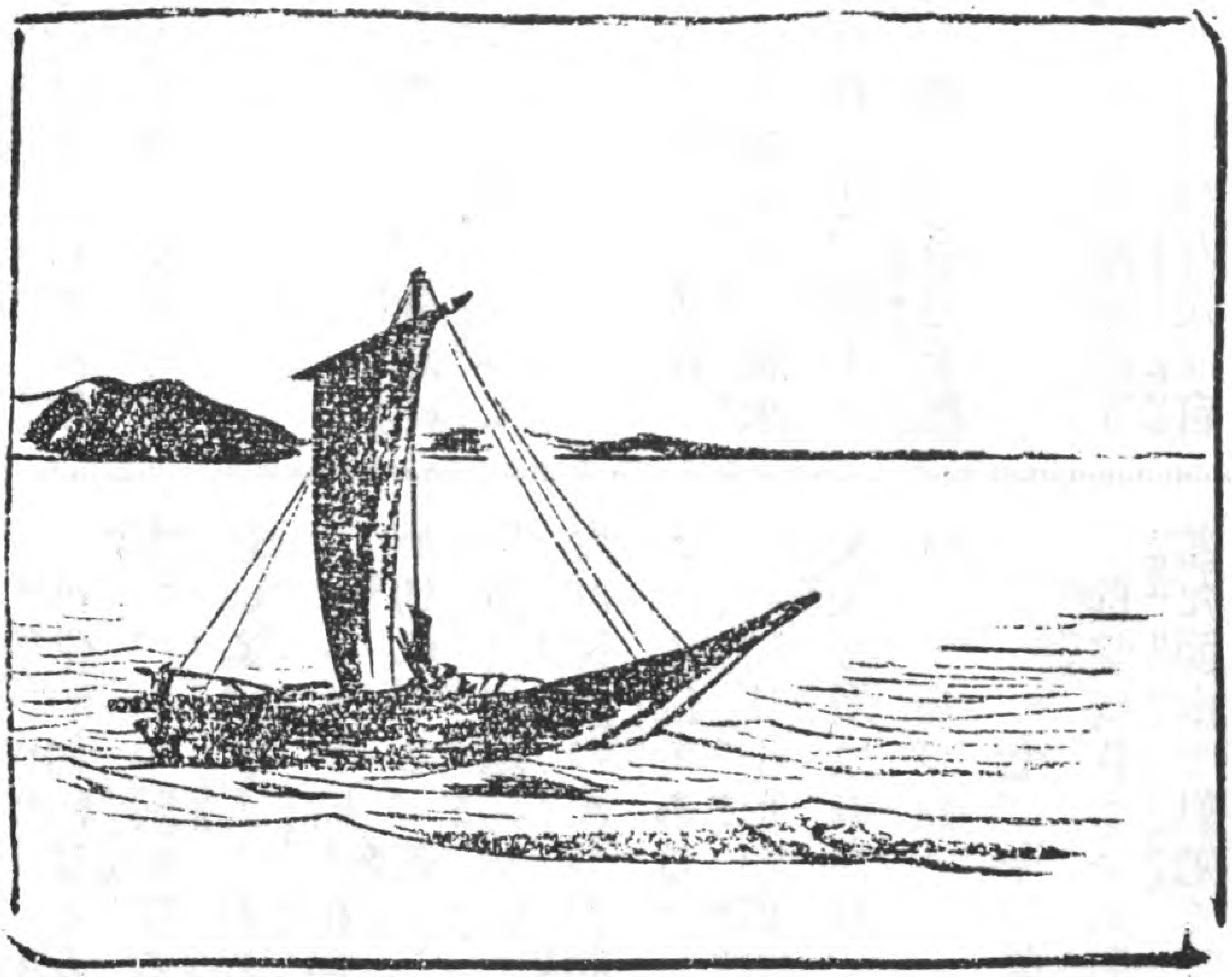
七、今の伯爵夫人

母堂はさういふ御氣性の御方であつたため、日比甚だ節儉で勤勉で、少時も身體を遊ばせるといふことはなく、必らず何か爲て居らるゝが常であつた。

日常の仕事としては一番機を織ることは御好であ

つたから。始終機を織られ時として夜三更に及んでも、杼を卸さないことがあつた、今の伯爵夫人が御輿入れになつても、矢張り機織を爲されて居たが、御一緒に織りかけて而して其間嚴肅に姑嫁といふ格式で夜三更に迄及ぶこと屢々であつたため、花嫁樣が眩暈して卒倒せられたことがあつたさうだ。

けれども、今の夫人も亦堪忍の強い御方で、どのやうなとがあつても露ほども顏に出さないやうにして努められて、姑御の御氣に入る樣にせられた、其處で其間柄を知つた人は母堂も嫁も共に克く盡し合たあんな感心な方は外にはないと評判した。



今の夫人が母堂に對する禮儀といふものは如何にも嚴かなもので何か用向きの談をする其都度に必らず敷居の外に數歩下つて兩手を疊の上に衝き、さうして其御談を爲された、それが習慣となつて亡くなられた當時迄尙斯の如くせられたといふことである。

八、衣食及び言語

衣食及び談話に關する平生は一番其爲人を現はすものである而して御母堂の此平生は洵に古の所謂賢婦人のそれと同じである。

母堂は御口數が少ない、家の人または他人が間違な事をしても決して怒らなくて克く諭された。

食事と衣服も共に世間並を喜び、決してそれ以上を望まれなかつた、又音樂を好まれなかつた處から見ると舊式の婦人には相違なきも、此處が母堂の母堂たる所以を示すのである、今はさうでもないが昔の三味線などを弄ぶ婦人はマー孰らかといへば浮氣の方であることを免れない。

九、下婢と庭男

下婢や庭男などに對しては恩威幷び行はるゝといふ風であつた。

母堂は下婢や庭男が「ア丶今日は寒い」といふ風で懐手をしたり、或は手首を袖の中に引込まして居ると、假に色を爲して怒りはしないけれどもソンナ事では冬の勤は出來ないから、何處か冬のない國に往つて奉公したら可ろうといふのである、だから下婢も庭男も御隱居樣といへば常にビク／＼して平服して居た。

けれども何處迄も嚴格のみではない、克く力めて功勞のあつたときには「ヨカゴワッス」の句調にて即時に引出物を賜はるといふ仕末であつたから、所謂恩威幷びに行はれたのである。

十、留守の時

昔から女の傑物といはるゝ人は必らず細かく行屆く人である、川村母堂の如き、亦克く細かく行屆く方であつた。

其一家を明けて沼津の別莊に行かれた時などは其家人の來られたものに對して、何處の戸締りは如何した、何處の鍵は誰が持つて居るかと其廣い邸内の隅から隅迄、少しも漏れなく問はれたさうである、さういふ風であるから、留守を預るものも御氣を損ずるやうなことがあつてはといふので、自ら丁寧に家内を取締り、落度のないやうに甚だ嚴しく見廻るのが常であつた。

十一、庭の樂み

庭園に於ての母堂が樂みは。芝生の上に歩を運んで、珍木佳草の馨を掬せんとにはあらで或は又遠く眼を山水の佳景に移して、自然に雅懐を催すにもあ

らで、甚だ小なるいはゞ單純なる樂みに滿足せられたのである。

奢るといふにあらねどもサスガに名高き川村家の邸園とて、其結搆甚だ數奇を凝らし、月下風前、老を養はれ給ふには、何一つの不足あらばこそであるけれども。母堂は斯る當世的のハイカラ式の庭園は餘り好まなかつたから、其庭園の裾に、少しばかりの畑を拵らへ自ら農夫となられて野菜を播きてボツリ〳〵其芽の萌え出づるのを見るのが第一の樂みなのである。

啻にそれが樂みばかりではなく其出來る野菜を自分にも食べ、親戚知己にも贈つて共に樂むことが亦何よりの樂みであつた。

斯る御考のあるは、平生儉朴を旨とし、盛んなる世になりても尙其昔を忘れられぬ床しい御心掛けで居られたからであらう。

十二、親戚に厚し

母堂は頗ぶる親戚に厚く、親戚を思ふことと自家を思ふやうであつた。

親戚は西鄕、樺山、得能、末川、伊集院の諸家である。母堂が此諸家の人方に盡されたることは到底普通の人の出來ることではない。節句や盆正月は勿論吉凶禍福の度毎に、克くマーあんなに行屆くと誰でも感心する程であつた。

中にも親戚の墓參りに就ての話が一番名高い、近年はお年よられて、足も自由ならざるに尙これを力められた。車が三臺一臺は御自分一臺は女中他一臺と女中のに煙草、酒、燒酎、餅、團子等樣々のものが積まれてある、これは何故かといふと。それがなかなか面白い。

先づ親戚の墓地に行れると母堂は女中を指揮して各墓前に到り其生前に好きなもの即はち煙草なら煙草酒ならば酒を供へしめ「貴下の御好なものを持つて來ましたよ」と恰も生きた人に語るが如くいふのであるから、知らない人は何だか奇妙に思ふほどであるが、其親戚に盡さるゝことはこの一事でも知ら

れるのである。

十三、友人を慕ふた

母堂の友達それは小供の時から姉妹の如くせられた伊集院しな子(八十二歳)といふ御方がある。記者此間、其邸を訪ふて、お目にかゝつたら、お年丈にもう子供のやうに甚だ無邪氣で舌の動きも自在ならず、それに「ゴワッセン」「ヨカゴワッス」の純粋な鹿兒島訛で些とも分らなかつたが、折柄此處に居られる中年位の一婦人が通辯をして下さつて一場の談をした。

御老人「此間沼津で別れ惡うゴワッした……何か出來たチウテー私呼び御起しゴワンす、何處にでも一緒に伴れ立て行きませんと氣がすまんチウもんな」

かういふ意味で談された其いふことは、私は母堂からは四才若い沼津では死ぬる知らせでしたろう互に別れ惡くかつたといふのである、倘涙を老眼に浮べて十五日の朝車が迎ひに來たから其車にて川村家に行き、鐵太郎サン(川村家の長男)に抱かれて母堂の顔を十五六度撫でたといふ意味を語られた。

母堂に付ての佳話は澤山あるけれども、これ丈でも、其如何なる母堂であつたかといふことは分る、而して何一ッ其亡くならるゝ前後川村家にて發見せられた立派なる話がある。

それは母堂が其亡くなられたる時の佛具經帷子、足袋、穿物、手珠一切のものをチャント揃へて土藏の一隅に人知れぬやうに秘め藏めてあつたとである。家中のもの丶評判には、目下畏くも

兩親王殿下御二方の御養育主任を承つて居る我家の事であるから、一意奉公の誠を貫く爲に自分のとは構ふことを成るべく尠なくして置きたい積りてかく仕て置かれたのであらうと云ふことである。

英國兒童の理想

岫雲

今を距る數年前英蘭の南北に於ける小學校中より約

六百名の兒童を撰み、第一汝等は寧ろ男子たるを欲する乎、但は女子たるを欲する乎、而してその理由如何、第二汝等は汝等が曾て聞き若くは讀みたる中の如何なる男子たり將た女子たらんとを欲する乎、而してその理由如何との問を發し之が答案を求めたることあり、その撰拔兒童は十一歳乃至十三歳のものにて悉く都會に生活する小童なりしが、其の答案を吟味したる結果は頗る興味あるものなりし。三百名の女兒中にて男子たらんを欲しゝもの三十名ありしが、同數の男子中女子たるべく希ひしは僅かに二名のみ。また女兒三十名中女性の優勝なることを確知して女子たるを願ひしは唯だ十名に過ぎざりき。甲は曰く、女子は男子より一層多感なるが故に女子たらんと欲すと。乙は曰く、女子は男子よりも勇敢にして敏速に事を爲し能ふが故に女子たるを望む、男子は鈍く不器用にして其上酒を嗜むと。丙は曰く、女子は男子が饒舌りつゝある間に事を爲すが故に女子たらんを希ふと。而して女兒中百分の三は斯る問題を撰決するは不敬虔の事とや考へけむ、問を發せられて驚怖の色を呈せり。さもあれ男子たらんを欲したる女兒中にて、男子は女子よりも有要にして且尊敬を拂はるゝのみならず、若し女子にして酒を飲ときは家庭を不幸に陥らしむるが故に寧ろ男子たるべきを希ひ、又男子は婦人の如く心に喰入る煩惱なきが故に男子たるを望むと云ふもありしが一般の意見は男子は女子よりも多く自由を有し、より多く强健に且欺かるゝと尠しと云ふに歸着せり、次に女性の受くべき經濟的不公平はまた彼等の多數を重く壓着せり。例へば或者の答案に曰く、汝若し男子たらば世人は汝を信じ相當に汝に支拂ふ、されど玆に女丈夫ありて男子よりは一層勝りたる事功を爲すも男子は爾く思惟せず、之に拂ふに輕侮を以てすと。而して女兒の百分の三十は女子として多少世を裨補せんことを望みたり。また寧ろ女子たらんを欲するものゝ中、其理由として女子は他人の患苦を思ひ遣るの情あり。然るに男子は唯だ我が身を顧み

るのみ、女子は忍耐力に富む、されど男子は都合惡きときは妄りに誓ひ、而して彼等は家具を蹴るといふもの一名、小供を思ふやうに敎育し得る爲めにと云ふもの十二名ありしが、他の百分の三十は女子は男子より生活安樂なりといふ理由の下に女子たるを望みぬ。即ち曰く女子は男子の如く石炭を掘らず街區に排水せず、又汚き長靴を以て應接室の毛氈を瀆すことなしと。又一女兒の答案こそ可笑しけれ、曰く妾は泣き、且つヒステリーを發せば、每に自分の思ふ儘に爲すことを得るが故に寧ろ女子たるを欲す、男子は泣くことなしと。他の一女兒は曰く、女子は男子より柔弱にして不正の非を爲したる場合にも罰せらるゝ事輕きか故に女子たるを望むと。以上の諸解答は以て英國の兒女が腦裡に描ける觀念の一班を窺ふに足り。次に男兒の懷ける希望いかにと見るに、其の答案には頗る奇なるものもありき。或者は曰く、女子は總て土曜日に給料を得るが故にいと都合宜し、女子は金錢を浪費せざれど男子は浪費す、而も予は浪費すべき金錢を有たんことを望むと。或男兒は又男兒たるを欲する由確言し、扨て曰く、男子は女子よりも多感なり而して汝が汝の國の爲めに戰はんとする時には感情を要すと。男兒中百分の七十六は女子の生活を以て不愉快なるものとし、且つ曰く女子は愚鈍なり、而して冒險的生活を營む能はず、彼等は嬰兒の守護を爲し又鈍き仕事をのみ爲さゞるべからずと。其の他女子は殆ど金を贏くることなく又敢て



商業的旅行家、軍人、探険家たる能はず、然るに此等は最も良き商賈なりといふもありき。以上の男兒の想像力は未だ多く家庭の生活に思ひ至らざりしが或一男子は曰く、女子にして若し小供を有たんか、諍鬪と泣き喚くことの絶ゆる間なし、蓋し小供は惡性のものなればなり、女子は之を忍ばざるべからずと。而して三百二名の男兒中、婦人たるべく望みしものは僅に二名のみ。其中の一人は詼諧家にて漸く十一歳の幼童なるにも拘らず皮肉の言を擅にせり、曰く予は速に女子たらんを欲す、其の生活容易なればなり、汝にして結婚すれば總て汝の亭主の給料を取りて汝の好むがまゝに之を費し、若し爲すべき業務あれば日傭女を僱ふ、而して亭主の歸宅若し時を失せんか、汝は思ふ存分之を罵り得るなりと。却々大人ぶりたる答辯なるが如此きは黄口兒童中多く類を見ざる所とす。

却説第二の問題たる兒童の最も欽慕する英雄女傑の誰なるやを檢するに、之を聞くもの少しく奇異の感なきにあらじ。即ち女兒の最多數が推服する理想的人物はフロレンス、ナイチンゲール孃とグラッドストーン氏となればなり。而して鶯孃たらんことを望みたるものは殆ど百分の十五を占めしが、其理由はいづれも孃は剛膽にして且つ熱心なる人物なるが故にと云ふに在りし。又具翁に次いで此等小學生徒の最も稱賛せしはヴイクトリヤ女皇にぞある。一女兒は記して曰く、女皇はいと淳良にして氣高き貴女なるが故に妾は女皇の如き婦人たらんことを欲すと。次に男兒の仰望する人物をその人氣の順序によりて排列すれば、サア、レッドヴアス、ブルラー。ロード、キッチナー。サア、シー、ホワイト。バーデン、パウエル。ロード、メスエン。（以上南阿出征將軍）セシル、ローヅ。ロード、チルソン。グラットストーン。ロスチヤイルド男爵。ウエリントン。サア、トーマス、リプトン。キップリング。シエークスピーヤ等その主なるものなりしが、サア、トーマス、リプトンが何故に斯く望みを博せしかを

聞くに、氏は快艇及び廛舗に向つて巨多の財貨を投ずるを吝まざるが故なりと。又セシル、ローズを稱贊するもの丶理由に曰く、彼は最近の數年に於て大に英國の爲めに盡し、彼がブーアの地に一會社を起すや、彼等ブーアは彼の力に依りて金鑛を發見せり然るに彼等は今や彼を射殺さんと擬す、我等は之が爲めに戰端を開きたりと。その言ふ所ろ宛然主戰論者の口吻と相肖たり。キップリングたらんことを望みたる一男兒は曰く、予はアブセント、マインデット、ベッガア（同氏の作）の如き好き詩集を著はし以て巨利を博せんと欲すと。一男兒はまたクルーゲルは唯だ座してパイプを燻ゆらし、而して容易に事を斷ずるが故にクルーゲルたらんことを期し、或一少年は又獨逸皇帝は專制の君主にして世界に於て最大の軍隊を有するといふを以て獨逸皇帝たらんことを望み、僕はその總軍隊を南阿に進め以てクルーゲルの眼に物見せ呉れんと意氣込めり。我は寧ろ我自身たらんことを期す、第一我は我以外の或者たる能はざるが故に、第二我は成長後必らず眼醒ましき事業を爲すべきが故にと云へるは十一歳の一男兒なりしが、自恃の精神に富める斯くの如くにして始めて英人の英人たる眞骨頭を見るべし。又中に英傑の世に立つ危險を慮る丶ものあり。曰く汝若し國家に於て高位を占め下民を驅使せば、恐らく汝に對して陰謀を企つるもの起らん、故に予は寧ろ凡人たらんを欲すべしと。一少年は曰く、泰平の世に於ては王たらんことを冀ふ、されど戰亂の代に在りては商業的旅行者たるを望むと。思慮愼密なりとはいへ其の心術憎むべきなり。



家庭科學 蠶の飼育法

さなへ生

養蠶は古昔から日本に行はれてゐる、至極利益の多い仕事で、其上興味も多く、婦女子の副業として一番によい事業と思ひます。で私は其の飼養の概畧を茲にお話致ませう。

○收蠶（掃立法）

收蠶とは蠶を收める事で、つまり、種紙の上に孵化つた蠶を、飼育する白紙の上に掃き集めまする方法で、或は掃立法とも申します。掃立法には、種々な方法が厶いまするが、一番よい方は紙掃法と糖掃法

第一、紙掃法

紙掃法をお話し乍ら蟻量を計る事をもつけ加へて申しあげる積り。蟻量とは蠶の重量——孵化した直の蠶は身體一面黒い毛が生えて其形は丁度蟻の樣です蟻蠶と云ひ、蟻蠶の重量を蟻量と申します。——蟻量を計には美濃紙を繼ぎ合して繼ぎ目が乾てから其の目方を秤つて、間違の無い樣に紙の一隅に記して置き、それを疊の上へ擴げ其の上へ蟻蠶の最早や孵化つてゐる種紙を俯向にして、暫く靜にて。蟻蠶の動搖が靜つて、稍々油斷してゐる時を見澄し、美濃紙より二三寸高い處で、種紙の裏を羽箒の柄で少し強く二三度、つゞけ樣に打ちますと、蟻は能く落ちます。（これ紙掃法）。

そこで其の蟻を紙ぐるめ、秤つて、前の紙の目方を引き去るのです。されば蟻蠶の量が分ります。

世間では紙掃法を非難して、突然種紙の裏から叩いては蟻蠶を驚かして發育に唯ならぬ害を及ぼす事が少なく無いと申します、だけれども僅か種紙の裏を叩く位は、決して左程の大害あるでは無く、叩かなければ却つて害を受ける位。即ち強く叩くのを厭て、初めから弱く叩く時は、蟻蠶は容易に落ちないで、叩けば叩く程抵抗力を增しますからとう〳〵羽箒で掃き下ろさなくてはならない始末になりますか

ら自然と蟻蠶の身を傷ける様な事が出來てきます。それ故初めから強く叩く方が、至極良いのです。

第二、蟻掃法

蟻掃法は掃き立てる前に、包紙を開て種紙を出し、蟻蠶の上へ直ぐ粟糠か籾糠の細片を撒き其の上へ呼び出し桑とて、細かに刻んだ桑を與り、蟻が糠の上へ這ひ登のを待つてゐて、他の敷紙箔に移して適宜の廣さに擴げるのです。

蟻掃の蟻量を秤るのには什麽するかと云へば蟻蠶を包紙と共に量目を秤定て、後よりも一度、蠶を他の箔へ移して、秤り直して、これを前に秤つて置いた量目から引き去るのです。

兎に角蠶の掃立は養蠶中の肝要なことで、掃立法がよくなければ、蠶兒を傷けて弱くし、又た知らずに捨てゝ終ふ事が御座ります、ですから掃立は十分丁寧に、出來る丈け靜にする様にするのが肝要です。

掃立をすると同時に、何故斯様に蟻蠶の量目を秤定て置くかは、即ち將來の爲めになるからです。

万一正しく蟻量を秤つて置かない時は、蠶が段々大きくなるに連れ、席を擴げたり、桑を給る等の取扱の上から考へても、又た道具立、桑葉の量、人夫の數等に夫れ／＼の準備にも甚激く不便するからで。

養蠶家は掃立を行ふ前に是非とも催青法をやらないといけませぬ。

そして掃立をするにも、一番早く發た蠶と一等遲く孵化た蠶とを、おしげなく捨てねば病蠶が多くなります。

孵化た早ぐの蠶は皮膚が極く柔いから成る丈け丁寧に取扱ないと傷を付ける様な事が出來てくる。ですから蠶座を廣げる時にも氣を付けて、いとゞ丁寧にお取扱になるがよろしい。

蠶座を擴げる法は蟻蠶の上へ直ぐ籾糠か粟糠を蠶體の隱れる位振りかけまして、其の上に一分位に刻んだ桑を給り、（蟻蠶と同量の桑）二三十分經つて蟻蠶が桑の香を臭で、上へ匍ひ上つて來頃を見許つて、糠ぐるみ蟻蠶を極く靜に、至つて丁寧に攪き交せまし

て、蟻量一匁に付き一坪、又たは一坪半の割合で他の箔の上に擴げるのです。斯樣に蠶座を擴げて後、二三十分間その儘にして置きますれば、蠶は桑を欲しさに粉糠を踏みにじつて上へ上へと匐ひつゝ上つて來ますから、そこで蟻蠶の三四倍の桑を與るのです。前に箔を廣げる時に與つた桑を呼び出し桑と謂ひ、只今の桑を居直り桑と申します。

◎飼育法

蠶を飼ふ法は三通り厶います。

一、清涼育。

二、溫暖育。

三、折衷育。

清涼育は、一寸も火力を借りず自然の氣候に任せる飼育法で、溫暖育とは取りも直さず火力を借りて飼育法。折衷育は、時々火力を用ひ、時に自然の天候に任せる飼育法です。

そして、玆には、唯溫暖育に就てお話致します。

蠶は溫度次第で或は早く飼ひ上げ、又たは手間取るのです。だが一番よい溫度は通常華氏の七十度前後で、養蠶は至つて溫度と關係の深いもので厶いまして、溫度の變動が厶いませず、平素、適順の氣候で厶いますれば、養蠶は、ほんの桑を與るのみで外に手數がかゝらず、いとも容易く出來上ります。

併し乍ら養蠶の期節は一年中でも一等不順ですから蠶の發育を妨げ、飼養の上にも少なからぬ害を蒙り氣候が寒い時には蠶の擧動は不活潑となり、食慾は減り、氣力も自然、衰へますから、斯樣な時には溫度を高めて無難に發育させるのが肝要で厶ります。これ僕が特に溫暖育をお話しする譯です。

だが火を使ふに致しましても、唯だ寒い時のみに限つて、平常目的とする溫度迄に昇さうとする一點張なれば、それこそ大變、反對に禍を來す素因と成ります。ですから火力を借りるにしても、外氣の溫度に從うて宜敷酌斟せぬといけませぬ。今火力を借りる標準を示しませう。

天然温度	火力温度	加用温度
四十度	二十度	六十度
四十五度	十八度	六十三度
五十度	十六度	六十六度
五十五度	十五度	七十度
六十度	十度	同
六十五度	五度	同
七十度	○	同
七十五度	○	七十五度
八十度	○	八十度

火力を借りるにも決して二十度以上に成つてはいけませぬ。萬一二十度以上に成りますと、炭から吐き出す炭酸瓦斯の爲めに、由々敷大害を受けますから。火力の事はこれで終焉として、次は空氣の流通に就てお話し致しませう。飼育中には空氣の流通を佳良するのは肝要な事。何分にも炭やら、蠶やらが炭酸瓦斯を吐き出しますから、これを發散せしめる手立をする必要が厶います。

今蠶が一時間に吐き出す炭酸瓦斯の分量を、表示致しましやう。

四萬頭なれば（蟻量一匁）　四七二六四〇〇

一萬頭なれば　一一八一六〇〇

千頭なれば　一一八一六〇

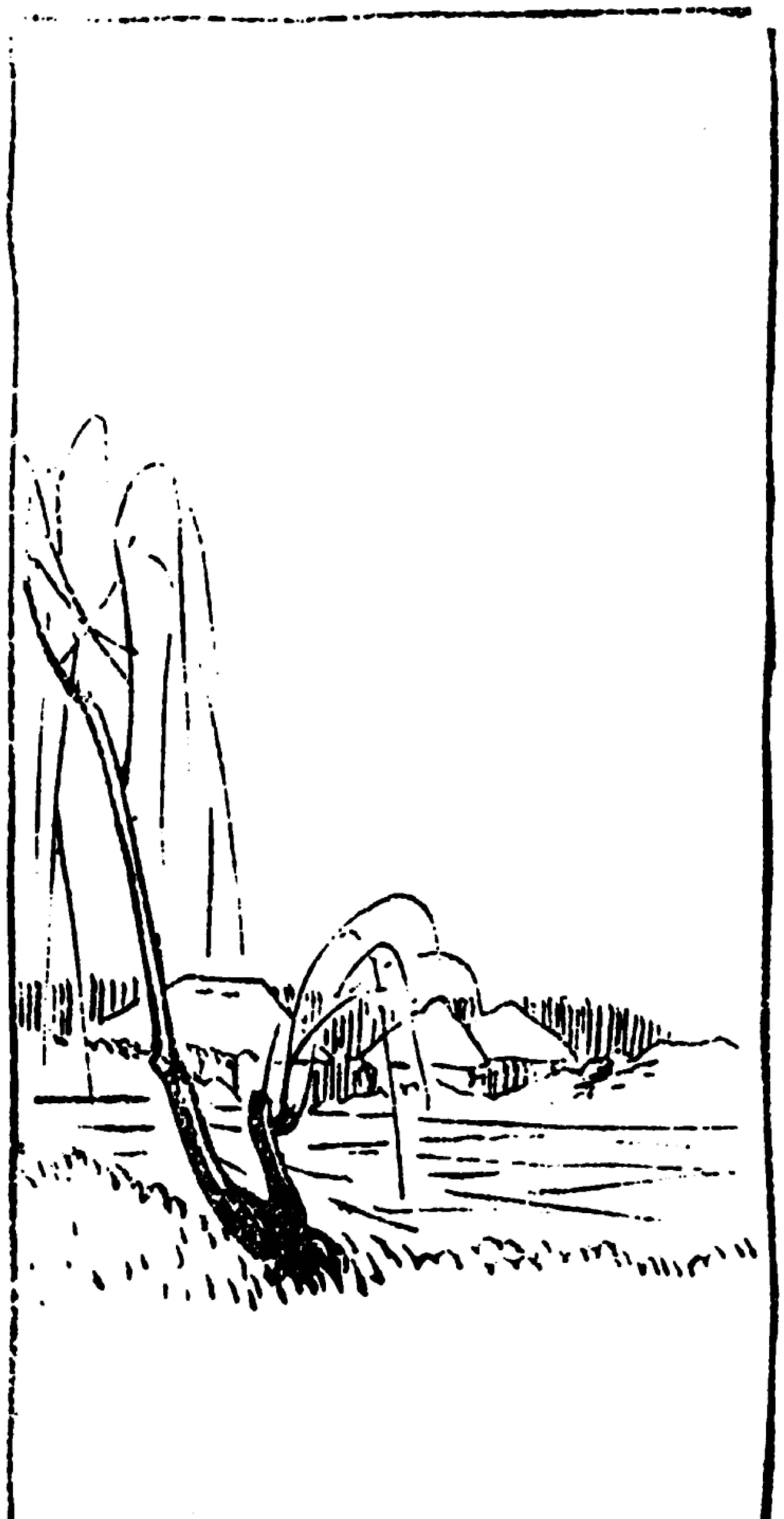
蠶は斯様に澤山な炭酸瓦斯を吐き出すのですから、十分空氣を流通せしめる事が肝必です。けれども温度を低くせない様に其處はお手加減。

一般の養蠶上の注意は、暑い時には空氣の流通を好くし、不潔なる空氣を新鮮なる空氣と交換せしめて、室内の空氣を清らかにせなくてはいけませぬ。世間が、温で、早や蒸屋もくる頃、稗蒔は靑々と延びます時、お天氣が續きますれば、從つて養蠶場も乾きますから、こんな時は床の上を雑巾で拭きますか、床の上に水を撒くのです。して又た濕る時は糠を蠶座に撒り、又たは火を燃て防ぐので。何れ養蠶を行るには乾濕器とて、濕氣を計る道具を使ひますが、こ の際には乾濕の差は五六度位で厶いますのを良いと

致します。この時火を使ひますには灰を掛けて温度を注意するのが肝要な事です。

蠶は生れた直ぐを蟻蠶と申ますは、前に早やお話したですが、この蟻蠶は、桑をやりつゝ注意しをればずん〳〵大きく成つて、四度舊ひ皮を脱ぎ後繭を作えて「可愛らしいや蠶の昆虫は桑の葉を喰て錦吐く」てふ俗謡の様に己が義務を果すのです。

却說、蠶が卵から生れてから、第一番目の皮を脱ぎ終る迄を第一齡と云ひ、其れから二度目の皮を脱ぎ了る迄を第二齡と云ひ、三度目の皮を脱ぎ了る迄を第三齡、四回目の脱皮を終る迄が第四齡、それから大きくなつて上簇（繭を結ぶこと、簇はまぶし、即ち簇に上ること）。する迄を第五齡と申します。



養蠶は何齡でも注意に注意を加えて、暫時も氣を安める時が厶いませんけれど、取り分け五齡中は特別注意せなければならぬ。

蠶は五齡に成ると重もに天然の氣温で育ひますもので非常の冷氣、例へば温度が六十度以下に降らなくては火力を借りないのが一般の方法で厶います。……

……兎に角五齡になりますと給桑量も一齡の四五百倍に增へ、從つて桑から發散蒸發する水蒸氣の分量も夥しいから其の室の空氣は一層濕つて、それが爲めに殘桑（喰ひ殘りの桑、）が腐り易く、萬一蠶が喰へば胃の消化を妨げて色々の病を惹起します。

ですから時々焚火をして空氣の欝滯を防ぎ、除沙(こしたを換える事、即ち餧桑やら糞なんかを取り捨てる事)を度々して空氣が欝して蒸熱を起す害を防ぐのが肝要です。

斯樣に五齡中は、炭酸瓦斯の量を增し、濕りの度をも增すのですから、成る丈け空氣の新陳代謝を勉めて、蠶の呼吸を苦めない樣に注意せないといけぬ。兎に角五齡中に蒸したり、熱を起したりすれば、左の三ヶ條に注意するのです。

第一、空氣の流通をよくする○○○○○○○○○
五齡の蠶兒の體重は蟻蠶の八千倍に增え、從つて炭酸瓦斯を吐き出すことも澤山ですから、十分空氣を流通せる樣に致さないと害があります。

第二、蠶室と蠶箔を淸潔にする○○○○○○○○○
溫度が上昇れば不潔物の腐る事が一層早く、掃除をせなかつた時には種々の病氣を起す基となりますす故、蠶室、蠶箔は申す迄もなく、室内の床柱の隅なく良く拭て淸潔に致しまして、疾病の源因を防ぐのは一番肝心のことで厶います。

第三、新鮮の桑を少量づゝ幾度にも與る、○○○○○○○○○○○
溫度が昇つて乾燥が激しければ、蠶の食慾は盛であるに關らず、桑を澤山與つた時には殘りの桑が腐つてしまふ。だから桑は少しづゝ幾度にも與るのです。

○給　桑

蠶に桑を與るのには蠶を一樣に大きくする樣心得ることは第一の肝要のことで、常に斯樣心得てゐねばならぬ。

桑を給るには、溫度の高低、濕氣の多寡、蠶の成長、又たは桑の厚薄に因つて同一では厶いませぬ。

溫度が高く昇つて好く乾く時分には給桑量を增し、又たは給桑回數を多くし、低溫で、濕氣が多い時は給桑量を減らし、又たは給桑回數を少なくするのです。

蠶の成長が遲い時は桑量を少なうして給桑回數を增

し、生長が盛である盛食期の時は、桑量を多くして回數を少なくし、又た桑の厚き時は刻み方に注意すると同時に、桑粒を少くし、薄い時は桑量を殖やすのです。

蠶の起た場合には、薄くて柔い桑を少しづゝ與つて、決して澤山與らぬ樣に心掛け、盛食期には十分喰せて養分を體内に貯へ　眠る時の用意にするのですから、盛食期には充分に不足の無い樣に桑を與る必要が厶います。其の代りに催眠前後は少しづゝ與つて宜敷のです。

給桑の方法の善悪に由つて蠶の衞生上、且つは經濟上に關係する事が大きくありますから、宜敷注意せねといけませぬ。――給桑量を少なくして桑の量を多くする樣な事は、桑の無駄費が多くなり、蠶の病を招く要となりますから、回數が多くて桑量が少なかつた時には、除沙分箔の手數を除くと共に、蠶の病を招くことが少なう御座います。どうか皆樣、給桑といふ事は養蠶上中々肝心なもので厶いますと思召して。

○規則的の給桑

給桑は斷して規則的によるがよろしい、世間では往往給桑を輕んじて、規則的は愚か、手のすいた時〱を見込でやる樣に致して居ります。併しこれは甚だ宜敷ない手段で、ある時には未だ前に與つた桑葉を喰べ切らない前にやり、それがため殘桑が積み重なり種々の病を起す源因となり。又た或る時には、既にこの前給桑したものも早や喰ひ盡した時分だのに、用事の都合で給桑が手間取り、桑が凋びる、蠶兒はお腹をへらすと云ふ樣に、これも亦た色々の害をおこします、だから給桑は乾度規則的におやりになるのが肝心。

兎角蠶と申す虫は健氣な虫では御座いますが、これは甘く飼ひ上げるには中々以て骨の折れる昆虫でして、給桑も朝は早くから、夜は遲くまでせねばならない始末。ですから今玆に規則的給桑を表示致しませう。

	給桑時間 午前	給桑時間 午後	給桑回數	給桑量（蟻量一匁に對する量）
第一齢	四時、七、一〇、	一時、三、五、八、十一、	八	三百匁—三百五十匁
第二齢	四、八、十一、	二、五、八、十一	七	六百匁—七百匁
第三齢（二様あり）	四、八、十一	二、五、八、十一	七	二貫三百匁—
	若くは			
	五、九、十二、	三、七、十一	六	二貫四百匁
第四齢	五、九、十二、	三、七、十一、	六	七貫三百匁 八貫五百匁
第五齢	五、一〇	二、六、十一	五	三十二貫匁— 三十六貫匁

給桑回數も給桑量と同樣に蠶兒の齡に由つて左右せなくてはならぬ。一齡二齡中には蠶が小いから回數を增して給桑量を少なくして段々蠶が大きくなるに連れて回數を少なくして桑量を增すのは前にお話した通りで厶います。けれど氣候の變化、卽ち温度が高く成つて能く乾く時は回數を增し、温度が低く、濕り氣が多い時には回數を減らすのです。

給桑の分量と回數とは前の表に示した通り…………（これは唯の標準迄の表。）……卽ち實際では蠶の成長する度合と、天氣乾濕の如何を見計つて斟酌する必要が厶います。

蠶の食料は大抵定まつたもので、一度に澤山を與つたとて、其れ丈け全々を喰べ盡すものでは無く。詰まり其の殘つたもの丈けは不用と成つて、不用桑を使うて經濟上に不利益を來す計りでは無く、其の桑は蠶に踏にじられて冷濕又たは發熱を起して蠶の衞生を害することが誠に激甚厶います。ですから養蠶家は起眠前後は勿論、氣候の乾く時、又たは濕る時等に注意して給桑回數と給桑量とに注意致しまするは肝心な事で厶います。

又た給桑するに致しましても、前回に與つた桑が能い加減に乾てゐるかどうかを考へて、ほんに好い時を見計ツて給桑するのです。さうで無くて前回の桑が未だ蠶座に殘つて居た時に給桑すれば、また乾かない生葉の上に生葉を與るのですから、餘程時間が經過ないと乾かず、そして一度蠶體の下に敷かれた桑は未だ生々しくても、蠶が喰べるものでなく、どうしても他の新らしい桑を欲しがりますから止むなく又た〳〵新に給桑せなくてはならない事になりますそう云ふ工合になると、後々が容易く乾かないで濕氣を起し、蒸熱を來たし、終には蠶の病を醸す樣になりまする。

前に申し上げた通り、一度蠶の身體に布かれて屎なんかに汚れた桑は、積り積つて蒸熱を起す計でなくこれを喰べさしますと軟化病を起します。

（をはり）

嬰兒の保護（承前）

ドクトル　淺田繁太郎

煉乳（コンデンスミルク俗にミルク又はメリキと云ふ）は牛乳に砂糖を加へ煮詰めて濃厚にし、罐詰となしたるものでありまして、良好の牛乳を得難き場合には、之を以て營養となすことがあります、併し是は大抵バタを取りたる殘滓が多く入れてありますが、肝心の營養素に乏しくて良き營養料とは申されませぬ、亞米利加製の鷹印でも純乳は半分より多くは入れてありませぬ、和製の下等の品であると、大抵純乳は二分位のものであります、其故に是等の品は其而已を以て嬰兒を養ふは宜しくありませぬ、煉乳も亦罐を開きましてからは腐敗易くありますから、一罐を永く滋養に供することは出來ませぬ、即ち夏期にありては二日、冬期にありては四日以上に亘るものは宜しくありませぬ、煉乳を以て嬰兒を養ふ者は常に試驗紙青赤二種を供へ置きまして、時々其乳を之に浸し試驗することが必要であります左右して若青色試驗紙が赤色に染まる時は、其乳の變敗した徵候でありまして是を用ゆるは有害であります

煉乳稀釋の比例　煉乳を溶解すには、矢張煮沸水又は麥煎汁を以て左の割合にいたします。

年齢	煉乳一回量	煮沸水或ハ麥煎汁一回於	比例大約
二週以內	四瓦	八十瓦	乳一分水廿分
一ヶ月同	五瓦	百瓦	同一分同廿分
二ヶ月同	七瓦	百二十瓦	同一分同十八分
三ヶ月同	八、五瓦	百四十五瓦	同一分同十七分
四ヶ月同	十瓦	百七十瓦	同一分同十七分
五ヶ月同	十二瓦	二百瓦	同一分同十六分
六ヶ月同	十三瓦	二百瓦	同一分同十六分
七ヶ月同	十四瓦	二百十瓦	同一分同十五分
八ヶ月同	十六瓦	二百二十瓦	同一分同十四分
九ヶ月同	十七瓦	二百二十瓦	同一分同十三分
十ヶ月以後	十八瓦	二百三十瓦	同一分同十三分
滿一年	二十瓦	二百四十瓦	同一分同十二分

ミリンスフード、ミルクフート及オイカシン等も亦嬰兒の營養料として用ゆることがありますけれども總ての點に於て良好生乳には及びませぬ、是等の品は、煉乳即ちコンデンスミルクと混て用ゆるのが宜しくあります、余は常に消化機能惡しくして下痢し易き小兒には、此ミリンスフードと鷲印のコンデンスミルクを等分にして、適當の割合（比例を見よ）に

長命するものは、長命する丈に、必らず善行がある。それは自分の身體を自ら克く節制し、且つ他に對して善行があるからである。

他に對して善を爲すので、いつも心が嬉しく、自分も克くいろ〳〵の人たる本分を全うするから其身を處して往く間に自然に適度の節制となるものである。怠惰たり、飲食を過して、運動が不足であつたりしては、決して長命は六かしい。而して自分から自分に省みて、何とも疚しい所のない人は其遺傳的に病體とか弱體とかでさへなければ、道理上長壽を保つ筈である。川村伯の母堂は、確かに其の證據とすべしである。

三、幼時

母堂が御幼少の歴史は、甚だ痛はしいことである併し梅花は霜雪を經て開くと同じく總て香ばしい人は、必らず其始めは痛はしい歴史がある。

母堂は川村家を繼ぐ可く生れたる令孃であつた。けれども、生れて後久しからずして、御兩親に先立たれて柱とも杖ともなるべき父母ともに無くなられてから、他人の乳を求めて呱々の聲を揚げることゝなつたのは、何とも痛はしい譯であつた。

併しかゝる不幸の中にも御親戚が七十五萬石の大守島津家の家中にて、家老職を勤めたる、日置左衛門といふ堂々たる武家であつたため父母の亡くなられた後に同家に引取られて、此處にて生家の如く養育せられて、後長じて川村家に歸り、年頃に及びて、御養子を迎へられたのである。

四、學問

鹿兒島といふ所はいふまでもなく武張つた土地で小さいスパルタとでもいふべき所である。

それ故男子は非常に武藝を勵みて文あるものは必らず武ありの方面から、即はち可い眞の武士は、文字もあつて治亂興廢の由つて來る所を知るの要ありとて、武に進むと同時に文字にも勉めたのであるが、婦人には、學問の要なしとせられ、一時は女に學問あるを却て耻とせられて居たのである。

かゝる風俗の中に人となられたため、母堂も始めより學問といふ學問はせられなかつた、固より一通りの手紙を書くとか女の道を辨へる位は學ばれたに相違ないが、三十一文字を並べて風月に懷を寄するなどの嗜はなかつたのである。

五、維新の際

日本の大革命といはるゝ御維新の際には、令息純義氏即はち今の伯爵が西郷大久保等と一緒に國事に奔走せられたのである。

其時は母堂は主義とか意見とかいふものよりは、元より學問が深くないから、かういふ政治上の意味よりは助言もし教戒もしなかつたけれども、武士といふ本領からは、秋霜烈日の意氣を鼓して令息を勵まされたのである。

けれども氣丈なる御方であつたから、其家庭は丁度霜の深い旦に梅の綻びて居るやうで、令息氏は自ら立派な奥床しい武士であつたため、母堂は紛々たる革命の渦中に投じ居る子に向つて、格別の懸念もせられなかつた。

六、母堂の特色

母堂が如何なる女であつたかといへば、氣丈なる方で、その嚴粛なることゝいつたら誰でも及ばないといふべき人である。

ソンナラ時々癇癪でも起すかといふと、それは首が切れても、苦々しい顔を見せないほどの堅忍で、思慮は何處迄も深く、其二三十年以來の友達でも一たび母堂の濁つた顔や、驚いた風を見たことのないといふ位である。

身體は小形の御方であつたが、氣丈なることは大丈夫も及ばぬため、傾城一藩此人の爲に動くといふほどであつた。

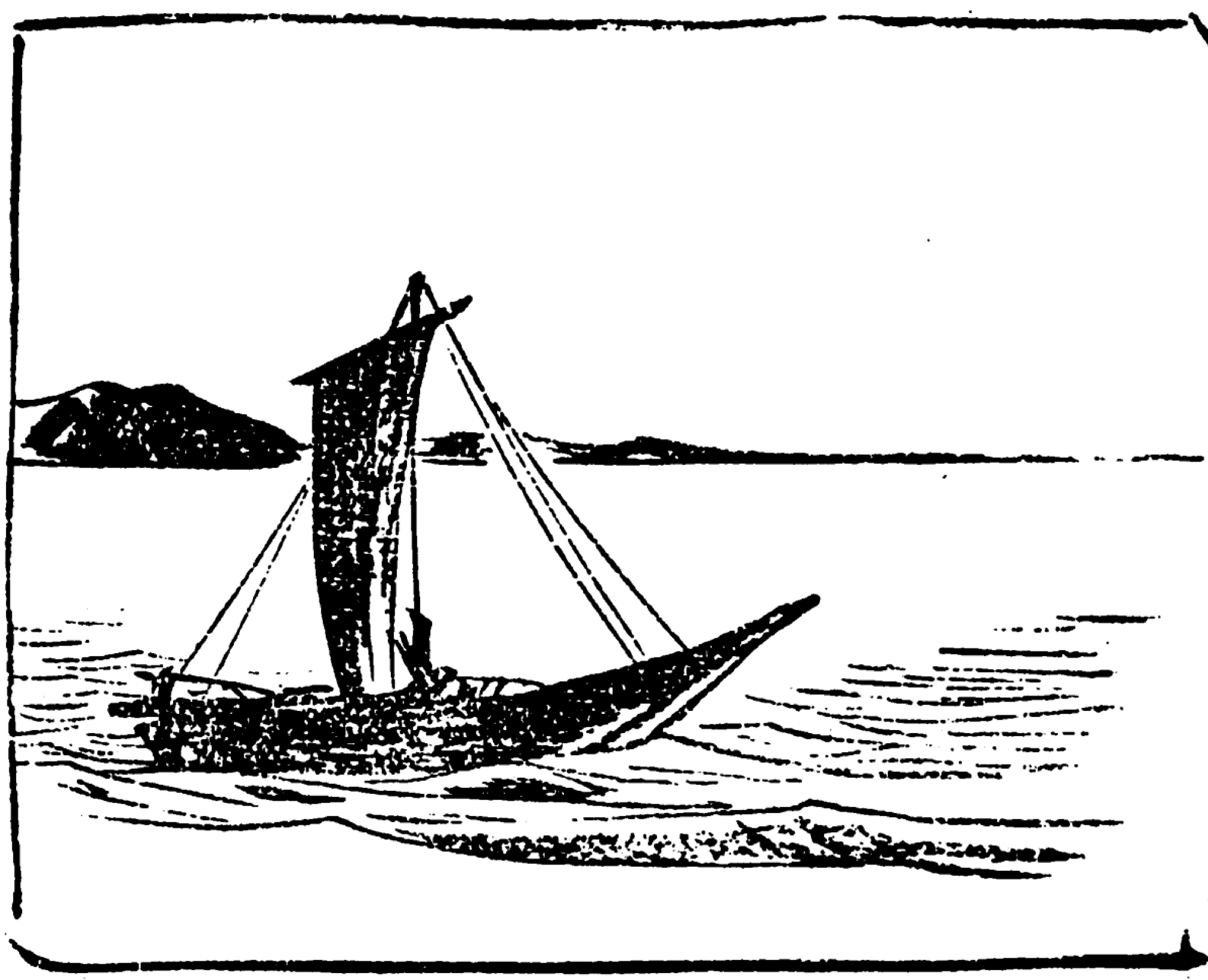
七、今の伯爵夫人

母堂はさういふ御氣性の御方であつたため、日比甚だ節儉で勤勉で、少時も身體を遊ばせるといふことはなく、必らず何か爲て居らるゝが常であつた。

日常の仕事としては一番機を織ることは御好であ

つたから。始終機を織られ時として夜三更に及んでも、杼を卸さないことがあつた、今の伯爵夫人が御輿入れになつても、矢張り機織を爲されて居たが、御一緒に織りかけて而して其間[illegible]に姑嫁といふ格式で夜三更に迄及ぶこと屢々であつたため、花嫁樣が眩暈して卒倒せられたことがあつたさうだ。

けれども、今の夫人も亦堪忍の強い御方で、どのやうなことがあつても露ほども顔に出さないやうにして務められて、姑御の御氣に入る樣にせられた、其處で其間柄を知つた人は母堂も嫁も共に克く盡し合たあんな感心な方は外にはないと評判した。



今の夫人が母堂に對する禮儀といふものは如何にも嚴かなもので何か用向きの談をする其都度に必らず敷居の外に數歩下つて兩手を疊の上に衝き、さうして其御談を爲された、それが習慣となつて亡くなられた當時迄倘斯の如くせられたといふことである。

八、衣食及び言語

衣食及び談話に關する平生は一番其爲人を現はすものである而して御母堂の此平生は洵に古の所謂賢婦人のそれと同じである。

母堂は御口數が少ない、家の人または他人が間違な事をしても決して怒らなくて克く諭された。

食事と衣服も其に世間並を喜び、決してそれ以上を望まれなかつた、又音樂を好まれなかつた處から見ると舊式の婦人には相違なきも、此處が母堂の母堂たる所以を示すのである、今はさうでもないが昔の三味線などを弄ぶ婦人はマー孰らかといへば浮氣の方であることを免れない。

九、下婢と庭男

下婢や庭男などに對しては恩威幷び行はるゝといふ風であつた。

母堂は下婢や庭男が「ア、今日は寒い」といふ風で懷手をしたり、或は手首を袖の中に引込まして居ると、俄に色を爲して怒りはしないけれどもソンナ事では冬の勤は出來ないから、何處か冬のない國に往つて奉公したら可ろうといふのである、だから下婢も庭男も御隱居樣といへば常にピク／＼して平服して居た。

けれども何處迄も嚴格のみではない、克く力めて功勞のあつたときには「ヨカゴワッス」の句調にて即時に引出物を賜はるといふ仕末であつたから、所謂恩威倂びに行はれたのである。

十、留守の時

昔から女の傑物といはるゝ人は必らず細かく行屆く人である、川村母堂の如き、亦克く細かく行屆く方であつた。

其一家を明けて沼津の別莊に行かれた時などは其家人の來られたものに對して、何處の戸締りは如何した、何處の鍵は誰が持つて居るかと其廣い邸内の隅から隅迄、少しも漏れなく問はれたさうである、さういふ風であるから、留守を預るものも御氣を損ずるやうなことがあつてはといふので、自ら丁寧に家内を取締り、落度のないやうに甚だ嚴しく見廻るのが常であつた。

十一、庭の樂み

庭園に於ての母堂が樂みは。芝生の上に歩を運んで、珍木佳草の馨を掬せんとにはあらで或は又遠く眼を山水の佳景に移して、自然に雅懷を催すにもあ

らで、甚だ小なるいはゞ單純なる樂みに滿足せられたのである。

奢るといふにあらねどもサスガに名高き川村家の邸園とて、其結搆甚だ數奇を凝らし、月下風前、老を養はれ給ふには、何一つの不足あらばこそであるけれども。母堂は斯る當世的のハイカラ式の庭園は餘り好まなかつたから、其庭園の裾に、少しばかりの畑を拵らへ自ら農夫となられて野菜を播きてポツリ〳〵其芽の萌え出づるのを見るのが第一の樂みなのである。

啻にそれが樂みばかりではなく其出來る野菜を自分にも食べ、親戚知己にも贈つて共に樂むことが亦何よりの樂みであつた。

斯る御考のあるは、平生儉朴を旨とし、盛んなる世になりても何卒昔を忘れられぬ床しい御心掛けで居られたからであらう。

十二、親戚に厚し

母堂は頗ぶる親戚に厚く、親戚を思ふことと自家を思ふやうであつた。

親戚は西鄕、樺山、得能、末川、伊集院の諸家である。母堂が此諸家の人方に盡されたることは到底普通の人の出來ることではない。節句や盆正月は勿論吉凶禍福の度毎に、克くマーあんなに行屆くと誰でも感心する程であつた。

中にも親戚の墓參りに就ての話が一番名高い、近年はお年よられて、足も自由ならざるに尙これを力められた。車が三臺一臺は御自分一臺は女中他一臺と女中のに煙草、酒、燒酎、餅、團子等樣々のものが積まれてある、これは何故かといふと。それがなかなか面白い。

先づ親戚の墓地に行れると母堂は女中を指揮して各墓前に到り其生前に好きなもの即はち煙草なら煙草酒ならば酒を供へしめ「貴下の御好なものを持つて來ましたよ」と恰も生きた人に語るが如くいふのであるから、知らない人は何だか奇妙に思ふほどであるが、其親戚に盡さるゝことはこの一事でも知ら

れるのである。

十三、友人を慕ふた

母堂の友達それは小供の時から姉妹の如くせられた伊集院しな子(八十二歳)といふ御方がある。

記者此間、其邸を訪ふて、お目にかゝつたら、お年丈にもう子供のやうに甚だ無邪氣で舌の動きも自在ならず、それに「ゴワッセン」「ヨカゴワッス」の純粋な鹿兒島訛で些とも分らなかつたが、折柄此處に居られる中年位の一婦人が通辯をして下さつて一場の談をした。

御老人「此間沼津で別れ悪うゴワッした……何か出來たチウテー私 呼び御起しゴワンす、何處にでも一緒に伴れ立て行きませんと氣がすまんチウもんな」。

かういふ意味で談された其いふことは、 私は母堂からは四才若い沼津では死ぬる知らせでしたろう互に別れ悪くかつたといふのである、 倘涙を老眼に浮べて十五日の朝車が迎ひに來たから其車にて川村家に行き、鐵太郎サン(川村家の長男)に抱かれて母堂の顔を十五六度撫でたといふ意味を語られた。

母堂に付ての佳話は澤山あるけれども、これ丈でも、其如何なる母堂であつたかといふことは分る、而して倘一ッ其亡くならるゝ前後川村家にて發見せられた立派なる話がある。

それは母堂が其亡くなられたる時の佛具經帷子、足袋、穿物、手珠一切のものをチャント拵へて土藏の一隅に人知れぬやうに秘め藏めてあつたとである。

家中のもの丶評判には、目下畏くも兩親王殿下御二方の御養育主任を承つて居る我家の事であるから、一意奉公の誠を貫く爲に自分のとは構ふことを成るべく尠なくして置きたい積りでかく仕て置かれたのであらうと云ふことである。

英國兒童の理想

岫雲

今を距る數年前英蘭の南北に於ける小學校中より約

六百名の兒童を撰み、第一汝等は寧ろ男子たるを欲する乎、但は女子たるを欲する乎、而してその理由如何、第二汝等は汝等が曾て聞き若くは讀みたる中の如何なる男子たり將た女子たらんとを欲する乎、而してその理由如何との問を發し之が答案を求めたることあり、その撰拔兒童は十一歳乃至十三歳のものにて悉く都會に生活する小童なりしが、其の答案を吟味したる結果は頗る興味あるものなりし。三百名の女兒中にて男子たらんを欲しゝもの三十名ありしが、同數の男子中女子たるべく希ひしは僅かに二名のみ。また女兒三十名中女性の優勝なることを確知して女子たるを願ひしは唯だ十名に過ぎざりき。甲は曰く、女子は男子より一層多感なるが故に女子たらんと欲すと。乙は曰く、女子は男子よりも勇敢にして敏速に事を爲し能ふが故に女子たるを望む、男子は鈍く不器用にして其上酒を嗜むと。丙は曰く、女子は男子が饒舌りつゝある間に事を爲すが故に女子たらんを希ふと。而して女兒中百分の三は斯る問題を撰決するは不敬虔の事とや考へけむ、問を發せられて驚怖の色を呈せり。さもあれ男子たらんを欲したる女兒中にて、男子は女子よりも有要にして且尊敬を拂はるゝのみならず、若し女子にして酒を飲ときは家庭を不幸に陷らしむるが故に寧ろ男子たるべきを希ひ、又男子は婦人の如く心に喰入る煩惱なきが故に男子たるを望むと云ふもありしが一般の意見は男子は女子よりも多く自由を有し、より多く強健に且欺かるゝと尠しと云ふに歸着せり、次に女性の受くべき經濟的不公平はまた彼等の多數を重く壓着せり。例へば或者の答案に曰く、汝若し男子たらば世人は汝を信じ相當に汝に支拂ふ、されど茲に女丈夫ありて男子よりは一層勝りたる事功を爲すも男子は爾く思惟せず、之に拂ふに輕侮を以てすと。而して女兒の百分の三十は女子として多少世を裨補せんことを望みたり。また寧ろ女子たらんを欲するものゝ中、其理由として女子は他人の患苦を思ひ遣るの情あり。然るに男子は唯だ我が身を顧み

るのみ、女子は忍耐力に富む、されど男子は都合惡きときは妄りに誓ひ、而して彼等は家具を蹴るといふもの一名、小供を思ふやうに敎育し得る爲めにと云ふもの十二名ありしが、他の百分の三十は女子は男子より生活安樂なりといふ理由の下に女子たるを望みぬ。即ち曰く女子は男子の如く石炭を掘らず街區に排水せず、又汚き長靴を以て應接室の毛氈を瀆すことなしと。又一女兒の答案こそ可笑しけれ、曰く妾は泣き、且つヒステリーを發せば、毎に自分の思ふ儘に爲すことを得るが故に寧ろ女子たるを欲す、男子は泣くことなしと。他の一女兒は曰く、女子は男子より柔弱にして不正の事を爲したる場合にも罰せらるゝ事輕きか故に女子たるを望むと。以上の諸解答は以て英國の兒女が腦裡に描ける觀念の一班を窺ふに足り。



次に男兒の懷ける希望いかにと見るに、其の答案には頗る奇なるものもありき。或者は曰く、女子は總て土曜日に給料を得るが故にいと都合宜し、女子は金錢を浪費せざれど男子は浪費す、而も予は浪費すべき金錢を有たんことを望むと。或男兒は又男兒たるを欲する由確言し、扨て曰く、男子は女子よりも多感なり而して汝が汝の國の爲めに戰はんとする時には感情を要すと。男兒中百分の七十六は女子の生活を以て不愉快なるものとし、且つ曰く女子は愚鈍なり、而して冒險的生活を營む能はず、彼等は嬰兒の守護を爲し又鈍き仕事をのみ爲さゞるべからずと。其の他女子は殆ど金を贏くることなく又敢て

商業的旅行家、軍人、探険家たる能はず、然るに此等は最も良き商賈なりといふもありき。以上の男兒の想像力は未だ多く家庭の生活に思ひ至らざりしが或一男子は曰く、女子にして若し小供を有たんか、諍闘と泣き喚くことの絶ゆる間なし、蓋し小供は惡性のものなればなり、女子は之を忍ばざるべからずと。而して三百二名の男兒中、婦人たるべく望みしものは僅に二名のみ。其中の一人は詼諧家にて漸く十一歳の幼童なるにも拘らず皮肉の言を擅にせり、曰く予は速に女子たらんを欲す、其の生活容易なればなり、汝にして結婚すれば總て汝の亭主の給料を取りて汝の好むがまゝに之を費し、若し爲すべき業務あれば日傭女を傭ふ、而して亭主の歸宅若し時を失せんか、汝は思ふ存分之を罵り得るなりと。却々大人ぶりたる答辯なるが如此きは黄口兒童中多く類を見ざる所とす。

却説第二の問題たる兒童の最も欽慕する英雄女傑の誰なるやを檢するに、之を聞くもの少しく奇異の感なきにあらじ。即ち女兒の最多數が推服する理想的人物はフロレンス、ナイチンゲール嬢とグラッドストーン氏となればなり。而して鶯嬢たらんことを望みたるものは殆ど百分の十五を占めしが、其理由はいづれも嬢は剛膽にして且つ熱心なる人物なるが故にと云ふに在りし。又具翁に次いで此等小學生徒の最も稱賛せしはヴイクトリヤ女皇にぞある。一女兒は記して曰く、女皇はいと淳良にして氣高き貴女なるが故に妾は女皇の如き婦人たらんことを欲すと。次に男兒の仰望する人物をその人氣の順序によりて排列すれば、サア、レッドヴアス、ブルラー。ロード、キッチナー。サア、シー、ホワイト。バーデン、パウエル。ロード、メスエン。（以上南阿出征將軍）セシル、ローヅ。ロード、チルソン。グラッドストーン。ロスチャイルド男爵。ウエリントン。サア、トーマス、リプトン。キップリング。シエークスピーヤ等その主なるものなりしが、サア、トーマス、リプトンが何故に斯く望みを博せしかを

聞くに、氏は快艇及び廛舗に向つて巨多の財貨を投ずるを吝まざるが故なりと。又セシル、ローズを稱賛するもの、理由に曰く、彼は最近の數年に於て大に英國の爲めに盡し、彼がブーアの地に一會社を起すや、彼等ブーアは彼の力に依りて金鑛を發見せり然るに彼等は今や彼を射殺さんと擬す、我等は之が爲めに戰端を開きたりと。その言ふ所ろ宛然主戰論者の口吻と相肖たり。キップリングたらんことを望みたる一男兒は曰く、予はアブセント、マインデット、ベッガア（同氏の作）の如き好き詩集を著はし以て巨利を博せんと欲すと。一男兒はまたクルーゲルは唯だ座してパイプを燻ゆらし、而して容易に事を斷ずるが故にクルーゲルたらんことを期し、或一少年は又獨逸皇帝は專制の君主にして世界に於て最大の軍隊を有するといふを以て獨逸皇帝たらんことを望み、僕はその總軍隊を南阿に進め以てクルーゲルの眼に物見せ呉れんと意氣込めり。我は寧ろ我自身たらんことを期す、第一我は我以外の或者たる能はざるが故に、第二我は成長後必らず眼醒ましき事業を爲すべきが故にと云へるは十一歳の一男兒なりしが、自恃の精神に富める斯くの如くにして始めて英人の英人たる眞骨頭を見るべし。又中に英傑の世に立つ危險を慮るゝものあり。曰く汝若し國家に於て高位を占め下民を驅使せば、恐らく汝に對して陰謀を企つるもの起らん、故に予は寧ろ凡人たらんを欲すべしと。一少年は曰く、泰平の世に於ては王たらんことを冀ふ、されど戰亂の代に在りては商業的旅行者たるを望むと。思慮愼密なりとはいへ其の心術憎むべきなり。



家庭科學 蠶の飼育法

さなへ生

養蠶は古昔から日本に行はれてゐる、至極利益の多い仕事で、其上興味も多く、婦女子の副業として一番によい事業と思ひます。で私は其の飼養の概畧を茲にお話致ませう。

○收蠶（掃立法）

收蠶とは蠶を收める事で、つまり、種紙の上に孵化つた蠶を、飼育する白紙の上に掃き集めまする方法で、或は掃立法とも申します。掃立法には、種々な方法が厶いまするが、一番よい方は紙掃法と糠掃法

第一、紙掃法

紙掃法をお話し乍ら蟻量を計る事をもつけ加へて申しあげる積り。蟻量とは蠶の重量——孵化した直の蠶は身體一面黑い毛が生えて其形は丁度蟻の樣です——蟻蠶と云ひ、蟻蠶の重量を蟻量と申します。——蟻量を計には美濃紙を繼ぎ合して繼ぎ目が乾てから其の目方を秤つて、間違の無い樣に紙の一隅に記して置き、それを疊の上へ擴げ其の上へ蟻蠶の最早や孵化つてゐる種紙を俯向にして、暫く靜に。蟻蠶の動搖が靜つて、稍々油斷してゐる時を見澄し、美濃紙より二三寸高い處で、種紙の裏を羽箒の柄で少し強く二三度、つゞけ樣に打ちますと、蟻は能く落ちます。（これ紙掃法）。

そこで其の蟻を紙ぐるめ秤つて、前の紙の目方を引き去るのです。されば蟻蠶の量が分ります。

世間では紙掃法を非難して、突然種紙の裏から叩いては蟻蠶を驚かして發育に唯ならぬ害を及ぼす事が少なく無いと申します、だけれども僅か種紙の裏を叩く位は、決して左程の大害あるでは無く、叩かなければ却つて害を受ける位。即ち強く叩くのを厭て、初めから弱く叩く時は、蟻蠶は容易に落ちないで、叩けば叩く程抵抗力を增しますからとう〳〵羽箒で掃き下ろさなくてはならない始末になりますか

ら自然と蠶の身を傷ける様な事が出來てきます。それ故初めから強く叩く方が、至極良いのです。

第二、蟻掃法

蟻掃法は掃き立てる前に、包紙を開て種紙を出し、蟻蠶の上へ直ぐ粟糠か籾糠の細片を撒き其の上へ呼び出し桑とて、細かに刻んだ桑を與り、蟻が糠の上へ這ひ登のを待つてゐて、他の敷紙箔に移して適宜の廣さに擴げるのです。

糠掃の蟻量を秤るのには什麼するかと云へば蟻蠶を包紙と共に掃目を秤定て、後よりも一度、蠶を他の箔へ移して、秤り直して、これを前に秤つて置いた量目から引き去るのです。

兎に角蠶の掃立は養蠶中の肝要なことで、掃立法がよくなければ、蠶兒を傷けて弱くし、又た知らずに捨てゝ終ふ事が御座ります、ですから掃立は十分丁寧に、出來る丈け靜にする樣にするのが肝要です。掃立をすると同時に、何故斯樣に蟻蠶の量目を秤定て置くかは、即ち將來の爲めになるからです。

万一正しく蟻量を秤つて置かない時は、蠶が段々大きくなるに連れ、席を擴げたり、桑を給る等の取扱の上から考へても、又た道具立、桑葉の量、人夫の數等に夫れ〴〵の準備にも甚激く不便するからで。

養蠶家は掃立を行ふ前に是非とも催青法をやらないといけませぬ。

そして掃立をするにも、一番早く發た蠶と一等遲く孵化た蠶とを、おしげなく捨てねば病蠶が多くなります。

孵化た早ぐの蠶は皮膚が極く柔いから成る丈け丁寧に取扱ないと傷を付ける樣な事が出來てくる。ですから蠶座を廣げる時にも氣を付けて、いとゞ丁寧にお取扱になるがよろしい。

蠶座を擴げる法は蟻蠶の上へ直ぐ籾糠か粟糠を蠶體の隱れる位振りかけまして、其の上に一分位に刻んだ桑を給り、(蟻蠶と同量の桑)二三十分經つて蟻蠶が桑の香を臭で、上へ匍ひ上つて來頃を見許つて、糠ぐるみ蟻蠶を極く靜に、至つて丁寧に攪き交せまし

て、蟻量一匁に付き一坪、又たは一坪半の割合で他の箔の上に擴げるのです。

斯様に蠶座を擴げて後、二三十分間その儘にして置きますれば、蠶は桑を欲しさに籾糠を踏みにじつて上へ上へと匍ひつゝ上つて來ますから、そこで蟻蠶の三四倍の桑を與るのです。前に箔を廣げる時に與つた桑を呼び出し桑と謂ひ、只今の桑を居直り桑と申します。

○飼育法

蠶を飼ふ法は三通り厶います。

一、清涼育。

二、温暖育。

三、折衷育。

清涼育は、一寸も火力を借りず自然の氣候に任せる飼育法で、温暖育とは取りも直さず火力を借りて飼育法。折衷育は、時々火力を用ひ、時に自然の天候に任せる飼育法です。

そして、茲には、唯温暖育に就てお話致します。

蠶は温度次第で或は早く飼ひ上げ、又たは手間取るのです。だが一番よい温度は通常華氏の七十度前後で、養蠶は至つて温度と關係の深いもので厶いまして、温度の變動が厶いませず、平素、適順の氣候で厶いますれば、養蠶は、ほんの桑を與るのみで外に手數がかゝらず、いとも容易く出來上ります。

併し乍ら養蠶の期節は一年中でも一等不順ですから蠶の發育を妨げ、飼養の上にも少なからぬ害を蒙り氣候が寒い時には蠶の擧動は不活潑となり、食慾は減り、氣力も自然、衰へますから、斯様な時には温度を高めて無難に發育させるのが肝要で厶ります。これ僕が特に温暖育をお話しする譯です。

だが火を使ふに致しましても、唯だ寒い時のみに限つて、平常目的とする温度迄に昇さうとする一點張なれば、それこそ大變、反對に禍を來す素因と成ります。ですから火力を借りるにしても、外氣の温度に從うて宜敷斟酌せぬといけませぬ。今火力を借りる標準を示しませう。

天然温度	火力温度	加用温度
四十度	二十度	六十度
四十五度	十八度	六十三度
五十度	十六度	六十六度
五十五度	十五度	七十度
六十度	十度	同
六十五度	五度	同
七十度	○	同
七十五度	○	七十五度
八十度	○	八十度

火力を借りるにも決して二十度以上に成つてはいけませぬ。萬一二十度以上に成りますと、炭から吐き出す炭酸瓦斯の爲めに、由々敷大害を受けますから。火力の事はこれで終焉として、次は空氣の流通に就てお話し致しませう。飼育中には空氣の流通を佳良するのは肝要な事。何分にも炭やら、蠶やらが炭酸瓦斯を吐き出しますから、これを發散せしめる手立をする必要が厶います。

今蠶が一時間に吐き出す炭酸瓦斯の分量を、表示致しましやう。

四萬頭なれば(蟻量一匁)　四七、二六四〇〇
一萬頭なれば　一一、八一六〇〇
千頭なれば　一、一八一六〇

蠶は斯樣に澤山な炭酸瓦斯を吐き出すのですから、十分空氣を流通せしめる事が肝必です。けれども温度を低くせない樣に其處はお手加減。

一般の養蠶上の注意は、暑い時には空氣の流通を好くし、不潔なる空氣を淸らかにせなくてはいけませぬ。世間が、温で、早や蒸屋もくる頃、稗蒔は靑々と延びます時、お天氣が續きますれば、從つて養蠶場も乾きますから、こんな時は床の上を雜巾で拭きますか、床の上に水を撒くのです。して又た濕る時は糠を蠶座に撒り、又たは火を燃て防ぐので。何れ養蠶を行るには乾濕器とて、濕氣を計る道具を使ひますが、この際には乾濕の差は五六度位で厶いますのを良いと

致します。この時火を使ひますには灰を掛けて温度を注意するのが肝要な事です。

蠶は生れた直ぐを蟻蠶と申ますは、前に早やお話したですが、この蟻蠶は、桑をやりつゝ注意しをればずん〳〵大きく成つて、四度舊ひ皮を脱ぎ後繭を作えて『可愛らしいや蠶の昆虫は桑の葉を喰て錦吐く』てふ俗謡の様に己が義務を果すのです。

却説、蠶が卵から生れてから、第一番目の皮を脱ぎ終る迄を第一齢と云ひ、其れから二度目の皮を脱ぎ了る迄を第二齢と云ひ、三度目の皮を脱ぎ了る迄を第三齢、四回目の脱皮を終る迄が第四齢、それから大きくなつて上簇（繭を結ぶこと、簇はまぶし、即ち簇に上ること）。



する迄を第五齢と申します。

養蠶は何齢でも注意に注意を加えて、暫時も氣を安める時が厶いませんけれど、取り分け五齢中は特別注意せなければならぬ。

蠶は五齢に成ると重もに天然の氣温で育ひますもので非常の冷氣、例へば温度が六十度以下に降らなくては火力を借りないのが一般の方法で厶います。…………兎に角五齢になりますと給桑量も一齢の四五百倍に増へ、從つて桑から發散蒸發する水蒸氣の分量も夥しいから其の室の空氣は一層濕つて、それが爲めに遺桑（喰ひ殘りの桑、）が腐り易く、萬一蠶が喰へば胃の消化を妨げて色々の病を惹起します。

ですから時々焚火をして空氣の鬱滯を防ぎ、除沙(こしたを換える事、即ち襯桑やら糞なんかを取り捨てる事)を度々して空氣が欝して蒸熱を起す害を防ぐのが肝要です。

斯樣に五齡中は、炭酸瓦斯の量を增し、濕りの度をも增すのですから、成る丈け空氣の新陳代謝を勉めて、蠶の呼吸を苦めない樣に注意せないといけぬ。兎に角五齡中に蒸したり、熱を起したりすれば、左の三ケ條に注意するのです。

第一、**空氣の流通をよくする** 五齡の蠶兒の體重は蟻蠶の八千倍に增え、從つて炭酸瓦斯を吐き出すことも澤山ですから、十分空氣を流通せる樣に致さないと害があります。

第二、**蠶室と蠶箔を清潔にする** 溫度が上昇れば不潔物の腐る事が一層早く、掃除をせなかつた時には種々の病氣を起す基となります故、蠶室、蠶箔は申す迄もなく、室内の床柱の隅なく良く拭て清潔に致しまして、疾病の源因を防ぐのは一番肝心のことで厶います。

第三、**新鮮の桑を少量づゝ幾度にも與る、** 溫度が昇つて乾燥が激しければ、蠶の食慾は旺であるに關らず、桑を澤山與つた時には殘りの桑が腐つてしまふ。だから桑は少しづゝ幾度にも與るのです。

◎給桑

蠶に桑を與るのには蠶を一樣に大きくする樣心得ることは第一の肝要のことで、常に斯樣心得てゐねばならぬ。

桑を給るには、溫度の高低、濕氣の多寡、蠶の成長、又たは桑の厚薄に因つて同一では厶いませぬ。

溫度が高く昇つて好く乾く時分には給桑量を增し、又たは給桑回數を多くし、低溫で、濕氣が多い時は給桑量を減らし、又たは給桑回數を少なくするのです。

蠶の成長が遲い時は桑量を少なうして給桑回數を增

し、生長が盛である盛食期の時は、桑量を多くして回數を少なくし、又た桑の厚き時は刻み方に注意すると同時に、桑拡を少くし、薄い時は桑量を殖やすのです。

蠶の起た場合には、薄くて柔い桑を少しづゝ與つて、決して澤山與らぬ様に心掛け、盛食期には十分喰せて養分を體内に貯へ眠る時の用意にするのですから、盛食期には充分に不足の無い様に桑を與る必要が厶います。其の代りに催眠前後は少しづゝ與つて宜敷のです。

給桑の方法の善惡に由つて蠶の衛生上、且つは經濟上に關係する事が大きくわりますから、宜敷注意せねといけませぬ。——給桑量を少なくして桑の量を多くする様な事は、桑の無駄遣が多くなり、蠶の病を招く要となりますから、回數が多くて桑量が少なかつた時には、除沙分箔の手數を除くと共に、蠶の病を招くことが少なう御座います。どうか皆様、給桑といふ事は養蠶上中々肝心なものでムいますと思召して。

○規則的の給桑

給桑は斷して規則的によるがよろしい、世間では往往給桑を輕んじて、規則的は愚か、手のすいた時くを見込でやる様に致して居ります。併しこれは甚だ宜敷ない手段で、ある時には未だ前に與つた桑葉を喰べ切らない前にやり、それがため殘桑が積み重なり種々の病を起す源因となり。又た或る時には、既にこの前給桑したものも早や喰ひ盡した時分だのに、用事の都合で給桑が手間取り、桑が凋びる、蠶兒はお腹をへらすと云ふ様に、これも亦た色々の害をおこします、だから給桑は屹度規則的におやりになるのが肝心。

兎角蠶と申す虫は健氣な虫では御座いますが、これは甘く飼ひ上げるには中々以て骨の折れる昆虫でして、給桑も朝は早くから、夜は遲くまでせねばならない始末。ですから今玆に規則的給桑を表示致しませう。

	給桑時間 午前	給桑時間 午後	給桑回數	給桑量（蟻量一匁に對する量）
第一齡	四時、七、一〇、	一時、三、五、八、十一、	八	三百匁—三百五十匁
第二齡	四、八、十一、	二、五、八、十一	七	六百匁—七百匁
第三齡（二樣あり）	四、八、十一	二、五、八、十一	七 若くは	二貫三百匁—
	五、九、十二、	三、七、十一	六	二貫四百匁
第四齡	五、九、十二、	三、七、十一、	六	七貫三百匁 八貫五百匁
第五齡	五、一〇	二、六、十一	五	三十二貫匁— 三十六貫匁

給桑回數も給桑量と同樣に蠶兒の齡に由つて左右せなくてはならぬ。一齡二齡中には蠶が小いから回數を増して給桑量を少なくして段々蠶が大きくなるに連れて回數を少なくして桑の量を增すのは前にお話した通りで厶います。けれど氣候の變化、即ち溫度が高く成つて能く乾く時は回數を増し、溫度が低く、濕り氣が多い時には回數を減らすのです。

給桑の分量と回數とは前の表に示した通り……………（これは唯の標準迄の表。）……即ち實際では蠶の成長する度合と、天氣乾濕の如何を見計つて斟酌する必要が厶います。

蠶の食料は大抵定まつたもので、一度に澤山を與つたとて、其れ丈け全々を喰べ盡すもので無く。詰まり其の殘つたもの丈けは不用と成つて、不用桑を使うて經濟上に不利益を來す計りでは無く、其の桑は蠶に踏にじられて冷濕又たは發熱を起して蠶の衛生を害することが誠に激甚厶います。ですから養蠶家は起眠前後は勿論、氣候の乾く時、又たは濕る時等に注意して給桑回數と給桑量とに注意致しまするは肝心な事で厶います。

又た給桑するに致しましても、前回に與つた桑が能い加減に乾てゐるかどうかを考へて、ほんに好い時を見計ッて給桑するのです。さうで無くて前回の桑が未だ蠶座に殘つて居た時に給桑すれば、また乾かない生葉の上に生葉を與るのですから、餘程時間が經過ないと乾かず、そして一度蠶體の下に敷かれた桑は未だ生々しくても、蠶が喰べるものでなく、どうしても他の新らしい桑を欲しがりますから止むなく又た〴〵新に給桑せなくてはならない事になりますそう云ふ工合になると、後々が容易く乾かないで濕氣を起し、蒸熱を來たし、終には蠶の病を釀す樣になりまする。

前に申し上げた通り、一度蠶の身體に布かれて屎なんかに汚れた桑は、積り積つて蒸熱を起す計でなくこれを喰べさしますと軟化病を起します。

（をはり）

嬰兒の保護（承前）

ドクトル　淺田繁太郎

煉乳（コンデンスミルク俗にミルク又はメリキと云ふ）は牛乳に砂糖を加へ煮詰めて濃厚にし、鑵詰となしたるものでありまして、良好の牛乳を得難き場合には、之を以て營養となすことがあります、併し是は大抵バタを取りたる殘渣が多く入れてありますが、肝心の營養素に乏しくて良き營養料とは申されませぬ、亞米利加製の鷲印でも純乳は半分より多くは入れてありませぬ、和製の下等の品であると、大抵純乳は二分位のものであります、其故に是等の品は其而已を以て嬰兒を養ふは宜しくありませぬ、煉乳も亦鑵を開きましてからは腐敗易くありますから、一鑵を永く滋養に供することは出來ませぬ、即ち夏期にありては二日、冬期にありては四日以上に亘るものは宜しくありませぬ、煉乳を以て嬰兒を養ふ者は常に試驗紙青赤二種を供へ置きまして、時々其乳を之に浸し試驗することが必要であります左右して若青色試驗紙が赤色に染まる時は、其乳の變敗した徵候でありまして是を用ゆるは有害であります

煉乳稀釋の比例　煉乳を溶解すには、矢張煮沸水又は麥煎汁を以て左の割合にいたします。

年齢	煉乳一回量	煮沸水或ハ麥煎汁一回分	比例大約
二週以内	四瓦	八十瓦	乳一分水廿分
一ヶ月	五瓦	百瓦	同一分同廿分
二ヶ月	七瓦	百二十瓦	同一分同十八分
三ヶ月	八、五瓦	百四十五瓦	同一分同十七分
四ヶ月	十瓦	百七十瓦	同一分同十七分
五ヶ月	十二瓦	二百瓦	同一分同十六分
六ヶ月	十三瓦	二百瓦	同一分同十六分
七ヶ月	十四瓦	二百十瓦	同一分同十五分
八ヶ月	十六瓦	二百二十瓦	同一分同十四分
九ヶ月	十七瓦	二百二十瓦	同一分同十三分
十ヶ月以後	十八瓦	二百三十瓦	同一分同十三分
滿一年	二十瓦	二百四十瓦	同一分同十二分

ミリンスフード、ミルクフート及オイカシン等も亦嬰兒の營養料として用ゆることがありますけれども總ての點に於て良好生乳には及びませぬ、是等の品は、煉乳即ちコンデンスミルクと混て用ゆるのが宜しくあります、余は常に消化機能惡しくして下痢し易き小兒には、此ミリンスフードと鷲印のコンデンスミルクを等分にして、適當の割合（比例を見よ）に

溶解し用ゆることにいたしております。

乳の粉　之は古來本邦に於て、乳汁の代りとして用ひ、今尚ほ稀に用ゆるものがありますけれども、之は米の粉でありまして、全部殆ど澱粉質にて營養素極めて乏しきしのならず、六ケ月以内の小兒にありましては、之を消化するの機能なく、自由に生乳を得る當今の世には、全く價値なきものであります。

哺乳器の清潔法　人工營養法を以て養育るものは哺乳を終る每に必ず哺乳器のグラス、及ゴム管の内外を煮沸水に浸し置き、次回の哺乳時には再び之を洗ひ、然して後牛乳混合液を入るゝのであります、少許にても牛乳の殘りが附着ておりますと、其れが忽ち變敗て、一種の黴菌を生じ、牽て之が病　原となることがありますから、充分注意をせねばなりませぬ。

喰初　とは乳汁の他に食物を始めて與ふるのを申ます、これは本邦に於ては古より喰物の祝と申して、百日目に膳を揃へ形式的に箸を取らする例があります、尤も是は單に形式のみでありまして、眞に食物を與ふるのではありませぬけれども、世間には隨分早くより種々の固形食物を與へるものがあります、是は甚だよろしくない、因て先づ通常十ケ月頃に至り、門齒(前齒)の生へてから、少許づゝビスケット輕燒せんべい、スープ、粥汁の如きものを與へ、滿一年を過ぎ、門齒(前齒)の外に、小臼齒(奧齒)を發生しまして後、少許づゝ粥、オジヤ、豆腐の柔かく煮たるもの半熟卵、さしみ、煮たる又は燒たる魚及煮て摺潰したる馬齡薯等を與へて宜のであります。

三　身體に就ての注意

啼泣　小兒の啼泣のは、大人の談話と同じことでありまして、自分の欲望を訴へるのであります、譬へば乳が飲みたいとか、臀部が濕つて心持が惡いとか、又は腹が痛いとか、或は苦しいとか云ふ場合であります、其故に哺乳の時間が來て啼けば、空腹と悟り、他の時間なれば、先づ臀部を見て襁褓を換へ

兩者何れにもあらずして、尙烈しく泣くときは、身體何の部にか苦痛があるものと察しねばなりませぬ。

大小便の排泄　嬰兒は一晝夜間に五六回より、七八回の小水及び兩三回の大便を泄すのが通常であります、然して大便は黃色で、卵の半熟の如きものが普通であります、小水の量及び度數少なくして、大便の回數多きか、或は便色靑きか或は便中に白色の小粒(米粒の如きもの)を混ずるか將又咳痰樣の粘液を交ゆるときは、腸胃に疾患のある徴候であります、此塲合には早速醫治を受るのが肝要であります。

便秘　本邦人殊に婦人には間々便秘症のものがあります、此婦人の乳汁にて養ふ小兒は大抵便秘を來し、二日或に三日に一回又甚しきは灌腸を施さゞれば便通のなきものがあります、此塲合には慈母の食物を改良するか、又は其狀體に依りては乳汁を全く廢して、他の乳汁に換へねばなりませぬ。

皮膚の清潔及守護　乳兒は皮膚至つて軟かき爲め細少の原因譬へば蚤蚊等の咬傷、又は他の機械的或は化學的の刺戟等に依つて忽ち皮膚に炎症を起し、又は種々なる發疹を生じ易く、そふして忽ち蔓延して、其れが爲め病氣(腦膜炎又は腎臟炎等)を起し易きものでありますから、充分に注意し、可及的皮膚を清潔にし、若し發疹又は腫起等の顯はれたる塲合には、早速醫治を受ねばなりませぬ。

手指の爪　普通健全なる兒は、手指の爪長く延び、之を以て顏面を搔き切創又は擦過傷等を生じ易きものゆへ、時々注意して爪を切る事が肝要であります。

體重及び體重增加　乳兒は時々體重を秤り其增加の度に注意し若し其增加が不足なるときは營養が不充分なるか又は身體に疾病があるかを想像せねばなりませぬ獨逸國に於ける調査に依りましては初生兒の體量平均三千二百五十瓦(凡そ八百十二匁)でありまして生後一週日間は每日少々宛減量いたしまして一週日以後より漸々增加し一週間每に二百五十瓦(凡そ六十二匁二分)宛增加するといふのが通則であ

ります、我邦に於きましては二三の醫家の調査がありますが平均して初生兒の體量を男兒二千九百瓦(七百二十二匁)女兒二千八百瓦(七百匁)位のものでありまして其增加の度は大抵歐洲のものと大差はありませぬ。

月代　古來本邦に於ては七夜に產毛を削り落す習慣がありますが、初生兒の頭は皮膚は素より骨も柔かくありますから、折角天然に着せてある頭巾を剝ぎ取るのは甚だ危險で一寸物に觸れても直ぐに創傷を起します、產毛を削らねば赤禿になると云ふことは妄信であります產毛のまゝでも日本人の髮は必ず黑くなるは必定であります。

頭巾　小兒の頭巾は外出の時殊に冬期にありましては最も必要でありますけれども平常室內に於ては無用であります。

衣服及おしめ　衣服は糊なき柔かき物を用ひ着物の附紐は成可廣くして柔かなるを付け必ず前の方に於て結ぶ樣にいたさねばなりませぬ而て古來本邦には寒暑に拘らず澤山の衣物を赤兒に着せる慣習がありますが是は宜しくありませぬ大抵大人の倍數位の厚さにて充分であります又襯衣はフランネル或は通常の木綿にてよろしけれども可成柔かき物を用ひ又洗濯の後屋外に於て乾かしたるときは取込の際能改め虫等の附着しおらざる樣注意せねばなりませぬ。

種痘　天然痘の恐るべきことは茲に述ずとも解りきつた事でありますが此恐るべき病氣が種痘を行ふた爲に全く逃れることを得るのは何といふ有難いことでありましよう然るに此豫防法のあるのに之を怠り本物の天然痘に罹込まれ愛兒を失ふたり又は折角滿足な奇麗な愛兒を菊面にしたり或は不具者とならしむるものが間々あるのは何といふ愚なことでありましよう實に嘆かはしき次第であります種痘をする時期は春夏秋冬何時でも差支はありませぬ生後四ケ月乃至六ケ月の間に行ふが最も適當でありますしかし天然痘の流行時にありては尚ほ早く施さねばなりませぬ。

種痘を忌むべき場合は小兒の熱性病、呼吸器病及重き全身の皮膚病等に罹りたる時の外にありませぬ。
再種痘の時期は諸家に依りて色々説がありますが初回に於て最も善く感じたるものは四五年間は行ふに及びませぬ併し初回に一顆或は二顆位發點るばかりなれば二三年を出でずして接種せねばなりませぬ其後は毎四五年目に一回宛行へば充分であります。
齒牙の發生　之は小兒の發育狀態に依り多少の遲速はありますが先づ大抵左の範圍内に於て發生ものであります。

下の前齒眞中	二本	五ケ月乃至九ケ月
上の前齒眞中	二本	八ケ月乃至十五ケ月
上の前齒兩側	二本	九ケ月乃至十五ケ月
下の前齒兩側	二本	十二ケ月乃至十七ケ月
初の奥齒	四本	十二ケ月乃至二十一ケ月
糸切齒	四本	十五ケ月乃至二十五ケ月
他の奥齒	四本	二十三ケ月乃至二十六ケ月

以上は最も早く發生ものと最も遲く生るもの丶範圍を示したものでありまして健康にして發育良きものは出發生早く不健康にして發育鈍きものは遲く發生いたします然而此範圍を越へて遲きものは身體に異狀ありと見て可然ものであります。
初生兒及小兒期に發する疾病　病氣を治療するは素より醫師の任務であるしかし病氣にならざる以前に於て之を豫防することは家人の任であります殊に初生兒期にあつては鎖細なる事が其病氣を起す原因となりますから充分注意して病氣に罹らぬ樣又一と度病氣になりたるものは重症ならぬ内早く適當の所置をいたさねばなりませぬ然而此時期に於て多く發する病氣は左の諸症であります。
初生兒期に發する疾病　痙攣、假死、消化不良症腦膜炎、脚氣、頭部腫瘍、頭部血腫、黄胆、乳房炎、臍部及び臍部より發する諸病（臍部濕爛及臍潰、破傷風、丹毒、膿毒症、臍部海綿腫、臍部脱腸等）及び内部外部の先天性不具等。
小兒期に發する疾病　消化不良症、腦膜炎、呼吸

瘰病、脚氣皮膚病（皮脂腺の浸潤）汗疹、顔部濕疹頭部濕疹、全身濕疹、痒疹、天疱瘡癩瘡及び疥癬等傳染性諸病（痲疹、猩紅熱、チフテリー、疫咳、結核等）其他口腔病耳病等なり。（完）

刺繍（つゞき）

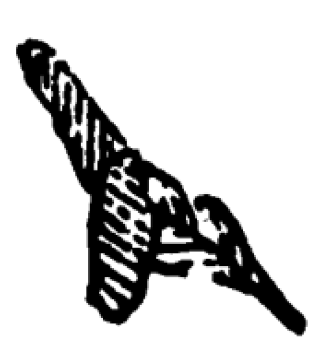
野菊平糸縫ひ方

上村百世子

野菊を縫ひますに、用ひます糸は花は紫色を用ひます、後は前に申ました草色で、葉及び草を縫ひます、此花の縫ひ方は前に申した菊花の縫ひ方と異いません、蕾の縫ひ方を、かゝげて有りませんから一寸申ましやう、縫ひますには、



一圖



二圖



三圖



其かま糸の太さに從て、異りますけれども、凡そかま一本で致します、前に、菊の花瓣を縫ひました如く、向き合ふ様に縫ひます、矢張りメウチを用ひまして、糸の重ならぬやうに、㊀圖に示したる如く縫ひます、小なる葉は桔梗の小なる葉の縫ひ方と異りません、大なる葉も同じで有りますけれども、此の葉は出入りが有りますから、其れに注意致しますればよろしいのです、㊁圖に示したる此の葉は表面の返ッて居るもので有りますから、圖の如く縫ひます、之は裏葉に表が重つて居りますものですから、裏から縫ふて後に表を縫ひ裏を縫ひました草色の

のので、三圖に示したる如く縫ひます、枝は撫子を縫ひましたのと同じですけれども、此菊の枝を固く見ゆる樣に曲り目を能く付けて、根本の方に行くにつれて、太く成る樣に縫ふのです、之も矢張り草色を用ひまして、かまで縫ひましてもよいのですけれども、よりましてもよいので御座います、よッて致しますには、出し合せに致しまして、左よりであまりからく無い樣に致します、草は撫子の葉を縫ひました樣に致しまして、針目の短くならない樣に根本に行くにつれて、細く成る樣に致します、色は草の淡きを用ひます、にほひは黄色二本に草色二本を左よりで甘よりにてさからを縫ひます、蕚の縫ひ方を申上げませんでしたが、之は、大きく畫いで見ますれば三圖に示したる樣に蕾の下に草色のかま糸にて、三本程針を出し、其間に針を出して致します、此の次に縫ひますのは、四君子なので、中で松が手輕いので有りますから、松から申上げます。（つゞく）

料理法の初等

廣田星橋

これは私一個の考へであるから、一般に之を應用するのは、少し偏頗になる嫌ひもあらうが、日本の料理は、どうも茶、懐石趣味から、持來つた方が適當であらうし、また茶人の趣味から發達されたというても過言でなからう、自體美味、惡味と舌に感ずるのは、人々の嗜好にも依り、或はいかな珍膳佳肴でも、再度味へば厭惡を感ずることは、我、人共に同じであるが、家庭料理には、經濟を講じなければならぬ塲合がある、これは正則一通を學んで之に應用せなければならん、で同じ簡單な調理を試みるにも、先正則を踏んで來なければ、自然經濟法も取れぬ理であるから、初等入門として、先一方に茶、懐石趣味の素養を勸めたがよいかと思ふ、そこで此の一定の調理法を茲にお話しして試ませう。

商業的旅行家、軍人、探險家たる能はず、然るに此等は最も良き商賈なりといふもありき。以上の男兒の想像力は未だ多く家庭の生活に思ひ至らざりしが或一男子は曰く、女子にして若し小供を有たんか、諍鬪と泣き喚くことの絕ゆる間なし、蓋し小供は惡性のものなればなり、女子は之を忍ばざるべからずと。而して三百二名の男兒中、婦人たるべく望みしものは僅に二名のみ。其中の一人は詼諧家にて漸く十一歲の幼童なるにも拘らず皮肉の言を擅にせり、曰く予は速に女子たらんを欲す、其の生活容易なればなり、汝にして結婚すれば總て汝の亭主の給料を取りて汝の好むがまゝに之を費し、若し爲すべき業務あれば日傭女を傭ふ、而して亭主の歸宅若し時を失せんか、汝は思ふ存分之を罵り得るなりと。却々大人ぶりたる答辯なるが如此きは黄口兒童中多く類を見ざる所とす。

却說第二の問題たる兒童の最も欽慕する英雄女傑の誰なるやを檢するに、之を聞くもの少しく奇異の感なきにあらじ。即ち女兒の最多數が推服する理想的人物はフロレンス、ナイチンゲール孃とグラッドストーン氏となればなり。而して鶯孃たらんことを望みたるものは殆ど百分の十五を占めしが、其理由はいづれも孃は剛膽にして且つ熱心なる人物なるが故にと云ふに在りし。又具翁に次いで此等小學生徒の最も稱賛せしはヴイクトリヤ女皇にぞある。一女兒は記して曰く、女皇はいと淳良にして氣高き貴女なるが故に妾は女皇の如き婦人たらんことを欲すと。次に男兒の仰望する人物をその人氣の順序によりて排列すれば、サア、レッドヴアス、ブルラー。ロード、キッチナー。サア、シー、ホワイト。バーデン、パウエル。ロード、メスエン。(以上南阿出征將軍)セシル、ローヅ。ロード、ネルソン。グラッドストーン。ロスチヤイルド男爵。ウエリントン。サア、トーマス、リプトン。キップリング。シエークスピーヤ等その主なるものなりしが、サア、トーマス、リプトンが何故に斯く望みを博せしかを

聞くに、氏は快艇及び廛舗に向つて巨多の財貨を投ずるを吝まざるが故なりと。又セシル、ローズを稱賛するもの丶理由に曰く、彼は最近の數年に於て大に英國の爲めに盡し、彼がブーアの地に一會社を起すや、彼等ブーアは彼の力に依りて金鑛を發見せり然るに彼等は今や彼を射殺さんと擬す、我等は之が爲めに戰端を開きたりと。その言ふ所ろ宛然主戰論者の口吻と相肖たり。キップリングたらんことを望みたる一男兒は曰く、予はアブセント、マインデット、ベッガア（同氏の作）の如き好き詩集を著はし以て巨利を博せんと欲すと。一男兒はまたクルーゲルは唯だ座してパイプを燻ゆらし、而して容易に事を斷ずるが故にクルーゲルたらんことを期し、或一少年は又獨逸皇帝は專制の君主にして世界に於て最大の軍隊を有するといふを以て獨逸皇帝たらんことを望み、僕はその總軍隊を南阿に進め以てクルーゲルの眼に物見せ呉れんと意氣込めり。我は寧ろ我自身たらんことを期す、第一我は我以外の或者たる能はざるが故に、第二我は成長後必らず眼醒ましき事業を爲すべきが故にと云へるは十一歳の一男兒なりしが、自恃の精神に富める斯くの如くにして始めて英人の英人たる眞骨頭を見るべし。又中に英傑の世に立つ危險を虞るゝものあり。曰く汝若し國家に於て高位を占め下民を驅使せば、恐らく汝に對して陰謀を企つるもの起らん、故に予は寧ろ凡人たらんを欲すべしと。一少年は曰く、泰平の世に於ては王たらんことを冀ふ、されど戰亂の代に在りては商業的旅行者たるを望むと。思慮愼密なりとはいへ其の心術憎むべきなり。



家庭科學 蠶の飼育法

さなへ生

養蠶は古昔から日本に行はれてゐる、至極利益の多い仕事で、其上興味も多く、婦女子の副業として一番によい事業と思ひます。で私は其の飼養の概畧を玆にお話致ませう。

○收蠶（掃立法）

收蠶とは蠶を收める事で、つまり、種紙の上に孵化つた蠶を、飼育する白紙の上に掃き集めまする方法で、或は掃立法とも申します。掃立法には、種々な方法が厶いまするが、一番よい方は紙掃法と糖掃法

第一、紙掃法

紙掃法をお話し乍ら蟻量を計る事をもつけ加へて申しあげる積り。蟻量とは蠶の重量――孵化した直の蠶は身體一面黑い毛が生えて其形は丁度蟻の樣です蟻蠶と云ひ、蟻蠶の重量を蟻量と申します。――蟻量を計には美濃紙を繼ぎ合して繼ぎ目が乾てから其の目方を秤つて、間違の無い樣に紙の一隅に記して置き、それを疊の上へ擴げ其の上へ蟻蠶の最早や孵化つてゐる種紙を俯向にして、暫く靜に。蟻蠶の動搖が靜つて、稍々油斷してゐる時を見澄し、美濃紙より二三寸高い處で、種紙の裏を羽箒の柄で少し强く二三度、つゞけ樣に打ちますと、蟻は能く落ちます。（これ紙掃法）。

そこで其の蟻を紙ぐるめ秤つて、前の紙の目方を引き去るのです。されば蟻蠶の量が分ります。

世間では紙掃法を非難して、突然種紙の裏から叩いては蟻蠶を驚かして發育に唯ならぬ害を及ぼす事が少なく無いと申します、だけれども僅か種紙の裏を叩く位は、決して左程の大害あるでは無く、叩かなければ却つて害を受ける位。即ち强く叩くのを厭て、初めから弱く叩く時は、蟻蠶は容易に落ちないで、叩けば叩く程抵抗力を增しますからとう／＼羽箒で掃き下ろさなくてはならない始末になりますか

ら自然と蟻蠶の身を傷ける樣な事が出來てきます。それ故初めから強く叩く方が、至極良いのです。

第二、糠掃法

糠掃法は掃き立てる前に、包紙を開て種紙を出し、蟻蠶の上へ直ぐ粟糠か籾糠の細片を撒き其の上へ呼び出し桑とて、細かに刻んだ桑を與り、蟻が糠の上へ這ひ登のを待つてゐて、他の敷紙箔に移して適宜の廣さに擴げるのです。

糠掃の蟻量を秤るのには什麽するかと云へば蟻蠶を包紙と共に量目を秤定て、後よりも一度、蠶を他の箔へ移して、秤り直して、これを前に秤つて置いた量目から引き去るのです。

兎に角蠶の掃立は養蠶中の肝要なことで、掃立法がよくなければ、蠶兒を傷けて弱くし、又た知らずに捨てゝ終ふ事が御座ります、ですから掃立は十分丁寧に、出來る丈け靜にする樣にするのが肝要です。

掃立をすると同時に、何故斯樣に蟻蠶の量目を秤定て置くかは、即ち將來の爲めになるからです。

万一正しく蟻量を秤つて置かない時は、蠶が段々大きくなるに連れ、席を擴げたり、桑を給る等の取扱の上から考へても、又た道具立、桑葉の量、人夫の數等に夫れ〲の準備にも甚激く不便するからで。

養蠶家は掃立を行ふ前に是非とも催青法をやらないといけませぬ。

そして掃立をするにも、一番早く發た蠶と一等遲く孵化た蠶とを、おしげなく捨てねば病蠶が多くなります。

孵化た早ぐの蠶は皮膚が極く柔いから成る丈け丁寧に取扱ないと傷を付ける樣な事が出來てくる。ですから蠶座を廣げる時にも氣を付けて、いとゞ丁寧にお取扱になるがよろしい。

蠶座を擴げる法は蟻蠶の上へ直ぐ籾糠か粟糠を蠶體の隱れる位振りかけまして、其の上に一分位に刻んだ桑を給り、（蟻蠶と同量の桑）二三十分經つて蟻蠶が桑の香を臭で、上へ匍ひ上つて來頃を見許つて、糠ぐるみ蟻蠶を極く靜に、至つて丁寧に攪き交せまし

て、蟻量一匁に付き一坪、又たは一坪半の割合で他の箔の上に擴げるのです。

斯様に蠶座を擴げて後、二三十分間その儘にして置きますれば、蠶は桑を欲しさに籾糠を踏みにじつて上へ上へと匍ひつゝ上つて來ますから、そこで蟻蠶の三四倍の桑を與るのです。前に箔を廣げる時に與つた桑を呼び出し桑と謂ひ、只今の桑を居直り桑と申します。

◎飼育法

蠶を飼ふ法は三通り厶います。

一、清涼育。

二、温暖育。

三、折衷育。

清涼育は、一寸も火力を借りず自然の氣候に任せる飼育法で、温暖育とは取りも直さず火力を借りて飼育法。折衷育は、時々火力を用ひ、時に自然の天候に任せる飼育法です。

そして、茲には、唯温暖育に就てお話致します。

蠶は温度次第で或は早く飼ひ上げ、又たは手間取るのです。だが一番よい温度は通常華氏の七十度前後で、養蠶は至つて温度と關係の深いもので厶いまして、温度の變動が厶いませず、平素、適順の氣候で厶いますれば、養蠶は、ほんの桑を與るのみで外に手數がかゝらず、いとも容易く出來上ります。

併し乍ら養蠶の期節は一年中でも一等不順ですから蠶の發育を妨げ、飼養の上にも少なからぬ害を蒙り氣候が寒い時には蠶の擧動は不活潑となり、食慾は減り、氣力も自然、衰へますから、斯様な時には温度を高めて無難に發育させるのが肝要で厶ります。これ僕が特に温暖育をお話しする譯です。

だが火を使ふに致しましても、唯だ寒い時のみに限つて、平常目的とする温度迄に昇さうとする一點張なれば、それこそ大變、反對に禍を來す素因と成ります。ですから火力を借りるにしても、外氣の温度に從うて宜敷酌斟せぬといけませぬ。今火力を借りる標準を示しませう。

天然温度	火力温度	加用温度
四十度	二十度	六十度
四十五度	十八度	六十三度
五十度	十六度	六十六度
五十五度	十五度	七十度
六十度	十度	同
六十五度	五度	同
七十度	○	同
七十五度	○	七十五度
八十度	○	八十度

火力を借りるにも決して二十度以上に成つてはいけませぬ。萬一二十度以上に成りますと、炭から吐き出す炭酸瓦斯の爲めに、由々敷大害を受けますから。火力の事はこれで終焉として、次は空氣の流通に就てお話し致しませう。飼育中には空氣の流通を佳良するのは肝要な事。何分にも炭やら、蠶やらが炭酸瓦斯を吐き出しますから、これを發散せしめる手立をする必要が厶います。

今蠶が一時間に吐き出す炭酸瓦斯の分量を、表示致しましやう。

四萬頭なれば（蟻量一匁）　四七匁二六四〇〇

一萬頭なれば　一一匁八一六〇〇

千頭なれば　一匁一八一六〇

蠶は斯樣に澤山な炭酸瓦斯を吐き出すのですから、十分空氣を流通せしめる事が肝必です。けれども温度を低くせない樣に其處はお手加減。

一般の養蠶上の注意は、暑い時には空氣の流通を好くし、不潔なる空氣を新鮮なる空氣と交換せしめて、室内の空氣を淸らかにせなくてはいけませぬ。世間が、温で、早や蔟屋もくる頃、稗蒔は青々と延びます時、お天氣が續きますれば、從つて養蠶場も乾きますから、こんな時は床の上を雑巾で拭きますか、床の上に水を撒くのです。して又た濕る時は糠を蠶座に撒り、又たは火を燃て防ぐので。何れ養蠶を行るには乾濕器とて、濕氣を計る道具を使ひますが、この際には乾濕の差は五六度位で厶いますのを良いと

致します。この時火を使ひますには灰を掛けて温度を注意するのが肝要な事です。

蠶は生れた直ぐを蟻蠶と申ますは、前に早やお話したですが、この蟻蠶は、桑をやりつゝ注意しをればずん〳〵大きく成つて、四度舊ひ皮を脫ぎ後繭を作えて『可愛らしいや蠶の昆虫は桑の葉を喰て錦吐く』。てふ俗謠の樣に己が義務を果すのです。

却說、蠶が卵から生れてから、第一番目の皮を脫ぎ終る迄を第一齢と云ひ、其れから二度目の皮を脫ぎ了る迄を第二齢と云ひ、三度目の皮を脫ぎ了る迄を第三齢、四回目の脫皮を終る迄が第四齢、それから大きくなつて上簇(繭を結ぶこと、簇はまぶし、即ち簇に上ること)。する迄を第五齢と申します。



養蠶は何齢でも注意に注意を加えて、暫時も氣を安める時が厶いませんけれど、取り分け五齢中は特別注意せなければならぬ。

蠶は五齢に成ると重もに天然の氣温で育ひますもので非常の冷氣、例へば温度が六十度以下に降らなくては火力を借りないのが一般の方法で厶います。…………

……………兎に角五齢になりますと給桑量も一齢の四五百倍に増へ、從つて桑から發散蒸發する水蒸氣の分量も夥しいから其の室の空氣は一層濕つて、それが爲めに殘桑(喰ひ殘りの桑、)が腐り易く、萬一蠶が喰へば胃の消化を妨げて色々の病を惹起します。

ですから時々焚火をして空氣の鬱滞を防ぎ、除沙（こしたを換える事、即ち蕨桑やら糞なんかを取り捨てる事）を度々して空氣が鬱して蒸熱を起す害を防ぐのが肝要です。

斯様に五齢中は、炭酸瓦斯の量を増し、濕りの度をも増すのですから、成る丈け空氣の新陳代謝を勉めて、蠶の呼吸を苦めない様に注意せないといけぬ。兎に角五齢中に蒸したり、熱を起したりすれば、左の三ケ條に注意するのです。

第一、**空氣の流通をよくする**　五齢の蠶兒の體重は蟻蠶の八千倍に増え、従つて炭酸瓦斯を吐き出すことも澤山ですから、十分空氣を流通せる様に致さないと害があります。

第二、**蠶室と蠶箔を清潔にする**　溫度が上昇れば不潔物の腐る事が一層早く、掃除をせなかつた時には種々の病氣を起す基となります故、蠶室、蠶箔は申す迄もなく、室内の床柱の隅なく良く拭て清潔に致しまして、疾病の源因を防ぐのは一番肝心のことで厶います。

第三、**新鮮の桑を少量づゝ幾度にも與る、**溫度が昇つて乾燥が激しければ、蠶の食慾は盛であるに關らず、桑を澤山與つた時には殘りの桑が腐つてしまふ。だから桑は少しづゝ幾度にも與るのです。

○給　桑

蠶に桑を與るのには蠶を一様に大きくする様心得ることは第一の肝要のことで、常に斯様心得てゐねばならぬ。

桑を給には、溫度の高低、濕氣の多寡、蠶の成長、又たは桑の厚薄に因つて同一では厶いませぬ。

溫度が高く昇つて好く乾く時分には給桑量を増し、又たは給桑回數を多くし、低溫で、濕氣が多い時は給桑量を減らし、又たは給桑回數を少なくするのです。

蠶の成長が遲い時は桑量を少なうして給桑回數を増

し、生長が盛である盛食期の時は、桑量を多くして回數を少なくし、又た桑の厚き時は刻み方に注意すると同時に、桑葉を少くし、薄い時は桑量を殖やすのです。

蠶の起た場合には、薄くて柔い桑を少しづゝ與つて、決して澤山與らぬ樣に心掛け、盛食期には十分喰せて養分を體内に貯へ眠る時の用意にするのですから、盛食期には充分に不足の無い樣に桑を與る必要が厶います。其の代りに催眠前後は少しづゝ與つて宜敷のです。

給桑の方法の善惡に由つて蠶の衞生上、且つは經濟上に關係する事が大きくわりますから、宜敷注意せねといけませぬ。――給桑量を少なくして桑の量を多くする樣な事は、桑の無駄遣が多くなり、蠶の病を招く變となりますから、回數が多くて桑量が少なかつた時には、除沙分箔の手數を除くと共に、蠶の病を招くことが少なう御座います。どうか皆樣、給桑といふ事は養蠶上中々肝心なもので厶いますと思召して。

○規則的の給桑

給桑は斷して規則的によるがよろしい、世間では往往給桑を輕んじて、規則的は愚か、手のすいた時〳〵を見込でやる樣に致して居ります。併しこれは甚だ宜敷ない手段で、ある時には未だ前に與つた桑葉を喰べ切らない前にやり、それがため剩桑が積み重なり種々の病を起す源因となり。又た或る時には、既にこの前給桑したものも早や喰ひ盡した時分だのに、用事の都合で給桑が手間取り、桑が凋びる、蠶兒はお腹をへらすと云ふ樣に、これも亦た色々の害をおこします、だから給桑は屹度規則的におやりになるのが肝心。

兎角蠶と申す虫は健氣な虫では御座いますが、これは甘く飼ひ上げるには中々以て骨の折れる昆虫でして、給桑も朝は早くから、夜は遲くまでせねばならない始末。ですから今茲に規則的給桑を表示致しませう。

齢	給桑時間 午前	給桑時間 午後	給桑回數	給桑量（蟻量一匁に對する量）
第一齢	四時、七、一〇、	一時、三、五、八、十一、	八	三百匁—三百五十匁
第二齢	四、八、十一、	二、五、八、十一	七	六百匁—七百匁
第三齢（二樣あり）	四、八、十一	二、五、八、十一	七 若くは	二貫三百匁—
	五、九、十二、	三、七、十一	六	二貫四百匁
第四齢	五、九、十二、	三、七、十一、	六	七貫三百匁 八貫五百匁
第五齢	五、一〇	二、六、十一	五	三十二貫匁— 三十六貫匁

給桑回數も給桑量と同樣に蠶兒の齢に由つて左右せなくてはならぬ。一齢二齢中には蠶が小いから回數を増して給桑量を少なくして段々蠶が大きくなるに連れて回數を少なくして桑量を増すのは前にお話した通りで厶います。けれど氣候の變化、即ち温度が高く成つて能く乾く時は回數を増し、温度が低く、濕り氣が多い時には回數を減らすのです。

給桑の分量と回數とは前の表に示した通り……（これは唯の標準迄の表。）……即ち實際では蠶の成長する度合と、天氣乾濕の如何を見計つて斟酌する必要が厶います。

蠶の食料は大抵定まつたもので、一度に澤山を與つたとて、其れ丈け全々を喰べ盡すものでは無く。詰まり其の殘つたもの丈けは不用と成つて、不用桑を使うて經濟上に不利益を來す計りでは無く、其の桑は蠶に踏にじられて冷濕又たは發熱を起して蠶の衛生を害することが誠に激甚厶います。ですから養蠶家は起眠前後は勿論、氣候の乾く時、又たは濕る時等に注意して給桑回數と給桑量とに注意致しまするは肝心な事で厶います。

又た給桑するに致ましても、前回に與つた桑が能い加減に乾てゐるかどうかを考へて、ほんに好い時を見計ッて給桑するのです。さうで無くて前回の桑が未だ蠶座に殘つて居た時に給桑すれば、まだ乾かない生葉の上に生葉を與るのですから、餘程時間が經過ないと乾かず、そして一度蠶體の下に敷かれた桑は未だ生々しくても、蠶が喰べるものでなく、どうしても他の新らしい桑を欲しがりますから止むなく又た〲新に給桑せなくてはならない事になりますそう云ふ工合になると、後々が容易く乾かないで濕氣を起し、蒸熱を來たし、終には蠶の病を釀す樣になりまする。

前に申し上げた通り、一度蠶の身體に布かれて屎なんかに汚れた桑は、積り積つて蒸熱を起す計でなくこれを喰べさしますと軟化病を起します。

（をはり）

嬰兒の保護（承前）

ドクトル　淺田繁太郎

煉乳（コンデンスミルク俗にミルク又はメリキと云ふ）は牛乳に砂糖を加へ煮詰めて濃厚にし、鑵詰となしたるものでありまして、良好の牛乳を得難き場合には、之を以て營養となすことがあります、併し是は大抵バタを取りたる殘滓が多く入れてありますが、肝心の營養素に乏しくて良き營養料とは申されませぬ、亞米利加製の鷹印でも純乳は半分より多くは入れてありませぬ、和製の下等の品であると、大抵純乳は二分位のものであります、其故に是等の品は其而已を以て嬰兒を養ふは宜しくありませぬ、煉乳も亦鑵を開きましてからは腐敗易くありますから、一鑵を永く滋養に供することは出來ませぬ、即ち夏期にありては二日、冬期にありては四日以上に亘るものは宜しくありませぬ、煉乳を以て嬰兒を養ふ者は常に試驗紙青赤二種を供へ置きまして、時々其乳を之に浸し試驗することが必要であります左右して若青色試驗紙が赤色に染まる時は、其乳の變敗した徴候でありまして是を用ゆるは有害であります

煉乳稀釋の比例　煉乳を溶解すには、矢張煮沸水又は麥煎汁を以て左の割合にいたします。

年齢	煉乳一回量	煮沸水或へ麥煎汁一回分量	比例大約
二週以内	四瓦	八十瓦	乳一分水廿分
一ヶ月同	五瓦	百瓦	同一分同廿分
二ヶ月同	七瓦	百二十瓦	同一分同十八分
三ヶ月同	八、五瓦	百四十五瓦	同一分同十七分
四ヶ月同	十瓦	百七十瓦	同一分同十七分
五ヶ月同	十二瓦	二百瓦	同一分同十六分
六ヶ月同	十三瓦	二百瓦	同一分同十六分
七ヶ月同	十四瓦	二百十瓦	同一分同十五分
八ヶ月同	十六瓦	二百二十瓦	同一分同十四分
九ヶ月同	十七瓦	二百二十瓦	同一分同十三分
十ヶ月以後	十八瓦	二百三十五瓦	同一分同十三分
満一年	二十瓦	二百四十瓦	同一分同十二分

ミリンスフード、ミルクフート及オイカシン等も亦嬰兒の營養料として用ゆることがありますけれども總ての點に於て良好生乳には及びませぬ、是等の品は、煉乳即ちコンデンスミルクと混て用ゆるのが宜しくあります、余は常に消化機能惡しくして下痢し易き小兒には、此ミリンスフードと鷲印のコンデンスミルクを等分にして、適當の割合（比例を見よ）に

溶解し用ゆることにいたしております。

乳の粉　之は古來本邦に於て、乳汁の代りとして用ひ、今尚ほ稀に用ゆるものがありますけれども、之は米の粉でありまして、全部殆ど澱粉質にて營養素極めて乏しきのならず、六ケ月以内の小兒にありましては、之を消化するの機能なく、自由に生乳を得る當今の世には、全く價値なきものであります。

哺乳器の清潔法　人工營養法を以て養育るものは哺乳を終る每に必ず哺乳器のグラス、及ゴム管の内外を煮沸水に浸し置き、次回の哺乳時には再び之を洗ひ、然して後牛乳混合液を入るゝのであります、少許にても牛乳の殘りが附着ておりますと、其れが忽ち變敗て、一種の黴菌を生じ、牽て之が病原となることがありますから、充分注意をせねばなりませぬ。

喰初　とは乳汁の他に食物を始めて與ふるのを申ます、これは本邦に於ては古より喰物の祝と申して、百日目に膳を拵へ形式的に箸を取らする例があります、尤も是は單に形式のみでありまして、眞に食物を與ふるのではありませぬけれども、世間には隨分早くより種々の固形食物を與へるものがあります、是は甚だよろしくない、因て先づ通常十ケ月頃に至り、門齒（前齒）の生へてから、少許づゝビスケット輕燒せんべい、スープ、粥汁の如きものを與へ、滿一年を過ぎ、門齒（前齒）の外に、小臼齒（奥齒）を發生しまして後、少許づゝ粥、オジヤ、豆腐の柔かく煮たるもの半熟卵、さしみ、煮たる又は燒たる魚及煮て摺潰したる馬鈴薯等を與へて宜のであります。

三　身體に就ての注意

啼泣　小兒の啼泣のは、大人の談話と同じことでありまして、自分の欲望を訴へるのであります、譬へば乳が飲みたいとか、臀部が濕つて心持が惡いとか、又は腹が痛いとか、或は苦しいとか云ふ場合であります、其故に哺乳の時間が來て啼けば、空腹と悟り、他の時間なれば、先づ臀部を見て襁褓を換へ

兩者何れにもあらずして、猶烈しく泣くときは、身體何の部にか苦痛があるものと察しねばなりませぬ。

大小便の排泄　嬰兒は一晝夜間に五六回より、七八回の小水及び兩三回の大便を泄すのが通常であります、然して大便は黃色で、卵の半熟の如きものが普通であります、小水の量及び度數少なくして、大便の回數多きか、或は便色青きか或は便中に白色の小粒(米粒の如きもの)を混ずるか將又咳痰樣の粘液を交ゆるときは、腸胃に疾患のある徵候であります、此場合には早速醫治を受るのが肝要であります。

便秘　本邦人殊に婦人には間々便秘症のものがあります、此婦人の乳汁にて養ふ小兒は大抵便秘を來し、二日或に三日に一回又甚しきは灌腸を施さゞれば便通のなきものがあります、此場合には慈母の食物を改良するか、又は其狀體に依りては乳汁を全く廢して、他の乳汁に換へねばなりませぬ。

皮膚の淸潔及守護　乳兒は皮膚至つて軟かき爲め細少の原因譬へば蚤蚊等の咬傷、又は他の機械的或は化學的の刺戟等に依つて忽ち皮膚に炎症を起し、又は種々なる發疹を生じ易く、そふして忽ち蔓延して、其れが爲め病氣(腦膜炎又は腎臟炎等)を起し易きものでありますから、充分に注意し、可及的皮膚を淸潔にし、若し發疹又は腫起等の顯はれたる場合には、早速醫治を受ねばなりませぬ。

手指の爪　普通健全なる兒は、手指の爪長く延び、之を以て顏面を搔き切創又は擦過傷等を生じ易きものゆへ、時々注意して爪を切る事が肝要であります。

體重及び體重增加　乳兒は時々體重を秤り其增加の度に注意し若し其增加が不足なるときは營養が不充分なるか又は身體に疾病があるかを想像せねばなりませぬ獨逸國に於ける調査に依りましては初生兒の體量平均三千二百五十瓦(凡そ八百十二匁)でありまして生後一週日間は每日少々宛減量いたしまして一週日以後より漸々增加し一週間每に二百五十瓦(凡そ六十二匁二分)宛增加するといふのが通則であ

ります、我邦に於きましては二三の醫家の調査がありますが平均して初生兒の體量を男兒二千九百瓦(七百二十二匁)女兒二千八百瓦(七百匁)位のものでありまして其増加の度は大抵歐洲のものと大差はありませぬ。

月代　古來本邦に於ては七夜に產毛を削り落す習慣がありますが、初生兒の頭は皮膚は素より骨も柔かくありますから、折角天然に着せてある頭巾を剝ぎ取るのは甚だ危險で一寸物に觸れても直ぐに創傷を起します、產毛を削らねば赤𩑛になると云ふことは妄信であります產毛のまゝでも日本人の髮は必ず黑くなるは必定であります。

頭巾　小兒の頭巾は外出の時殊に冬期にありましては最も必要でありますけれども平常室內に於ては無用であります。

衣服及おしめ　衣服は糊なき柔かき物を用ひ着物の附紐は成可廣くして柔かなるを付け必ず前の方に於て結ぶ樣にいたさねばなりませぬ而て古來本邦には寒暑に拘らず澤山の衣物を赤兒に着せる慣習がありますが是は宜しくありませぬ大抵大人の倍數位の厚さにて充分であります又襯衣はフランネル或は通常の木綿にてよろしけれども可成柔かき物を用ひ又洗濯の後屋外に於て乾かしたるときは取込の際能改め虫等の附着しおらざる樣注意せねばなりませぬ。

種痘　天然痘の恐るべきことは茲に述ずとも解りきつた事でありますが此恐るべき病氣が種痘を行ふた爲に全く逃れることを得るのは何といふ有難いことでありましよう然るに此豫防法のあるのに之を怠り本物の天然痘に舞込まれ愛兒を失ふたり又は折角滿足な奇麗な愛兒を菊面にしたり或は不具者とならしむるものが間々あるのは何といふ愚なことでありましよう實に嘆かはしき次第であります種痘をする時期は春夏秋冬何時でも差支はありませぬ生後四ケ月乃至六ケ月の間に行ふが最も適當でありますしかし天然痘の流行時にありては尙ほ早く施さねばなりませぬ。

種痘を忌むべき場合は小兒の熱性病、呼吸器病及重き全身の皮膚病等に罹りたる時の外にありませぬ。再種痘の時期は諸家に依りて色々說がありますが初回に於て最も善く感じたるものは四五年間は行ふに及びませぬ併し初回に一顆或は二顆位發點るばかりなれば二三年を出でずして接種せねばなりませぬ其後は毎四五年目に一回宛行へば充分であります。

齒牙の發生　之は小兒の發育狀態に依り多少の遲速はありますが先づ大抵左の範圍内に於て發生ものであります。

下の前齒眞中	二本	五ヶ月乃至九ヶ月
上の前齒眞中	二本	八ヶ月乃至十五ヶ月
上の前齒兩側	二本	九ヶ月乃至十五ヶ月
下の前齒兩側	二本	十二ヶ月乃至十七ヶ月
初の奥齒	四本	十二ヶ月乃至二十一ヶ月
糸切齒	四本	十五ヶ月乃至二十五ヶ月
他の奥齒	四本	二十三ヶ月乃至二十六ヶ月

以上は最も早く發生ものと最も遲く生るもの丶範圍を示したものでありまして健康にして發育良きものは出發生早く不健康にして發育鈍きものは遲く發生いたします然而此範圍を越へて遲きものは身體に異狀ありと見て可然ものであります。

初生兒及小兒期に發する疾病　病氣を治療するは素より醫師の任務であるしかし病氣にならざる以前に於て之を豫防することは家人の任であります殊に初生兒期にあつては鎖細なる事が其病氣を起す原因となりますから充分注意して病氣に罹らぬ樣又一と度病氣になりたるものは重症ならぬ内早く適當の所置をいたさねばなりませぬ然而此時期に於て多く發する病氣は左の諸症であります。

初生兒期に發する疾病　痙攣、假死、消化不良症腦膜炎、脚氣、頭部腫瘍、頭部血腫、黃胆、乳房炎、臍部及び臍部より發する諸病（臍部濕爛及膿潰、破傷風、丹毒、膿毒症、臍部海綿膿、臍部脫腸等）及び内部外部の先天性不具等。

小兒期に發する疾病　消化不良症、腦膜炎、呼吸

器病、脚氣皮膚病（皮脂腺の浸潤）汗疹、顔部濕疹頭部濕疹、全身濕疹、痒疹、天疱瘡痤瘡及び疥癬等傳染性諸病（痲疹、猩紅熱、チフテリー、頓咳、結核等）其他口腔病、耳病等なり。（完）

刺繡（つゞき）

上村百世子

野菊平糸縫ひ方

野菊を縫ひますに、用ひます糸は花は紫色を用ひます、後は前に申ました草色で、葉及び莖を縫ひます、此花の縫ひ方は前に申した菊花の縫ひ方と異いません、蕾の縫ひ方を、かゝげて有りませんから一寸申ましやう、縫ひますには、

一圖



二圖



三圖





其かま糸の太さに從つて、異りますけれども、凡そかま一本で致します、前に、菊の花瓣を縫ひました如く、向き合ふ樣に縫ひます、矢張りメウチを用ひまして、糸の重ならぬやうに、㈠、圖に示したる如く縫ひます、小なる葉は桔梗の小なる葉の縫ひ方と異りません、大なる葉も同じで有りますけれども、此の葉は出入りが有りますから、其れに注意致しますればよろしいのです、㈢圖に示したる此の葉は表面の返ッて居るもので有りますから、圖の如く縫ひます、之は裏葉に表が重つて居りますものですから、裏から縫ふて後に表を縫ひ裏を縫ひました草色の

ので、三圖に示したる如く縫ひます、枝は撫子を縫ひましたのと同じですけれども、此菊の枝を固く見ゆる樣に曲り目を能く付けて、根本の方に行くにつれて、太く成る樣に縫ふのです、之も矢張り草色を用ひまして、かまで縫ひましてもよいのですけれども、よりましてもよいので御座います、よッて致しますには、出し合せに致しまして、左よりであまりからく無い樣に致します、草は撫子の葉を縫ひました樣に致しまして、針目の短くならない樣に根本に行くにつれて、細く成る樣に致します、色は草の淡さを用ひます、にほひは黄色二本に草色二本を左よりで甘よりにてさからを縫ひます、萼の縫ひ方を申上げませんでしたが、之は、大きく畫いで見ますれば三圖に示したる樣に蕾の下に草色のかま糸にて、三本程針を出し、其間に針を出して致します、此の次に縫ひますのは、四君子なので、中で松が手輕いので有りますから、松から申上げます。　（つゞく）

料理法の初等

廣田星橋

これは私一個の考へであるから、一般に之を應用するのは、少し偏頗になる嫌ひもあらうが、日本の料理は、どうも茶、懷石趣味から、持來つた方が適當であらうし、また茶人の趣味から發達されたといふても誣言でなからう、自體美味、惡味と舌に感ずるのは、人々の嗜好にも依り、或はいかな珍膳佳肴でも、再度味へば厭惡を感ずることは、我、人共に同じであるが、家庭料理には、經濟を講じなければならぬ塲合がある、これは正則一通を學んで之に應用せなければならん、で同じ簡單な調理を試みるにも、先正則を踏んで來なければ、自然經濟法も取れぬ理であるから、初等入門として、先一方に茶、懷石趣味の素養を勸めたがよいかと思ふ、そこで此の一定の調理法を茲にお話しして試ませう。

○潮煮（鯛脊切、同卸し身、鱸卸し身、吸口入用。）

鯛を脊から切つて一鹽にする、即ザツト鹽を撒つてから肉のしまつた時水でよく洗つて籠へ移し、湯を一遍サアト注け、手早く煮立た醬汁の中へ入れる、此湯を注けるが法で、湯の爲に醬汁は濁らない、又水から魚を入れて煮立るが正則のやうであるが、多く煮る時にはさうもならんから斯うするのである、炭火は成丈強くせなければ魚が入ると、湯の熱度は減じる故、之に注意をするが肝要である、もと〳〵此の潮煮は船中で鯛を釣つて潮水を掬んで調理するといふ趣味である、又舊時は鯛に鹽を撒つてから、洗つて直に水へ入れ、鹽梅して煮立るに、二遍程にして水が泡立つて白水のやうになると、火から下し、冷却るのを待つて居ると、其湯の濁りは澄んで來る、又鯛の味も出る、尤も下す時泡を掬ひ捨るのではわるが、斯うするもよい、白魚のスマシ、鱸のスマシ抔皆此法に依つてよい、潮煮は少し醬油を落して、ワザト濁りを見せるが舊式であるが、それは潮流の色を見せるの意であるが、「澄し」も「潮煮」も、一樣の法であるが、只澄むと濁るとの二樣で區別するので、此鹽の加減が緊要のことゝする、都て魚は煮過したのはよくないまた半熟は倘惡ひのであるから注意すべきことである、鹽を撒るのは白魚の他、何魚にも利用すべきものとする。

○定家煮（鯛）

これは俗に云ふ潮煮であるが、此調理は新牛蒡を其まゝ大きく短冊形二三寸斗りに切り、椀の中へ生にて入れ、其上へ鯛を盛る、牛蒡一切れ一文字のやうになつて「一字の題」といふ趣向であるさうなが、何人の考案か知らざれども右はさういふものにはあらざるべし、先づ大きな鯛をおろし、好き程に切り、鹽を強く撒つて肉の堅くなるまで置き、水で洗ひ酒を澤山入れて、よく煮て色付けば「煎附」となる故色のつかぬやうに煮るのである、「吸口」は山葵を用ふ。

○鱈の澄し

鰹節の煮汁、昆布煮汁を平均に混交るを好しとす、すべて「澄し」に色の付くは嫌ふものにて、少し醤油を落して鹽梅するも随意である、鯛、白魚抔を身にすれば最「澄し」に味を加減し、精製すべきことで、舊時は汁といへば昆布だし、鰹節だしを平均に鹽梅したると、之を煮拔きて三分一に能く澄したるものとを合せて、煮汁を作つたのである。

中身に配するものは、半ペン、淡雪豆腐、しんじよ、松前昆布、青昆布、せり、みつ葉、つくし、かざ、鶴藻、海菜、ワカメ、漬蕨、ホンダハラ、藥味は柚子、胡椒の粉（鰹の節、は不用）茗荷等

○山かけ（雉子、セリ、木の子の類）

これは「澄し」に煮汁を入れずして鹽梅するのである山陰の中納言政朝卿、自ら野遊に臨み、遊興の節、芹を摘んで澤水を掬ひ、雉子を吸物の身として即席の調理をなした故、此名があるので、雉子の山かけは、政朝卿が六角堂へ詣で、其歸途雉子を献じた者がある故、卿は手づから調理して共に一酌を催し、之を下物としたとのことで、此時澤邊の芹を摘んで配したが、鹽のみでは舌味に感ぜぬと工夫を凝したのである、實に將來奇代の美味と賞したといふ一話が遺つて居る。

○皮煎り、（雁、鴨、バン其他鳥肉を配する品は木の子類、竹の子、麩のせん、牛蒡、吸口は作意に任す）、

これは鳥の油皮を纎に切り、小鍋に入れて炭火にかけ、其油でカラ／＼となるまで煮るのである、これを「澄し」の鹽梅した中へ鳥肉と一所に入れ、煮立るうち此皮が浮たのを時機として鹽梅し椀へ盛るのである。

○煎鳥（雁、鴨、其他鳥類、配品は長芋、長菜、セリ、三ツ葉、松茸、初茸、松露、榎茸、吸口は柚皮、五分切り葱）、

これは煎り酒といつて鹽と酒と砂糖を加減し醤油を加へた汁に鳥肉を大ぶりに切り、之を入れてさらさ

らと煮て器物に盛るのである、すべて鳥肉はざつと煮るがよい、煮過れば強くなりて味悪し、舊時は蒜を入れて、口授の秘法あれど今は傳はらぬのである。

○じふ（雁、鴨、其他鳥類、吸口にワサビを必用とす）

都て鹽梅は煎鳥と同じで只汁の溜らぬやうに煮る、煎鳥は汁を溜めるとの相違がある、でこれは配品を要せぬ。

○せんば（雁、鴨、鶴、鴫、バン、配品は木の子類、冬大根、大蕪、慈姑、栗、せり、三つ葉、蕗、竹の子等）

これは鯛の潮煮のやうに酒なぞは入れぬがよい、鳥肉は大きな目に扁く切り、「澄し」を鹽梅して鳥肉を入れる、此調理は船中で飛ぶ鳥を射て取敢ず調味するといふ趣意である、先づ潮煮の工合に鹽梅し、精良の煮汁でなければ美味は感ずるやうには出來ぬ、中古は此字を「船場」と書たが鄙劣であるから「煮羽」と改めた。

○鳥濃漿（鳥肉は何品も利用してよい）

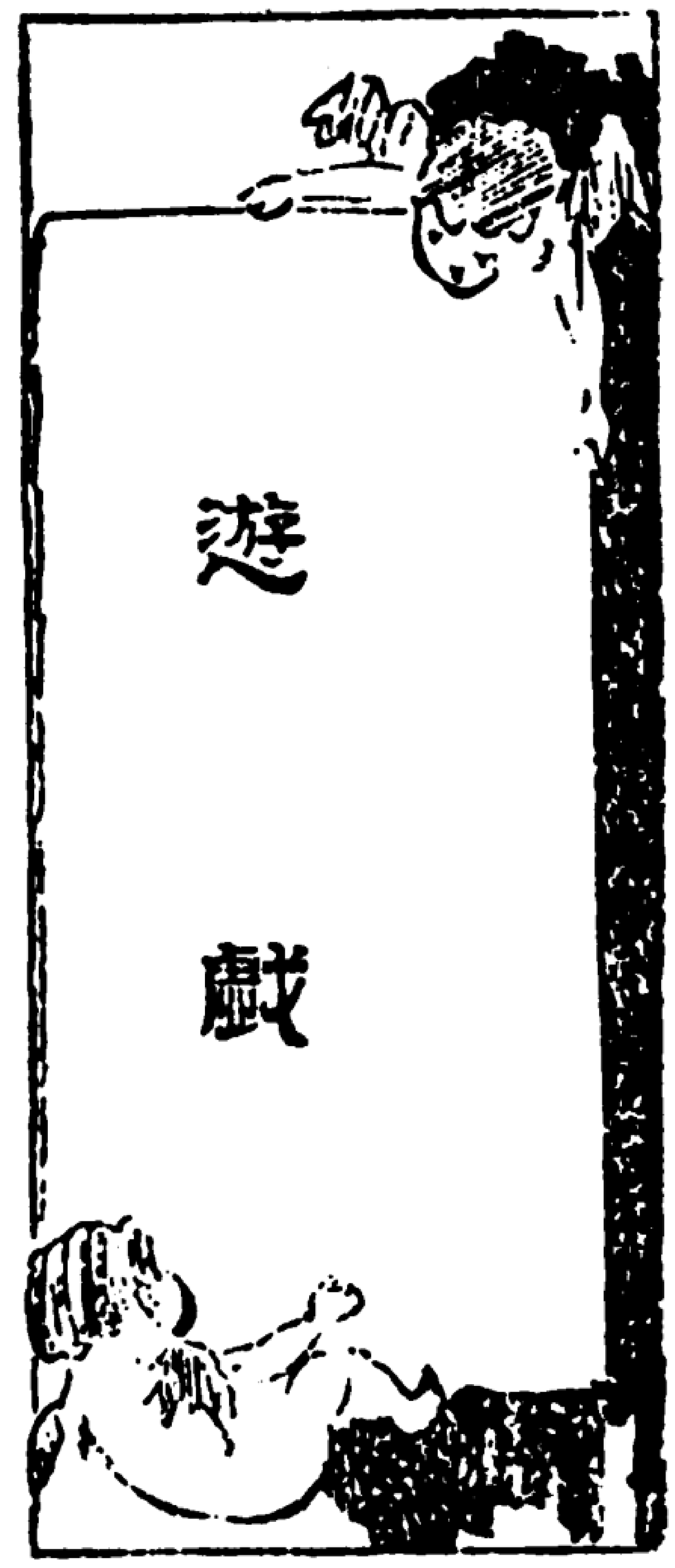
これは前の煮汁の法に依り、豆腐へ鳥肉の摺り身をどろ〱とかけて出すのである、山葵を摺りて「口」に添へる。

○鳥味噌（同前）

鳥肉の皮を剝ぎ最細かにたゝき、其皮は鍋で煎り、脂を取りて其中へたゝいた肉を入れ、酒をさし好き程に煮て、其肉を等分より少なく堅ねりの味噌を加へ能く煮る、これは柚味噌を作る加減にねり合せるが肝要である、又一法として前法の通りに煮て、中白の味噌と鳥肉を等分にし、或は味噌を稍少く加減にしてもよい、それでこれを幾個にも分けて燒味噌にして板を以て能く刻み、鳥肉の中へ入れて、カラカラと煎る、酒は少ひ加減がよい。

○鳥餅（雁、鴨、小鴨に限る）

これは「煎鳥」の調理と同法で、鳥肉を好き程に煮立て他の器へ肉ばかりを拾ひ揚げ其汁へ餅を入れ「雜煮」の樣に製へそれから鳥肉を加へるのである（完）



婦人の遊戯と山野

綾井武夫氏談

一 野邊の風色に心を奪はる

追々暖かく爲つて參りますと、皆さん方の御遊戯と申す者が、盛大に爲つて參ります、年の暮れには色々の俗事に驅り廻はされ、學校の御休み中には、碌碌に御遊びに爲ることが出來なかつた、又た御正月に爲つても僅かに三四回、御友達の家にて歌骨牌の御遊び位で、此年の春は案外遊ぶことの出來なかつた春だと、御不平になる御連中も、追々摘み草の時期に移つて參りまして、野邊の風光に心を奪はる

る樣に爲るのであります、野邊の風光に心を奪はるるのは、皆さん方の御身體の御爲めになる、至極結構の時節で、寒い〳〵と申して縮けて炬燵の中に往生して、御座るから見まする と、御精神の爲めにも御身體の爲めにも、此上もなき仕合せの時期であります、最う一ヶ月程經過ますと、此の時期が參ります。

二 活潑の御成育を遂ぐるには

併しながら、徒に野邊の風光に醉ふのみでは、文人臭くつて、詩人ぶつて歌人ぶつて、何も面白味と申すものがありませぬ、此の臭ひのとぶるのとは、大に嫌だと申す御婦人が、澤山出來ませんと不可ないのでありますは勿論で御座います、殿方に限りません、山を見海を見乃至草木を見、田舍の風光を見ますと、色々な感想が浮びまして、マー一句遣らふかと申す樣に爲つて參ります、況や畫や寫眞の御嗜みある御方は、スケッチの詮索などに忙はしく爲つて參ります、之れは決して御惡いと申すのでは御座い

ません、狭隘なる一小天地に御生活爲るものに比しますれば、甚だ結構のことではありますが、野邊の遊戯の必要と申す者は、僅かに其風光のみを貪ぼりて、滿足すべきものではありません、野邊の逍遙に於て、最も深く多く趣味を感ずると申すことが、甚だ大切にして、又た甚だ必要なる條件であります、活潑の御成育を遂ぐるには、甚だ必要であります、僅かに山紫水明の風光のみでありますと、御屋敷の御廣い御宅にても、又た御別莊にても、充分でありますが、但だ活潑の御成育を遂ぐるには、能く筋骨を勞し、飽くことなく、能く趣味を感じて、快樂を覺ゆるを要す、之には必らず之れと申す一定の目的か、一定の標的がなくてはなりませぬ、終日同一の風光を撮影し、又は之を模寫したればとて、別に之れと申す程に、深き快味を感ずるものではありませぬ。

三　何の面白味を感ずるでありませうか

即ち諸君の問題となる處のものであります、同じ野邊の逍遙に於きましても、必す大小の目的と申す者が無くては爲りません、花見遊山にも目的あり、摘み草にも目的あり、然れども其趣味と申すものが、甚だ單調でありますから、其れこそ互に飽きが出て參ります、最ふ寒くなつたと云ふては、あれ大變だ雲が出た、空模樣が惡しくなつたと云ふては、歸路を急ぐ樣に爲つて參りますから、充分に運動して、充分に筋骨を勞し、充分に身體の成育發達を欲することが、出來なく爲つて參ります、杉田、蒲田の梅も日ならずして、多數の老若男女の群集の準備を整へますが、僅かに此の梅を見物したと申します程りでは、何の面白味を感ずるでありませうか、私には一向心に落ちないのであります、無遠慮に是を評しますれば、或は物數奇と申すのでは無からふかと思はれます、消閑の要具と致しましては、如何にも理由があります。

四　毎年の實例で御座います

內外に御多忙を極められて居る、今日の御婦人とし

て、又た二十世紀の御婦人としては、如何にも呑氣過ぎはすまいかと思はれます、斯かる物數奇のことを、學び得べき御暇が、多忙なる今日の御婦人に、爭で能く有得べきであらふかと疑がはれます、英雄の胸中閑日月ありではありますが、斯樣に日本にも事實上の英雄が、澤山あるでありませうかと疑はしい事で有升、之れは必らず觀梅を御急ぎになる御婦人に、御尋ね致さねばならぬことであります、隨分梅見の時節、櫻見の時節になりますと、算へ得べからざるまでに、多數なる御令閨、御令孃乃至女學生の御方が、いろんな男の間を排しては御通行に爲つて居るのを、拜見致しまするのは、毎年の實例で御座います、鳥啼て花歌ふ、眞に之れ天下泰平の象ではありますが、一面から觀察致しますると、餘り褒めたことでもなからうかと思はれます。

五　必ず一定の目的なかる可らず

私の了見は、聊か窮屈かは存じませぬが、今日の御婦人、所謂二十世紀の御婦人と致しましては、必らず御身體を充分强壯にし、又た筋骨を充分逞しく致しますことが、甚だ必要なる急務では無らふかと思つて居ります、果して然りと致しますれば、之を行ふ方法として、必らず一定の目的が無くてはなりません而して野邊の逍遙にも、必らず此の目的を應用し、良妻として、又た賢母として、世の中に御立に爲るにも、必らず此の目的を應用し、此に初めて立派なる一個の御婦人たるの責任を、盡し得たと申すのであります、生花、茶、琴、三味線の如き御稽古が、上流の階級に流行し初めて、我邦の婦人は上下一般に、體育の發達を妨げたるの事實は著しいことであります、一體我邦の婦人の嗜好と申す者が、芝居見物とか花見遊山とか申すもの丶以上に、上つて居ないと云ふことが、甚だ殘念でならぬこと丶考へます。

六　何れも一長一短一得一失

婦人の御身體を强壯にし、又た其筋骨を逞しく致しまするには、種々の方法がありまして、決して一二

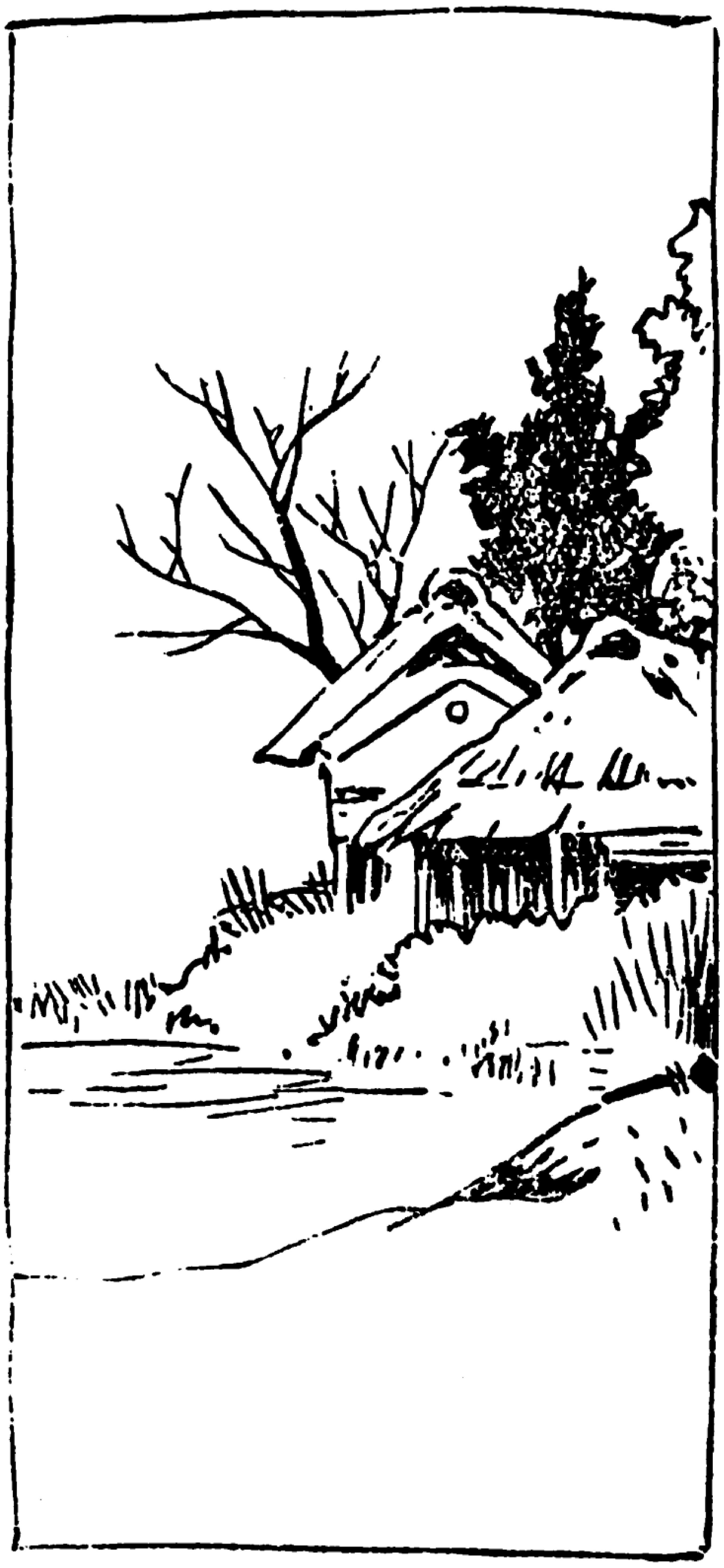
のものではありませぬが、何れも一長一短一得一失と申して、其長所と、其得點のみで專用して居るものは、甚だ少いのであります、先づ普通の運動としては、自轉車の如きあり、乘馬の如きあり、ベースボールの如きあり、ボートレースの如きあり、一通の遊戯運動としては、備はつて居る樣でありますが、仔細に之を講究致しますと、其競爭の範圍、其快樂の範圍と申す者が、甚だ狹少にして、固定して居りますから、變幻の奇出沒の妙と申す趣味は甚だ乏しいのであります、が斯かる遊戯は場合によりては、種々の結果に伴ふ危險を免れないことがありますから、御婦人の遊戯としては、面白味のないのみでなくて、寧ろ不適當のものである、と申さねばなりませぬ、然らばどうしたら好いかと申すと。

七　婦人體育の新方面

でありまして、身體を强壯にし、筋骨を逞しくするには、如何なるものを選べば可なるかと云ふ問題が起ります、則ち婦人の銃獵と申すことであります、即ち銃獵は、眞に婦人體育の新方面であります、婦人の銃獵は、未だ我邦に多く其例を見ないのでありますから、今後の婦人體育問題として、必らず講究を費さねばならぬ處の、一個の新問題であります、此の問題を解決する爲めには、少くも婦人銃獵の何ものたるかを知らねばなりません、自轉車、騎馬、ベースボール、ボートレースは婦人の遊戯として、危險であるといふたことのある、私が斯申しましたなら、婦人の銃獵も甚だ危險である、銃と云ふものは、一體人を殺すに用ゆるもので、殺人の要具とも申すべきものである、婦人方面の最も忌避する戰爭の要具である、其器具に於てすら既に然り、況や之が使用を婦人に奬勵すると云ふことは、大なる間違ひであると云ふ、攻擊が起るのであります、之れか爲多少の議論が、婦人教育家の間に起るでありませう、私どもが熱心に銃獵の趣味を論ずるのも、之か爲であります。

八　危險と云ふ點より論じますれば

危險と云へば危險ではありますが、其は必らず其人の用意如何にあるのであります、人としては其何事たるに關はらず、豫め其危險を豫防すべき、愼重の用意がなくてはなりませぬ、白痴の人はいざ知らず普通の精神と腦力とを有するの人に於ては、必ず自然に危險を豫防し得べき一種の注意力を有して居るのであります、之を一概に危險と云ふ點より論じますれば、成程殺人の要具を、控へて居るには違ひありませぬが、事實は案外に過失の少いものであります、私などは男の側で、而かも最も亂暴なる射手の側でありますが、其れですら十ヶ年の久しき今日まで、未だ曾つて過失の爲めに自他の殺傷に遭遇したことはありませぬ、即ち平生の心得方一ッに據るとであります。



九　田圃の傍を御逍遥になれば

一通り銃獵の趣味を解することが出來ますが實際之を試みますと、相手が動物で御座いますから、却々面白味があります、强ひて深林に分け入りて、猛獸虎狼の類と鬪ふのが、銃獵の目的ではありません、此所には御婦人に適當して居る一番手近い例を申し上げます、田鴫、鶉、頰白、丁馬の如き小鳥は、何れの地にも澤山蕃殖して居りますから、日曜日を初

め、精神の御疲勞を覺へました時などには、一寸手頃の銃を提げ、郊外に出で、田圃の傍らを御逍遙になれば、必ず數群の飛鳥に遭遇致します、即ち之を驅り之を射つ、或は進み或は靜まりて、或は成功し、或は失敗するのであります、此の時は如何なる霜の朝、如何なる雪の日にても、毫も寒さと云ふことを感せぬのであります、雪又は雨の日などには、銃獵と申すことが、非常の趣味を感じ、非常に壯快を覺ゆるので、自然に體の運動を均調し、其四肢は健康となり、其精神は活潑と爲るのであります

一〇　殊に霞立つ春の日に於て

又た其上に獲物を、一羽にても澤山に射ようと致しますれば、御無性にては、目的を達することが出來ませぬから、自然の事情と、自然の必要とは、知らず知らず其人を克己に誘導して、幾多の困難に打勝つ處の素養をも、造り出すことが出來ます、殊に霞み立つ春の日に於て『立派な晴天で而かも外氣溫暖なる日』は野邊の風光を愛でつゝ、銃を肩にして、田圃の間を逍遙し、飛鳥を驅るなどは、實に筆紙に盡し得べからざる程に、趣味と快樂とを併せ有して居ります、御承知の通り銃獵には、獲物と云ふ目的があります、而して始終此の獲物に對抗して、運動の方針を定むるのでありますから、其作戰計畫と云ふものが、甚だ多くの趣味を帶びて居るのであります、即ち其巧拙が、常に獲物の多寡に關して參りますから、行樂の傍らに、種々の學問をも爲し、又た種々の智識をも、研磨することが出來ます。又

一一　行樂の傍ら幾多の智識を養ふ

ことも出來ます殊に諸君が良妻として、賢母として其夫に仕へ、其子女を教育すると云ふ、大任を御荷ひになり、敢て之を空しく爲さゝるには、必ず第一に身體の故障を少くして、健康を維持し、第二に精神を活潑、壯快ならしめねばならぬのであります、狹隘なる天地の遊戯、即ち御座敷と、臺所の外には身を容るゝ餘地のない樣に御考に爲つて居る、今日の御婦人は、宜しく此の二點に御着目あらんことを

希望するのであります、婦人銃獵の目的は、強ちに銃器を要して、獲物を射撃するの謂ひにあらずして、別に深い目的を併有して居ります、一例を擧ぐれば地理を研究し、動植物を研究し、山野を研究し沼澤を研究し、行樂の傍ら、幾多の智識を養ひ、清潔なる空氣を呼吸し。高潔なる志想を涵養する者は蓋し銃獵の特有に定つて居ります。

一二　博士キヤクデンポカーダス氏の所論

婦人の銃獵は、阿米利加よりも、却つて獨逸の方が盛であります、博士キヤクデンポカーダス氏は、曾て銃獵の趣味を論じ『銃獵は一體に男子よりも、婦人の方面に於て多く其趣味を感じ、又た婦人よりも兒童の方面に於て、更に一層深き趣味を感ずるものなり』と言ふて森林と婦人との關係を論じ、又た兒童と森林との關係を論じたることがあります。

一三　敢て貴婦人諸君に望む

獨逸と申しまする國は、御承知の通り非常に森林を尊重する國柄でありまして、獨逸の今日の文明は、森林より出でたと申して居る位であります、森林なる哉、森林なる哉、眞に森林は文明の母であります、支那にても名山は偉人を生ずと申して居ります森林と申すものが、曾て幾多の偉人傑士を産みたる實例は、內外甚だ之に富みて居ります、即ち斯の如く人物自然の養成に必要を有して居る森林を味はんとするには、必らず銃獵の如き、動機を藉りて、之に接昵するのが一番早道であります。

然れども私は、今日の御婦人方に向つて、足必ずアルプス山上をお踏みなさいとは申しませぬ、又た富士山の登山を企つることをも御すゝめ致しませぬけれど少くも登山は壯遊なりと云ふだけは、確かに御婦人の御記憶を離れぬ樣に、願はしいのであります。

私が今日の御婦人に……………而かも三味線、琴、生花、茶の湯などに御熱心になる御婦人に向つて、御座敷籠城の甚だ非なることを說き、併せて野外遊戯

として、有らゆる遊戯の中より、特に銃獵の一つを選びたるものは、全く博士キヤクデンボカーダス氏の所言を、信じたる結果のみにはあらずして、私が十數年間に於ける銃獵の實驗に鑑み、銃獵其物が多く高貴なる婦人の方面、即ち教育あり、財産あり、而かも常に煩雜なる家政を料理する、御婦人及び始終文學技藝に、御熱心になる處の御婦人に向つて、多くの趣味を與ふる所の、遊戯であると云ふことを申上ぐるのであります、殊に兒童を、御教育になる所の御婦人が、兒童の趣味を御研究になる材料として、必らず御同意を願ひたいのであります、銃獵の方法は、獵器、獵具、獵裝、獵犬、獵地等は少しく間暇を求めて、別に御話を致します、但だ一言御注意を願つて置きたいことは、婦人の銃獵と申しますれば、少しく大袈裟になりますから……婦人と山野の關係位にして置て貰ひたいものであります。

（をはり）

西洋遊戯法

喜内生

旅行遊戯法

滊車列車内の遊戯

紅塵萬丈の都會を後にして、山野河海の光景送迎に暇なき有様は、如何にも心を樂しまする種ではありますが、長時間の旅程は倦怠を生ぜしめ易く、まして少年少女達は退屈し易いものでありますから、西洋諸國に於て專ら年少者間に行はるゝ列車内遊戯中、最も興味多きものを撰みまして、徒然を慰むる材料に供したい譯であります。

（一）鐵道點取（RailWayWhist）

二人又は二人以上の者、車内に於て左右兩側二組に別れ、各自車窓より目擊したる事柄に就き得點を爭ふものにして、遊戯を始むる前に豫め某驛より某驛

までと區域を定め、且つ採點規則を設くるを必要とす、例へば次の如きものを採點規則とす、

得點數に加ふべきもの

寺院	三點
社殿	三點
森	二點
池	四點
鐵	三點
小丘	二點
案山子	二點
水車	五點
名勝遊覧案內廣告	五點
旅館廣告	五點
賣藥廣告	四點
大人	二點
子供	一點
犬	一點

得點數より減ずべきもの

煙草廣告	三點
酒類廣告	四點
火葬場	五點
煙突	三點
馬	二點
荷車	三點
牛	二點
開かれたる門	三點
閉さしたる門	三點

列車の勝負を決すべき驛は到着したる時、兩組各自に得點數を合算し、點數多き方を勝ちとす、時としては普通多く見請けざる或物（例へば、チョン髷、盲人、跛者、白馬の如き）を豫め特定なしおき、指定の驛に到らずとも、之を認めたる組を、其時までの得點數の如何に拘はらず、直ちに勝利者と見做す條件を設くることあり。

（三）目撃競爭 (Railway COmPetition s.)

遊戯者は車內左右兩側に別れて座を占め、豫め或事物を特定なしおき、各自の車窓より此物を多く認めたる方を勝ちとす、例へば、牛馬、牛追ふ人、馬に乘る人、自轉車乘等の如し、而して前項の遊戯と同じく、豫め某々兩驛間と、勝負の區域を定めおくこと必要なり、今ま假りに右側の組は馬三十頭を目撃

し、左側の組は二十八頭を目撃したりとせば、右側の組を勝利者とす。

（三）觀察競爭 (Sta tion odservation.)

列車が驛に停車せる時、遊戯者は各自車窓より可及的多くの事物を看取し、列車の再び進行を始むる時、各自に筆を執て、先きに看取して記憶に存する事物を列記し、紙片の上に其の表を作る、而して凡ての遊戯者の表を檢査したる上、最も多くの事物を擧げたる者を以て勝利者となす。

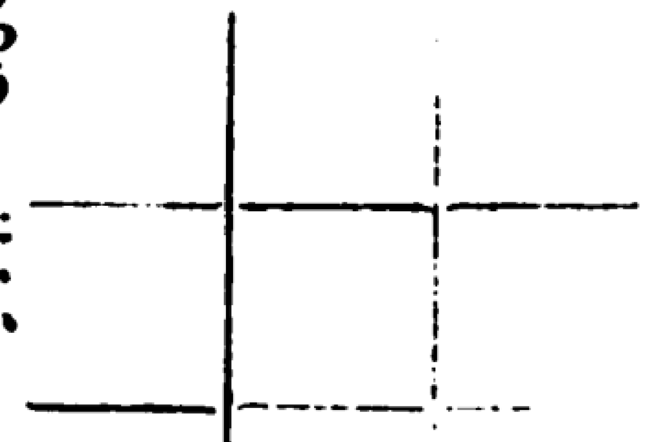
（四）時計遊戯 (Cameswith watch.)

此の遊戯は懷中時計を利用して、之を行ふものにして、當今は何づれの列車も皆な車内に鐵道沿路地圖を掲げ、之に各停車場を詳記しあれば、遊戯者は此の地圖に依て各驛間の距離を推定し、更に此の距離より打算して、進行中の列車が次の驛に到着すべき時刻を推測するにあり、而して推測時刻をして實際の到着時刻に精確に適中せしむることは中々の難事なれば、最も之に近く推測をなしたる者を以て勝利者となす、蓋し勝利者は榮譽の記號として次驛の勝負決定に到るまで時計を保持するものとす。

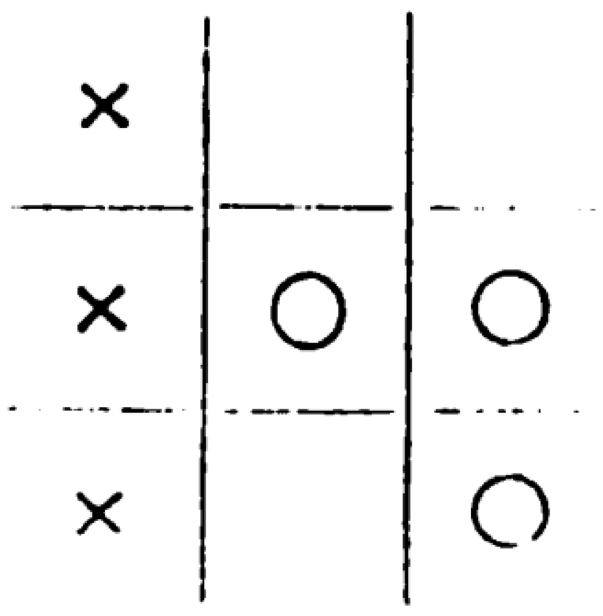
同じく時計を利用して、鐵道線路に沿ふて立てる一哩四分の一標に據りて行ふ二種の遊戯あり、一は列車が一の標を過ぎて次の標に到達する時刻を推測し他は列車進行の速力を推算するものにして、一の標より次の標に達する時間の長さを推算す、而して兩戯共必ず精確の適中を期せず、最も近く推測したる者を以て勝ちとすること前に同じ。

（五）三つ併べ (Noughts andcrosses.)

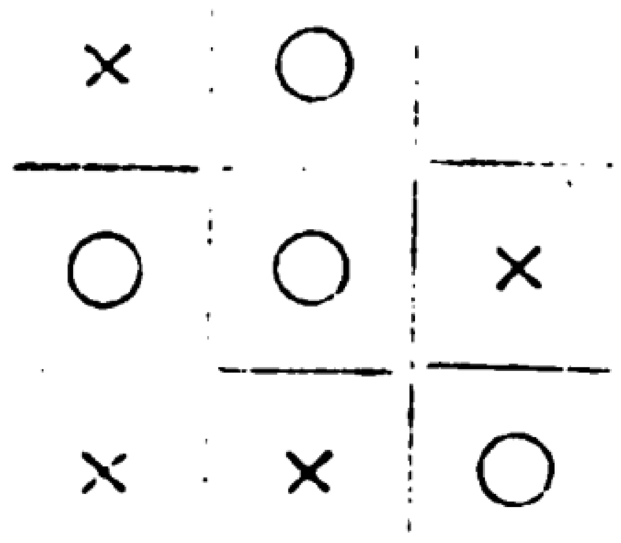
簡單なる五目併べの如きものにして、二人にて之を行ふ、先づ持ち合はせの紙に、四線を以て圖の如く九個に平方形を劃し、次に適宜に一人をノート（則ち○印）一人をクロス（即ち×印）と定め、先手の者九個の平方形中隨意に一個の中に自個の符號を記す、次に敵手は之に應じて、相手の目的を防げて自己



の勝利を謀りつゝ、殘餘八個の平方形中隨意に一個の中に自己の符號を記す、順次此の如くなして、終に三個の同一符號の、縱橫、對角の如何を問はず、一直線に併びたる方を勝ちとす。次の圖は○先手にて×の勝なり、



この圖は○先手にて勝負なしなり



（六） 英佛戰鬪 (French and English.)

此の遊戲を行ふには紙一枚、鉛筆一本にて事足れり先づ適宜に一人を英軍、一人を佛軍と定め、紙面の半分づゝを各自の領分とし、領內の所には鉛筆を以て數多の點を印し、此の點は幾個にても隨意にして制限なしと雖も、双方同數ならざる可からず、次に各次領分の一隅に一個の大砲を畫く（圖の巧拙は問ふ所にあらず、之に擬するまでにして、只だ大砲と假定するを得ば可なり）、最後に交戰の回數を定めたる上愈々勝負を始む、先番の者鉛筆を執て其の尖端を自領の大砲の口に置き、眼を閉ぢ敵の領分目蒐けて線を引張る、蓋し其目的は先きに記るされたる敵領內の所々に散在する點を、此の線に依て可及的多く抹殺するにありて、線は直線たるも、曲線たるも、又は幾多の迂曲を重ぬるとも、一線ならば凡て隨意なり、思ふ如く線を引き終りたる時は、眼を開き其の線の經過したる印點を檢し、悉く之を削り去る、次番の者も亦た斯の如くして、終に規定の回數を經たる時、双方領內の印點を檢し、抹殺を免かれたる點多き方、即ち敵の印點を多く抹殺したる方を勝ちとなす。

（七）「バッズ」(Buz.)

是は聲を發して數を計ふる遊戯なり、遊戯者は一所に集り相併びて坐し、一人宛順次に一の數より聲を發して計へゆくものにして、七或は七の倍數（例へば、十四、二十一、二十八、三十五、四十二等）或は七を含む數（例へば、十七、二十七、三十七、四十七等）に到る每に其の順番に當れる者は、七と唱へずして「バッズ」と叫はざる可からず、而して之を失敗る者は一回若くは二回順番を停止され、又は他に罰を科せらる、蓋し七十の時には單に一回「ハッズ」と叫び、七十一は「バッズ」一、七十二は「バッズ」二、七十三は「バッズ」三、にして七十七（77）は「バッズ」「バッズ」と二回連呼するものとす。

（八） 文字遊び (Letters with abncil.)

板紙の如き厚き紙を用意なしおき、之に都市、草花、鳥獸等の名稱を十乃至十二位、語每に文字の排列を轉倒して記し、各遊戯者に一枚宛渡し、短き時間を限りて文字の排列轉倒したる語を元の語に直さしむるものにして、完全に直し得たる語數多き者を勝利者となす、文字排列の轉倒は例へば次の如し、

マコヨハ	ヨコハマ（横濱）
ストホギト	ホト、ギス（杜鵑）
ヤヤククシ	シヤクヤク（芍藥）
カズツミハネ	ハツカネズミ（はつか鼠）

前記と同一遊戯にして、文字の排列を轉倒する代りに、語每に首尾の二文字を殘し中間の文字を悉く除去し、除去した文字の數を點にて表はし、元の語に直さしむるものあり、例へば、

ヤ、、コ	ヤマネコ（山猫）
ト、、シ	トヨハシ（豐橋）
オ、、、シ	オミナヘシ（女郎花）
ホ、、、ス	ホト、ギス（杜鵑）



慰み半分 鳥の飼法（二）

囀々子

◎生餌は昔は重に鰻を用ひましたが、之れは強すぎると申すことで、唯今では大概鮠を與へます、尤も鮠の中でも鹿島鮠は鳥のために善くありません、然し雑鳥には差支ないのです、沙魚や鯎は少しは上鳥に與へましても善いと申すことです、又た「若さぎ」とか赤腹など申す魚を用ひますこともありますが、何んと申しても鮠に優ることはないのです、鮠は冬から春の間は澤山あるものですが、夏場は誠に拂底になりますゆえ、冬の間に十分貯へて置くのが宜しいです、之れは時々日に乾しまして夏の間は箱の中へ唐辛子を丸のまゝ二三本も入れて置きますれば、決して虫のつくものではありません。

◎青餌と申すのは擂餌に青味を加へますので、大概菜を用ひますが、暑中には直ぐに腐敗いたしますので此時節には箒の實生を澤山植えて置きまして菜の代りに與へます、而し此葉とても莖からすぐ出ますものですから、能く莖を去て葉斗りを擂りて與へます。

◎箒の實生極暑の中は腐敗し易いものでして、此腐敗した餌を與へますと上鳥類は忽ち餌に離れます故、能く注意して朝と晝と二度位に擂りたてを與へます樣にするのです又た箒は菜よりも青味が強いのですから其心組で加減が入ります、暑中に萬一箒の葉がないときは唐辛子の葉でも宜しいです、併しこれは餘り長く用ひてはよくないのでホンノ一時間に合せ位に與へるものです。

◎磨餌や青味は餘程氣を付けて細かに致さんと鳥に害を與へます、少しでも荒い樣ですと掘りこぼすのみで、食しません、又た喰べましても糞がゆるく通じまして發病いたしますゆえ、餌を作りますときは竹篦を用意しまして擂鉢の目に入りましたものを能く掻き落し〳〵幾度も丁寧に擂るので、柔からず固からず仕上げるのでありますが、又た餌が出來ました

ら、後は能く掃除して前日の殘などが混らぬ様にするのです。

◎合はせ餌　之れは磨り餌が面倒なときに致すものでして、少し斗り小鳥を飼ふものなどには極めて便利の餌であります、其製法は先づ七分餌の鳥でありますと、生餌七匁にても七十目にても粉にいたしまして前に申したハッタイ七分に　餌一匁の割にいたして能く混合し擂に掛けまして篩ひます、與へますときに、何程なりとも青葉のもみ汁にて入用だけづゝ練りまはせばよいのです。

◎摘み餌　と申すのは、粟、稗、黍、米、餌胡麻胡桃などで飼ふのであります。

◎白餌　と申すのは磨り餌に青味を入れませんで。生ま餌と粉と胡桃の三色を合せましたものです。

◎飼ひ水　他の餌では餘り水を與へなくともよいですが、摘み餌の鳥には是非水を別の器にて與へるのです、尤も磨り餌などでも夏場には日々新らしい

水を與へます。

餌の種類は先づコンナものであります、面倒なら何れも鳥屋で賣りますゆゑ少々づゝ求めて與へるもよいですが、眞の趣味は餌から手掛て與へるのにあります。扨て次は、

籠

です、之れは吾々の住家と同じ様ですから、其々鳥に應じて作りました良いものを撰ぶのが大切です、尤も良いと申して外邊の裝飾を申すのではありません、丁寧に出來て居るものを申すので、麁造のものですと時に爪を懸けて足を損じましたり、又た夜中に騷ぎましたとき飛んだ怪我を致します事などがありますゆゑ、成るべく奥行を深くして丈の高いものでヒゴ（之れは周圍の竹です）の能く削つてあるものを撰ぶのです。

塒

何の鳥でも大概七月の末から八九月十月の始めへ掛けまして、羽が抜け變りまして新たに生へます、之

れを時と申すので、此時になりましたら今まで五分餌で飼ひました鳥なれば六分餌位に増して與へます余り餌が強すぎましても反つて羽がちゞれましたり足を痛めたり目を損じたりいたすものですから、此加減が少し六ヶ敷いのです。

羽變り

羽變りと申すのは、白く變りましたり又た柿色などに變りますので、初めは頭の羽からして少々づゝ白くなり嘴次第に白くなります、爪まで白くなりましたら眞の羽變りでして、終に一面の白に變ります、が他が變りましても嘴や爪が變らぬ中は決して羽變りではないのです、時によりますと風切り羽又た脊尻尾などから白くなることもありますが、之れは痛み羽と申して丁度人間が打身などて其處の色が變りました樣に、身の痛みから變りましたのです、痛み羽の鳥は時の後ちでも決して痛羽だけは失せません、之れは初心のものですと大概だまされます、柹色に變りますものは重に目白か鶫の類ですが、兎に角此の羽變りと申すのは餘り賞美致すべきものでありません、羽變りの鳥は概して弱く短命なものであります。

水浴

飼鳥は大概冬春の間は二日に一度位づゝ浴びせます、暖かになるに從ひまして毎日致させるので、水が遠くなりますと、體も汚れ自然に發病いたします、暑中などは日に二度位も行はせてよいのです、唯だ浴させる時には成るたけ手反へしを早くして籠に入れますのが肝心です。

病ひと薬

◎臑腫　年久しく飼ひます鳥は臑腫と申して、脛に皮が層りまして脛太くなりますので、自然に足が痛みだるくなります、之れを打ち捨て置きますと、終に足を損じます、此際にはよく水を浴せまして、竹篦を脛の皮の間へ挿込みまして徐々と剝がします、之れは脛のなりに造作なく取れます。

◎足腫　凡て飼ひ鳥は足腫が出勝ちなものです。

下餌が強すぎましたり、止まり木に摺餌が附着した其上へ止まりなどするから起るのであります、それ故折々生木を掛け代へてやるのも宜しいです。

◎爪　籠の中では爪の延びが早いものでして、之れが長いと籠の目などへ引掛て足を損じますから、水浴の後に程よく切るのです、餘り短いと血が出て痛みます、切りますときは裏から表へ掛けていたすのです。

◎眼の病　眼に雲かゝりて見へず、捨ておきますと左右へ傳染しまして、物を喰ふことも出來なくなります、之れは重に泉水などの鴨や、鴛鴦によくある病氣でして、適には小鳥にもあります、此時は早く古い唐墨をよく摺りまして兩眼へ二三回も塗てやりますと、全治いたすものです。

◎糞詰り　糞が詰りますと尻尾を上げて振りますゆえ直ぐに分かります、此時は蠣売の粉を水に泡和して呑ませます、之れは「ボレイ」と申して何れの藥種店にもあるものです。

若し又た之れでも効のないときには、固紅をときまして與へると宜しいです、之れは頗る解熱の効があります。

◎餌離れ　時によりますと餌離れと申して餌を喰はぬことがあります、別して赤髭、駒鳥、小翠雀などは離れ易い鳥でして、又た連雀も時々之れに罹ります、此時には赤蚯蚓の小さいのを能く腹の土をこきまして細かに切て與へますと宜しいです、又た蕃椒を細かに切りまして水が赤くなります程に入れまして、其まゝ與へますのも一法です、又た鳥の衰弱しましたのには、鷄卵を燒拔きに致して黄味斗りを細かに餌の上へ振り掛けて與へますと、効があります。

◎細殖虫　は鳥の軆に付きます虫でして、形狀至て小さい白色の虫で恰も羽虫の樣なものです、之が一トつ出來ますと一夜の中に殖えまして、羽の莖から段々と喰盡しますので、終に其鳥は落ちて仕舞ます、此虫は中々防ぎ難いものでして、昔は飼鳥家の

秘法となつて居りましたものですが、内々で此名薬を傳授いたしませう、實を申せば誠に造作もないものでして、薊の葉を煎して洗つてやりさへすれば忽ちに驅除されます、尤も其煎汁で籠から何から一切洗ふのでありまず、前以て心掛まして秋に葉を採りましたら陰干にして貯へて置きまして、冬から春の間に發生したとき直ぐに此法を行ふのです、他の虫なれば尾の方から煙草の煙を二三回も吹き掛けてやりますと効があります。

◎怪我　籠の目か何にかで怪我をいたした鳥は忽ち總身腫れまして丸くなつて落ちますものです、之れは丁度人間の破傷風の様に疵口から風が這入りまして腫れますのです、竹の箆で突き破つてやりますと全治します、尤も此時は横に破りますので決して眞直に突いてはなりませぬ。

又た足腫の痛でありますと鐵漿を沸かし附子の粉を少々入れまして冷却しましたものを局部へ屢々塗抹してやりますと治ります、又た土龍の黒焼は總て小鳥類の妙薬として水で呑ませます。

◎子々虫と螽　濁水に發生いたします子々虫も總て小鳥の餌といたして殊に塒にある時などは宜しいものです、又た螽の足と羽を除きまして磨餌の中へ少々づゝ磨り交せて與へますのも宜しいです、之れは重に荒鳥の餌付けや病鳥などに與へます。

未だ御話すれば種々の事がありますが、餘り前置きが長いと退屈ですし、又た之れ以上のことは斯道の専門とでも申す様な譯になりますゆえ、先づ此位にして置きまして、次回から彌々鳥と飼餌とを對照して御目に掛けませう。

（つゞく）

夕月夜しほみちくらし汝にはえの
あしのわかばをこゆるしらなみ

空はなほかすみもあえず風さえて
ゆきげにくもるはるのよのつき

面白き問答 答は次號に出します

○二人令孃の年齡

甲「モシ阿方のお年はお幾ッにおなり遊ばしましたの。

乙「ハイ妾はとつて十七になりました、妾の年は至つて覺え易いのでございまして、今年は三十七年でございますから十七で、昨年は三十六年でございましたから十六で、何時も此いふ工合に明治何年といふのについて參りますので、コー申して置ますと、何方でも後に阿方のお年はとおつしやつては、ソー〳〵お幾ッでと、直にお分りになりますのでございます。

甲「成程左樣でございますか、妾の年も覺え易いのでございますが、阿方のより少し六ケしい代りに、阿方のより確かなやうでございます。

乙「左樣でございますか、阿方はお幾ッでございます。

甲「へー妾は二十になりした。

乙「お二十に、へーソレガ何いふ譯でお覺え易いのでございますか。

甲「妾の年は少し覺え方は阿方のよりは六ケしうございますが、阿方のは三十七年はお十七といふので、七丈でございますが妾しのは昨年は十九、今は二十、來年は二十一とすつかり分るのでございます、併し妾は最早阿方のお年は一層よく覺えらるゝことが出來ます、阿方のお年と妾の年と合しますと丁度三十七になりますから。

右の話を聞きたるが甲の二十の覺え易いといひしは、果して何をいふのであらうか、あてゝ御覽なさい、答へは次號に出します。



雑録

北米通信姉妹病院

うまのかみ

◎馬頭奇病を得て黒衣の婦人を驚かす＝馬頭此度姉妹病院を音づれ院長たる黒衣の婦人に面會し雇員に採用して貰ひたいと頼み込みました、紹介人も無い突然の申込みで有りましたけれども、『兎に角試みませう。併し毎日の用向は手術室の整頓ですが、病室の掃除の手傳もして貰はなければなりませぬ、其等の事出來ますか』と婦人が申しまして重ねて『何も病氣を持つては居ますまいネ』と申しました。馬頭之に答へまして『力わざはどうも出來かねます、はき掃除の手傳ぐらゐならやつて見ませう。身體は至極健康で顔色を御覽になつた所で御分りでせう、おゝ忘れました、一つの病氣を持つて居ます……』婦人はすると、迷惑さうな顔を作りまして何の病氣かと問ひ返しました。馬頭此時まで、うまく廻らぬ英語を以て口重に談判をして居ましたが、更めて佛語を以て答へました『されば御坐います、馬頭の病氣は、想　病（病名にして病名にあらず佛國文豪モリエールの傑作の名です）で御坐います』婦人は聞きも終らず『戯談を云ひ給ふな……併し佛語を話すは大變結構です、どうか今日只今からでも居て貰ひ申たいのです。』と申しましたので御話がまとまりまして馬頭はこゝに入りました。それ以來今日まで一ヶ月ばかり病める米國婦人と健全なる佛國婦人とを研究して居ます。

◎四十五人黒衣の姉妹＝＝此病院内に看護婦の役目を務めて看護婦ではない、下女おさんのする仕事をして下女おさんでない、年頃は二十位から三四十歳位のも見えます、器量も普通と云ふよりは美貌の方

へ近い所の婦人が四十五人と云ふ大勢居ます。抑も此婦人たちの本體は何で御座いませうか。これは一身を神に捧げて一生男子には歸がないローマン、カトリック教の尼さんたちで御坐います。尼さんと申しますとチト可笑しく聞えますが、羅甸語でヴイルジネ、佛語でスウール、英語でシスター、日本語に譯して童貞と呼ので御座ます此尼さん達は日本に於ても澤山見えます、築地の明石町にも神田の猿樂町にも居ます。尼さんに二種類御座ます、二種類ともに墨染の袖に身をやつして居ますが、一つは白い頭巾を被つて居まして、他の一つは黑いのを被つて居ます此病院に居ますのは黑頭巾の尼さん達で御座ます、

◎ムシウ、トマ。ミストル、ターマス——四十五人の黑衣の婦人の中には佛國人あり加奈太佛人あり米人あり、馬頭を呼ぶに單にムシウ或は、ミストルと呼び又はムシウ、トマ。ミストルターマス。ムシウシブヤ。ミストルシブヤ等樣々に呼びます。此病院内では男でも女でも上から下まで一般に尊稱を加へて呼ぶ事になつて居ます。チヤーレとかヘンリーとか米人得意の呼棄てを一つも聞きませぬ。

◎カナダ佛人——とは英領カナダに移住して居ます佛國人及び其子孫を申しますのです。此病院に居ます四十五人の尼さんの中には、此カナダ佛人が最多數を占めて居ます。ですから佛語は勿論英語をもよく話す人が多いので御座います。然るに試みに其加奈太佛人の尼さん達に向つて『御國はどちら』と聞きますと必ず『ジユ、スウイ、フランセー（私は佛人ですと）』答へますので馬頭も始めは四十五人皆佛人かと思ひましたが『どちらから御出ですか』と聞きます時には『カナダから』と答へますので其實際がわかりましたので御座ました。佛國的愛國心をどこまでも持參しておるきますのが、感心の至りで御座います。日本人にして支那人と間違へられて腹立たない人は有りますまいが『アメリカ人に似て居る』と褒められて、嬉しがる者も少なくはありますまい。併し日本兵が今に露國と戰爭して、大勝利を得ました後には

此樣な考へを持ちます者がだんだん少くなつてまゐりませう。

◎三階の苦み＝＝馬頭の事務分擔區域はたゞ三階だけです。二階には男 患者ばかり置いて、三階には女患者ばかり置きます。總體の病室數は一百に達して、患者は大抵いつも充滿して居ます。三階の手術室で婦人患者が手術を施されたあとには、人肉の附着して居るナイフ、ピンセットなどは劍の山を思ひやらせ、金盥の中には血の池を堪へてあります。之を始末する男をメツ(馬頭)と云ふも我ながら恐ろしい名で御坐ひます。何の因果か幾多の亞米利加婦人に三階の呵責を受けつゝ御坐います。

◎日本婦人の入院＝＝只今は一人も居ませんが時々は御坐います、佛國婦人は日本婦人によく似て居ます其小がらな體軀に於きましても、其目其鼻其口もとに於きましても、どうしても佛國婦人は米國婦人よりは日本婦人に近い、いな、日本婦人に同じいと云つてもよい位で御坐います、先日二三の日本婦人の入院がありました。それを尼さんたちは大さう譽めて居ました。其内の秋田某婦人は入院料一週二十弗の室に居ましたが、これは、中等の入院料で御座います。男子が一室に數人入り交つて居ますれば、一週間大抵八弗位ですみます。これは當地の他の病院に比べましても高價の方で御座います、併しそれだけ病院設備が完全に行き届いて居ますのです。日本男子の入院もをりをり見えます。

◎雇人日本人五人白人二十三四人＝＝割合に少いですが、是は尼さんたちが雇入の仕事をしますからですこの病院に居る者は下女下男の末々までも、招待されて來た客のやうに皆「樣づけ」にされて、相當の部屋に寢かされて、毎日の食事は肉は勿論の事スープありカフエーありミルクありデザート、フルーツあり充分な御馳走に預つて、さうして、おまけに食事の給仕は佛國婦人にしてもらひます、殊に嬉しいのは自分の病氣の時には月給も減らされずに藥價も取られずに、入院患者同樣に丁寧に取扱つて貰ひます

ので御座います。

◎此病院は＝＝二十八年前比シャトルがまだ一寒村でありました時に、一陋屋の中に開設されましたので今日の盛大を見まするにも長い年月を費しましたので御座ます、屋は當市マヂスン街と第五街の角に巍然として立つてる大建築で御座ます、本名は慈善病院(プロビデンス、ハスピタル)ですが世間は通じて姉妹病院(シストル、ハスピタル)の名を呼びます。

動物の生殖

林壽祐

生殖とは天の惠みで、此世界に生活する生物が、子孫を殖やして、永遠の末代まで傳えるといふことであります。生殖は生物には最も必要であるが、恰も食を索めて躰を養ふが如く、一の本能であッて、最も容易く、誰にも出來のであります、今動物の生殖をみるに、二樣に大別されて居ります。

第一　有性生殖

◎有性生殖は主に高等動物の行ふものであります、高等動物は躰が成熟しますと、生殖物といふ極めて微小で、そうして極めて貴重なものを生じます、雄性生殖物を精子といひ雌性生殖物を卵子といひます、普通は精子生殖物と卵子生殖物の合體によッて、始めて新動物となるのでありますが、稀には相手の合體を要せずに卵子生殖物が、自分獨りで新動物となることがあります。精子と卵子の合體で生殖するものを兩性生殖といひ、卵子獨りで生殖するものを單性生殖といひます。

(一)兩性生殖は最もありふれたる生殖であります、けれど一ッの動物には精子生殖物か、若くは卵子生殖物のみ生ずるものと、一ッの動物は精子生殖物と卵子生殖物即ち兩方の生殖物を生ずるものとの二種類があります、前者を雌雄異體といひ後者を雌雄同體といひます。

(イ)雌雄異體は吾々人間から、獸類、鳥類、爬虫類、兩棲類、魚類(小數を除き)等は勿論、蟲類、介類

にいたるまで、動物界に大部分を占めて居ります。
(ロ)雌雄同體は高等動物には極めて僅かでありますが唯魚類中の烏鰂魚は、古から雌雄同體といはれ、鯉、鰊、鱈、鯖、鰯、鰐魚等にも、一ツ體に、卵子と精液を具えてることがあるといふ說です。〆クラウナギやサルパは、時によッて、雄となつたり雌となつたりするさうです。地中や水中によく居る蚯蚓と蛭、木竹や墻の上を匐ふてる蝸牛や蛞蝓、水底を匐ッてる田螺などは、全く雌雄同體であります。人間や畜類の體內に寄生してる條蟲、肝蛭、ヂストマや、それから海水中に住んでる下等動物中には、雌雄同體が尠くないのです。

生理學上からいふと、自分の卵子へ自分の精子を合體させるは勿論、兄弟姉妹間の生殖さへ、有害であるとしてる、夫故自然に依ても、成るべく自家受精や近族間の生殖を避けさせてあります。けれども寄生動物や、運動の遲鈍なる動物は、雌雄の接近することが尠いから、已むを得ず兩性の生殖物を一體內に授けられてあるのです、併し自分の卵子へ自分の精子を合はせることは殆んどなく、大概交尾して精子だけを交換してゐます。蚯蚓や蝸牛の交尾してる所を觀た人は多いでせうが、これらの動物には雌雄の區別なく、兩方が孕んで卵を產むのであります。

(二)單性生殖は兩性生殖の變體でありまして、卵子は雄性生殖物の力を藉らなくとも、單獨で生殖を完ふしられる、併し此生殖は極めて稀であります、唯蜜蜂は精子を受けない卵を產んで雄蜂を孵へし。それから新らしき木の芽や野菜などに群生してる蚜虫と、水田の中に游泳してるミジンコといふ細かな動物は、暖かい夏の中に雌ばかりでドシ〳〵蕃殖し、秋になッて氣候が冷やかになると、雄が出來て、精子卵子は始めて合體するのです、此他蜂や蛾の中にも單性生殖を行ふものがあります。

有性生殖を系統に表はしますと次の如くになります

- 有性生殖
  - 兩性生殖
    - 雌雄異體……人間、馬、鷄、鴨、蛇、蛙、鯉、蜻蛉、蛤、蝦、蟹
    - 雌雄同體……蚯蚓、蛭、カタツムリ、條蟲、海綿、ツブラリア
  - 單性生殖……蜜蜂、蚜虫、ミジンコ

として、有らゆる遊戯の中より、特に銃獵の一つを選びたるものは、全くキヤクデンボカーダス氏の所言を、信じたる結果のみにはあらずして、私が十數年間に於ける銃獵の實驗に鑑み、銃獵其物が多く高貴なる婦人の方面、即ち教育あり、財產あり、而かも常に煩雜なる家政を料理する、御婦人及び始終文學技藝に、御熱心になる處の御婦人に向つて、多くの趣味を與ふる所の、遊戯であると云ふことを申上ぐるのであります、殊に兒童を、御教育になる所の御婦人が、兒童の趣味を御研究になる材料として、必らず御同意を願ひたいのであります、銃獵の方法は、獵器、獵具、獵裝、獵犬、獵地等は少しく間暇を求めて、別に御話を致します、但だ一言御注意を願つて置きたいことは、婦人の銃獵と申しますれば、少しく大袈裟になりますから…………婦人と山野の關係位にして置て貰ひたいものであります。

（をはり）

西洋遊戯法

喜内生

旅行遊戯法

汽車列車内の遊戯

紅塵萬丈の都會を後にして、山野河海の光景送迎に暇なき有様は、如何にも心を樂しまする種ではありますが、長時間の旅程は倦怠を生ぜしめ易く、まして少年少女達は退屈し易いものでありますから、西洋諸國に於て專ら年少者間に行はるゝ列車内遊戯中、最も興味多きものを撰みまして、徒然を慰むる材料に供したい譯であります。

（一）鐵道點取（RailWayWhist）

二人又は二人以上の者、車内に於て左右兩側二組に別れ、各自車窓より目撃したる事柄に就き得點を爭ふものにして、遊戯を始むる前に豫め某驛より某驛

まで區域を定め、且つ採點規則を設くるを必要とす、例へば次の如きものを採點規則とす、

得點數に加ふべきもの

寺院	三點
社殿	三點
森	二點
池	四點
鍛	三點
小丘	二點
案山子	二點
水車	五點
名勝遊覽案內廣告	五點
旅館廣告	五點
賣藥廣告	四點
大人	二點
子供	一點
犬	一點

得點數より減ずべきもの

煙草廣告	三點
酒類廣告	四點
火葬場	五點
煙突	三點
馬	二點
荷車	三點
牛	二點
開かれたる門	三點
閉されたる門	三點

列車の勝負を決すべき驛は到着したる時、兩組各自に得點數を合算し、點數多き方を勝ちとす、時としては普通多く見請けざる或物（例へば、チヨン髷、盲人、跛者、白馬の如き）を豫め特定なしおき、指定の驛に到らずとも、之を認めたる組を、其時までの得點數の如何に拘はらず、直ちに勝利者と見做す條件を設くることあり。

（二）目撃競爭 (Railway COmPetition s.)

遊戲者は車內左右兩側に別れて座を占め、豫め或事物を特定なしおき、各自の車窓より此物を多く認めたる方を勝ちとす、例へば、牛馬、牛追ふ人、馬に乘る人、自轉車乘等の如し、而して前項の遊戲と同じく、豫め某々兩驛間と、勝負の區域を定めおくこと必要なり、今ま假りに右側の組は馬三十頭を目撃

し、左側の組は二十八頭を目撃したりとせば、右側の組を勝利者とす。

(三) 觀察競爭 (Station odservation.)

列車が驛に停車せる時、遊戯者は各自車窓より可及的多くの事物を看取し、列車の再び進行を始むる時、各自に筆を執て、先きに看取して記憶に存する事物を列記し、紙片の上に其の表を作る、而して凡ての遊戯者の表を檢査したる上、最も多くの事物を擧げたる者を以て勝利者となす。

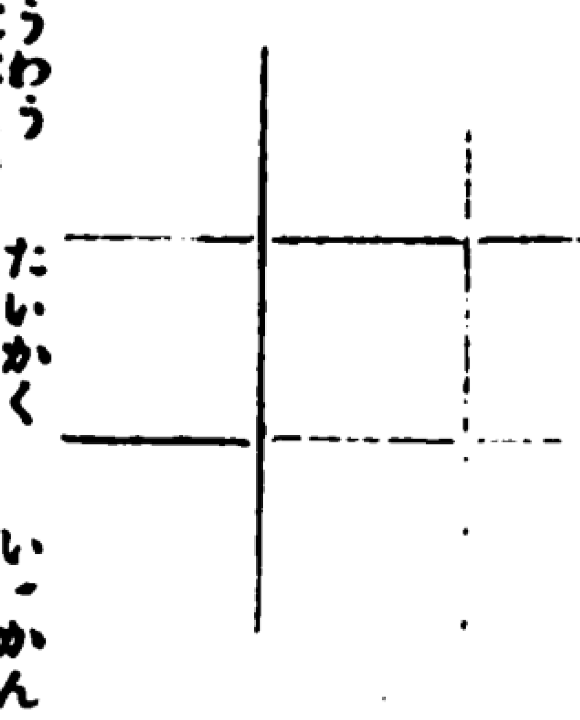
(四) 時計遊戯 (Cameswith watch.)

此の遊戯は懷中時計を利用して、之を行ふものにして、當今は何づれの列車も皆な車內に鐵道沿路地圖を掲げ、之に各停車場を詳記しあれば、遊戯者は此の地圖に依て各驛間の距離を推定し、更に此の距離より打算して、進行中の列車が次の驛に到着すべき時刻を推測するにあり、而して推測時刻をして實際の到着時刻に精確に適中せしむることは中々の難事なれば、最も之に近く推測をなしたる者を以て勝利者となす、蓋し勝利者は榮譽の記號として次驛の勝負決定に到るまで時計を保持するものとす。

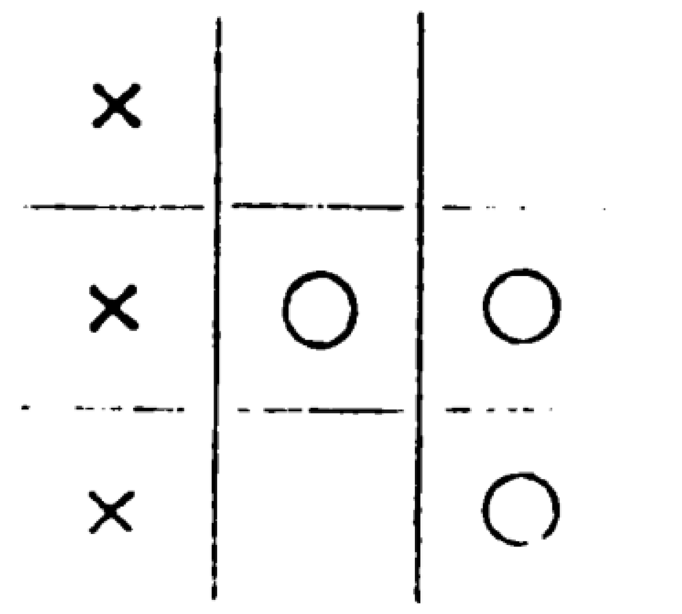
同じく時計を利用して、鐵道線路に沿ふて立てる一哩四分の一標に據りて行ふ二種の遊戯あり、一は列車が一の標を過ぎて次の標に到達する時刻を推測し他は列車進行の速力を推算するものにして、一の標より次の標に達する時間の長さを推算す、而して兩戯共必ず精確の適中を期せず、最も近く推測したる者を以て勝ちとすること前に同じ。

(五) 三つ併べ (Noughts andcrosses.)

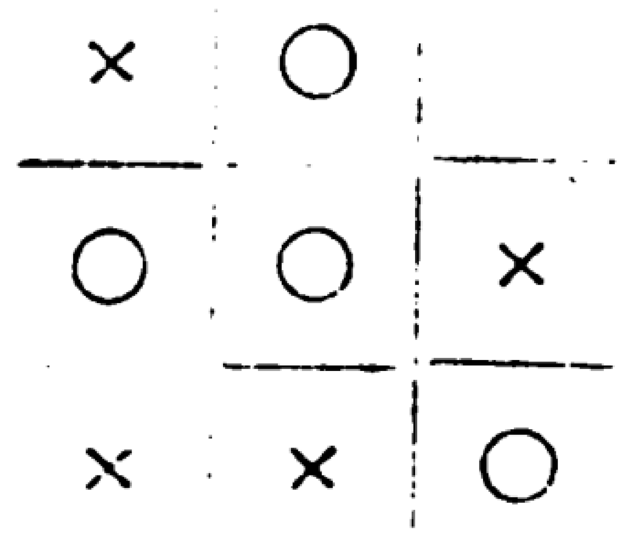
簡單なる五目併べの如きものにして、二人にて之を行ふ、先づ持ち合はせの紙に、四線を以て圖の如く九個に平方形を劃し、次に適宜に一人をノート(則ち○印)一人をクロス(即ち×印)と定め、先手の者九個の平方形中隨意に一個の中に自個の符號を記す、次に敵手は之に應じて、相手の目的を防げて自己



の勝利を謀りつゝ、殘餘八個の平方形中隨意に一個の中に自己の符號を記す、順次此の如くなして、終に三個の同一符號の、縱横、對角の如何を問はず、一直線に併びたる方を勝ちとす。次の圖は〇先手にて×の勝なり、



この圖は〇先手にて勝負なしなり



（六）英佛戰鬪 (French and English.)

此の遊戯を行ふには紙一枚、鉛筆一本にて事足れり先づ適宜に一人を英軍、一人を佛軍と定め、紙面の半分づゝを各自の領分とし、領内の所には鉛筆を以て數多の點を印し、此の點は幾個にても隨意にして制限なしと雖も、双方同數ならざる可からず、次に各々領分の一隅に一個の大砲を畫く（圖の巧拙は問ふ所にあらず、之に擬するまでにして、只だ大砲と假定するを得ば可なり）、最後に交戰の回數を定めたる上愈々勝負を始む、先番の者鉛筆を執て其の尖端を自領の大砲の口に置き、眼を閉ぢ敵の領分目蒐けて線を引張る、蓋し其目的は先きに記るされたる敵領内の所々に散在する點を、此の線に依て可及的多く抹殺するにありて、線は直線たるも、曲線たるも、又は幾多の迂曲を重ぬるとも、一線ならば凡て隨意なり、思ふ如く線を引き終りたる時は、眼を開き其の線の經過したる印點を檢し、悉く之を削り去る、次番の者も亦た斯の如くして、終に規定の回數を經たる時、双方領内の印點を檢し、抹殺を免かれたる點多き方、即ち敵の印點を多く抹殺したる方を勝ちとなす。

（七）「バッズ」(Buz.)

是は聲を發して數を計ふる遊戯なり、遊戯者は一所に集り相併びて坐し、一人宛順次に一の數より聲を發して計へゆくものにして、七或は七の倍數（例へば、十四、二十一、二十八、三十五、四十二等）或は七を含む數（例へば、十七、二十七、三十七、四十七等）に到る毎に其の順番に當れる者は、七と唱へずして「バッズ」と叫はざる可からず、而して之を失敗る者は一回若くは二回順番を停止され、又は他に罰を科せらる、蓋し七十の時には單に一回「ハッズ」と叫び、七十一は「バッズ」一、七十二は「バッズ」二、七十三は「バッズ」三、にして七十七（77）は「バッズ」「バッズ」と二回連呼するものとす。

（八）文字遊び　（Letters with abncil.）

板紙の如き厚き紙を用意なしおき、之に都市、草花、鳥獸等の名稱を十乃至十二位、語毎に文字の排列を轉倒して記し、各遊戯者に一枚宛渡し、短き時間を限りて文字の排列轉倒したる語を元の語に直さしむるものにして、完全に直し得たる語數多き者を勝利者となす、文字排列の轉倒は例へば次の如し、

マコヨハ　ヨコハマ（横濱）
ストホギト　ホト、ギス（杜鵑）
ヤヤククシ　シヤクヤク（芍藥）
カズツミハネ　ハツカネズミ（はつか鼠）

前記と同一遊戯にして、文字の排列を轉倒する代りに、語毎に首尾の二文字を殘し中間の文字を悉く除去し、除去した文字の數を點にて表はし、元の語に直さしむるものあり、例へば、

ヤ、、コ　ヤマネコ（山猫）
ト、、シ　トヨハシ（豐橋）
オ、、、シ　オミナヘシ（女郎花）
ホ、、、ス　ホト、ギス（杜鵑）



慰み半分 鳥の飼法（二）

囀々子

◎生餌　は昔は重に鰻を用ひましたが、之れは強すぎると申すことで、唯今では大概鮠を與へます、尤も鮠の中でも鹿島鮠は鳥のために善くありません、然し雜鳥には差支ないのです、沙魚や鰍は少しは上鳥に與へましても善いと申すことです、又た「若さぎ」とか赤腹など申す魚を用ひますこともありますが、何んと申しても鮠に優ることはないのです、鮠は冬から春の間は澤山あるものですが、夏場は誠に拂底になりますゆえ、冬の間に十分貯へて置くのが宜しいです、之れは時々日に乾しまして夏の間は箱の中へ唐辛子を丸のまゝ二三本も入れて置きますれば、決して虫のつくものではありません。

◎青餌　と申すのは摺餌に青味を加へますので、大概菜を用ひますが、暑中には直ぐに腐敗いたしますので此時節には蘩の實生を澤山植えて置きまして菜の代りに與へます、而し此葉とても莖からすぐ出ますものですから、能く莖を去て葉斗りを摺りて與へます。

◎蘩の實生極暑の中は腐敗し易いものでして、此腐敗した餌を與へますと上鳥類は忽ち餌に離れます故、能く注意して朝と晝と二度位に摺りたてを與へます樣にするのです又た蘩は菜よりも青味が強いのですから其心組で加減が入ります、暑中に萬一蘩の葉がないときは唐辛子の葉でも宜しいです、併しこれは餘り長く用ひてはよくないのでホンノ一時間に合せ位に與へるものです。

◎磨餌や青味は餘程氣を付けて細かに致さんと鳥に害を與へます、少しでも荒い樣ですと掘りこぼすのみで、食しません、又た喰べましても糞がゆるく通じまして發病いたしますゆえ、餌を作りますときは竹篦を用意しまして摺鉢の目に入りましたものを能く搔き落し〳〵幾度も丁寧に摺るので、柔からず固からず仕上げるのであります、又た餌が出來ました

ら、後は能く掃除して前日の殘などが混らぬ樣にするのです。

◎合はせ餌　之れは磨り餌が面倒なときに致すものでして、少し斗り小鳥を飼ふものなどには極めて便利の餌であります、其製法は先づ七分餌の鳥でありますと、生餌七匁にても七十目にても粉にいたしまして前に申したハッタイ七分に　餌一匁の割にいたして能く混合し磨に掛けまして篩ひます、與へますときに、何程なりとも青葉のもみ汁にて入用だけづゝ練りまはせばよいのです。

◎摘み餌　と申すのは、粟、稗、黍、米、餌胡磨胡桃などで飼ふのであります。

◎白餌　と申すのは磨り餌に青味を入れませんで。生ま餌と粉と胡桃の三色を合せましたものです。

◎飼ひ水　他の餌では餘り水を與へなくともよいですが、摘み餌の鳥には是非水を別の器にて與へるのです、尤も磨り餌などでも夏場には日々新らしい

水を與へます。

餌の種類は先づコンナものであります、面倒なら何れも鳥屋で賣りますゆゑ少々づゝ求めて與へるもよいですが、眞の趣味は餌から手掛て與へるのにあります。扨て次は、

籠

です、之れは吾々の住家と同じ樣ですから、其々鳥に應じて作りました良いものを撰ぶのが大切です、尤も良いと申して外邊の裝飾を申すのではありません、丁寧に出來て居るものを申すので、麁造のものですと時に爪を懸けて足を損じましたり、又た夜中に騷ぎましたとき飛んだ怪我を致します事などがありますゆゑ、成るべく奧行を深くして丈の高いものでヒゴ（之れは周圍の竹です）の能く削つてあるものを撰ぶのです。

塒

何の鳥でも大概七月の末から八九月十月の始めへ掛けまして、羽が拔け變りまして新たに生へます、之

れを時と申すので、此時になりましたら今まで五分餌で飼ひました鳥なれば六分餌位に増して與へます余り餌が强すぎましても反つて羽がちゞれましたり足を痛めたり目を損じたりいたすものですから、此加減が少し六ヶ敷いのです。

羽變り

羽變りと申すのは、白く變りましたり又た柿色などに變りますので、初めは頭の羽からして少々づゝ白くなり嘴次第に白くなります、爪まで白くなりましたら眞の羽變りでして、終に一面の白に變ります、が他が變りましても嘴や爪が變らぬ中は決して羽變りではないのです、時によりますと風切り羽又た脊尻尾などから白くなることもありますが、之れは痛み羽と申して丁度人間が打身などで其處の色が變りました様に、身の痛みから變りましたのです、痛み羽の鳥は時の後ちでも決して痛羽だけは失せません、之れは初心のものですと大概だまされます、柿色に變りますものは重に目白か鶫の類ですが、兎に角此の羽變りと申すのは餘り賞美致すべきものでありません、羽變りの鳥は概して弱く短命なものであります。

水浴

飼鳥は大概冬春の間は二日に一度位づゝ浴びせます、暖かになるに從ひまして毎日致させるので、水が遠くなりますと、體も汚れ自然に發病いたします、暑中などは日に二度位も行はせてよいのです、唯だ浴させる時には成るたけ手反へしを早くして籠に入れますのが肝心です。

病ひと藥

◎臑腫　年久しく飼ひます鳥は臑腫と申して、脛に皮が層りまして脛太くなりますので、自然に足が痛みだるくなります、之れを打ち捨て置きますと、終に足を損じます、此際にはよく水を浴せまして、竹篦を脛の皮の間へ挿込みまして徐々と剝がします、之れは脛のなりに造作なく取れます。

◎足腫　凡て飼ひ鳥は足腫が出勝ちなものです。

下餌が強すぎましたり、止まり木に摺餌が附着した其上へ止まりなどするから起るのであります、それ故折々生木を掛け代へてやるのも宜しいです。

◎爪　籠の中では爪の延びが早いものでして、之れが長いと籠の目などへ引掛て足を損じますから、水浴の後に程よく切るのです、餘り短いと血が出て痛みます、切りますときは裏から表へ掛けていたすのです。

◎眼の病　眼に雲かゝりて見へず、捨ておきますと左右へ傳染しまして、物を喰ふことも出來なくなります、之れは重に泉水などの鴨や、鴛鴦によくある病氣でして、適には小鳥にもあります、此時は早く古い唐墨をよく摺りまして兩眼へ二三回も塗てやりますと、全治いたすものです。

◎糞詰り　糞が詰りますと尻尾を上げて振りますゆえ直ぐに分かります、此時は蠣殻の粉を水に泡和して呑ませます、之れは「ボレイ」と申して何れの藥種店にもあるものです。

若し又た之れでも効のないときには、固紅をときまして與へると宜しいです、之れは頗る解熱の効があります。

◎餌離れ　時によりますと餌離れと申して餌を喰はぬことがあります、別して赤髭、駒鳥、小翠雀などは離れ易い鳥でして、又た連雀も時々之れに罹ります、此時には赤蚯蚓の小さいのを能く腹の土をこきまして細かに切て與へますと宜しいです、又た蕃椒を細かに切りまして水が赤くなります程に入れまして、其まゝ與へますのも一法です、又た鳥の衰弱しましたのには、鷄卵を燒拔きに致して黄味斗りを細かに餌の上へ振り掛けて與へますと、効がありまます。

◎細殖虫　は鳥の體に付きます虫でして、形狀至て小さい白色の虫で恰も羽虫の樣なものです、之が一トつ出來ますと一夜の中に殖えまして、羽の莖から段々と喰盡しますので、終に其鳥は落ちて仕舞ます、此虫は中々防ぎ難いものでして、昔は飼鳥家の

秘法となつて居りましたものですが、内々で此名薬を傳授いたしませう、實を申せば誠に造作もないものでして、蕣の葉を煎して洗つてやりさへすれば忽ちに驅除されます、尤も其煎汁で籠から何から一切洗ふのであります、前以て心掛まして秋に葉を採りましたら陰干にして貯へて置きまして、冬から春の間に發生したとき直ぐに此法を行ふのです、他の虫なれば尾の方から煙草の煙を二三回も吹き掛けてやりますと効があります。

◎怪我　籠の目か何にかで怪我をいたした鳥は忽ち總身腫れまして丸くなつて落ちますものです、之れは丁度人間の破傷風の樣に疵口から風が這入りまして腫れますのです、竹の篦で突き破つてやりますと全治します、尤も此時は横に破りますので決して眞直に突いてはなりませぬ。

又た足腫の痛でありますと鐵漿を沸かし附子の粉を少々入れまして冷却しましたものを局部へ屢々塗抹してやりますと治ります、又た土龍の黒燒は總て小鳥類の妙薬として水で呑ませます。

◎孑々虫と蝗　濁水に發生いたします孑々虫も總て小鳥の餌といたして殊に塒にある時などは宜しいものです、又た蝗の足と羽を除きまして磨餌の中へ少々づゝ磨り交せて與へますのも宜しいです、之れは重に荒鳥の餌付けや病鳥などに與へます。

未だ御話すれば種々の事がありますが、餘り前置きが長いと退屈ですし、又た之れ以上のことは斯道の専門とでも申す樣な譯になりますゆえ、先づ此位にして置きまして、次回から彌々鳥と飼餌とを對照して御目に掛けませう。

（つゞく）

夕月夜しほみちくらしなにはえの
あしのわかばをこゆるしらなみ

空はなほかすみもあえず風さえて
ゆきげにくもるはるのよのつき

面白き問答 （答は次號に出します）

○二人令孃の年齢

甲「モシ阿方のお年はお幾ッにおなり遊ばしましたの。

乙「ハイ妾はとつて十七になりました、妾の年は至つて覺え易いのでございまして、今年は三十七年でございますから十七で、昨年は三十六年でございましたから十六で、何時も此いふ工合に明治何年といふのについて參りますので、コー申して置ますと、阿方でも後に阿方のお年はとおつしやつては、ソー〳〵お幾ッでと、直にお分りになりますのでございます。

甲「成程左樣でございますか、妾の年も覺え易いのでございますが、阿方のより少し六ケしい代りに、阿方のより確かなやうでございます。

乙「左樣でございますか、阿方はお幾ッでございます。

甲「ヘー妾は二十になりした。

乙「お二十に、ヘーソレガ何いふ譯でお覺え易いのでございますか。

甲「妾の年は少し覺え方は阿方のよりは六ケしうございますが、阿方のは三十七年はお十七といふので、七丈でございますが妾しのは昨年は十九、今は二十、來年は二十一とすつかり分るのでございます、併し妾は最早阿方のお年は一層よく覺えられることが出來ます、阿方のお年と妾の年と合しますと丁度三十七になりますから。

右の話を聞きたるが甲の二十の覺え易いといひしは、果して何をいふのであらうか、あて〻御覽なさい、答へは次號に出します。



雜錄

北米通信姉妹病院

うまのかみ

◎馬頭奇病を得て黒衣の婦人を驚かす＝馬頭此度姉妹病院を音づれ院長たる黒衣の婦人に面會し雇員に採用して貰ひたいと頼み込みました、紹介人も無い突然の申込みで有りましたけれども、『兎に角試みませう。併し毎日の用向は手術室の整頓ですが、病室の掃除の手傳もして貰はなければなりませぬ、其等の事出來ますか』と婦人が申しまして重ねて『何も病氣を持つては居ますまいネ』と申しました。馬頭之に答へまして『力わざはどうも出來かねます、はき掃除の手傳ぐらゐならやつて見ませう。身體は至極健康で顔色を御覽になつた所で御分りでせう、おゝ忘れました、一つの病氣を持つて居ます……』婦人はすると、迷惑さうな顔を作りまして何の病氣かと問ひ返しました。馬頭此時まで、うまく廻らぬ英語を以て口頭に談判をして居ましたが、更めて佛語を以て答へました『さればで御坐います、馬頭の病氣は　想　病（病名にして病名にあらず佛國文豪モリエールの傑作の名です）で御坐います』婦人は聞きも終らず『戯談を云ひ給ふな……併し佛語を話すは大變結構です、どうか今日只今からでも居て貰ひ申たいのです。』と申しましたので御話がまとまりまして馬頭はこゝに入りました。それ以來今日まで一ケ月ばかり病める米國婦人と健全なる佛國婦人とを研究して居ます。

◎四十五人黒衣の姉妹＝此病院内に看護婦の役目を務めて看護婦ではない、下女おさんのする仕事をして下女おさんでない、年頃は二十位から三四十歳位のも見えます、器量も普通と云ふよりは美貌の方

らと煮て器物に盛るのである、すべて鳥肉はざつと煮るがよい、煮過れば強くなりて味惡し、舊時は蒜を入れて、口授の秘法あれど今は傳はらぬのである。

○じふ（雁、鴨、其他鳥類、吸口にワサビを必用とす）

都て鹽梅は煎鳥と同じで只汁の溜らぬやうに煮る、煎鳥は汁を溜めるとの相違がある、でこれは配品を要せぬ。

○せんば（雁、鴨、鶴、鴫、バン、配品は木の子類、冬大根、大蕪、慈姑、栗、せり、三つ葉、蕗、竹の子等）

これは鯛の潮煮のやうに酒などは入れぬがよい、鳥肉は大きな目に扁く切り「澄し」を鹽梅して鳥肉を入れる、此調理は船中で飛ぶ鳥を射て取敢ず調味するといふ趣意である、先づ潮煮の工合に鹽梅し、精良の煮汁でなければ美味は感ずるやうには出來ぬ、中古は此字を「船場」と書たが鄙劣であるから「煮羽」と改めた。

○鳥濃醬（鳥肉は何品も利用してよい）

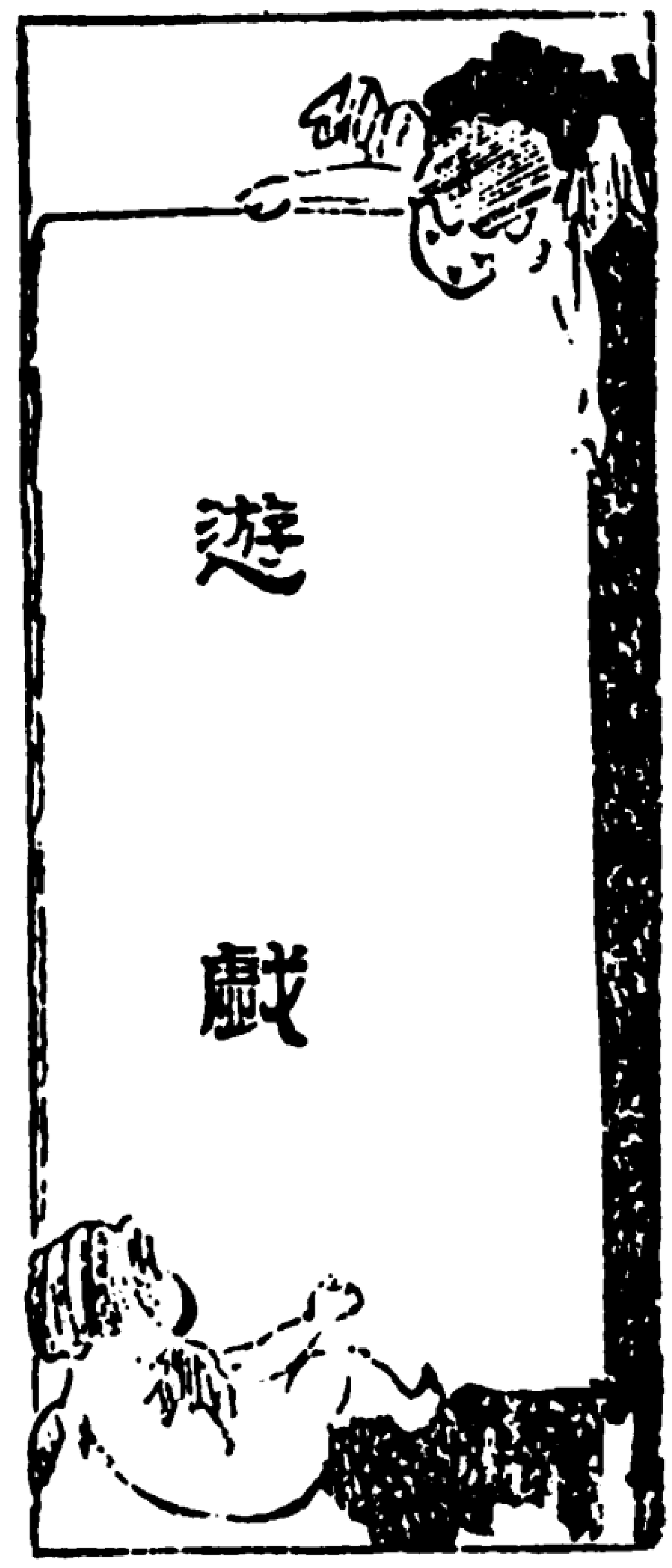
これは前の煮汁の法に依り、豆腐へ鳥肉の摺り身をどろ〱とかけて出すのである、山葵を摺りて「口」に添へる。

○鳥味噌（同前）

鳥肉の皮を剝ぎ最細かにたゝき、其皮は鍋で煎り、脂を取りて其中へたゝいた肉を入れ、酒をさし好き程に煮て、其肉を等分より少なく堅ねりの味噌を加へ能く煮る、これは柚味噌を作る加減にねり合せるが肝要である、又一法として前法の通りに煮て、中白の味噌と鳥肉を等分にし、或は味噌を稍少く加減にしてもよい、それでこれを幾個にも分けて燒味噌にして板を以て能く刻み、鳥肉の中へ入れて、カラカラと煎る、酒は少ひ加減がよい。

○鳥餅（雁、鴨、小鴨に限る）

これは「煎鳥」の調理と同法で、鳥肉を好き程に煮立て他の器へ肉ばかりを拾ひ揚げ其汁へ餅を入れ「雑煮」の様に製へそれから鳥肉を加へるのである（完）



婦人の遊戯と山野

綾井武夫氏談

一 野邊の風色に心を奪はる

追々暖かく爲つて參りますと、皆さん方の御遊戯と申す者が、盛大に爲つて參ります、年の暮れには色々の俗事に驅り廻はされ、學校の御休み中には、碌碌に御遊びに爲ることが出來なかつた、又た御正月に爲つても僅かに三四回、御友達の家にて歌骨牌の御遊び位で、此年の春は案外遊ぶことの出來なかつた春だと、御不平になる御連中も、追々摘み草の時期に移つて參りまして、野邊の風光に心を奪はるる樣に爲るのであります、野邊の風光に心を奪はるるのは、皆さん方の御身體の御爲めになる、至極結構の期節で、寒い〳〵と申して縮けて炬燵の中に往生して、御座るから見ますると、御精神の爲めにも御身體の爲めにも、此上もなき仕合せの時期であります、最う一ヶ月程經過ますと、此の時期が參ります。

二 活潑の御成育を遂ぐるには

併しながら、徒に野邊の風光に醉ふのみでは、文人臭くつて、詩人ぶつて歌人ぶつて、何も面白味と申すものがありませぬ、此の臭ひのとぶるのとは、大に嫌だと申す御婦人が、澤山出來ませんと不可ないのでありますは勿論で御座います、殿方に限りません、山を見海を見乃至草木を見、田舍の風光を見ますと、色々な感想が浮びまして、マー一句遣らふかと申す樣に爲つて參ります、況や畫や寫眞の御嗜みある御方は、スケッチの詮索などに忙はしく爲つて參ります、之れは決して御惡いと申すのでは御座い

ません、狭隘なる一小天地に御生活爲るものに比しますれば、甚だ結構のことではありますが、野邊の遊戯の必要と申す者は、僅かに其風光のみを貪ぼりて、滿足すべきものではありません、野邊の逍遙に於て、最も深く多く趣味を感ずると申すことが、甚だ大切にして、又た甚だ必要なる條件であります、活潑の御成育を遂ぐるには、甚だ必要であります、僅かに山紫水明の風光のみでありますと、御屋敷の御廣い御宅にても、又た御別莊にても、充分でありますが、但だ活潑の御成育を遂ぐるには、能く筋骨を勞し、飽くことなく、能く趣味を感じて、快樂を覺ゆるを要す、之には必らず之れと申す一定の目的か、一定の標的がなくてはなりませぬ、終日同一の風光を撮影し、又は之を模寫したればとて、別に之れと申す程に、深き快味を感ずるものではありませぬ。

三　何の面白味を感ずるでありませうか

即ち諸君の問題となる處のものであります、同じ野邊の逍遙に於きましても、必らず大小の目的と申す者が無くては爲りません、花見遊山にも目的あり、摘み草にも目的あり、然れども其趣味と申すものが、甚だ單調でありますから、其れこそ互に飽きが出て參ります、最も寒くなつたと云ふては、あれ大變だ雲が出た、空模樣が惡しくなつたと云ふては、歸路を急ぐ樣に爲つて參りますから、充分に運動して、充分に筋骨を勞し、充分に身體の成育發達を欲することが、出來なく爲つて參ります、杉田、蒲田の梅も日ならずして、多數の老若男女の群集の準備を整へますが、僅かに此の梅を見物したと申します許りでは、何の面白味を感ずるでありませうか、私には一向心に落ちないのであります、無遠慮に是を評しますれば、或は物數奇と申すのでは無からふかと思はれます、消閑の要具と致しましては、如何にも理由がありますか。

四　毎年の實例で御座います

内外に御多忙を極められて居る、今日の御婦人とし

て、又た二十世紀の御婦人としては、如何にも呑氣過ぎはすまいかと思はれます、斯かる物數奇のことを、學び得べき御暇が、多忙なる今日の御婦人に、爭で能く有得べきであらふかと疑がはれます、英雄の胸中閑日月ありではありますが、斯樣に日本にも事實上の英雄が、澤山あるでありませうかと疑はしい事で有升、之れは必らず觀梅を御急ぎになる御婦人に、御尋ね致さねばならぬことであります、隨分梅見の時節、櫻見の時節になりますと、算へ得べからざるまでに、多數なる御令閨、御令孃乃至女學生の御方が、いろんな男の間を排しては御通行に爲つて居るのを、拜見致しまするのは、毎年の實例で御座います、鳥啼て花歌ふ、眞に之れ天下泰平の象ではありますが、一面から觀察致しますると、餘り褒めたことでもなからうかと思はれます。

五　必ず一定の目的なかる可らず

私の了見は、聊か窮屈かは存じませぬが、今日の御婦人、所謂二十世紀の御婦人と致しましては、必らず御身體を充分強壯にし、又た筋骨を充分逞しく致しますことが、甚だ必要なる急務では無らふかと思つて居ります、果して然りと致しますれば、之を行ふ方法として、必らず一定の目的が無くてはなりません而して野邊の逍遙にも、必らず此の目的を應用し、良妻として、又た賢母として、世の中に御立に爲るにも、必らず此の目的を應用し、此に初めて立派なる一個の御婦人たるの責任を、盡し得たと申すのであります、生花、茶、琴、三味線の如き御稽古が、上流の階級に流行し初めて、我邦の婦人は上下一般に、體育の發達を妨げたるの事實は著しいことであります、一體我邦の婦人の嗜好と申す者が、芝居見物とか花見遊山とか申すもの丶以上に、上つて居ないと云ふことが、甚だ殘念でならぬこと丶考へます。

六　何れも一長一短一得一失

婦人の御身體を強壯にし、又た其筋骨を逞しく致しまするには、種々の方法がありまして、決して一二

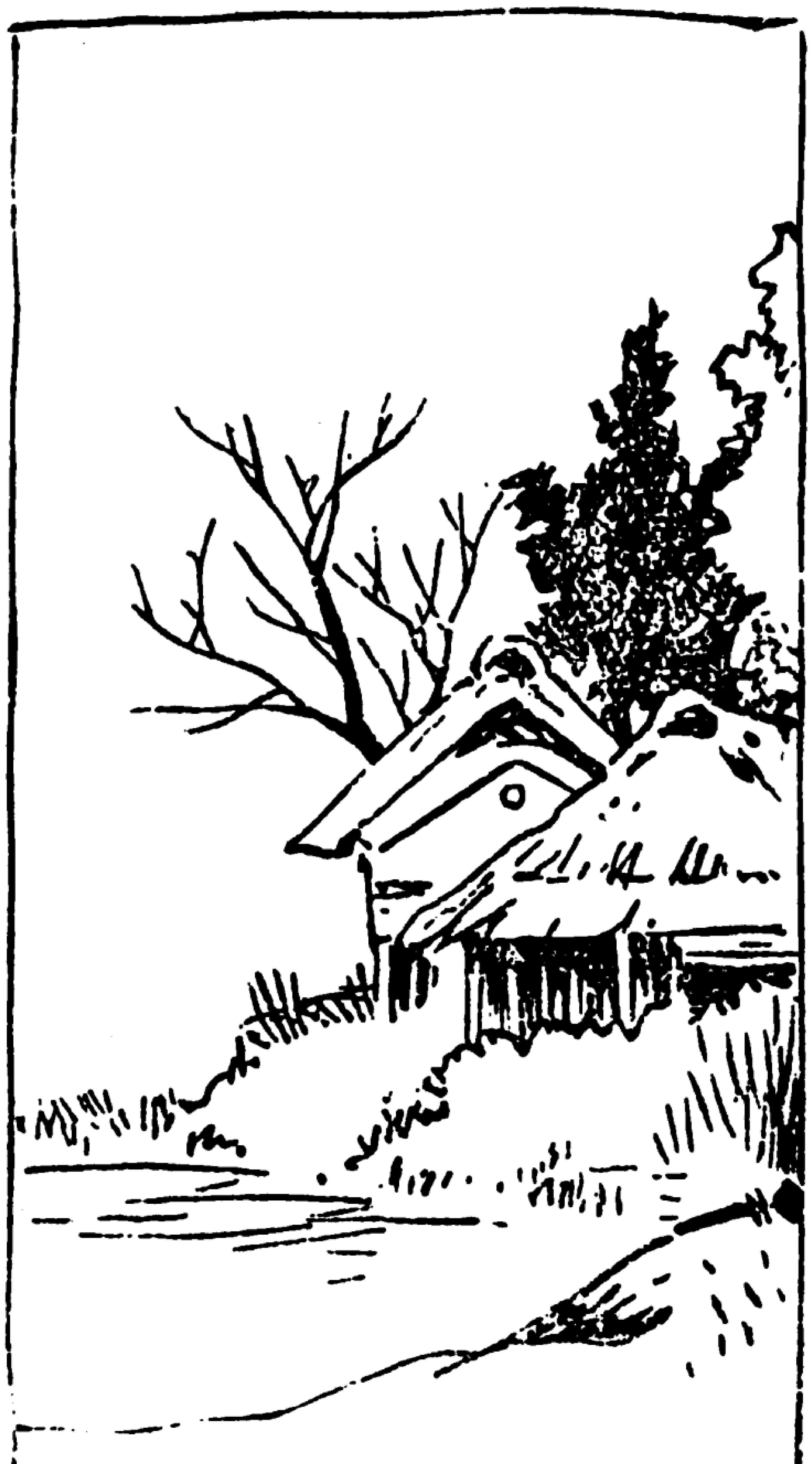
のものではありませぬが、何れも一長一短一得一失と申して、其長所と、其得點のみで専用して居るものは、甚だ少いのであります、先づ普通の運動としては、自轉車の如きあり、乘馬の如きあり、ベースボールの如きあり、ボートレースの如きあり、一通の遊戯運動としては、備はつて居る樣でありますが、仔細に之を講究致しますと、其競爭の範圍、其快樂の範圍と申す者が、甚だ狹少にして、固定して居りますから、變幻の奇出沒の妙と申す趣味は甚だ乏しいのであります、が斯かる遊戯は場合によりては、種々の結果に伴ふ危險を免れないことがありますから、御婦人の遊戯としては、面白味のないのみでなくて、寧ろ不適當のものである、と申さねばなりませぬ、然らばどうしたら好いかと申すと。

七　婦人體育の新方面

でありまして、身體を强壯にし、筋骨を逞しくするには、如何なるものを選べば可なるかと云ふ問題が起ります、則ち婦人の銃獵と申すことであります、即ち銃獵は、眞に婦人體育の新方面であります、婦人の銃獵は、未だ我邦に多く其例を見ないのでありますから、今後の婦人體育問題として、必らず講究を費さねばならぬ處の、一個の新問題であります、此の問題を解決する爲めには、少くも婦人銃獵の何ものたるかを知らねばなりません、自轉車、騎馬、ベースボール、ボートレースは婦人の遊戯として、危險であるといふたことのある、私が斯申しましたなら、婦人の銃獵も甚だ危險である、銃と云ふものは、一體人を殺すに用ゆるもので、殺人の要具とも申すべきものである、婦人方面の最も忌避する戰爭の要具である、其器具に於てすら既に然り、況や之が使用を婦人に奬勵すると云ふことは、大なる間違ひであると云ふ、攻撃が起るのであります、之れか爲多少の議論が、婦人教育家の間に起るでありませう、私どもが熱心に銃獵の趣味を論ずるのも、之か爲であります。

八　危險と云ふ點より論じますれば

危險と云へば危險ではありますが、其は必らず其人の用意如何にあるのであります、人としては其何事たるに關はらず、豫め其危險を豫防すべき、愼重の用意がなくてはなりませぬ、白痴の人はいざ知らず普通の精神と腦力とを有するの人に於ては、必ず自然に危險を豫防し得べき一種の注意力を有して居るのであります、之を一概に危險と云ふ點より論じますれば、成程殺人の要具を、控へて居るには違ひありませぬが、事實は案外に過失の少いものであります、私などは男の側で、而かも最も亂暴なる射手の側でありますが、其れですら十ヶ年の久しき今日まで、未だ嘗つて過失の爲めに自他の殺傷に遭遇したことはありませぬ、即ち平生の心得方一ツに據るとであります。



九　田圃の傍を御逍遥になれば

一通り銃獵の趣味を解することが出來ますが實際之を試みますと、相手が動物で御座いますから、却々面白味があります、强ひて深林に分け入りて、猛獸虎狼の類と鬪ふのが、銃獵の目的ではありません、此所には御婦人に適當して居る一番手近い例を申し上げます、田鴫、鶉、頰白、丁馬の如き小鳥は、何れの地にも澤山蕃殖して居りますから、日曜日を初

め、精神の御疲勞を覺へました時などには、一寸手頃の銃を提げ、郊外に出で、田圃の傍らを御逍遙になれば、必ず數群の飛鳥に遭遇致します、即ち之を驅り之を射つ、或は進み或は靜まりて、或は成功し、或は失敗するのであります、此の時は如何なる霜の朝、如何なる雪の日にても、毫も寒さと云ふことを感せぬのであります、雪又は雨の日などには、銃獵と申すことが、非常の趣味を感じ、非常に壯快を覺ゆるので、自然に體の運動を均調し、其四肢は健康となり、其精神は活潑と爲るのであります

一〇　殊に霞立つ春の日に於て

又た其上に獲物を、一羽にても澤山に射ようと致しますれば、御無性にては、目的を達することが出來ませぬから、自然の事情と、自然の必要とは、知らず知らず其人を克己に誘導して、幾多の困難に打勝つ處の素養をも、造り出すことが出來ます、殊に霞み立つ春の日に於て『立派な晴天で而かも外氣溫暖なる日』は野邊の風光を愛でつゝ、銃を肩にして、田圃の間を逍遙し、飛鳥を驅るなどは、實に筆紙に盡し得べからざる程に、趣味と快樂とを併せ有して居ります、御承知の通り銃獵には、獲物と云ふ目的があります、而して始終此の獲物に對抗して、運動の方針を定むるのでありますから、其作戰計畫と云ふものが、甚だ多くの趣味を帶びて居るのでありますす、即ち其巧拙が、常に獲物の多寡に關して參りますから、行樂の傍らに、種々の學問をも爲し、又た種々の智識をも、研磨することが出來ます。又

一一　行樂の傍ら幾多の智識を養ふ

ことも出來ます殊に諸君が良妻として、賢母として其夫に仕へ、其子女を敎育すると云ふ、大任を御荷ひになり、敢て之を空しく爲さゝるには、必ず第一に身體の故障を少くして、健康を維持し、第二に精神を活潑、壯快ならしめねばならぬのであります、狹隘なる天地の遊戲、即ち御座敷と、臺所の外には身を容るゝ餘地のない樣に御考に爲つて居る、今日の御婦人は、宜しく此の二點に御着目あらんことを

希望するのであります、婦人銃猟の目的は、強ちに銃器を要して、獲物を射撃するの謂ひにあらずして、別に深い目的を併有して居ります、一例を擧ぐれば地理を研究し、動植物を研究し、山野を研究し沼澤を研究し、行樂の傍ら、幾多の智識を養ひ、清潔なる空氣を呼吸し。高潔なる志想を涵養する者は蓋し銃猟の特有に定つて居ります。

一二　博士キヤクデンボカーダス氏の所論

婦人の銃猟は、阿米利加よりも、却つて獨逸の方が盛であります、博士キヤクデンボカーダス氏は、曾て銃猟の趣味を論じ『銃猟は一體に男子よりも、婦人の方面に於て多く其趣味を感じ、又た婦人よりも兒童の方面に於て、更に一層深き趣味を感ずるものなり』と言ふて森林と婦人との關係を論じ、又た兒童と森林との關係を論じたることがあります。

一三　敢て貴婦人諸君に望む

獨逸と申しまする國は、御承知の通り非常に森林を尊重する國柄でありまして、獨逸の今日の文明は、森林より出でたと申して居る位であります、森林なる哉、森林なる哉、眞に森林は文明の母であります、支那にても名山は偉人を生ずと申して居ります森林と申すものが、曾て幾多の偉人傑士を産みたる實例は、内外甚だ之に富みて居ります、即ち斯の如く人物自然の養成に必要を有して居る森林を味はんとするには、必らず銃猟の如き、動機を藉りて、之に接昵するのが一番早道であります。

然れども私は、今日の御婦人方に向つて、足必ずアルプス山上をお踏みなさいとは申しませぬ、又た富士山の登山を企つることをも御すゝめ致しませぬけれど少くも登山は壯遊なりと云ふとだけは、確かに御婦人の御記憶を離れぬ樣に、願はしいのであります。

私が今日の御婦人に………而かも三味線、琴、生花、茶の湯などに御熱心になる御婦人に向つて、御座敷籠城の甚だ非なることを說き、併せて野外遊戲

として、有らゆる遊戯の中より、特に銃獵の一つを選びたるものは、全く博士キヤクデンボカーダス氏の所言を、信じたる結果のみにはあらずして、私が十數年間に於ける銃獵の實驗に鑑み、銃獵其物が多く高貴なる婦人の方面、即ち教育あり、財産あり、而かも常に煩雜なる家政を料理する、御婦人及び始終文學技藝に、御熱心になる處の御婦人に向つて、多くの趣味を與ふる所の、遊戯であると云ふことを申上ぐるのであります、殊に兒童を、御教育になる所の御婦人が、兒童の趣味を御研究になる材料として、必らず御同意を願ひたいのであります、銃獵の方法は、獵器、獵具、獵裝、獵犬、獵地等は少しく間暇を求めて、別に御話を致します、但だ一言御注意を願つて置きたいことは、婦人の銃獵と申しますれば、少しく大袈裟になりますから……婦人と山野の關係位にして置て貰ひたいものであります。

（をはり）

西洋遊戯法

喜内生

旅行遊戯法

汽車列車内の遊戯

紅塵萬丈の都會を後にして、山野河海の光景迭迎に暇なき有様は、如何にも心を樂しまする種ではありますが、長時間の旅程は倦怠を生ぜしめ易く、まして少年少女達は退屈し易いものでありますから、西洋諸國に於て専ら年少者間に行はるゝ列車内遊戯中、最も興味多きものを撰みまして、徒然を慰むる材料に供したい譯であります。

（一）鐵道點取（RailWayWhist）

二人又は二人以上の者、車内に於て左右兩側二組に別れ、各自車窓より目撃したる事柄に就き得點を爭ふものにして、遊戯を始むる前に豫め某驛より某驛

までと區域を定め、且つ採點規則を設くるを必要とす、例へば次の如きものを採點規則とす、

得點數に加ふべきもの

寺院	三點
社殿	三點
森	二點
池	四點
籔	三點
小丘	二點
案山子	二點
水車	五點
名勝遊覽案內廣告	五點
旅館廣告	五點
賣藥廣告	四點
大人	二點
子供	一點
犬	一點

得點數より減ずべきもの

煙草廣告	三點
酒類廣告	四點
火葬場	五點
煙突	三點
馬	二點
荷車	三點
牛	二點
開かれたる門	三點
閉されたる門	三點

列車の勝負を決すべき驛は到着したる時、兩組各自に得點數を合算し、點數多き方を勝ちとす、時としては普通多く見請けざる或物（例へば、チョン髷、盲人、跛者、白馬の如き）を豫め特定なしおき、指定の驛に到らずとも、之を認めたる組を、其時までの得點數の如何に拘はらず、直ちに勝利者と見做すの條件を設くることあり。

（三）目擊競爭（Railway COmPetition s.）

遊戲者は車內左右兩側に別れて座を占め、豫め或事物を特定なしおき、各自の車窓より此物を多く認めたる方を勝ちとす、例へば、牛馬、牛追ふ人、馬に乘る人、自轉車乘等の如し、而して前項の遊戲と同じく、豫め某々兩驛間と、勝負の區域を定めおくこと必要なり、今まで假りに右側の組は馬三十頭を目擊

し、左側の組は二十八頭を目撃したりとせば、右側の組を勝利者とす。

(三) 觀察競爭 (Sta tion odservation.)

列車が驛に停車せる時、遊戲者は各自車窓より可及的多くの事物を看取し、列車の再び進行を始むる時、各自に筆を執て、先きに看取して記憶に存する事物を列記し、紙片の上に其の表を作る、而して凡ての遊戲者の表を檢査したる上、最も多くの事物を舉げたる者を以て勝利者となす。

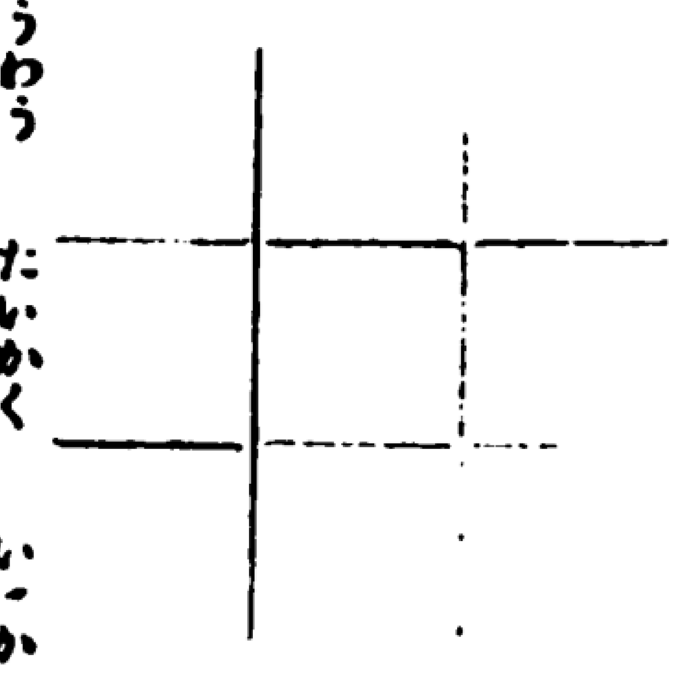
(四) 時計遊戲 (Cameswith watch.)

此の遊戲は懷中時計を利用して、之を行ふものにして、當今は何づれの列車も皆な車內に鐵道沿路地圖を揭げ、之に各停車場を詳記しあれば、遊戲者は此の地圖に依て各驛間の距離を推定し、更に此の距離より打算して、進行中の列車が次の驛に到着すべき時刻を推測するにあり、而して推測時刻をして實際の到着時刻に精確に適中せしむることは中々の難事なれば、最も之に近く推測をなしたる者を以て勝利者となす、蓋し勝利者は榮譽の記號として次驛の勝負決定に到るまで時計を保持するものとす。

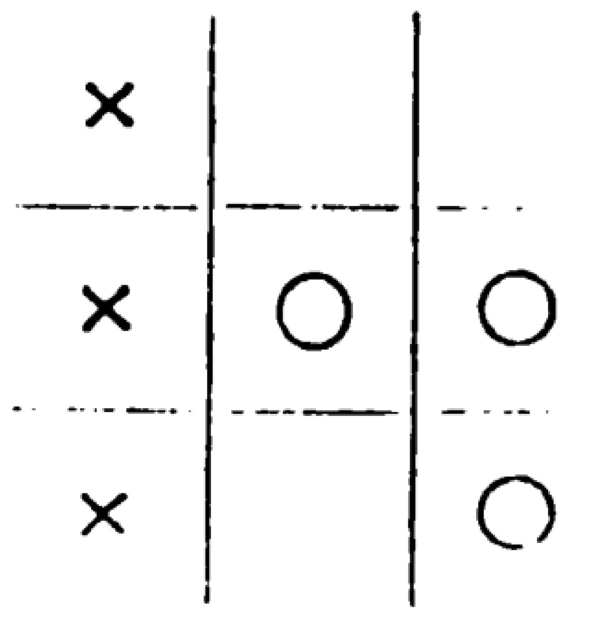
同じく時計を利用して、鐵道線路に沿ふて立てる一哩四分の一標に據りて行ふ二種の遊戲あり、一は列車が一の標を過ぎて次の標に到達する時刻を推測し他は列車進行の速力を推算するものにして、一の標より次の標に達する時間の長さを推算す、而して兩戲共必ず精確の適中を期せず、最も近く推測したる者を以て勝ちとすること前に同じ。

(五) 三つ併べ (Noughts andcrosses.)

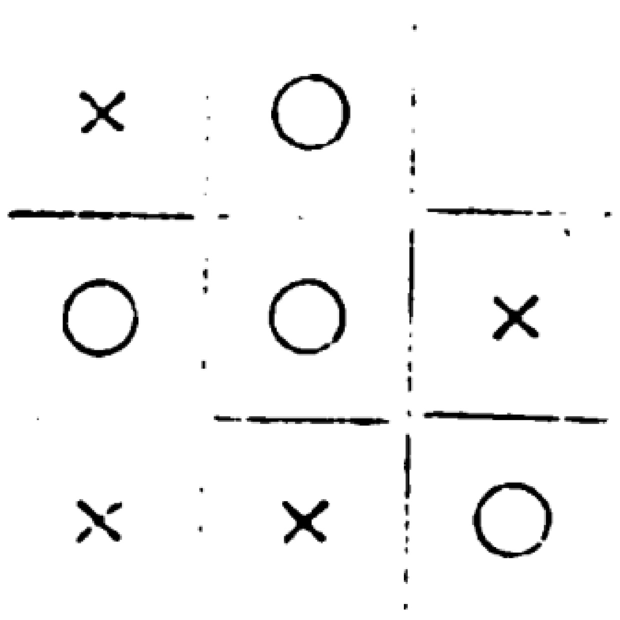
簡單なる五目併べの如きものにして、二人にて之を行ふ、先づ持ち合はせの紙に、四線を以て圖の如く九個に平方形を劃し、次に適宜に一人をノート(則ち〇印)一人をクロス(即ち×印)と定め、先手の者九個の平方形中隨意に一個の中に自個の符號を記す、次に敵手は之に應じて、相手の目的を防げて自己



の勝利を謀りつゝ、殘餘八個の平方形中隨意に一個の中に自己の符號を記す、順次此の如くなして、終に三個の同一符號の、縱横、對角の如何を問はず、一直線に併びたる方を勝ちとす。次の圖は○先手にて×の勝なり、



この圖は○先手にて勝負なしなり



（六）英佛戰鬪（French and English.）

此の遊戯を行ふには紙一枚、鉛筆一本にて事足れり先づ適宜に一人を英軍、一人を佛軍と定め、紙面の半分づゝを各自の領分とし、領内の所には鉛筆を以て數多の點を印し、此の點は幾個にても隨意にして制限なしと雖も、双方同數ならざる可からず、次に各次領分の一隅に一個の大砲を畫く（圖の巧拙は問ふ所にあらず、之に擬するまでにして、只だ大砲と假定するを得ば可なり）、最後に交戰の回數を定めたる上愈々勝負を始む、先番の者鉛筆を執て其の尖端を自領の大砲の口に置き、眼を閉ぢ敵の領分目蒐けて線を引張る、蓋し其目的は先きに記るされたる敵領内の所々に散在する點を、此の線に依て可及的多く抹殺するにありて、線は直線たるも、曲線たるも、又は幾多の迂曲を重ぬるとも、一線ならば凡て隨意なり、思ふ如く線を引き終りたる時は、眼を開き其の線の經過したる印點を檢し、悉く之を削り去る、次番の者も亦た斯の如くして、終に規定の回數を經たる時、双方領内の印點を檢し、抹殺を免かれたる點多き方、即ち敵の印點を多く抹殺したる方を勝ちとなす。

（七）「バッズ」（Buz.）

是は聲を發して數を計ふる遊戲なり、遊戲者は一所に集り相併びて坐し、一人宛順次に一の數より聲を發して計へゆくものにして、七或は七の倍數（例へば、十四、二十一、二十八、三十五、四十二等）或は七を含む數（例へば、十七、二十七、三十七、四十七等）に到る毎に其の順番に當れる者は、七と唱へずして「バッズ」と叫はざる可からず、而して之を失敗る者は一回若くは二回順番を停止され、又は他に罰を科せらる、蓋し七十の時には單に一回「バッズ」と叫び、七十一は「バッズ」一、七十二は「バッズ」二、七十三は「バッズ」三、にして七十七（ナナ）は「バッズ」「バッズ」と二回連呼するものとす。

（八） 文字遊び　(Letters with abncil.)

板紙の如き厚き紙を用意なしおき、之に都市、草花、鳥獸等の名稱を十乃至十二位、語毎に文字の排列を轉倒して記し、各遊戲者に一枚宛渡し、短き時間を限りて文字の排列轉倒したる語を元の語に直さしむるものにして、完全に直し得たる語數多き者を勝利者となす、文字排列の轉倒は例へば次の如し、

マコヨハ	ヨコハマ（横濱）
ストホギト	ホト、ギス（杜鵑）
ヤヤククシ	シヤクヤク（芍藥）
カズツミハネ	ハツカネズミ（はつか鼠）

前記と同一遊戲にして、文字の排列を轉倒する代りに、語毎に首尾の二文字を殘し中間の文字を悉く除去し、除去した文字の數を點にて表はし、元の語に直さしむるものあり、例へば、

ヤ、、コ	ヤマネコ（山猫）
ト、、シ	トヨハシ（豐橋）
オ、、、シ	オミナヘシ（女郎花）
ホ、、、ス	ホト、ギス（杜鵑）



慰み半分 鳥の飼法（二）

囀々子

◎生餌　は昔は重に鰻を用ひましたが、之れは強すぎると申すことで、唯今では大概鮠を與へます、尤も鮠の中でも鹿島鮠は鳥のために善くありません、然し雑鳥には差支ないのです、沙魚や鰍は少しは上鳥に與へましても善いと申すことです、又た「若さぎ」とか赤腹など申す魚を用ひますこともありますが、何んと申しても鮠に優ることはないのです、鮠は冬から春の間は澤山あるものですが、夏場は誠に拂底になりますゆえ、冬の間に十分貯へて置くのが宜しいです、之れは時々日に乾しまして夏の間は箱の中へ唐辛子を丸のまゝ二三本も入れて置きますれば、決して虫のつくものではありません。

◎青餌　と申すのは摺餌に青味を加へますので、大概菜を用ひますが、暑中には直ぐに腐敗いたしますので此時節には箒の實生を澤山植えて置きまして菜の代りに與へます、而し此葉とても莖からすぐ出ますものですから、能く莖を去て葉斗りを摺りて與へます。

◎箒の實生極暑の中は腐敗し易いものでして、此腐敗した餌を與へますと上鳥類は忽ち餌に離れます故、能く注意して朝と晝と二度位に摺りたてを與へます様にするのです又た箒は菜よりも青味が強いのですから其心組で加減が入ります、暑中に萬一箒の葉がないときは唐辛子の葉でも宜しいです、併しこれは餘り長く用ひてはよくないのでホンノ一時間に合せ位に與へるものです。

◎摺餌や青味は餘程氣を付けて細かに致さんと鳥に害を與へます、少しでも荒い様ですと掘りこぼすのみで、食しません、又た喰べましても糞がゆるく通じまして發病いたしますゆえ、餌を作りますときは竹箆を用意しまして摺鉢の目に入りましたものを能く掻き落し〳〵幾度も丁寧に摺るので、柔からず固からず仕上げるのでありますが、又た餌が出來ました

ら、後は能く掃除して前日の殘などが混らぬ様にするのです。

◎合はせ餌　之れは磨り餌が面倒なときに致すものでして、少し斗り小鳥を飼ふものなどには極めて便利の餌であります、其製法は先づ七分餌の鳥でありますと、生餌七匁にても七十目にても粉にいたしまして前に申したハッタイ七分に、餌一匁の割にいたして能く混合し擂に掛けまして篩ひます、與へますときに、何程なりとも青葉のもみ汁にて入用だけづゝ練りまはせばよいのです。

◎摘み餌　と申すのは、粟、稗、黍、米、餌胡磨胡桃などで飼ふのであります。

◎白餌　と申すのは磨り餌に青味を入れませんで。生ま餌と粉と胡桃の三色を合せましたものです。

◎飼ひ水　他の餌では餘り水を與へなくともよいですが、摘み餌の鳥には是非水を別の器にて與へるのです、尤も磨り餌などでも夏場には日々新らしい水を與へます。

餌の種類は先づコンナものであります、面倒なら何れも鳥屋で賣りますゆゑ少々づゝ求めて與へるもよいですが、眞の趣味は餌から手掛て與へるのにあります。扨て次は、

籠

です、之れは吾々の住家と同じ様ですから、其々鳥に應じて作りました良いものを撰ぶのが大切です、尤も良いと申して外邊の裝飾を申すのではありません、丁寧に出來て居るものを申すので、麁造のものですと時に爪を懸けて足を損じましたり、又た夜中に騒ぎましたとき飛んだ怪我を致します事などがありますゆゑ、成るべく奥行を深くして丈の高いものでヒゴ（之れは周圍の竹です）の能く削つてあるものを撰ぶのです。

塒

何の鳥でも大概七月の末から八九月十月の始めへ掛けまして、羽が拔け變りまして新たに生へます、之

れを蝴と申すので、此時になりましたら今まで五分餌で飼ひました鳥なれば六分餌位に増して與へます余り餌が强すぎましても反つて羽がちゞれましたり足を痛めたり目を損じたりいたすものですから、此加減が少し六ケ敷いのです。

羽變り

羽變りと申すのは、白く變りましたり又た柿色などに變りますので、初めは頭の羽からして少々づゝ白くなり嘴次第に白くなります、爪まで白くなりましたら眞の羽變りでして、終に一面の白に變ります、が他が變りましても嘴や爪が變らぬ中は決して羽變りではないのです、時によりますと風切り羽又た脊尻尾などから白くなることもありますが、之れは痛み羽と申して丁度人間が打身などて其處の色が變りました樣に、身の痛みから變りましたのです、痛み羽の鳥は蝴の後ちでも決して痛羽だけは失せません、之れは初心のものですと大概だまされます、柹色に變りますものは重に目白か鶇の類ですが、兎に角此の羽變りと申すのは餘り賞美致すべきものでありません、羽變りの鳥は概して弱く短命なものであります。

水浴

飼鳥は大概冬春の間は二日に一度位づゝ浴びせます、暖かになるに從ひまして毎日致させるので、水が遠くなりますと、體も汚れ自然に發病いたします、暑中などは日に二度位も行はせてよいのです、唯だ浴させる時には成るたけ手反へしを早くして籠に入れますのが肝心です。

病ひと藥

◎膈腫　年久しく飼ひます鳥は膈腫と申して、脛に皮が層りまして脛太くなりますので、自然に足が痛みだるくなります、之れを打ち捨て置きますと、終に足を損じます、此際にはよく水を浴せまして、竹篦を脛の皮の間へ挿込みまして徐々と剝がします、之れは脛のなりに造作なく取れます。

◎足腫　凡て飼ひ鳥は足腫が出勝ちなものです。

下餌が強すぎましたり、止まり木に摺餌が附着した其上へ止まりなどするから起るのであります、それ故折々生木を掛け代へてやるのも宜しいです。

◎爪　籠の中では爪の延びが早いものでして、之れが長いと籠の目などへ引掛て足を損じますから、水浴の後に程よく切るのです、餘り短いと血が出て痛みます、切りますときは裏から表へ掛けていたすのです。

◎眼の病　眼に雲かゝりて見へず、捨ておきますと左右へ傳染しまして、物を喰ふことも出來なくなります、之れは重に泉水などの鴨や、鴛鴦によくある病氣でして、適には小鳥にもあります、此時は早く古い唐墨をよく摺りまして兩眼へ二三回も塗てやりますと、全治いたすものです。

◎糞詰り　糞が詰りますと尻尾を上げて振りますゆえ直ぐに分かります、此時は蠣殼の粉を水に泡和して呑ませます、之れは「ボレイ」と申して何れの藥種店にもあるものです。

若し又た之れでも効のないときには、固紅をときまして與へると宜しいです、之れは頗る解熱の効があります。

◎餌離れ　時によりますと餌離れと申して餌を喰はぬことがあります、別して赤髭、駒鳥、小翠雀などは離れ易い鳥でして、又た連雀も時々之れに罹ります、此時には赤蚯蚓の小さいのを能く腹の土をこきまして細かに切て與へますと宜しいです、又た蕃椒を細かに切りまして水が赤くなります程に入れまして、其まゝ與へますのも一法です、又た鳥の衰弱しましたのには、鷄卵を燒拔きに致して黄味斗りを細かに餌の上へ振り掛けて與へますと、効があります。

◎細殖虫　は鳥の體に付きます虫でして、形狀至て小さい白色の虫で恰も羽虫の樣なものです、之が一トつ出來ますと一夜の中に殖えまして、羽の莖から段々と喰盡しますので、終に其鳥は落ちて仕舞ます、此虫は中々防ぎ難いものでして、昔は飼鳥家の

秘法となつて居りましたものですが、内々で此名薬を傳授いたしませう、實を申せば皺に造作もないものでして、蕣の葉を煎して洗つてやりさへすれば忽ちに驅除されます、尤も其煎汁で籠から何から一切洗ふのであります、前以て心掛まして秋に葉を採りましたら陰干にして貯へて置きまして、冬から春の間に發生したとき直ぐに此法を行ふのです、他の虫なれば尾の方から煙草の煙を二三回も吹き掛けてやりますと効があります。

◎怪我　籠の目か何にかで怪我をいたした鳥は忽ち總身腫れまして丸くなつて落ちますものです、之れは丁度人間の破傷風の樣に疵口から風が這入りまして腫れますのです、竹の篦で突き破つてやりますと全治します、尤も此時は横に破りますので決して眞直に突いてはなりませぬ。

又た足腫の痛でありますと鐵漿を沸かし附子の粉を少々入れまして冷却しましたものを局部へ屡々塗抹してやりますと治ります、又た土龍の黒燒は總て小鳥類の妙藥として水で呑ませます。

◎孑々虫と螽　濁水に發生いたします孑々虫も總て小鳥の餌といたして殊に塒にある時などは宜しいものです、又た螽の足と羽を除きまして磨餌の中へ少々づゝ磨り交ぜて與へますのも宜しいです、之れは重に荒鳥の餌付けや病鳥などに與へます。

未だ御話すれば種々の事がありますが、餘り前置きが長いと退屈ですし、又た之れ以上のことは斯道の專門とでも申す樣な譯になりますゆえ、先づ此位にして置きまして、次回から彌々鳥と飼餌とを對照して御目に掛けませう。

（つゞく）

夕月夜しほみちくらしなにはえの
あしのわかばをこゆるしらなみ

空はなほかすみもあえず風さえて
ゆきげにくもるはるのよのつき

面白き問答 答は次號に出します

○二人令嬢の年齢

甲「モシ阿方のお年はお幾ツにおなり遊ばしましたの。

乙「ハイ妾はとつて十七になりました、妾の年は至つて覺え易いのでございまして、今年は三十七年でございますから十七で、昨年は三十六年でございましたから十六で、何時も此いふ工合に明治何年といふのについて參りますので、コー申して置ますと、阿方でも後に阿方のお年はとおつしやつては、ソー〳〵お幾ツでと、直にお分りになりますのでございます。

甲「成程左樣でございますか、妾の年も覺え易いのでございますが、阿方のより少し六ケしい代りに、阿方のより確かなやうでございます。

乙「左樣でございますか、阿方はお幾ツでございます。

甲「ヘー妾は二十になりました。

乙「お二十に、ヘーソレガ何ういふ譯でお覺え易いのでございますか。

甲「妾の年は少し覺え方は阿方のよりは六ケしうございますが、阿方のは三十七年はお十七といふので、七丈でございますが妾しのは昨年は十九、今は二十、來年は二十一とすつかり分るのでございます、併し妾は最早阿方のお年は一層よく覺えらるゝことが出來ます、阿方のお年と妾の年と合しますと丁度三十七になりますから。

右の話を聞きたるが甲の二十の覺え易いといひしは、果して何をいふのであらうか、あてゝ御覽なさい、答へは次號に出します。



雑録

北米通信姉妹病院

うまのかみ

◎馬頭奇病を得て黒衣の婦人を驚かす＝馬頭此度姉妹病院を晉づれ院長たる黒衣の婦人に面會し雇員に採用して貰ひたいと頼み込みました、紹介人も無い突然の申込みで有りましたけれども、『兎に角試みませう。併し毎日の用向は手術室の整頓ですが、病室の掃除の手傳もして貰はなければなりませぬ、其等の事出來ますか』と婦人が申しまして重ねて『何も病氣を持つては居ますまいネ』と申しました。馬頭之に答へまして『力わざはどうも出來かねます、はき掃除の手傳ぐらゐならやつて見ませう。身體は至極健康で顔色を御覽になつた所で御分りでせう、おゝ忘れました、一つの病氣を持つて居ます……』婦人はすると、迷惑さうな顔を作りまして何の病氣かと問ひ返しました。馬頭此時まで、うまく廻らぬ英語を以て口重に談判をして居ましたが、更めて佛語を以て答へました『さればで御坐います、馬頭の病氣は想病（病名にして病名にあらず佛國文豪モリエールの傑作の名です）で御坐います』婦人は聞きも終らず『戯談を云ひ給ふな……併し佛語を話すは大變結構です、どうか今日只今からでも居て貰ひ申たいのです。』と申しましたので御話がまとまりまして馬頭はこゝに入りました。それ以來今日まで一ケ月ばかり病める米國婦人と健全なる佛國婦人とを研究して居ます。

◎四十五人黒衣の姉妹＝＝此病院内に看護婦の役目を務めて看護婦ではない、下女おさんのする仕事をして下女おさんでない、年頃は二十位から三四十歳位のも見えます、器量も普通と云ふよりは美貌の方

へ近い所の婦人が四十五人と云ふ大勢居ます。抑も此婦人たちの本體は何で御座いませうか。これは一身を神に捧げて一生男子には歸がないローマン、カトリック敎の尼さんたちで御坐います。尼さんと申しますとチト可笑しく聞えますが、羅甸語でヴイルジネ、佛語でスウール、英語でシスター、日本語に譯して童貞と呼ので御座ます此尼さん達は日本に於ても澤山見えます、築地の明石町にも神田の猿樂町にも居ます。尼さんに二種類御座ます、二種類ともに墨染の袖に身をやつして居ますが、一つは白い頭巾を被つて居まして、他の一つは黑いのを被つて居ます此病院に居ますのは黑頭巾の尼さん達で御座ます、

◎ムシウ、トマ。ミストル、ターマス――四十五人の黑衣の婦人の中には佛國人あり加奈太佛人あり米人あり、馬頭を呼ぶに單にムシウ或は、ミストルと呼び又はムシウ、トマ。ミストルターマス。ムシウシプヤ。ミストルシプヤ等様々に呼びます。此病院内では男でも女でも上から下まで一般に尊稱を加へて呼ぶ事になつて居ます。チヤーレとかヘンリーとか米人得意の呼棄てを一つも聞きませぬ。

◎カナダ佛人――とは英領カナダに移住して居ます佛國人及び其子孫を申しますのです。此病院に居ます四十五人の尼さんの中には、此カナダ佛人が最多數を占めて居ます。ですから佛語は勿論英語をもよく話す人が多いので御座います。然るに試みに其加奈太佛人の尼さん達に向つて『御國はどちら』と聞きますと必ず『ジユ、スウイ、フランセー（私は佛人ですと）』答へますので馬頭も始めは四十五人皆佛人かと思ひましたが『どちらから御出ですか』と聞きます時には『カナダから』と答へますので其實際がわかりましたので御座ました。佛國的愛國心をどこまでも持參してゐるきますのが、感心の至りで御座います。日本人にして支那人と間違へられて腹立たない人は有りますまいが『アメリカ人に似て居る』と譽められて、嬉しがる者も少なくはありますまい。併し日本兵が今に露國と戰爭して、大勝利を得ました後には

此樣な考へを持ちます者がだんだん少くなつてまゐりませう。

◎三階の苦み＝＝馬頭の事務分擔區域はたゞ三階だけです。二階には男患者ばかり置いて、三階には女患者ばかり置きます。總體の病室數は一百に達して、患者は大抵いつも充滿して居ます。三階の手術室で婦人患者が手術を施されたあとには、人肉の附着して居るナイフ、ピンセットなどは劍の山を思ひやらせ、金盥の中には血の池を堪へてあります。之を始末する男をメヅ(馬頭)と云ふも我ながら恐ろしい名で御坐ひます。何の因果か幾多の亞米利加婦人に三階の呵責を受けつゝ御座います。

◎日本婦人の入院＝＝只今は一人も居ませんが時々は御座います、佛國婦人は日本婦人によく似て居ます其小がらな體軀に於きましても、其目其鼻其口もとに於きましても、どうしても佛國婦人は米國婦人よりは日本婦人に近い、いな、日本婦人に同じいと云つてもよい位で御座います、先日二三の日本婦人の入院がありました。それを尼さんたちは大さう譽めて居ました。其内の秋田某婦人は入院料一週二十弗の室に居ましたが、これは、中等の入院料で御座います。男子が一室に數人入り交つて居ますれば、一週間大抵八弗位ですみます。これは當地の他の病院に比べましても高價の方で御座います、併しそれだけ病院設備が完全に行き届いて居ますのです。日本男子の入院もをりをり見えます。

◎雇人日本人五人白人二十三四人＝＝割合に少いですが、是は尼さんたちが雇入の仕事をしますからですこの病院に居る者は下女下男の末々までも、招待されて來た客のやうに皆「樣づけ」にされて、相當の部屋に寢かされて、毎日の食事は肉は勿論の事スープありカフエーありミルクありデザート、フルーツあり充分な御馳走に預つて、さうして、おまけに食事の給仕は佛國婦人にしてもらひます、殊に嬉しいのは自分の病氣の時には月給も減らされずに藥價も取られずに、入院患者同樣に丁寧に取扱つて貰ひます

ので御座います。
◎此病院は＝＝二十八年前比シャトルがまだ一寒村でありました時に、一陋屋の中に開設されましたので今日の盛大を見まするにも長い年月を費しましたので御座ます、屋は當市マヂスン街と第五街の角に巍然として立つてる大建築で御座ます、本名は慈善病院(プロビデンス、ハスピタル)ですが世間は通じて姉妹病院(シストル、ハスピタル)の名を呼びます。

動物の生殖

林　壽祐

生殖とは天の惠みで、此世界に生活する生物が、子孫を殖やして、永遠の末代まで傳えるといふことであります。生殖は生物には最も必要であるが、恰も食を索めて躰を養ふが如く、一の本能であッて、最も容易く、誰にも出來るのであります、今動物の生殖をみるに、二樣に大別されて居ります。

第一　有性生殖

有性生殖は主に高等動物の行ふものであります、高等動物は躰が成熟しますと、生殖物といふ極めて微小で、そうして極めて貴重なものを生じます、雄性生殖物を精子といひ雌性生殖物を卵子といひます、普通は精子生殖物と卵子生殖物の合體によッて、始めて新動物となるのでありますが、稀には相手の合體を要せずに卵子生殖物が、自分獨りで新動物となることがあります。精子と卵子の合體で生殖するものを兩性生殖といひ、卵子獨りで生殖するものを單性生殖といひます。

(一)兩性生殖は最もありふれたる生殖であります、けれど一ッの動物には精子生殖物か、若くは卵子生殖物のみ生ずるものと、一ッの動物は精子生殖物と卵子生殖物即ち兩方の生殖物を生ずるものとの二種類があります、前者を雌雄異體といひ後者を雌雄同體といひます。

(イ)雌雄異體は吾々人間から、獸類、鳥類、爬虫類、兩棲類、魚類(小數を除き)等は勿論、蟲類、介類

にいたるまで、動物界に大部分を占めて居ります。
(ロ)雌●雄●同●體は高等動物には極めて僅かであります
唯魚類中の烏賊魚は、古から雌雄同體といはれ、鯉、鰊、鱈、鯖、鰯、鰐魚等にも、一ッ體に、卵子と精液を具えてることがあるといふ説です。メクラウナギやサルパは、時によって、雄となつたり雌となつたりするさうです。地中や水中によく居る蚯蚓と蛭、木竹や墻の上を匐ふてる蝸牛や蛞蝓、水底を匐ッてる田螺などは、全く雌雄同體であります。人間や畜類の體内に寄生してる條蟲、肝蛭、ヂストマや、それから海水中に住んでる下等動物中には、雄雌同體が尠くないのです。

生理學上からいふと、自分の卵子へ自分の精子を合體させるは勿論、兄弟姉妹間の生殖さへ、有害であるとしてる、夫故自然に依ても、成るべく自家受精や近族間の生殖を避けさせてあります。けれども寄生動物や、運動の遅鈍なる動物は、雌雄の接近することが尠いから、已むを得ず兩性の生殖物を一體內に授けられてあるのです、併し自分の卵子へ自分の精子を合はせることは殆んどなく、大概交尾して精子だけを交換してゐます。蚯蚓や蝸牛の交尾してる所を觀た人は多いでせうが、これらの動物には雌雄の區別なく、兩方が孕んで卵を產むのであります。

(ニ)單●性●生●殖●は兩性生殖の變體でありまして、卵子は雄性生殖物の力を藉らなくとも、單獨で生殖を完ふしられる、併し此生殖は極めて稀であります、唯蜜蜂は精子を受けない卵を產んで雄蜂を孵へし。それから新らしき木の芽や野菜などに群生してる蚜虫と、水田の中に游泳してるミジンコといふ細かな動物は、暖かい夏の中に雌ばかりでドシ／＼蕃殖し、秋になッて氣候が冷やかになると、雄が出來て、精子卵子は始めて合體するのです、此他蜂や蟻の中にも單性生殖を行ふものがあります。

有性生殖を系統に表はしますと次の如くになります

- 有性生殖
  - 兩性生殖
    - 雌雄異體……人間、馬、鶏、鴨、蛇、鰐、蛙、鯛、蜻蛉、蛤、蝦、蟹
    - 雌雄同體……蚯蚓、蛭、カタツムリ、條蟲、海鞘、ツブラリア
  - 單性生殖……蜜蜂、蚜虫、ミジンコ

有性生殖の動物が新動物を産み出すのに二様の仕方があります、甲は胎生とて、人間や犬猫の如く既に親動物の形をして産み出され、乙は卵生とて鳥や蟲の如く卵子のまゝで産みおとされるのです今胎生若くは卵生に如何なる種類あるか、ざッと述べてみましよう。

(甲)胎生　人間及び獣類(二種を除き)は、何れも胎生であるが、鳥類以下は大概卵生であります。蛇類には胎生と卵生の二類があッて、南米の大蛇、我琉球の海蛇、普通各地にも見られる蝮蛇、赤棟蛇、それから熇尾蛇、ペリアス蛇、などは、胎生の方であります。鮫類にも二類あるが、サカタザメ、ホシザメ、アヲザメ、コロザメ、などは胎生する方です、で魚類中胎生を以て有名なるは海鰌であります。

カモノハシ



卵を産む獣

昆蟲類中では、前に述べた蚜蟲及び畜類に寄生する蝨蝿や蜂蝿は胎生します、就中蚜虫は吾々の見てる前でも蝨の如き兒をウヨ〳〵と産み出すのです。蜘蛛類中外國に産する蠍も、我邦普通水田に居る田螺も胎生します。而し蝮蛇や田螺は素卵生であるが、母の體内で早くも卵の中から孵へり出るのであるから、人間や獣の如き眞の胎生とは違ふのであります。

(乙)卵生　卵生する動物は其範圍頗る廣く、少數の胎生類を除けば、鳥類、爬虫類、兩棲類、魚類、昆蟲類、蠕蟲類、介類、海膽海盤車類から、珊瑚類、海綿類、等何れも卵生するのであります、獣類は殆んど胎生でありますが、唯濠西太利亞洲に産する鴨嘴獣と刺鼹鼠の二種だけは卵生であります、此二種は獣と鳥の中間者で體の形と體の毛の生えてる所は獣であるが口は嘴と

ハリムグラ



卵を産む獣

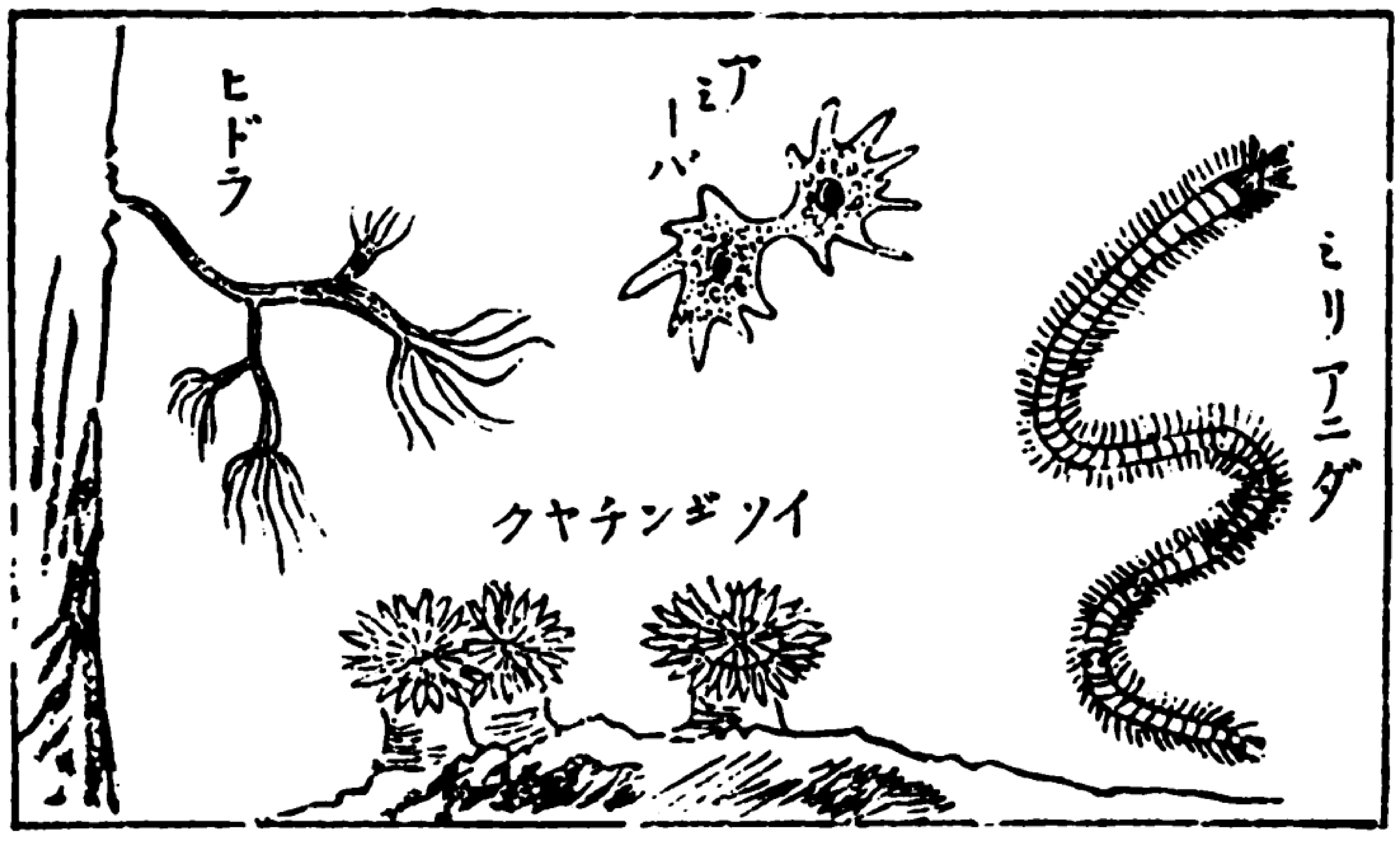
なり、雄の後足に趾を生じ、卵を產む所などは鳥と同樣であります、それのみならず糞尿を出す所も卵を出す所も一ッ穴で通じてるから、分類上一穴類といはれて居ります、併し卵から孵ッた兒をば、乳汁をのませて育てるから、哺乳類の中に編入されてあります。

第二　無性生殖

無性生殖は專ら下等動物の行ふもので、精子や卵子といふ生殖物を生ずることなく、體は單に二個或は數個に切り離れるか、又は植物の樣に芽を出して蕃殖するのですから、誠に簡便であります。

(一)**分裂生殖**　分裂生殖とは一ッの動物が成熟すると、中央から眞二ッに分裂して、二ッの新らしき動物となるので、何方が親だか、子だかわからないそれ故これらの動物は、自然に於て死ぬといふことはないのです。

海濱の岩礁の上には、菊の花に似たものが附着してて、觸ると花瓣の樣なものを引縮めてしまう、これは菟葵花といふ動物で、概ね卵を產んで生殖するのですが、時とすると體が縦に裂けて、二ッの同じ動物となります。汚れた水の中に澤山游泳してる草履虫といふ、下等の動物は横に割れて二ッの動物となり、それから夜光虫、喇叭虫、イウグリファ、アミーバの如きは、何れも横或は縦に割れて繁殖するのです。



蚯蚓に近い種類のミリアニダといふ細長い動物は、尾の方にくびれが出來て、一ッの子虫を劃け、其子虫が未だ親の體から離れない內に、更に第二の子虫が出來續いて第三第四の子の親虫が現はれ、一

匹の親の尾の方に三匹も四匹も連ッて海水中を游泳してるとがあるさうです、これは親と子の區別が判然してゐますが、矢張り一種の分裂生殖であります。條蟲は恰も一匹の虫の樣に思はれますが、實は分割された子虫が、直ぐ親から離れないで、百も千も一續きに連てるのであります、故に條虫の一節は一匹に相當さるのです。條蟲に近い種類のプラナリといふ蟲は、長さ一寸許りで、清き谷川などい岩の下に附いてゐますが、時期が來ると、體が横に分れて二つの動物となります。

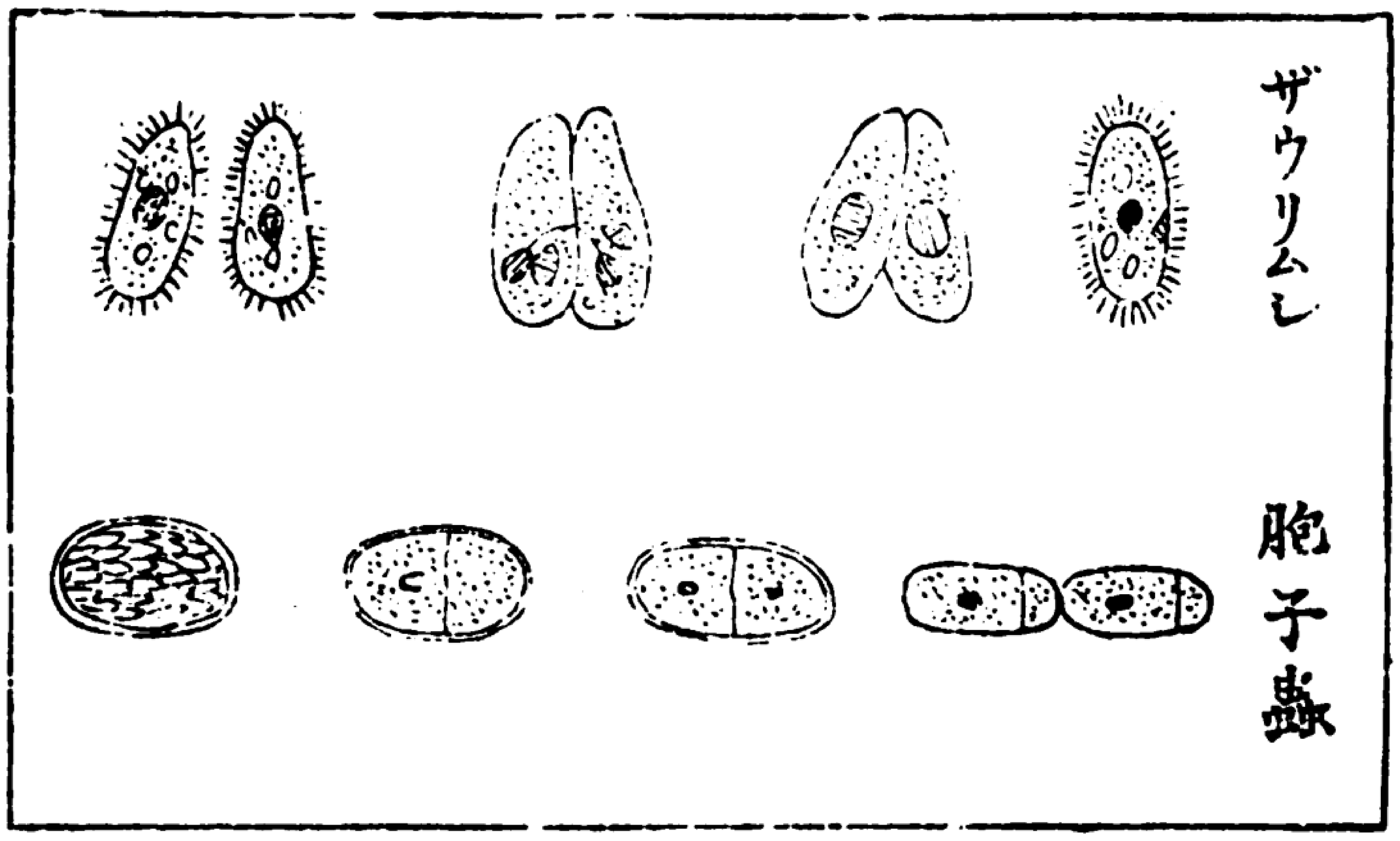
(二)胞子生殖　胞子生殖とは、一つの動物が單に多くの胞子に分裂するか、或は二つの動物が合一して後、更に多くの胞子に分裂し、胞子はやがて新動物となるのであります、下等動物中に胞子蟲類といふ一族があります、生殖しやうとする時は、二つの蟲が合體して、表面に皮を被ぶり、一ッの球となります、其球の内は多くの胞子に分裂し、皮が破れると多くの胞子は各一ッの蟲となります。或る種類には胞子の内に、更に又數個の胞子を分裂するのがあります、恰度二ッ餅を合はせて一ッとなし、之を多くの小餅に切り、其小餅を再び三ッか四ッの小餅にちぎると同理であります。胞子生殖をなす動物は、胞子蟲類(蜻蛉、甲虫、蚯蚓などに寄生してる)の外夜光虫、アミガヒの中にもあるさうです。

(三)發芽生殖　發芽生殖とは、動物が成熟すると、仙人掌や青芋の如く、芽を出して蕃殖するので、最も僅かしかないのです。池や溝の水草にはヒドラといふ丼の如き動物が附いてゐます、此動物は夏の間は芽を發し、時とすると芽から更に芽は發し、親も子も孫も一連になつてゐることがあります。此他發芽する動物といへば海鞘類、苔蘚類、水螅類、珊瑚類、海綿類、原生動物(喇叭虫)などにあります。無性生殖の系統を表はせば左の如くになります。

無性生殖
- 分裂生殖……莵葵蒂、ゾウリ虫、ラッパ虫
- 發芽生殖……ヒドラ、珊瑚、海綿
- 胞子生殖……胞子蟲類、夜光虫

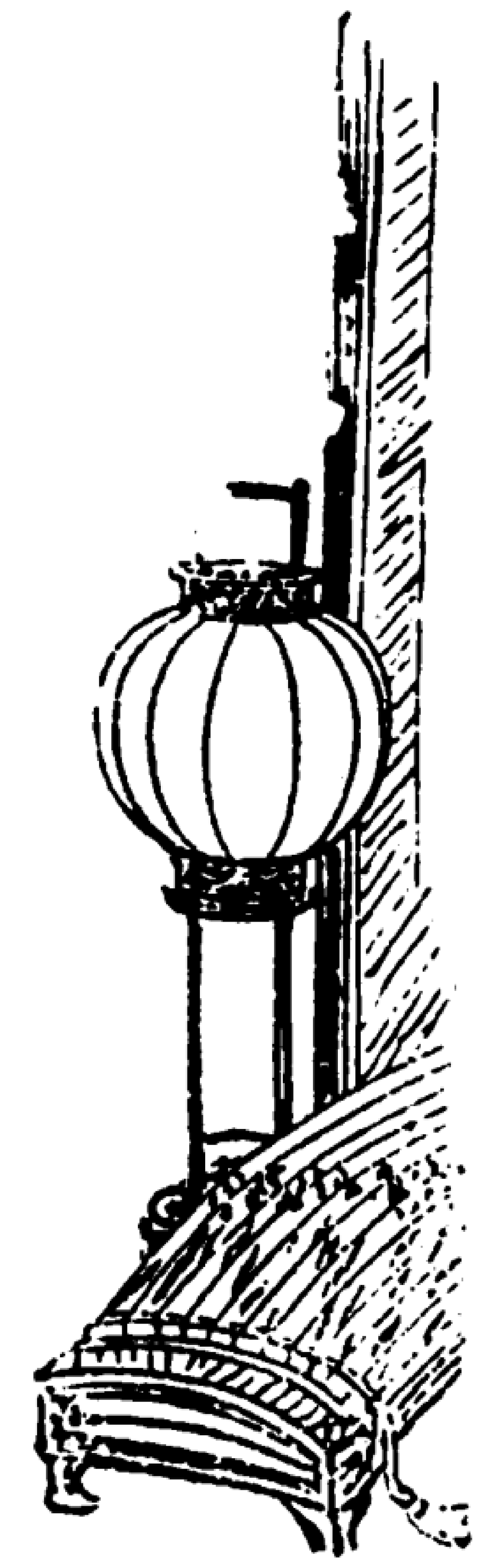
接合　高等動物は、雌雄の二動物が交接して、雄

動物の精子は、雄動物の體内にある、卵子に合體して、新動物を生せしめるのですが、彼の草履虫、夜光虫、胞子蟲などには、體全體が僅かに一ッの細胞であるから、精子だの卵子だのといふ復雑なものは素より無いので唯體が成熟すると、眞二ッに分裂して、増殖するのであります。けれども分裂する前に、二ッの動物は、殆んど交接と同様なことを爲します。



草履虫は暫くの間口部の所を以て、互に接合せしめ、夜光虫は二虫全く合一して一體となりそれから後互に引離れて、始めの如く二虫となりそうして二虫は各二ッに分裂して、新しき二ッづゝの動物となるのであります。何の爲めにかやうに一時のみ密接するかといふに、其接合或は合體して居る間に、核とて體内の重要なる部分を、互に半分づゝ交換するのであります、今接合或は合體しない前の核を假りに彩色して、一方を黄色とし一方を青色とすれば、接合或は合體した後の核は兩方共黄色と青色の混合、即ち綠色に變化するのです。胞子蟲にいたつては、二虫合體するの後分離することなく、其儘一ッの動物體となり、それから更に胞子といふ數多の生殖體に分成し、胞子は後に各一個の新動物となるのであります。自然の神は生物を繁榮せしめやうとして、極微の動物にまで、妙味をもたせてあるのです。

（終）



し、左側の組は二十八頭を目撃したりとせば、右側の組を勝利者とす。

(三) 觀察競爭 (Station odservation.)

列車が驛に停車せる時、遊戯者は各自車窓より可及的多くの事物を看取し、列車の再び進行を始むる時、各自に筆を執て、先きに看取して記憶に存する事物を列記し、紙片の上に其の表を作る、而して凡ての遊戯者の表を檢査したる上、最も多くの事物を擧げたる者を以て勝利者となす。

(四) 時計遊戯 (Cameswith watch.)

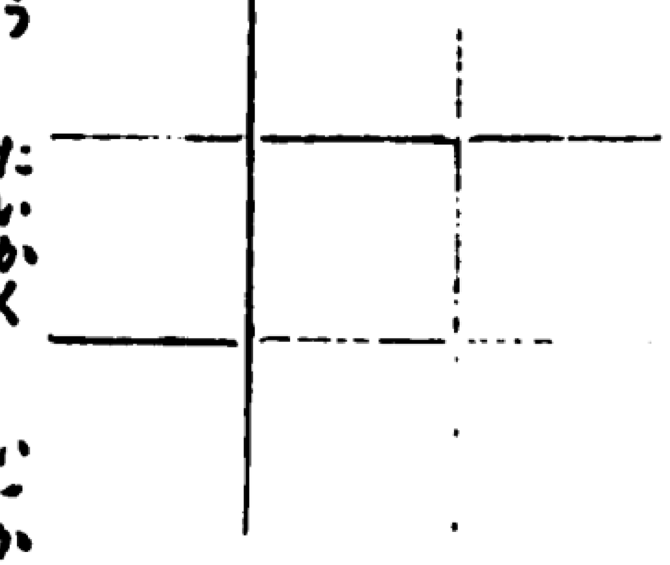
此の遊戯は懷中時計を利用して、之を行ふものにして、當今は何づれの列車も皆な車内に鐵道沿路地圖を揭げ、之に各停車場を詳記しあれば、遊戯者は此の地圖に依て各驛間の距離を推定し、更に此の距離より打算して、進行中の列車が次の驛に到着すべき時刻を推測するにあり、而して推測時刻をして實際の到着時刻に精確に適中せしむることは中々の難事なれば、最も之に近く推測をなしたる者を以て勝利者となす、蓋し勝利者は榮譽の記號として次驛の勝負決定に到るまで時計を保持するものとす。

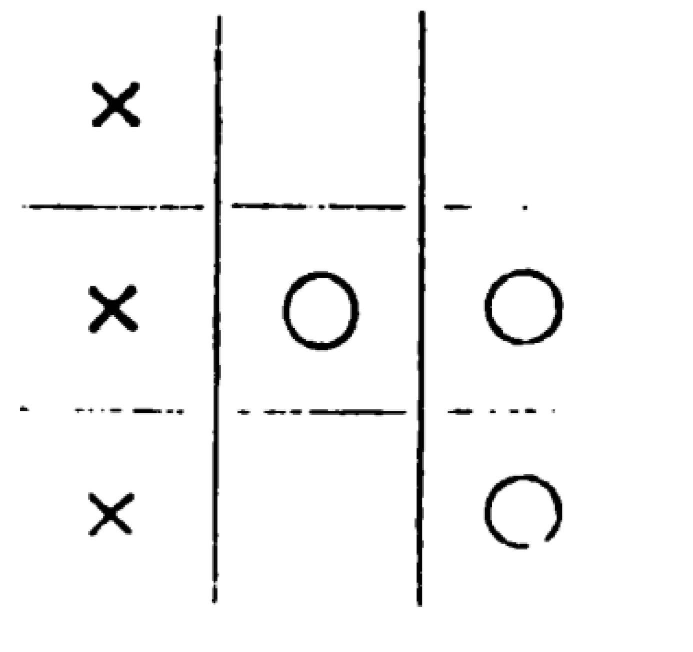
同じく時計を利用して、鐵道線路に沿ふて立てる一哩四分の一標に據りて行ふ二種の遊戯あり、一は列車が一の標を過ぎて次の標に到達する時刻を推測し他は列車進行の速力を推算するものにして、一の標より次の標に達する時間の長さを推算す、而して両戯共必ず精確の適中を期せず、最も近く推測したる者を以て勝ちとすること前に同じ。

(五) 三つ併べ (Noughts andcrosses.)

簡單なる五目併べの如きものにして、二人にて之を行ふ、先づ持ち合はせの紙に、四線を以て圖の如く九個に平方形を劃し、次に適宜に一人をノート(則ち〇印)一人をクロス(即ち×印)と定め、先手の者九個の平方形中随意に一個の中に自個の符號を記す、次に敵手は之に應じて、相手の目的を防げて自己

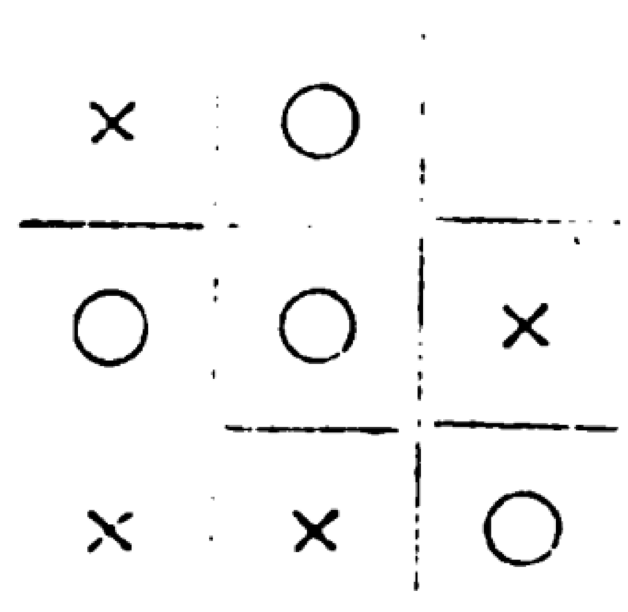
の勝利を謀りつゝ、殘餘八個の平方形中隨意に一個の中に自己の符號を記す、順次此の如くなして、終に三個の同一符號の、縱横、對角の如何を問はず、一直線に併びたる方を勝ちとす。次の圖は○先手にて×の勝なり、





この圖は○先手にて勝

負なしなり



（六）英佛戰鬪 (French and English.)

此の遊戯を行ふには紙一枚、鉛筆一本にて事足れり先づ適宜に一人を英軍、一人を佛軍と定め、紙面の半分づゝを各自の領分とし、領内の所には鉛筆を以て數多の點を印し、此の點は幾個にても隨意にして制限なしと雖も、双方同數ならざる可からず、次に各々領分の一隅に一個の大砲を畫く（圖の巧拙は問ふ所にあらず、之に擬するまでにして、只だ大砲と假定するを得ば可なり）、最後に交戰の回數を定めたる上愈々勝負を始む、先番の者鉛筆を執て其の尖端を自領の大砲の口に置き、眼を閉ぢ敵の領分目蒐けて線を引張る、蓋し其目的は先きに記るされたる敵領内の所々に散在する點を、此の線に依て可及的多く抹殺するにありて、線は直線たるも、曲線たるも、又は幾多の迂曲を重ぬるとも、一線ならば凡て隨意なり、思ふ如く線を引き終りたる時は、眼を開き其の線の經過したる印點を檢し、悉く之を削り去る、次番の者も亦た斯の如くして、終に規定の回數を經たる時、双方領内の印點を檢し、抹殺を免かれたる點多き方、即ち敵の印點を多く抹殺したる方を勝ちとなす。

（七）「バッズ」(Buz.)

是は聲を發して數を計ふる遊戯なり、遊戯者は一所に集り相併びて坐し、一人宛順次に一の數より聲を發して計へゆくものにして、七或は七の倍數（例へば、十四、二十一、二十八、三十五、四十二等）或は七を含む數（例へば、十七、二十七、三十七、四十七等）に到る每に其の順番に當れる者は、七と唱へずして「バッズ」と叫はざる可からず、而して之を失敗る者は一回若くは二回順番を停止され、又は他に罰を科せらる、蓋し七十の時には單に一回「バッズ」と叫び、七十一は「バッズ」一、七十二は「バッズ」二、七十三は「バッズ」三、にして七十七（77）は「バッズ」「バッズ」と二回連呼するものとす。

（八） 文字遊び （Letters with abncil.）

板紙の如き厚き紙を用意なしおき、之に都市、草花、鳥獸等の名稱を十乃至十二位、語每に文字の排列を轉倒して記し、各遊戯者に一枚宛渡し、短き時間を限りて文字の排列轉倒したる語を元の語に直さしむ

るものにして、完全に直し得たる語數多き者を勝利者となす、文字排列の轉倒は例へば次の如し、

マコヨハ　ヨコハマ（横濱）
ストホギト　ホト、ギス（杜鵑）
ヤヤククシ　シヤクヤク（芍薬）
カズツミハネ　ハツカネズミ（はつか鼠）

前記と同一遊戯にして、文字の排列を轉倒する代りに、語每に首尾の二文字を殘し中間の文字を悉く除去し、除去した文字の數を點にて表はし、元の語に直さしむるものあり、例へば、

ヤ、、コ　ヤマネコ（山猫）
ト、、シ　トヨハシ（豊橋）
オ、、、シ　オミナヘシ（女郎花）
ホ、、、ス　ホト、ギス（杜鵑）



慰み半分 鳥の飼法（二）

囀々子

◎生餌　は昔は重に鰻を用ひましたが、之れは強すぎると申すことで、唯今では大概鮠を與へます、尤も鮠の中でも鹿島鮠は鳥のために善くありません、然し雜鳥には差支ないのです、沙魚や鰍は少しは上鳥に與へましても善いと申すことです、又た「若さぎ」とか赤腹など申す魚を用ひますこともありますが、何んと申しても鮠に優ることはないのです、鮠は冬から春の間は澤山あるものですが、夏場は誠に拂底になりますゆえ、冬の間に十分貯へて置くのが宜しいです、之れは時々日に乾しまして夏の間は箱の中へ唐辛子を丸のまゝ二三本も入れて置きますれば、決して虫のつくものではありません。

◎青餌　と申すのは摺餌に青味を加へますので、大概菜を用ひますが、暑中には直ぐに腐敗いたしますので此時節には箒の實生を澤山植えて置きまして菜の代りに與へます、而し此葉とても莖からすぐ出ますものですから、能く莖を去て葉斗りを摺りて與へます。

◎箒の實生極暑の中は腐敗し易いものでして、此腐敗した餌を與へますと上鳥類は忽ち餌に離れます故、能く注意して朝と晝と二度位に摺りたてを與へます樣にするのです又た箒は菜よりも青味が強いのですから其心組で加減が入ります、暑中に萬一箒の葉がないときは唐辛子の葉でも宜しいです、併しこれは餘り長く用ひてはよくないのでホンノ一時間に合せ位に與へるものです。

◎摺餌や青味は餘程氣を付けて細かに致さんと鳥に害を與へます、少しでも荒い樣ですと掘りこぼすのみで、食しません、又た喰べましても糞がゆるく通じまして發病いたしますゆえ、餌を作りますときは竹箆を用意しまして摺鉢の目に入りましたものを能く掻き落し〳〵幾度も丁寧に摺るので、柔からず固からず仕上げるのであります、又た餌が出來ました

ら、後は能く掃除して前日の殘などが混らぬ樣にするのです。

◎合はせ餌　之れは磨り餌が面倒なときに致すものでして、少し斗り小鳥を飼ふものなどには極めて便利の餌であります、其製法は先づ七分餌の鳥でありますと、生餌七匁にても七十目にても粉にいたしまして前に申したハッタイ七分に　餌一匁の割にいたして能く混合し磨に掛けまして篩ひます、與へますときに、何程なりとも青葉のもみ汁にて入用だけづゝ練りまはせばよいのです。

◎摘み餌　と申すのは、粟、稗、黍、米、餌胡麿胡桃などで飼ふのであります。

◎白餌　と申すのは磨り餌に青味を入れませんで。生ま餌と粉と胡桃の三色を合せましたものです。

◎飼ひ水　他の餌では餘り水を與へなくともよいですが、摘み餌の鳥には是非水を別の器にて與へるのです、尤も磨り餌などでも夏場には日々新らしい水を與へます。

餌の種類は先づコンナものであります、面倒なら何れも鳥屋で賣りますゆえ少々づゝ求めて與へるもよいですが、眞の趣味は餌から手掛て與へるのにあります。扨て次は、

籠

です、之れは吾々の住家と同じ樣ですから、其々鳥に應じて作りました良いものを撰ぶのが大切です、尤も良いと申して外邊の裝飾を申すのではありません、丁寧に出來て居るものを申すので、麁造のものですと時に爪を懸けて足を損じましたり、又た夜中に騷ぎましたとき飛んだ怪我を致します事などがありますゆゑ、成るべく奥行を深くして丈の高いものでヒゴ（之れは周圍の竹です）の能く削つてあるものを撰ぶのです。

塒

何の鳥でも大概七月の末から八九月十月の始めへ掛けまして、羽が拔け變りまして新たに生へます、之

れを塒と申すので、此時になりましたら今まで五分餌で飼ひました鳥なれば六分餌位に増して與へます余り餌が強すぎましても反つて羽がちゞれましたり足を痛めたり目を損じたりいたすものですから、此加減が少し六ヶ敷いのです。

羽變り

羽變りと申すのは、白く變りましたり又た柿色などに變りますので、初めは頭の羽からして少々づゝ白くなり嘴次第に白くなります、爪まで白くなりましたら眞の羽變りでして、終に一面の白に變ります、が他が變りましても嘴や爪が變らぬ中は決して羽變りではないのです、時によりますと風切り羽又た脊尻尾などから白くなることもありますが、之れは痛み羽と申して丁度人間が打身などて其處の色が變りました樣に、身の痛みから變りましたのです、痛み羽の鳥は塒の後ちでも決して痛羽だけは失せません、之れは初心のものですと大概だまされます、柹色に變りますものは重に目白か鶫の類ですが、兎に角此の羽變りと申すのは餘り賞美致すべきものでありません、羽變りの鳥は概して弱く短命なものであります。

水浴

飼鳥は大概冬春の間は二日に一度位づゝ浴びせます、暖かになるに從ひまして毎日致させるので、水が遠くなりますと、體も汚れ自然に發病いたします、暑中などは日に二度位も行はせてよいのです、唯だ浴させる時には成るたけ手反へしを早くして籠に入れますのが肝心です。

病ひと藥

◎臑腫　年久しく飼ひます鳥は臑腫と申して、脛に皮が層りまして脛太くなりますので、自然に足が痛みだるくなります、之れを打ち捨て置きますと、終に足を損じます、此際にはよく水を浴せまして、竹箆を脛の皮の間へ挿込みまして徐々と剝がします、之れは脛のなりに造作なく取れます。

◎足腫　凡て飼ひ鳥は足腫が出勝ちなものです。

下餌が強すぎましたり、止まり木に摺餌が附着した其上へ止まりなどするから起るのでありま す、それ故折々生木を掛け代へてやるのも宜しいです。

◎爪　籠の中では爪の延びが早いものでして、之れが長いと籠の目などへ引掛て足を損じますから、水浴の後に程よく切るのです、餘り短いと血が出て痛みます、切りますときは裏から表へ掛けていたすのです。

◎眼の病　眼に雲かゝりて見へず、捨ておきますと左右へ傳染しまして、物を喰ふことも出來なくなります、之れは重に泉水などの鴨や、鴛鴦によくある病氣でして、適には小鳥にもあります、此時は早く古い唐墨をよく摺りまして兩眼へ二三回も塗てやりますと、全治いたすものです。

◎糞詰り　糞が詰りますと尻尾を上げて振りますゆえ直ぐに分かります、此時は蠣殻の粉を水に泡和して呑ませます、之れは「ボレイ」と申して何れの薬種店にもあるものです。

若し又た之れでも効のないときには、固紅をときまして與へると宜しいです、之れは頗る解熱の効があります。

◎餌離れ　時によりますと餌離れと申して餌を喰はぬことがあります、別して赤鶲、駒鳥、小翠雀などは離れ易い鳥でして、又た連雀も時々之れに罹ります、此時には赤蚯蚓の小さいのを能く腹の土をこきまして細かに切て與へますと宜しいです、又た番椒を細かに切りまして水が赤くなります程に入れまして、其まゝ與へますのも一法です、又た鳥の衰弱しましたのには、鶏卵を燒抜きに致して黄味斗りを細かに餌の上へ振り掛けて與へますと、効があります。

◎細殖虫　は鳥の體に付きます虫でして、形狀至て小さい白色の虫で恰も羽虫の樣なものです、之が一トつ出來ますと一夜の中に殖えまして、羽の茎から段々と喰盡しますので、終に其鳥は落ちて仕舞ます、此虫は中々防ぎ難いものでして、昔は飼鳥家の

秘法となつて居りましたものですが、内々で此名薬を傳授いたしませう、實を申せば誠に造作もないものでして、蕣の葉を煎して洗つてやりさへすれば忽ちに驅除されます、尤も其煎汁で籠から何から一切洗ふのでありいます、前以て心掛まして秋に葉を採りましたら陰干にして貯へて置きまして、冬から春の間に發生したとき直ぐに此法を行ふのです、他の虫なれば尾の方から煙草の煙を二三回も吹き掛けてやりますと効があります。

◎怪我　籠の目か何にかで怪我をいたした鳥は忽ち總身腫れまして丸くなつて落ちますものです、之れは丁度人間の破傷風の樣に疵口から風が這入りまして腫れますのです、竹の箆で突き破つてやりますと全治します、尤も此時は横に破りますので決して眞直に突いてはなりませぬ。

又た足腫の痛でありますと鐵漿を沸かし附子の粉を少々入れまして冷却しましたものを局部へ屢々塗抹してやりますと治ります、又た土龍の黒燒は總て小鳥類の妙薬として水で呑ませます。

◎孑々虫と蝗　濁水に發生いたします孑々虫も總て小鳥の餌といたして殊に塒にある時などは宜しいものです、又た蝗の足と羽を除きまして磨餌の中へ少々づゝ磨り交ぜて與へますのも宜しいです、之れは重に荒鳥の餌付けや病鳥などに與へます。

未だ御話すれば種々の事がありますが、餘り前置きが長いと退屈ですし、又た之れ以上のことは斯道の專門とでも申す樣な譯になりますゆえ、先づ此位にして置きまして、次回から彌々鳥と飼餌とを對照して御目に掛けませう。

（つゞく）

夕月夜しほみちくらし泣にはえの
あしのわかばをこゆるしらなみ

空はなほかすみもあえず風さえて
ゆきげにくもるはるのよのつき

面白き問答 答は次號に出します

○二人令嬢の年齢

甲「モシ阿方のお年はお幾ツにおなり遊ばしましたの。

乙「ハイ妾はとつて十七になりました、妾の年は至つて覺え易いのでございまして、今年は三十七年でございますから十七で、昨年は三十六年でございましたから十六で、何時も此いふ工合に明治何年といふのについて參りますので、コー申して置ますと、何方でも後に阿方のお年はとおつしやつては、ソー〳〵お幾ツでと、直にお分りになりますのでございます。

甲「成程左樣でございますか、妾の年も覺え易いのでございますが、阿方のより少し六ケしい代りに、阿方のより確かなやうでございます。

乙「左樣でございますか、阿方はお幾ツでございます。

甲「ヘー妾は二十になりした。

乙「お二十に、ヘーソレガ何いふ譯でお覺え易いのでございますか。

甲「妾の年は少し覺え方は阿方のよりは六ケしうございますが、阿方のは三十七年はお十七といふので、七丈でございますが妾しのは昨年は十九、今年は二十、來年は二十一とすつかり分るのでございます、併し妾は最早阿方のお年は一層よく覺えられることが出來ます、阿方のお年と妾の年と合しますと丁度三十七になりますから。

右の話を聞きたるが甲の二十の覺え易いといひしは、果して何をいふのであらうか、あてゝ御覽なさい、答へは次號に出します。



雜録

北米通信姉妹病院

うまのかみ

◎馬頭奇病を得て黑衣の婦人を驚かす＝馬頭此度姉妹病院を音づれ院長たる黑衣の婦人に面會し雇員に採用して貰ひたいと賴み込みました、紹介人も無い突然の申込みで有りましたけれども『兎に角試みませう。併し毎日の用向は手術室の整頓ですが、病室の掃除の手傳もして貰はなければなりませぬ、其等の事出來ますか』と婦人が申しまして重ねて『何も病氣を持つては居ますまいネ』と申しました。馬頭之に答へまして『力わざはどうも出來かねます、はき掃除の手傳ぐらゐならやつて見ませう。身體は至極健康で顏色を御覽になつた所で御分りでせう、おヽ忘れました、一つの病氣を持つて居ます……』婦人はすると、迷惑さうな顏を作りまして何の病氣かと問ひ返しました。馬頭此時まで、うまく廻らぬ英語を以て口重に談判をして居ましたが、更めて佛語を以て答へました『されば御坐います、馬頭の病氣は　想　病（病名にして病名にあらず佛國文豪モリエールの傑作の名です）で御坐います』婦人は聞きも終らず『戯談を云ひ給ふな……併し佛語を話すは大變結構です、どうか今日只今からでも居て貰ひ申たいのです。』と申しましたので御話がまとまりまして馬頭はこゝに入りました。それ以來今日まで一ケ月ばかり病める米國婦人と健全なる佛國婦人とを研究して居ます。

◎四十五人黑衣の姉妹＝此病院内に看護婦の役目を務めて看護婦ではない、下女おさんのする仕事をして下女おさんでない、年頃は二十位から三四十歳位のも見えます、器量も普通と云ふよりは美貌の方

へ近い所の婦人が四十五人と云ふ大勢居ます。抑も此婦人たちの本體は何で御座いませうか。これは一身を神に捧げて一生男子には歸がないローマン、カトリック敎の尼さんたちで御坐います。尼さんと申しますとチト可笑しく聞えますが、羅甸語でヴイルジネ、佛語でスウール、英語でシスター、日本語に譯して童貞と呼ので御座ます此尼さん達は日本に於ても澤山見えます、築地の明石町にも神田の猿樂町にも居ます。尼さんに二種類御座ます、二種類ともに墨染の袖に身をやつして居ますが、一つは白い頭巾を被つて居まして、他の一つは黑いのを被つて居ます此病院に居ますのは黑頭巾の尼さん達で御座ます、

◎ムシウ、トマ。ミストル、ターマス――四十五人の黑衣の婦人の中には佛國人あり加奈太佛人あり米人あり、馬頭を呼ぶに單にムシウ或は、ミストルと呼び又はムシウ、トマ。ミストルターマス。ムシウシブヤ。ミストルシブヤ等樣々に呼びます。此病院内では男でも女でも上から下まで一般に尊稱を加へて呼ぶ事になつて居ます。チヤーレとかヘンリーとか米人得意の呼棄てを一つも聞きませぬ。

◎カナダ佛人――とは英領カナダに移住して居ます佛國人及び其子孫を申しますのです。此病院に居ます四十五人の尼さんの中には、此カナダ佛人が最多數を占めて居ます。ですから佛語は勿論英語をもよく話す人が多いので御座います。然るに試みに其加奈太佛人の尼さん達に向つて『御國はどちら』と聞きますと必ず『ジユ、スウイ、フランセー（私は佛人ですと）』答へますので馬頭も始めは四十五人皆佛人かと思ひましたが『どちらから御出ですか』と聞きます時には『カナダから』と答へますので其實際がわかりましたので御座ました。佛國的愛國心をどこまでも持參してあるきますのが、感心の至りで御座います。日本人にして支那人と間違へられて腹立たない人は有りますまいが『アメリカ人に似て居る』と褒められて、嬉しがる者も少なくはありますまい。併し日本兵が今に露國と戰爭して、大勝利を得ました後には

此樣な考へを持ちます者がだんだん少くなつてまゐりませう。

◎三階の苦み＝＝馬頭の事務分擔區域はたゞ三階だけです。二階には男患者ばかり置いて、三階には女患者ばかり置きます。總體の病室數は一百に達して、患者は大抵いつも充滿して居ます。三階の手術室で婦人患者が手術を施されたあとには、人肉の附着して居るナイフ、ピンセットなどは劍の山を思ひやらせ、金盥の中には血の池を堪へてあります。之を始末する男をメヅ（馬頭）と云ふも我ながら恐ろしい名で御坐います。何の因果か幾多の亞米利加婦人に三階の呵責を受けつゝ御坐います。

◎日本婦人の入院＝＝只今は一人も居ませんが時々は御座います、佛國婦人は日本婦人によく似て居ます其小がらな體軀に於きましても、其目其鼻其口もとに於きましても、どうしても佛國婦人は米國婦人よりは日本婦人に近い、いな、日本婦人に同じいと云つてもよい位で御座います、先日二三の日本婦人の入院がありました。それを尼さんたちは大さう譽めて居ました。其内の秋田某婦人は入院料一週二十弗の室に居ましたが、これは、中等の入院料で御座います。男子が一室に數人入り交つて居ますれば、一週間大抵八弗位ですみます。これは當地の他の病院に比べましても高價の方で御座います、併しそれだけ病院設備が完全に行き届いて居ますのです。日本男子の入院もをりをり見えます。

◎雇人日本人五人白人二十三四人＝＝割合に少いですが、是は尼さんたちが雇入の仕事をしますからですこの病院に居る者は下女下男の末々までも、招待されて來た客のやうに皆「樣づけ」にされて、相當の部屋に寢かされて、毎日の食事は肉は勿論の事スープありカフエーありミルクありデザート、フルーツあり充分な御馳走に預つて、さうして、おまけに食事の給仕は佛國婦人にしてもらひます、殊に嬉しいのは自分の病氣の時には月給も減らされずに藥價も取られずに、入院患者同樣に丁寧に取扱つて貰ひます

のでございます。
◎此病院は＝＝二十八年前此シャトルがまだ一寒村でありました時に、一陋屋の中に開設されましたので今日の盛大を見まするにも長い年月を費しましたので御座ます、屋は當市マヂスン街と第五街の角に巍然として立つてる大建築で御座ます、本名は慈善病院（プロビデンス、ハスピタル）ですが世間は通じて姉妹病院（シストル、ハスピタル）の名を呼びます。

動物の生殖

林壽祐

生殖とは天の惠みで、此世界に生活する生物が、子孫を殖やして、永遠の末代まで傳えるといふことであります。生殖は生物には最も必要であるが、恰も食を索めて躰を養ふが如く、一の本能であッて、最も容易く、誰にも出來るのであります、今動物の生殖をみるに、二樣に大別されて居ります。

第一　有性生殖

◎◎◎◎有性生殖は主に高等動物の行ふものであります、高等動物は躰が成熟しますと、生殖物といふ極めて微小で、そうして極めて貴重なものを生じます、雄性生殖物を精子といひ雌性生殖物を卵子といひます、普通は精子生殖物と卵子生殖物の合體によッて、始めて新動物となるのでありますが、稀には相手の合體を要せずに卵子生殖物が、自分獨りで新動物となることがあります。精子と卵子の合體で生殖するものを兩性生殖といひ、卵子獨りで生殖するものを單性生殖といひます。

（二）兩性生殖は最もありふれたる生殖であります、けれど一ツの動物には精子生殖物か、若くは卵子生殖物のみ生ずるものと、一ツの動物は精子生殖物と卵子生殖物即ち兩方の生殖物を生ずるものとの二種類があります、前者を雌雄異體といひ後者を雌雄同體といひます。

（イ）雌雄異體は吾々人間から、獸類、鳥類、爬虫類、兩棲類、魚類（小數を除き）等は勿論、蟲類、介類

にいたるまで、動物界に大部分を占めて居ります。

(ロ)**雌雄同體**は高等動物には極めて僅かでありますが唯魚類中の烏賊魚は、古から雌雄同體といはれ、鯉、鰊、鱈、鯖、鰯、鱘魚等にも、一ッ體に、卵子と精液を具へてることがあるといふ説です。メクラウナギやサルパは、時によッて、雄となつたり雌となつたりするさうです。地中や水中によく居る蚯蚓と蛭、木竹や墻の上を匍ふてる蝸牛や蛞蝓、水底を匍ッてる田螺などは、全く雌雄同體であります。人間や畜類の體内に寄生してる條蟲、肝蛭、ヂストマや、それから海水中に住んでる下等動物中には、雌雄同體が尠くないのです。

生理學上からいふと、自分の卵子へ自分の精子を合體させるは勿論、兄弟姉妹間の生殖さへ、有害であるとしてる、夫故自然に依ても、成るべく自家受精や近族間の生殖を避けさせてあります。けれども寄生動物や、運動の遅鈍なる動物は、雌雄の接近することが尠いから、已むを得ず兩性の生殖物を一體内に授けられてあるのです、併し自分の卵子へ自分の精子を合はせることは殆んどなく、大概交尾して精子だけを交換してゐます。蚯蚓や蝸牛の交尾してる所を觀た人は多いでせうが、これらの動物には雌雄の區別なく、兩方が孕んで卵を産むのであります。

(ニ)**單性生殖**は兩性生殖の變體でありまして、卵子は雄性生殖物の力を藉らなくとも、單獨で生殖を完ふしられる、併し此生殖は極めて稀であります、唯蜜蜂は精子を受けない卵を産んで雄蜂を孵へし。それから新らしき木の芽や野菜などに群生してる蚜虫と、水田の中に游泳してるミジンコといふ細かな動物は、暖かい夏の中に雌ばかりでドシ〳〵蕃殖し、秋になッて氣候が冷やかになると、雄が出來て、精子卵子は始めて合體するのです、此他蜂や蛾の中にも單性生殖を行ふものがあります。

有性生殖を系統に表はしますと次の如くになります

- 有性生殖
  - 兩性生殖
    - 雌雄異體……人間、馬、鵜、鴨、蛇、龜、蛙、鯛、蜻蛉、蛤、蝦、蟹
    - 雌雄同體……蚯蚓、蛭、カタツムリ、條蟲、海鞘、ツブラリア
  - 單性生殖…………蜜蜂、蚜虫、ミジンコ

匹の親の尾の方に三匹も四匹も連ッて海水中を游泳してるとがあるさうです、これは親と子の區別が判然してゐますが、矢張り一種の分裂生殖であります。條蟲は恰も一匹の虫の様に思はれますが、實は分割された子虫が、直ぐ親から離れないで、百も千も一續きに連てるのであります、故に條虫の一節は一匹に相當さるのです。條蟲に近い種類のプラナリといふ蟲は、長さ一寸許りで、清き谷川などい岩の下に附いてゐますが、時期が來ると、體が横に分れて二つの動物となります。

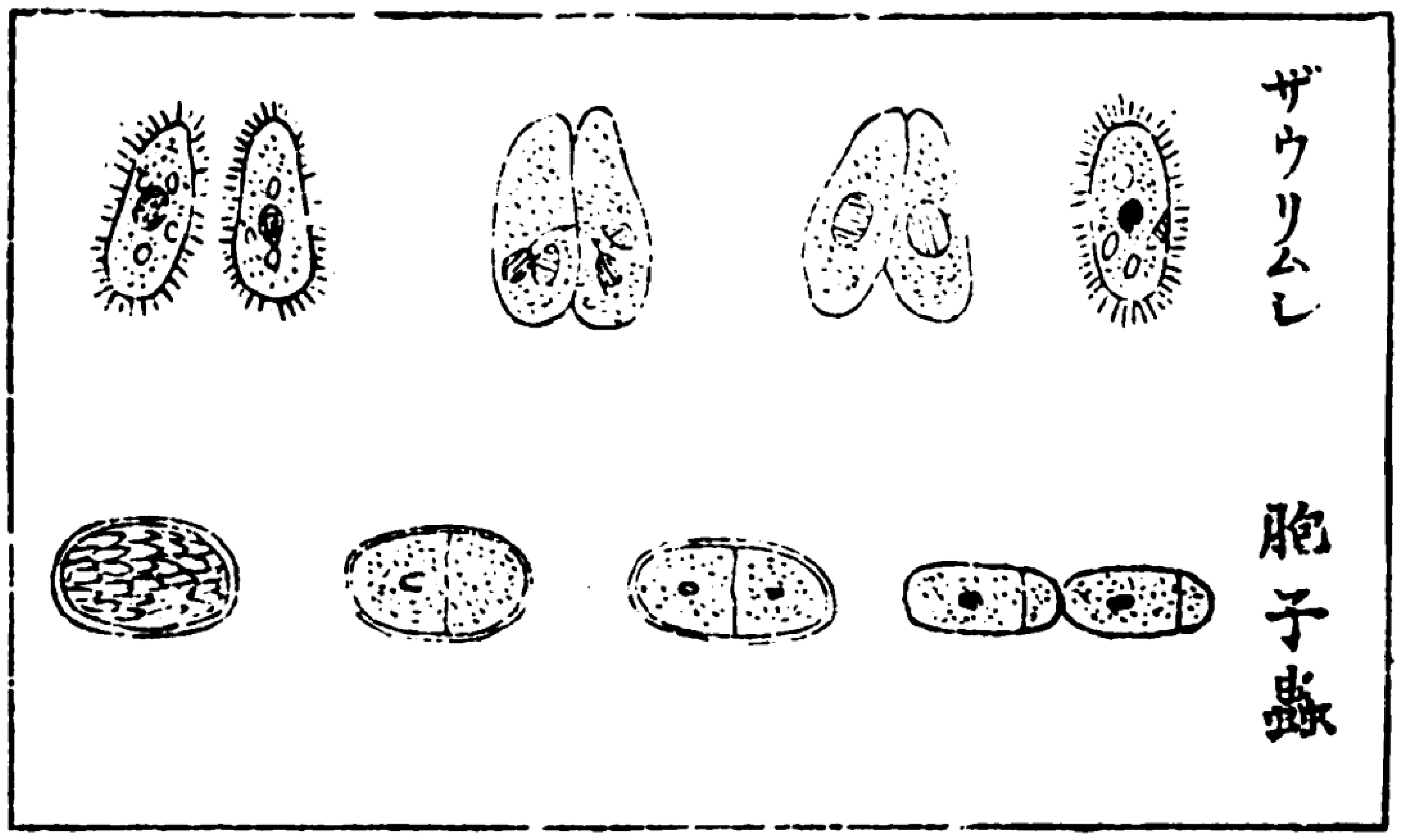
(二)胞子生殖　胞子生殖とは、一つの動物が單に多くの胞子に分裂するか、或は二つの動物が合一して後、更に多くの胞子に分裂し、胞子はやがて新動物となるのであります、下等動物中に胞子蟲類といふ一族があります、生殖しやうとする時は、二つの蟲が合體して、表面に皮を被ぶり、一ッの球となります、其球の内は多くの胞子に分裂し、皮が破れると多くの胞子は各一ッの蟲となります。或る種類には胞子の内に、更に又數個の胞子を分裂するのがあります、恰度二ッ餅を合はせて一ッとなし、之を多くの小餅に切り、其小餅を再び三ッか四ッの小餅にちぎると同理であります。胞子生殖をなす動物は、胞子蟲類(蜻蛉、甲虫、蚯蚓などに寄生してる)の外夜光虫、アミガヒの中にもあるさうです。

(三)發芽生殖　發芽生殖とは、動物が成熟すると、仙人掌や青芋の如く、芽を出して蕃殖するので、最も僅かしかないのです。池や溝の水草にはヒドラといふ芥の如き動物が附いてゐます、此動物は夏の間は芽を發し、時とすると芽から更に芽は發し、親も子も孫も一連になつてゐることがあります。此他發芽する動物といへば海鞘類、苔蘚類、水螅類、珊瑚類、海綿類、原生動物(喇叭虫)などにあります。無性生殖の系統を表はせば左の如くになります。

無性生殖
- 分裂生殖……莵葵蒂、ゾウリ虫、ラッパ虫
- 發芽生殖……ヒドラ、珊瑚、海綿
- 胞子生殖……胞子蟲類、夜光虫

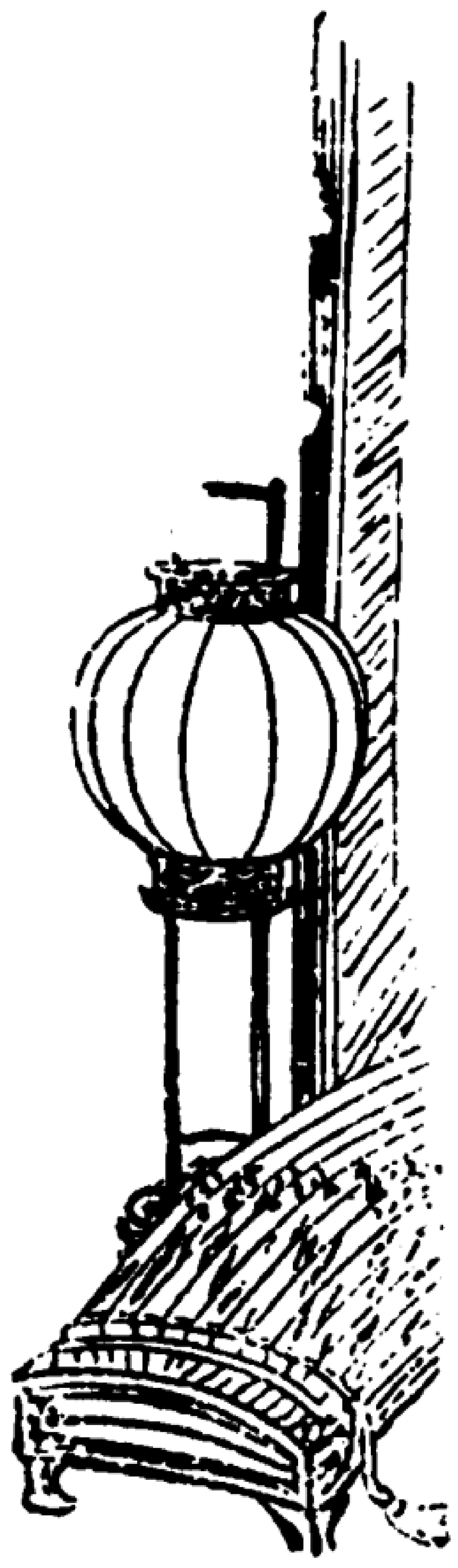
接合　高等動物は、雌雄の二動物が交接して、雄

動物の精子は、雄動物の體内にある、卵子に合體して、新動物を生せしめるのですが、彼の草履虫、夜光虫、胞子蟲などには、體全體が僅かに一ッの細胞であるから、精子だの卵子だのといふ復雑なものは素より無いので唯體が成熟すると、眞二ッに分裂して、増殖するのであります。けれども分裂する前に、二ッの動物は、殆んど交接と同様なことを爲します。



草履虫は暫くの間口部の所を以て、互に接合せしめ、夜光虫は二虫全く合一して一體となりそれから後互に引離れて、始めの如く二虫となりそうして二虫は各二ッに分裂して、新しき二ッづゝの動物となるのであります。何の爲めにかやうに一時のみ密接するかといふに、其接合或は合體して居る間に、核とて體内の重要なる部分を、互に半分づゝ交換するのであります、今接合或は合體しない前の核を假りに彩色して、一方を黄色とし一方を青色とすれば、接合或は合體した後の核は兩方共黄色と青色の混合、即ち緑色に變化するのです。胞子蟲にいたつては、二蟲合體するの後分離することなく、其儘一ッの動物體となり、それから更に胞子といふ數多の生殖體に分成し、胞子は後に各一個の新動物となるのであります。自然の神は生物を繁榮せしめやうとして、極微の動物にまで、妙味をもたせてあるのです。

（終）



主婦と接客（下）

土肥月巴

◎夜更けて客の辭し去らむとするとき主婦たる者如何心得然るべきにや。

△客若し高齢の人ならば成るべく强壯の車力を傭ひ其の宅まで送り參らすべき旨を命じ或は然ること能はざる場合は家族中の强壯なる者を附き添はせ以て途上の安全を保護すべし尤も普通壯健の人に對しては勿論斯る配慮に及ばず。

若し又た時の事情に依つては特に宿泊せしむるも可なるべし左れど實際親切あるにあらず唯だ一片の世辭的に輕卒に宿泊を勸め立てして客の其の言に從ふに及び却つて口上肚裡と相反し頗る之を待つこと薄く爲めに客の不快を招く如きは是れ其の浮巧の舌を以て一種の仇敵を求むるに過ぎず果して此の如きことならば寧ろ始めよりアッサリ告別し由なき思はせ振りせぬこそ相互に取つての利益なりと知るべし。

（註に曰く）　己れ眞に其の客に厚うするの意なく唯だ其の親切を衒はむが爲め勉强して愛嬌を切り賣りするは虛僞なり亦た客の請に應ぜざるべきを豫知し尙ほ且つ敢て之を挑むは侮辱なり虛僞と侮辱とは惡德なり人類交和の神聖も社會關繫の圓滿も常に皆之に依つて破らる家庭の花形外交官として日夕接客の衝に當る主婦は這般の消息を明めざる可からず。

◎客と應對中は如何心得然るべきにや。

△客に斷りなくして其の座を空しうすると勿れ。

談話は活潑に過ぐるを避け且つ又た殊更滑稽じみて客の笑歡を買はんよりは寧ろ落付ける平談白話に眞面目の問對を交換し餘り馴々しからざるを禮とす但し其の代りとして苟も客の心目を慰め多少の利益を與ふべき物件は何品に拘らず滿前排列其の展覽に供するを力むべし。

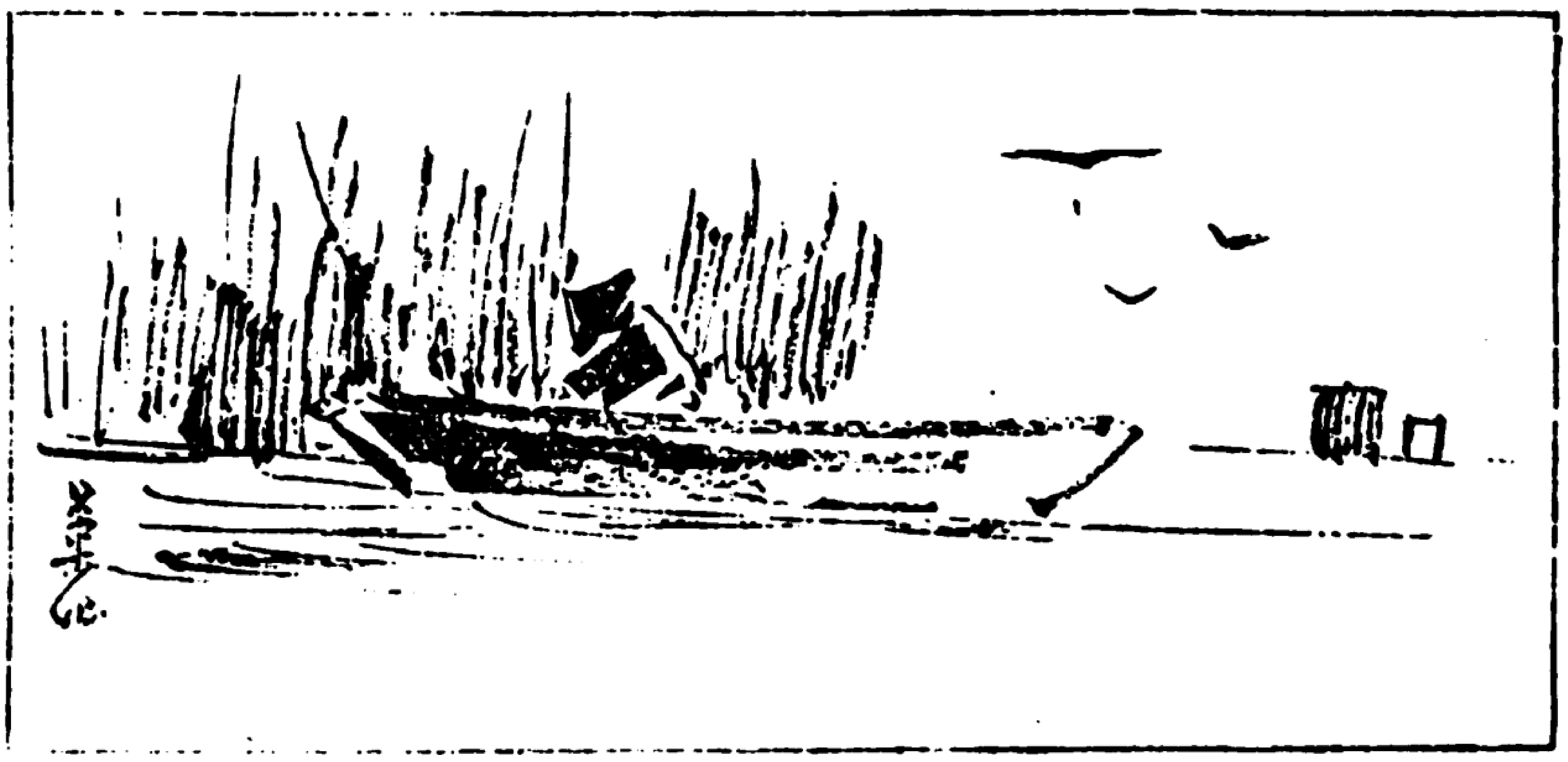
己れの欲せざる所を以て客に施すこと勿れ。

若し又酒食を勸むるとき其の客女流にあらざる限りは其の席に膳を共にすべからず。

◎客より土產物を受くるときは如何心得然るべきにや。

△成るべく客の座に留る内に包を開きて口を極め賞讃し其の菓子或は菓物の如きは先づ其の一部を神佛に獻じ殘りを居合す家人に配與す若し又た炙煮を經たる後始めて舌に上すべきものならば早速之を調理して客と共に風味を頒つべし而して其の品の食物以外即ち反物の如きものならば一旦定めの場所に藏め家族中相應せる者の爲めに成るべく派手やかに之を仕立てゝ着用の上返訪するを可しとす。

◎妊娠中來客に對しては如何心得然るべきにや。



△元來妊娠中に在つては已むなき用向ある人か若しくは懇親の間柄ならば兎も角其の他は成るべく謝絕するを法とす。殊に其の客と對座するに當つては成るべく眞面目の話題を選み苟も感情の發作を激動し或は猥褻妄誕に涉るものは必ず聞かず語らざるを要す。

〇〇〇〇

(註に曰く)　姙婦の遊山觀劇等濫りに門外に跋涉するは外見に於ても來生に於ても共に大に忌避すべき所なるは今更架說を要するまでもなし聞說歐米文明國の婦人は一般分娩前に在つては深く其の身を隱蔽するを力め假令如何なる緣故ある會場にも遠慮して出席せざるのみならず其の家に在つても亦た一切訪客に面會を謝絕し併せて外出を禁止するを以て普通の習慣とす

るが如しと東西國を異にすと雖も風俗の由て來る眞意に至つては大に參勘するに足るを覺ゆ。

◎懇親の爲め特に客を會するときは如何心得然るべきにや。

△餘りに多數を混集するより寧ろ多くも十人前後を限り且つ其の客の種類に於ても成るべく身分の懸隔なき者を擇むは一座互に打ち寛ろぎて趣味深き親睦を結ぶに便利あり主婦たる者此般の消息を顧慮し適當の用意を存するを要す而して定日一旬前程に使者に命じ案内狀を配布し豫め諾否を問合すべし其の文案は簡單にして可なり例へば

一筆啓上來二十日午後五時麁飯進上致度存候間別に御障も無御座候はゞ枉げて御入らせ被下度偏に念じ上參らせ候あら〳〵かしく

月　日　　何某妻より

何某奥様御許へ

追而御諾否の程御示し願上候

○主婦の賓客に對する心得尙ほ更に記述すべきもの十百限りなかるべきも要するに如何なる場合に於ても從容閑雅の態度を以て懇切周到の歡待を怠らず客をして無上高潔の快感に打たれて知らず識らず其の座を長ふせしむべく取り持つは正に主婦たるものに於て宜しく任ずべきの責務なり苟も心茲に存する小集大會の何れを問はず甚だ失墜なきに庶幾からん大方紳士の令夫人なる者宜しく此の趣意を咀嚼して可なり。

▲第十三年廿三號正誤　第三十五頁上段第十四行(陥らん)は(陥らしめん)△同頁下段第十二行(終)は(經)△第三十六頁上段第一行(式)は(或)△同頁同段第二行(側)は(測)△同頁同段第三行(誘ば)は(誘ふは)の誤植



梅の話

清水橘村

陽春の正使である側金盞花が南谿の巖かげから、開花第一の春を報ずると、先づ咲く野梅兩三枝、霜雪の苦に堪へて凜然百華に魁けし、芳香馥郁、紅白濃淡、氣品高く、風韻深き所から古詩人も『うつたへに鳥ははまねどしめはへてもらまくほしき梅の花かも』(萬葉集)。とうたひました。

譬へば梅は無言の詩人、天成の畫家、貞淑なる婦女の權化として我邦人に愛玩さるゝ所、彼の日本武士道に於ける櫻花に對して、是れは女子的標式のよく其の當を得たものであります。

『梅が香や耳掻く猫の影法師』と云へる也有翁の句は四條圓山派などの寫生畫に見るべき、閑雅な景象ですが、『梅が香や思ふことなき朝ぼらけ』(蘭更)は作者自らの思想を述べましたもの、淸香高く、朝氣さわやかなる梅下に立ちて、一切是空なりと云つたやうな俳諧の寂を味ひました懷襟、夫れも梅であるからこそかやうな句があつたのです。其れから又『梅一輪一りんづゝの温かさ』(嵐雪)。と云ふ句は、古人もこれより上の秀句は得られないとやら申しました、是等は皆梅が季節と他の生物と照應した所の美觀です。

『人ごとに折かざしつゝ遊へども、いやめづらしき梅の花かも』(萬葉集)と云ふ歌は今日尙新しき萬人の心となすべく、梅は實に淸楚たる高雅な花でありまして、我が邦では昔より松竹梅と唱へ、植物の三瑞として御座います、元は支那邊の特産でありましたが、何時か我邦にも移し植えられたので‖尤も豐前宇佐郡西シイヤ村及び豐後玖珠郡森山中には野生のものがあるさうです‖元來熱地に適しないので、絕えて西洋諸國に見る事がありませぬが、近頃は外國へも輸出され、矢張ウメの名を以て盆栽などに珍重されるさうでございます。

梅の花の形態は諸嬢よく御存じでせうが、極く淡白

した花で、五枚の花瓣より成り、一枚づゝ離れ〳〵になつて、居る所から、植物學上之れを稱して離瓣花と申します、花の中心にはあまたの雄蕊と、一本の雌蕊とがあつて、雄蕊の頭から黄色の花粉を吐きこれを雌蕊の柱頭へ振りかけると、花粉は又雌蕊の基部の肥太た處に達して、爰に初めて果實を結びます、然し雄雌蕊が同じ場所にあつても、同じ花の花粉では果を結ぶ事がありませぬ、それに他の動物と違つて手も足もないのだから花粉の運びやうがない、そこで花の底に甘い蜜と芳ばしい馨とを持つて居りまして、先づ芳香を以て蜜の好きな蝶や蜂なんどを呼び、その蜜汁を舐めさせると、虫は蜜を吸はんがために、花の中へ頭を差入れて雄蕊の花粉を身體のある部に附け、又次へ次へと飛び廻る內、知らず〳〵その花粉を他の花へ傳達して、斯て花の受精の目的を達しさせます、何と自然の組織と云ふものは面白くできてるではありませぬか。

やがて此の花が落ると葉が生じます、葉は圓みを帶びて椽に鋸齒を有し、先に行つて尖つて居りまする、而して互ひ違ひに枝に附着して居りまする、それを互生植物と申します。で此の梅に似て居る植物は、桃、スモヽ、アンズ、山櫻、ヨシノ櫻、彼岸櫻などで、其他ビハ、リンゴ、イチゴ、バラ、山吹などを總稱して薔薇科植物と申します。

梅は白花を以て最美と致します、これは芳香他の花より勝れて居るからで、白梅の外には紅梅と云ふがあり、帶靑と云ふがあり、帶黄と云ふがあります、而して此の帶靑、帶黄などと申すは、花に靑み又は黄みを帶びて居りますもので、八重咲は雄蕊が變形して數個の花瓣となつたもの、八房の梅とは、一花中に七八個の雌蕊を有するもので、又八重咲は獨り梅ばかりでなく、椿、薔薇、櫻などに澤山ありまして、是等は皆插木、接木の人工法によりて製出されたもの、野生のものには絕えて八重咲は存在しませぬ。

植物は各々季節、時間、又は他の景物と照應して美

しき、配合をなすものでありまして、獨立しては餘り其美觀を現はさないと云ふのは其の植物の特性が見えないからで、若又野邊のタンポ、池邊の藤、朝の櫻、雨の菖蒲、霞に柳、雪に松と云ふ如き對照を取ると、その特性を顯はして居るので、只單に松は松、櫻と櫻ばかり見るよりは一層面白く感じられる。そこで梅は何と配合して其美を表はすかと申すと。歌にも、「降る雪の中に匂へる梅の花しのびに春のいろぞ見えける」(信明)とある如く、まづ雪です。雪と梅の配合のついたのは、多分梅が寒地に適する植物であるからで、極く自然的だらうと思はれますが、又「春の夜はのきばの梅をもる月の光もかをる心地こそすれ」(俊成)とある



月は、人々が見て以て美はしく感じた上の、即ち人爲的の配合では無からうかと考へられるので、此の二つは古人も「わが宿の梅の初花ひるは雪、よるは月かと見えまかふかな」(不知讀人)(配合の美ではないが)と歌つて居りまする。

難波津に咲くや此の花冬ごもり今を春べとさくやこの花

萬葉集以前は單に花と云へば梅を指し、その以後は花と云へば必らず櫻を指します、然しこの難波津の歌は、正しく梅花でありまする。

前に梅は白花を以て最美とする由を申しました、即ち銘花は野梅生の青白大輪を以て盆栽中の逸品と致します。方今園藝家に愛玩さるゝものは、滿月(白

の大輪）、芳流閣（白の大輪）青龍（青白の大輪）、塒出の鷹（薄移紅とて曙色）、雪月花（白の大輪）、古今集（移紅大輪）水仙梅（青白大輪）田子の浦、石清水（此の二種は花兄弟とて白の大輪）、田子の月（田子の浦より大輪）などその數凡そ三百五十種ばかりです、がほんとの種類は豐後生、難波生、摩紅生、紅梅生、緋梅生、杏生、寒紅生、紅筆生、唐梅生の九種で、前者は皆この九種のものが園藝家の爲めに變成された、即ち變り種とも云ふべきものでありまする。

梅花は實に高潔なもの、清淨なもの、優雅なものでありまするから、古人此花を愛玩された例は尠なくない、まづ第一に吾人の記臆を呼び起すものは菅原道實公の逸事でありまする、公は參議是善公の第三子、幼少の時分より才學ことの外に優れて居られまして、その十二才の時、父是善公より詩を試ましまれ『月耀如二晴雪一。梅花似二照星一。可レ憐金鏡轉。庭上玉房馨。』と詠ませ給ひしに聽く者をして驚歎せしめられましたが、醍醐帝の御時、左大臣藤原時平と申す人の讒言にあひ、右大臣から太宰權師に貶せられ、筑紫の方に流され玉ふ時、あまたある公達の手をとられ、しばしが程悲しみおはせしが、折からにほふ御前の梅花を御覽じて『東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれぞ。』とよませられました。後にこの梅が公の配所へ飛び行かれしとて、今も筑紫太宰の天滿宮に飛び梅と云ふのがあるさうでございます。此のやうに道實公は非常に梅花を愛されて居りまし所から、今は梅花を以て其の紋所となされます。又公を祀られる天滿天神宮にはいづこの社にも梅樹が植えてない所はございませぬ。實に梅花も公の爲め一段の崇高さを加へたと云ふものです。

夫から又水戸黄門光圀卿も、大廚梅花を愛された御方でして、老後自ら梅里先生と號され、梅樹を許多お植になり、お樂しみなされました所が今の水戸の公園で、卿は只花をお樂しみになつた許りでなく、梅の實を以て軍旅の際にお用にならうとなされ

たのは、同公園の種梅の碑文にも明らかに誌されてあるのでわかります。

　また武士が梅花によりて香ばしき名を歴史の上に踐されたのは梶原景季が生田の森に於ける箙の梅で、彼の東夷とさげすまれた陸奥の阿部宗任も、捕はれて都に上り、『我國の梅の花とは見つれども大宮人は何と云ふらん』と詠んで殿上人を愕かした例などや『勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へむ。』などと梅は何處へ往つても其の芳香を發つて、たぐゐなき芳烈な特性を發輝して居りまする。

　梅は獨り人生の一に特別な感化があるばかりでなく、その實際に一りましても、多大な稗益を與へて居りまする、即ち昔より、實は梅干となつて戰場又は食事、茶受等に賞用され、木材は櫛となり、盃となり、曾呂盤珠になつて用ゐられて居ります。而してこの梅干といふものは、極く必要なものでありまして、暑中物の腐り易い時、梅干を入れた握り飯は決して腐敗せず、その又永く保存される所に至りますと、罐詰類の食品を除いでは、梅干に及ぶものがありませぬ。(因に梅干をコメカミへ貼ることは、度々すると皮膚を酸蝕しますから注意せんといけません、尙梅の實は生で食べ砂糖漬などに致しますが、生でたべると往々中毒し、急劇な流行病の原因となることがありまするから、小供などには食べさせてなりませぬ、これ梅の實の未熟なる時は、實に靑酸と云ふ毒分が含まれてゐるからで、この毒分は實が未熟なうちに鳥獸などに食べられない豫防のために含んで居るのです。

　梅、桃、櫻、李、などは花の形の似てる植物であることは諸君も既にお承知でありませう、で今その比較をして見ると。

梅、桃、櫻、李の花
- 萼　筒狀にして五裂
- 花瓣　離瓣にしてて五片
- 雌蕊　一本
- 雄蕊　多數にして木離る

但し梅、桃の花瓣は短かく、櫻、李の花瓣は長し。

このやうに類同して、相違せる所がない、即ち以上の四種は同種であるといふことが分ります、總じて植物を區別するには第一に花の形に從ふのです。

西洋昔ばなし

在文科大學　ゆみはり生

水晶のやうに、美しい、まじりッけのない、セイ〱としてゐる物語といへば、それは昔話の外にはあるまい。昔話は、一つの教訓である、一つの歴史である。又一つの哲學である。その無邪氣な事柄の中に洋のやうに深い眞理が含まれてゐる。その平凡な文句の中に金山のやうに貴い寶が藏されてゐる。今それで西洋諸國の神話英雄譚などの内から、成丈け女子に關係の深い面白い話を擇むで逐次掲載しやうと思ふのである。

あはれなる織女

世界は今よりズーと若くて、希臘の國なるオリムパスの山の上には天地の神チュピターが諸々の神を率きつれて此の天が下を知ろしめした頃、とある處にアラクネーといふ美しい少女が住んでをつた。その美しさをなんと形容していゝやら、まあそのふつくりとした面ざしは秋の夜澄み渡つてゐる空に、笑ましげに照り輝いてゐる淨い清い滿月のやう、眼は大きくパッチリとして、あの天竺の青い蓮の緑、滴らん許りのやう、又ふさふさとしてゐる髪の毛はさながら黄金の絲を幾筋となく千垂り八千垂りに垂らしたやう。

少女アラクネーは曙の神オーロラの促しに、蘭麝の香もゆかしい閨の板戸をおし開けて、やがて南の窓にホコホコと暖い朝日をうけながら、衣に懸けてゐる眞玉の音もゆらゝかに、色々樣々の絲を紡ぎ、さて日中になれば、北の窓の邊、木葉の緑の影深きところへ、玉履徐ろに運ばして、夕日西山にうすづいて塒に飛び歸る鳥の聲かまびすしい迄、その紡い

だ色々樣々の絲を經緯に、美しい織物を織る。これが少女アラクネーのする毎日の仕事であつた。

少女アラクネーの紡いだものを見ると、麻糸でも毛糸でも絹糸でも皆美しう柔う艶々としてゐる。そしてこの絲が少女の杼の運らしの内に、反物となつて出てくるのを見ると、これも美しう柔う艶々してゐる織物で、やがては此話が世界中に擴がつて、西東の遠い〳〵邊國の人迄も皆々旅かけて之を見にくるやうになつた。

かくて女少アラクネーは、毎日毎日、朝は日向暖い南の窓に絲を紡ぎ、晝は綠陰深き北窓に機を織りながら、その小さい胸の内には、斯ういふことを考へてゐた。『どこの世界へ行つたて妾ほど奇麗な絲を紡ぐものは無いだろうし、どこの天下を探したて妾ほど柔う美しう艶々としてゐる織物を織るものも無いだろう。』

ところが、或日のこと、一人の人が尋ねまするには、『あなたの絲や織物は大さう美しいが、それは誰れに教はつたのですか。』

『イーエ誰れにも教はらないのですか、毎日朝は日向、晝は木の陰に座つてゐまするると、自然とそれが出來るのであつて、別に誰も妾に教へたものではありませぬ。』と少女はいひました。

然しそれは天つ神アテーナが教へたのだが、あなたはそれを知らないのだろう」。

『アテーナが、天つ神がその？、神樣が妾に機織を教へましたて？、一體その神樣は妾のやうな美しい綛絲を紡ぐのでしやうか、又妾のやうな艶々とした織物を織んでしやうか、妾は一度それを見たいものです、その時は反て神樣に一つ二つ教へてあげましやうよ』と少女は頰の邊りを少し紅うして言つた。

ふと振り向くと、部屋の入口に不意に、背のスラリと高い、白々とした長い衣の裳裾を引いてゐる婦人が立つてゐる。その面ざしの美しさは何と形容のしやうも無いが、その內に一種犯すことの出來ない威嚴がある。まことに犯すことの出來ない威嚴があ

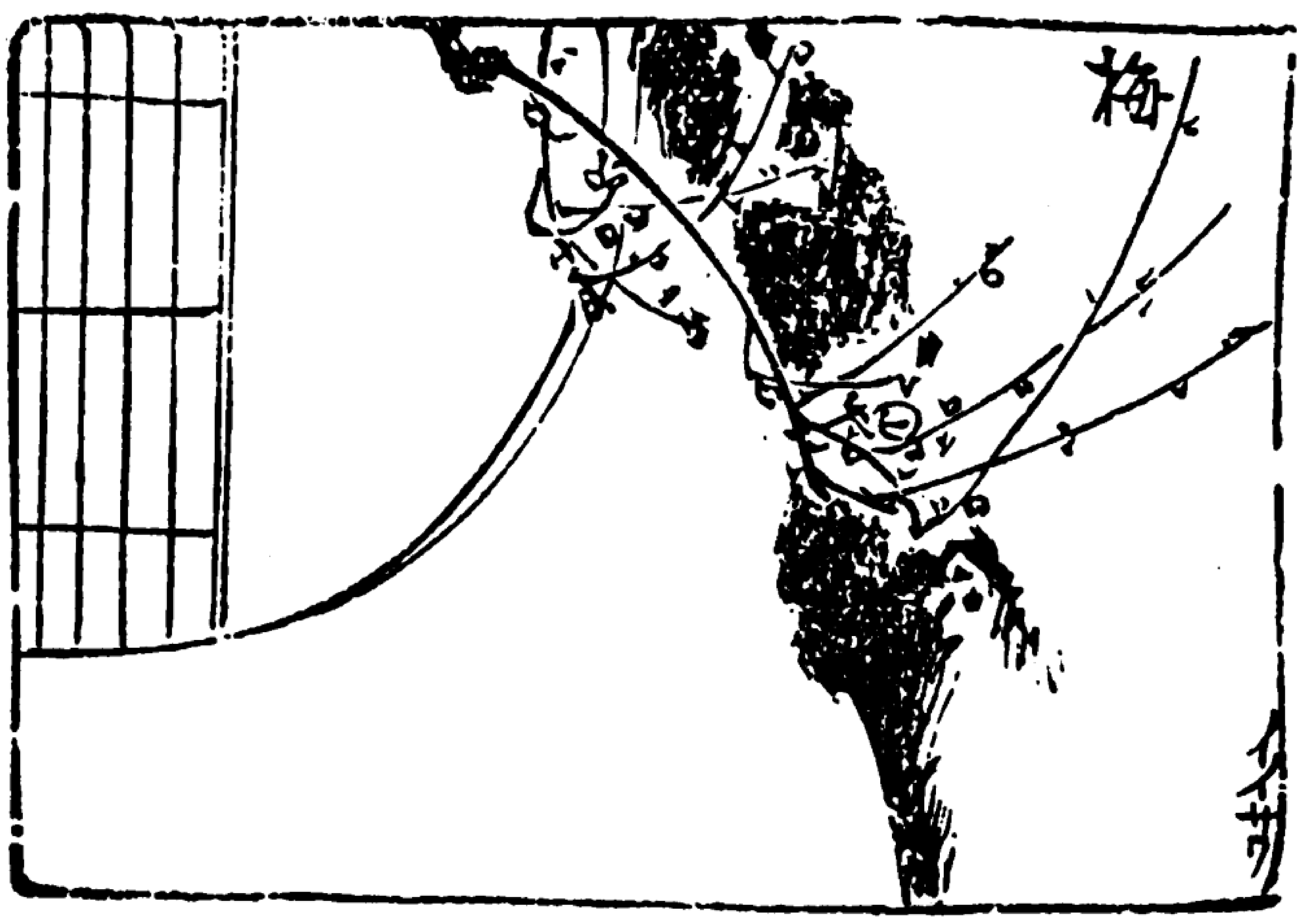
るのである。双の眼は少し怒の色も見えて鋭く輝いてゐたものだから、さすが少女アラクネーは、さながら獅子の前の羊のやうに、面もよくえ上げなかつた。

生ひ繁つた松や杉の木ぬれを通ふてゐた颯々たる風の音が、程なく遠く向ふの方へ過ぎ去つて、やがては小川の清水に小波を立てゝゐるだろうと思ふ頃、此の氣高い婦人は靜かに嚴かに言ひ出した、少女アラクネーよ、妾は天つ神アテーナであるが、よく汝の自慢を聞いた、どこ迄も汝は妾に機織のすべを敎はらないと申すのか。』

『固より妾はこんなに美しい織物を織ることを誰にも、敎はりませぬから、誰にもお禮を申上げることはさら／＼いりませぬ。』

と少女は言つた。

『それでは汝は妾のやうに美しい織物を織ることが出來ると思ふてゐるのか。』と天つ神は詰つた。少女はこの詰問にあうて、その頰を靑うして申上ぐるには『ハイ私は神樣のやうに美しい織物を織ることが出來ます』



そこでアテーナが言ふには、『ジヤこうしやうではないか、今日から三日の間に、汝は汝の機で、妾は妾の機で、一世一代の立派な織物を競織してはどうであるか。吾等は雲井遙かに鎭りゐますヂュピター神に審判をたのみ、又世界のもろ／＼の人に見せて其評判を聞ふと思ふ。でもし汝の織物が妾のより勝れてゐた時には妾はモー再び此世界のあらん限り機織を致すまい、然し妾の織物が汝のより勝れてゐた時には汝は決して再び機にも紡錘にも紡輪竿にも手を觸れてはいけない。サーこの約束はイーか。』

少女は思ひがけない事で、小さい胸の内にドキドキと動悸を立てながら暫く考へてゐたが、遂に思切て答をした『よろしうご座ります』斯う言ふて天つ神アテーナは忽ち掻き消すやうに去つてしまつた。

○　○　○　○　○　○　○　○

龜と兎が競走してとうどと、兎が負けたといふ面白い話は聞いてゐるが、これは亦神樣と人間との競織、どちらが勝つだろうか、どちらが負けるだろうかと、世界中の評判は回向院は角力より何千倍何萬倍か知れない、忽ち希臘の國はあちこちより見に來る人の群集で、錐を立てる處も無い程である。この時天地の大神ヂュピターは雲の上遙か設けの席に着いて靜かに樣子を見てゐられた。

少女アラクチーは、さら〳〵と流れてゐる小川の岸近く、繁も豐かに立つてゐる大きな桑の本の陰、白黄色々の蝶々の誠に樂しさうに飛でゐ、蟋蟀のいと物靜かにコロ〳〵と鳴きつゞけてゐる處にその機をうち据えた、然しアテーナは天の神樣であるから、そよ〳〵と吹きくる香はしい風に長い袂を飜へして、雲の上に其の機を立てたのである。

さて少女は其靜な桑の本の影に座り、美しい絹の絣糸を取つて、一生懸命に機を織り初めた。やがて少女の織つたものを見ると、その薄さと輕さはフワフワと空にも飛びそう、然しその強さは怒つてゐる獅子でも綱ぐことが出來るやうな珍らしい織物。その經糸と緯糸は數へ切れない程樣々の色糸で、それが右左上下と配合よく織られてゐるものだから、之れを見た世界のすべての人は誠にこの上もなく感心して、『少女の自慢も全く無理ではなかつた。』といふてをつた。天地の神ヂュピターもあの雲の上から靜かにこの模樣を見てござつた。

アテーナも亦機を織り初めたが、その織物の材料は、山の上に閃めける日の光、柳、櫻をこめて棚引く春の霞、小羊の毛のやうに白い夏の雲、紫の色も濃い秋の木葉、この外色々樣々のものであつた。斯うして織上げた織物は花鳥園城塔山人獸雲の上の神樣迄、ありとあらゆるものが書いてある大曼陀羅、

見るものはその美さに驚嘆じて魂も飛び氣も遠くなるやう。少女アラクネーの美しい織物のことも皆すつかり忘れてしまつた。

　あはれな少女はこれですつかり競織に負けたことを知つて、モーこれからは約束通り機も紡錘も紡輪竿も持つことが出來ないと思へば、その心細さは亦一しほ、とう〳〵袂を顔にあてゝ聲を限りに泣き出した。清い小川の縁に飛でゐる蝶々も急に羽をゝさめて立すくみ、可愛らしい蟋蟀の鳴音もハタとゝまつてしまふた。世界の人は皆アテーナの織物をひたすら褒めてゐるのを見るにつけても、ア、悲くて悲くて。

『ドーしやうドーしやう、モー此上は二度と再び機にも紡錘にも紡輪竿にも手を觸れることは出來ないから、樂しう日を送ることも出來ない。』とあはれにも少女アラクネーの泣き悲みは喩へ様がない。その桑の木も泣枯らさるゝであろう。その小川の流も泣乾さるゝであろう。

　そこで女神アテーナは深く哀を覺えて斯う言つた。『妾の力で出來ることならば前の約束は殘らず取消してやろうが、モー今となつてはドーすることも出來ないから、やはり汝は此後機にも紡錘にも手を觸れないといふ約束を守らなければならぬ。然し汝は元の通り機織をしなくては樂しう世を送ることも出來まいから、妾は今機も紡錘も持たないで、そして好きな機織が出來るといふ方法を敎へてやろう。』

　こう言つて女神アテーテは右の手に持つてをつた鎗の尖を一寸少女に觸れた。……不思議にも、あの美しい眼も口も髪の毛も何處へやら、少女は忽ち小さい蜘蛛に化つてチヨコ〳〵と草の陰に隱れてしまつた。定めしそこで嬉しそうに美しい小さい織物を織つたであろう。

　その後の澤山の蜘蛛は皆アラクネーの子孫だといふことであるが、それはどうか分らない。然しあはれな少女は未だ此世に生てゐて、しよつちう機を織つて樂でゐるのだろうと私は思ひます。そこの疊の隅に這ふてゐるのが可愛さうな少女アラクネーかも知れない……………………………。　（終）



春の水

遅塚麗水

一

さゝにごりの春の水、青柳の渡頭を過ぎて漣漪を碧にかへし、流るゝともなく悠々たり、青柳の枝を拂つて、渡守の水馴棹、蘆の芽の寸にも足らず水を抽いた淺いところを淺くさして、舟ゆらゆらと搖ぎ出でた、

舟の眞中に、金茶朱珍の丸帯を大鼓に背負た侍婢風の若い女が、塗駒下駄の半ばを藏して縹色の裾を取り廻して小さく蹲んで手に翳す綾織の蝙蝠傘、翳された人は誰が家の愛娘か、胸せめて締めた帯は厚板の、模様は光琳の紅葉美くしく、溢るゝは緋の扱帯、光るは帶止の無垢の牡丹、匂に簪めた翡翠玉、肩から上は傘の簷の陰に隱れて日影を紺に限どつたが、曙染の振袖裳模様は遠霞に影櫻、小豆色の蛤褄を御家流の入の字様に、端然と坐つて雛のやう、

傘を繞つて蹲まるもの二人、鐵色の紋付羽織の禿頭、椎蕈ほどの丸髷に結つた女、汀の柳の陰に立つて、懐かしげに見送くる老爺、涙に霞む眼を揩つて、

「お粂、お殿様へ宜しく申し上げて呉れ、幾多別れを惜んだッて元々お預かり申したお姫様が、今更自分の娘になるんぢやない、」

「あい、お殿様へは妾から、宜しく申し上げますよ、」と椎茸の丸髷は舟の中から回顧いた、

「お姫様、其れでは此處でお別れを申し上げます、」

潤む涙に眼を異しく光らせて、片手に柳の幹を抱え、身を展して見送つた、

「あい、阿爹さん、壯健で居て下さいよ、」

侍婢の傾げた傘の影より劃然と、色白の氣高い顔、髪は桃割、白の丈長、手を揚げて日を避けて、岸なる老爺を凝乎と看めた、指より颯と虹を噴いたやう、指環の珠は金剛石、

二

「勿體ないことを仰しやいます、早蕨村の土百姓の、此の蘭兵衛を阿爹さんとお呼び下さいましたか、勿體ないことを仰しやいます、」

老爺は柳の幹を抱いて、嬉しさに啜泣きした、

「東京へ來たら切望邸へも、屹度來て下さいましよ、阿爹さん、」

「もう澤山、勿躰なくてお返事が出來ません、阿爺さんと仰しやることだけは、切望お雪、どつこい進つたお姫様、もう止して下さいまし、此の老爺、冥理に盡きまする、」

舟、水禽のやうに緩い波を曳きながら、舳は彼岸に振り向いた、

「切望、來て下さいよ、阿菱さん。」
「まだ仰しやいます、伯爵樣のお姫樣を、吾が娘にして丁度十三年、勿體ないがお雪〳〵と呼び捨てにし阿菱さんと呼ばせたのは、冥護に餘つて罰が中ると思つて居たが、東京のお邸へお還りになる愛たい今日を、此の闌兵衞は、勿體ないが掌中の珠を他に奪つて往かれるやうな心地がいたしまする、今日もお伴をいたす筈を、留守のないので乳をさし上げた女房を、代りに附けて差し上げます、上野の停車場にはお馬車がお出迎へでございませう、晴れやかなお乘込、お館の御門前は人の山、お殿樣にお對面の御儀式、お祝ひのお酒宴、定めてお立派な事でございませう、其れを今夜は此の老爺が、夢で拜見いたしまする、あゝ船頭さん、漕いで下さいまし、お迎ひの乘、御苦勞樣でございます、お雪――どつこいお姫樣、貴孃樣の妹にした、お花もお姫樣が今日突如にお還りになつたと聞いては、喫驚いたしませう、泣きませう、末永くお榮え遊ばせ、お姫樣、これでお別れいたしまする。」
柳を離れてだち〳〵と蹌めきながら兩歩三步、曩昔の雨のまだ晞かぬ小堤の、飴のやうな新泥に草履を埋めて、舟の人を見送るのであつた、
「阿菱さん、左樣なら。」
「勿體ない。」
「今一度、雪と呼んで下さいまし。」
「勿體ない上にも勿體なうて、申し上げるお言葉はございません。」
「切望一遍、爾う仰しやつて。」
「勿體ないが早蕨村の百姓闌兵衞、一期の思ひ出に、青柳堤の渡頭の上で、晴れがましくも此の小笹の川

筋の十箇村へ、聞え渡るやうに大聲で、伯爵櫻町樣のお姫樣を、十三箇年お育て申した其の甲斐に、呼び捨てにさせて下さいますか。」

「あい、切望。」

「嬉し涙が溢れます、お言葉に甘へまして、其れでは申し上げまする。」

「切望、毎夕の甚句とやらを歌ふやうに、大きな聲で。」

「雪や、」

「あい、阿爹さん、」

「おう、雪や。」

「あい、阿爹さん。」

呼ぶ聲と應ふる聲の、間を流るゝ春の水、風徐ろに吹き渡つて、川一面に笑を疊んだ、

三

舟、堤の下へとんと着くと、侍婢のお筆は雪姫の手を拉いて、徐々と汀に下り立つた、續いて三太夫の禿頭、後より今朝までの假の母、百姓闌兵衛の女房お粂、畏まつて跟いて行く、

堤を登ると俥が四臺、三太夫の豫ての指揮で、此に雪姫の一行を迎へたのである、先頭なる一臺は、車の裡を金茶地の綾唐草、木履も埋まるばかりの蹴込の敷物は燃えたつ緋の色、轅は重籐、母衣は裏を萠黄にした扇骨、漆の香高く澤々とした、三太夫、停車塲の前の數ある俥の中から、特に是れをと擇り出して、姫樣のお召料、

「切望、姫さま、此車にお召遊ばしませ、」

『爾う』と鷹揚に點頭きながら、雪姫侍婢の差し出す洋傘を受け取つて、傍近う俥を寄せた、
突如に堤の陰から、一と聲高く、
『阿孃さん』
聲を趁ふて一驂に駈けて來たのは十二三の蝶々髷、手織の衣服に褪せた友禪メリンスの帶を後にちよきさんと貝の口、草履を穿いて手には行厨、本の袱、頬は杏のやうに紅い、
『おう、お花、好い處へ還つて來た、お姫樣が今日急に、東京のお邸へお還り遊ばすことになつたので、妾はお伴をして行くところ、さアお姫樣にお辭儀をして、今まで永らくお世話樣になつたお禮を申し上げな、』
少女は眼を圓らにして、錦繪にあるやうな雪姫を凝乎と看めながら、『阿孃さん、お姫樣ッて誰方のこと、』
『まア失禮なことを言ふ子だね、其處にお姫樣がおゐで遊ばす、永らくお世話樣を戴だいたことのお禮を申し上げないかね』
尙ほ怪しんで立ち窘むに、嫣然笑つて雪姫は二歩三歩近づいて、
『花ちやん、染々とお話が、出來ないのが、お名殘惜うございますが、今日東京から急に迎へを寄越されたので、還ります、其の中には緩々とまた來ますよ』と言つて美しい眼をしばだゝいた、
お花は凝乎と看て却歩つて、
『あッ、雪ちやん？』
『爾うよ、』と點頭いて懷かしげに、お花の顔を打戍るのであつた、
『本統に雪ちやんだ、』

母は娘の肩に手を掛けて、『これ〳〵、那麼な失禮なことを申上げるものではないよ、今まではお前の姉様のやうにして居たお雪様は、お前はまだ知るまいが、お華族様のお姫様だよ。』

『あら、姉さんが？』

『本統に可愛いね』と、雪姫はお花の手を握つて、『花ちやん、直喚びに寄越すから、是非遊びに來てお呉れ。』

『本統に雪ちやんは、お華族様のお姫様なの、』

『そんなら矢張妹の妾も、お華族様のお姫様なの。』

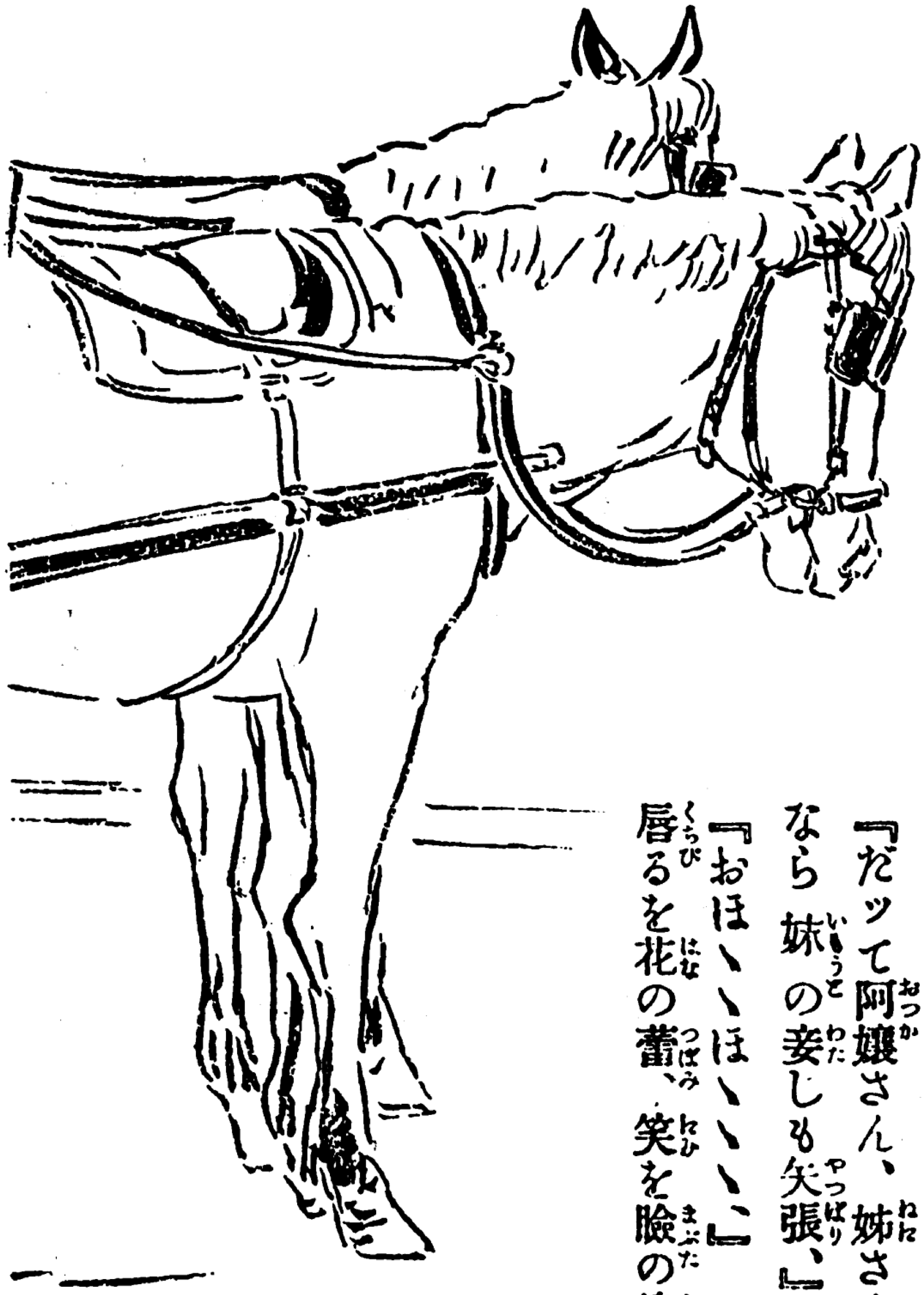
『那麼な失禮なことを申し上げてお姫様、今までのお馴染に免じて、切望お赦し下さいまし。

〃本統に沒分曉漢で困り切ります、花や、那麼ことを申し上げるものではない。』

『だッて阿孃さん、姉さんがお華族様のお姫様なら妹の妾しも矢張。』

『おほゝゝほゝゝゝ。』

脣るを花の蕾、笑を瞼の邊に堆めて、雪姫は親





しげに顏を傾げ、
「花ちやんの言ふ通り、妾もお前も此の阿媽さんの、お乳を飮んで大きくなつたのだから、姉妹に違いないのよ。」
「什麽して姉さんは、東京へ往くの、——あゝ解つてよ、あの、姉さんは東京へお嫁に往くの。」
三太夫、苦笑ひすれば、侍婢のお筆も手の甲を唇に中てゝ笑ふのである、雪姫も誘はれて、
「おほゝゝほゝゝ」
「笑つて居るから爾うに違ひない、屹度東京へお嫁に往くのでせう、那麽立派な衣服を着て、帶を締めて屹度爾うに違ひない、だけども姉さん、長者屋敷の金村さんへ、東京から來たお嫁さんは、綿帽子を冠つて居ましたよ、そら姉さんと一緒に見に行きましたッけ。」
「おほゝゝゝ、爾うねえ彼の時のお嫁さんは、綿帽子を冠つて居ましたね、だけど妾はね、お嫁に行くんぢやないの、東京の邸へ還るの、父樣のお邸へ。」
「あら、東京に、姉さんの阿爹さんが居るの、其れでは吾家の阿爹さんは。」
「これ、花、お前は何にも解らないで、失禮な事を申上げてはならないよ、姫樣切望お搆ひなく、お車へお召遊ばせ。」
三太夫も苦り切つて、手に提げた大鞄を車の蹴込に載せながら「姫樣、お暇が取れますと、滊車の時間に後れまする。」
「まアお俟ち、前から知れたら學校を休んで貰つて、緩々と話をして往きたいと思つて居たが、丁度此で會つたのは、矢張、緣が深いのね、これで一生別れて仕舞ふのではないけれど、同じ人の乳を飮んで長の

歳月、姉妹になつて居たのだから、別れるのが何だか悲しくッて……、花ちやん、妾が還つてから、乾度迎を寄越すから、阿爹さんとでも阿孃さんとでも、一緒に邸へ來て下さいよ、乾度だよ花ちやん、」

「あい」とお花は懷かしげに頷ついた、

「お姫樣、切望、お車へお召あそばしませ、」

「解つたかえ花ちやん、」

言ひ棄て、車に乘れば、車夫心得て母衣を懸けた、今朝までは磨かぬ璞の、綺羅に褒まれては、光る姿、氏の上の心も自然と高倘くなつて、鷹揚に頷づけば、車は水の流るゝごとくに草碧なる堤の上を、母衣に並んで紫の筑波山、

四

「やい、花、何をめそ〳〵泣いて居る、」

門の老杉の下に惘乎と、雲の行方を看めて居た蘭兵衛は、回顧いた、

「あの阿爹さん、雪ちやんは東京へお嫁に往つて仕舞つたの、」

「お姫樣にお逢ひ申したか、」

「美しい衣服を着た姉さんに、渡場の堤で逢つたのよ、」

「姉さんぢやアないお姫樣だ、お嫁に往つたのぢやアないお邸へお還り遊ばしたんだ、まだお前には話さないから知るまいが、まア涙を拭いて家へ入れ」

手を執つて爐畔に坐らせ、

「善く聽けよ、今までお前が姉さんと言つて居た彼のお雪は、姉妹には違ひないが乳姉妹、本統は華族樣

のお姫さまだぞ、日本で豪いお位の三番目の、伯爵といふお位を有つて居なさる櫻町春家様と仰しやる方の、お姫様だぞ』

『其れでは彼の雪ちやんは、妾の本統の姉さんではなくッても、矢張、妾の阿嬶ちやんのお乳を飲んで育つたの、』

『お前とは乳姉妹だ、お可哀相に彼の姫様は、お二歳の時に阿母様がお歿れなすつたのだ、』

『其れで解つた、妾の阿嬶ちやんが、雪ちやんの阿嬶ちやんになつたのね、』

蘭兵衛、頰の皺を深めて淋しく笑つて、

『まア聽いて居な、櫻町様といふのは元は此の界隈の御領主様で、俺が茶の樹を培養るのが上手だといふので、東京のお邸へ召されてお裏のお茶園をお預けになつたのだ、丁度其の時、お前の姉さんが産れて直きに歿なつて、お前の阿母さんは不斷に出る乳をもち扱かつて居たところであつたので、お二歳になるお姫様を、田舍へ遣つて捨て育てにした方が、却つて壯健に成人しやうといふ事から、お前の阿母さんがお預かり申して、お育て申したのだ、其の中にお前は産れる、乳姉妹で仲睦まじく、お前も姫様を姉と思ひ姫様も物心のおつきなさる頃までは、本統のお前の姉と思召して居らしつたのだ、』

『妾、始めて其れを聽いたの、』お花は愛らしい眼を睜つた、

『後の夫人に間もなくお姫様をお擧けなすッた、其の方が蝶よ花よと御寵愛遊ばされるにつけ、お可愛さうに彼のお雪さまは、俺のやうな百姓の茅屋の下で呉蓙の上で、星螺彈きや飯事などしてお遊びなさる、什麼してもお里流れ、お華族様のお姫様を娘に持てば家の光り、切望爾うなれば好いがと心の中で喜んで居たんだが、お慘はしいことには其のお姫様は去年の秋にお歿れとなつたので、到頭、彼のお雪様は、お

邸へお還り遊ばすことになつたんだ、お前も姉樣を他に奪られたやうに思はう、俺も娘を攫はれたやうな氣がする、けれども元々お領主樣のお姫樣、御運が向いて今日からは、お立派なお座敷にお雛樣のやうにお坐りなすつて、大勢のお侍婢に冊づかれて、好いお召、旨しい物、物見お遊山、華族女學校とやらへもお通ひなすッて、お妙齡になればお華族方から、お立派なお花婿をお迎へ遊ばす、假にも阿爹さんと呼ばれた俺も冥加至極、乳姉妹のお前も幸福、阿爹さんはお祝ひに今夜は膽斗お酒を飲むよ、お花、おう忘れたお前に見せて喜ばせる物がある、殿樣と夫人から、お前への下され物だ」

白木の角臺に、紅白の縮緬一疋づゝ、綾織の帶地一卷、

看る眼も綾にお花は恍然、言葉もなし、

五

其の夜の夢に、お花は獨り、乳姉妹の跡を慕つて、都大路に彷徨ふ時しも、馬蹄輕く軟塵を揚げて、轣り來た馬車の中、玉の人嫣然と笑つて手を揚げて、徐かに馬車を停めさせ給ふ、

（完）





明治三十七年一月十八日本願寺前住明如上人の一周忌法楽に雪といふことをよみてたむけける歌とも

子爵　田中光顕

一とせをふるしらゆきのひかりこそ
きえてのゝちのよをてらしけれ

同夫人　伊與子

白ゆきのふるにつけてもふるとしの
おもひぞつもるゆふくれのそら

伯爵　東久世通禧

月はなはすでにすこしてひとめくり
ゆきみるむしろさひしかりけり

子爵　黒田清綱

みそらより手向るはなのこゝちして
みのりのにはにふれるしらゆき

男爵　高崎正風

なきからをうつみし頃もこのころと
おもへばさむしけさのはつゆき

同

はつみゆきふればかならす言の葉の
はなにさかせてみせにしものを

同

ふみわけてこのよにかへれ降しよの
ゆきのみやまのあとをしたはゝ

侯爵　蜂須賀茂韶

すぎしよをおもへはかなし野も山も
うもれはてぬるけさのはつゆき

同夫人　隨子

白ゆきのふりにしてそのしのはれて
そでのつらゝのむすほゝれつゝ

男爵　渡邊千秋

きえぬともみちはすたれじしら雪に
なをちぎりにしのりのみにはゝ

公爵　徳川慶喜

かつゝもりかつきえそめて世の中の
はかなさみするけさのゆきかな

公爵　二條基弘

ふる雪をみるにつけてもこぞのけふ
きえにしきみのうへをしぞ思ふ

侯爵　中山孝麿

君とわれともにたのしとみしゆきを
ひとりながめてしのぶけふかな

伯爵　津輕承昭

のりのこゑひゞきていとゞ寒きひの
みちふりうづむけふのゆきかな

子爵　高辻條具

たまのには花のはやしとみしうちに
きえてはかなきけさのしらゆき

公爵　九條道實

ふるゆきになどかをれけむ龍谷の
まつは千代もとおもひしものを

同夫人　恵子

白ゆきのはかなくきゆるあとみても
うせにしきみのしのばるゝかな

筏上霜（つゞき）

千種任子

大井かはきしのあしはらかせさえて
いかだましろにしもおきにけり

小倉文子

そまひとかつなぎすてたる山かはの
いかたのうへにしもそおきける

姉小路良子

大井かはいかたのうへにちりつもる
もみちもしもにうつもれにけり

宮地嚴夫

いかたしのかつく笠にもいかたにも
おくしもしろくみゆるわさかな

阪正臣

大井かはいかたのうへにみゆるかな
たにはのおくのわかつきのしも

小池道子

おきわたすしも丶こほれり杣かはに
いくかつなきしいかたなるらん

津守好子

しも白くおけるいかたをさしてゆく
ひとのさむさぞおもひやらる丶

荻原嚴雄

あさしものおきたるま丶に山かはの
いくせくだせるいかだなるらん

平田三枝

さすさほのしづくもけさは氷るらん
いかたのうへのしもましろなり

吉田愛

大井かはしもをのせてもさしくたす
いかたしいかにさむけかるらん

植松有經

大井かはいかたのうへにしもふりて
いよ〳〵さむきみづのいろかな

小出粲

水かれしきしのいかたのしもの上に
とりはなけともひとかけもなし

中村秋香

ふきおろすあらしをおひてさす筏
ひのくれはやくしもおきにけり

小杉榲邨

大井かはわかきもみちのいかたしの
けさはやしろきしもをのせたる

鎌田正夫

しも白きいかたそくたるあさかせに
もみぢちりしくたにのなかれに

大口鯛二

かはかみの夜寒をのせてくたすらん
いかたましろにみゆるあさしも

猪熊夏樹

みなかみのさむさしられて差くたす
いかたのうへにしもぞむすへる

千葉胤明

水けぶりたちてなかるゝやまかはを
くたすいかだはしもしろくして

滋野井實麗

もみぢはゝ底にしづみておほゐかは
つなくいかたにしものおくみゆ

遠山英一

水馴さをとるしついかにさむからん
いかたのうへのしもましろなり

加藤義清

千鳥なくやまかはつたひよるゆけば
いかたのしもにつきぞきらめく

鈴木小舟

月さゆるよかはをくたすいかたしの
ころもてしろししもやおくらん

則武正副

霜けぶるそまやまかはのすていかた
あさひのほかにさすひともなし

尾崎宍夫

冬かれのそまかはせはみさしなづむ
いかたのとこにしもやおくらん

須川信行

さしくたす川せのいかたしもしろし
さをのしづくもけさこほるらん

深夜千鳥

菊池武則

ふけぬるか鴫のかはゝしゝもみえて
ちとりのみこそ鳴きわたりけれ

池千鳥

しくれせぬそらこそくもれひろ澤の
いけのみつとりいまかたつらん

文　林

河鴛鴦

川かせにふきながされてをしとりの
つかひはなるゝときもありけり

浦千鳥

はまちとり友よふこゑそきこゆなる
しばのうらかせさえわたるよに

野中鷹狩

御狩ひといまかはしたかあはせけん
ゆきにまじりてはねぞちりくる

母をおもひて　笠木鶯里

うき旅をかこつ身よりもなかなかに
われをおもはんおやのこゝろは
月さえてこがらしすさびしもこほる
こよひやいかにふるさとのはゝ
遙さとほき旅に瘦せゆくこのころを
はゝにみせなば母いかならん

月と詩人

山本細柳

理想の夢はよけれども
うつゝはつらき詩人(うたびと)は
さてもはかなき末の世の
毒ある霧に身をうたれ
あはや五體も裂けんとす
みそらの月はあはれとや
涙ながらのほゝゑみを
玉のおもわにかをらせて
いざ永劫の秘密(ひめごと)を
ひらかんものときらめきぬ
月うたびとの戀中に
さやかの光り通ふ時
さてもさはりの黒雲の
のろひの羽のはたゝきは
いかなる魔神(おに)のつかひぞも

歌の庭

正三位子爵 黑田清綱先生撰
（菊池武則先生代撰）

餘寒月

天

大そらのかすみのころもたちかへて
ふたゝびこほるつきを見るかな
肥後國菊池郡城北村 佐々有鄰子

地

あらしやまさくらか枝にゆきふりて
松風さむしはるの夜のつき
神戸 井上品子

人

さえかへり空にゆきけの雲みえて
いまたかすまぬつきのかけかな
埼玉縣入間郡川越町 横田音羽子

甲

霜かせにはるなほむすふいさらゐの
こほりをみかくつきのさむけさ
東京 金原玉城子

ひさかたのそらにや冬のゝこりけん
またさえかへるはるの夜のつき
壬生 上町初江子

はる立とまたふくかせのさむけれは
つきのひかりはかすまさりけり
長野 山本基子

たつ春はこよみのうへの名のみにて
さゆるしも夜にこほるつきかな
東京 林環子

梅のはなにほふはかりをはるにして
そらにさえゆくつきのかけかな
熊本 日高かず子

吹すさふきたかせさむくさえ〳〵て
はるともみへぬ月のかけかな
長野 岡田千穂子

きのふけふ風さえかへりひさかたの
つきのみやこもしもやをくらむ
東京 山本茂子

和泉　福原菫子

春なれとかすみもおへすかせさえて
ゆきけにくものつきのかけかな

乙

さえかへる雪けの雲をもれいてゝ冬にまされるつきのさむけさ
三河　服部嶌子

雪もよふ雲にかすみもたちかはりふたゝひさゆる月のかけかな
三河　永井さい子

こほりるへまたとけやらぬ谷河にうつろもさむき春のよのつき
三河　本多きさ子

さえかへりな਼ほ春寒き霜のうへにひかりさえゆく夜半の月かな
河内　竹内敬子

夜の梅またひとしほとまとの方をおくれはさむし冴えわたる月
壬生　松野みどり子

ともすれはかけひの水や氷るらんまたさえかへるはるの夜の月
壬生　よしの子

つくはれのあらしに冴て月影のかすみがうらも名のみなりけり
東京　岩谷梓子

やまふかみ春をうつめてふる雪にかすみかれてもさゆる月かな
秋田　小島いわ子

丙

まゆつくろやなきに月はかゝれとも冴かへるよは見る人もなし
三河　河合ぬひ子

ふくろ夜のおほろに殘る寒むけさもしほしわするゝ春の夜の月
陸前　前田河みさを子

月かけはのとけく春になりぬれとまたなり〱は風さむきかな
陸前　三浦ゑん子

又更にふきかへしはるのよのつきのおほろはゆきになりけり
埼玉　櫛田やな子

春もなほ雪けにさゆる雲まよりこほりていつるなかそらのつき
東京　河合粂子

消えのころ雪間にあそふをさな子も母よひたてゝうたふ月かけ
秋田　日野千嶌世子

山の端にかすめる月はあまりにも光りさむけく夜そふけにける
陸前　前田河千年子

きさらきや春ともいはす雪ふれとやよひの山はもえそめにけり
兵庫　原田ひて子

さほひみの霞のそてのやるゝまて吹く風さむく月ぞさえける
備中　大橋庶江子

雪とみむ梅の木のまをもるつきのかけなほさえて春としもなし
備中　大橋兼子

霞かとみまかふまてにかきくもり空なほさむきはるの夜の月
東京　中山紫子

春たてとなほはるならぬ心地すれてる月かけもさえかへりつゝ
備中　久山ささよ子

雪もまたきえせぬ峯にさえかへりいてたる月ははるとしもなし
三河　藍原鉦子

きえ殘る高嶺の雪にてりそひてはるとしもなきつきのさむけさ
三河　鵜野くわ子

春立ちて二十日あまりになりぬれとまた〱寒し春の夜のつさ
磐城　鈴木たけ子

きさらきの空は雪けにくもりつゝかすまぬ月もおほろなりけり
但馬　田尻保代子

磐城　鈴木たま子

春きてもなどかくばかり寒からん月のかつらに雪はふるらし　埼玉　横田秋子

我宿の梅はさかりになりぬるをいつまてさゆるはるの夜のつき　東京　あら井あさ子

冬のよも寒さますらんやまるとのしは戸にさすやありあけの月　東京　荒井満武子

あまりある寒さに月や雲かくれをしやこなたにしはしとゝめん　東京　荒井幾久子

おほろなるなかに一ときわ露しけき餘寒の月そ身にしみにける　薩摩　松原みれ子

うくひすの春つけくれとゆき消えぬ山家の月のかけのさむける　東京　角田ふみ子

春としもおもはれぬかなとけやらぬこほりのうへを照す月かけ　松山　高市もと子

さしのほる月のひかりの寒けさに春のそらともしられさりけり　三河　白井よし子

歌よめといはぬはかりにさえ〳〵て月の寒さにはれわたるそら　備後　春木花子

冬もはやわかれの霜のまたさむくかたそきふきにつき白う見ゆ　備後　春木春江子

梅の花は早や散るを待つ時なから小夜風さむしかたわれのつき　島根　岩倉なを子

春といへとかすみもやらぬ山のはを冴てそのほるよはの月かな　大和　栗山たか子

春なからたへす雪けのそらなれはてるさへさむきつきの影かな　大和　栗山健子

いけ水にかすまぬ月のかけみれはのこる寒さの身にもしむかな　長野　小泉みつし子

春なれとかすみもあへぬ大空になほもさむけき夜半のつきかけ

きさらきの夜半の春風みにしみて月のおもわの寒くもある哉　奥　和佐千鶴子

梅か香もみ雲にくれて春またきかゝれるつきのかけそさむけき　三河　榊原ていい子

梅の花散るかとみしはさへかえるつきのかけよりふれる雪かな　名古屋　木下鶴子

きのふけふ寒さまさりてこほるよも一ときわさえし月の影かな　東京　荒井千代子

また残る寒さいとひてはるのよのつきもくまをいてつかくれつ　東京　荒井幸子

あつさゆみ春こそ立てれ庭の面の雪にやとれるつきのさむけさ　東京　それ女

山かせはまたさむけれは霞あへすつきかけさゆるはるの夜の空　長野　山本直枝子

春來ぬと人はいへともこほる夜は冬よりさむしきさらきのつき　信濃　伊藤道子

春なから猶風さむしさゆる夜はうきれのとこにつきやとるらん　信濃　伊藤道子

なかむれは月のひかりもさへわたりきさらきの空風またさむし　東京　神戸すゑ子

おしゝとは思と餘寒のきびしさに月を見すてゝ戸をたてにけり　東京　神戸ろく子

春くれと空にゆきけのいろ見せてかすみもやらすさゆる月かな　上野　脇坂義子

春なれは月はおほろにかすめとも冬にもまさるかせのさむけさ　東京　河田いし子

春なからまたさきそめぬ梅か枝のひまよりてらす月のさむけさ　東京　松村あさ子

肥後　徳永萬濤子

山はいまた雪やのこれるきさらきのそらさえかへる春のよの月
肥後　徳永多瑠子
きさらきの空もかすまてつむ雪にかけさえかへるはるのよの月
肥後　徳永旗子
春なれとさむさかはらぬ雪のそら夜なよな月もおほろなりけり
肥後　佐々小學子
さえかへるきさらきころの月みれはこほりはてたる影の寒けさ
松山　上原のふ子
月かけのさゆるを見れは大そらに冬をのこしてはるはたちけむ
山口　村上操子
てる月のかすまむ空とおもひきやのころさむさに影さえむとは
肥後　千々波楢子
おほろなる影とみえしはさえかへる雪けのそらのはるの夜の月
函館　村上つる子
はた寒き餘寒の月はわかやとのうめか小えたにはなをたつねる
肥後　秋吉輝尾子
さえかへるさむさしのきて咲出るうめをもてらす夜半の月かな
東京　甲藤若子
春きてもとけんともせぬいさらゐになほ風さえてこほる月かけ
尾張　後藤のふ子
春くれとかすみもあへす風さえてゆきけにくもる月のさむけさ
失名
さえかへり雪ふきおろす山風にかすむもさむしはるの夜のつき
上總　高石とよ子
梅の花にほふこすゑもよそにしてこほるはかりの三日月のかけ
長野　藤村とし子
春の夜のしるしをとめてつきかけはゆきけにかすむきさらきの空
秋田　梅村たか子
むらきえのゆきまた殘るやまのはに月かけ寒しはるあさくして

京都　坪内りき子
日ころまつ春のこゝろもさえられつまたさゑかゑり月の寒けさ
秦野　琴千茂子
きえのころまかきの雪にかせさえててる月かけの寒けかりけり
常陸　山本延枝子
さむけれは月のやとりも霜とみへたもとはらへは梅かをる夜半
神奈川　森田はな子
まく梅もゆきかと見えてさえわたる月かけさむし春といへとも
東京　岩谷淺子
吹かはるみれのあらしに雲はれてしもさえわたるはるのよの月
秋田　和田りつ子
あつさゆみ春なほ寒し空さえてかすみもやらすさゆるつきかな
秋田　梅村きよ子
春たてとなほはたさむしひさかたの月のかつらにゆきやとるらん
東京　松田露子
さえかへり春をよそなるやまかせに霞みもやらていつる月かけ
信濃　今井政子
ふきすさむあらしに梅の香のなくは誰かは春の月ととみましや
信濃　今井露子
なしかものひそむを見れは中々にはるとしもなきいけの月かけ
伊豫　吉瓦眞子
梅のはなさきそむゑだに風さえて雪けにくもるおほろよのつけ
宮城　大槻初音子
梅のはなにほひそめにしこの夕たるひにかゝるつきのさむけさ
宮城　大槻良子
あつさ弓春とはいへと戸ほそより身をいるはかりさむき月かけ
宮城　杉田哲子
たちかへるはるの日數もうすくもり雪けにさゆる月のかけかな
埼玉　前野喜賀子

春そとて宿をたちいてなかむれは霞みもあへすさゆる月かけ
埼玉 前野ふさ子

山のはなのほれる月のさえかへり春のいろにはうつらさりけり
本郷 青木たま子

ともすれは雪もふるへくそらさえてかけなほさむし春の夜の月
東京 敷島うた子

冴えかへる月をし見れはあつさ弓おほろや春の名のみなるらん
熊本 田代艶子

さほ姫のかすみのころも春きてもまたそてさむくさゆる月かな
熊本 田代綾子

梅のはなゑみてうつれるいけの面の鏡にさゆるはるのよのつき
東京 林艶子

春たてとまた冬なれやふきとかぬ池のこほりにうつるつきかけ
摂津 鹽見文子

山のはののこるみ雪にてりそひてかけなほさむしありあけのつき
東京 八尾いへ子

風さえてふたゝひむすふうすらひをみかくも寒き月のかけかな
麹町 戸塚てつ子

春なからのこるさむさの空さえてかすみもやらぬ山の端のつき
麹町 戸塚とも子

木の間よりもれくる月の影さえてはるなほさむくこほる夜半哉

富士山

天
東京市赤坂區青山北町六丁目四十五番地 岩谷淺子

仰きみてたれめてさらん富士のねの
たかき皇國のすかたとおもへは

地
神田區駿河臺南甲賀町八番地 金原玉城子

雲たにもいゆきはゝかるほと見えて
そらにそひゆるふしのかみやま

人
東京府荏原郡品川南品川淺間臺 山崎文子

ちりひちのいかにつもりて富士のねの
かはかりたかきやまとなりけん

甲
東京 河合樂子

むら雲はかせにはれゆくおほそらに
そひえてたてるふしのかみやま

松山 上原のぶ子

ふしの嶺はいかなる神のちりひちを
いかにつみてかつくりましけむ

肥後 千々波橘子

ならひなきふしの高ねとことさへく
外國ひともわふき見るらむ

東京 清水はるみ子

うこきなき國のすかたをむかしより
ひとりしめたるふしのかみやま

伊豫 吉良貞子

みるたびにこゝろ清くもなりにけり
　神代なからのふしのすかたを

乙

秋田 津村よし子
神代よりふりつもりたる白雪はきえずやふしのやまとなりけん
東京 牛山菜子
あふきみぬ人なかりけりふしのねのゆるかぬ姿くもにそびゑて
薩摩 松原みれ子
にひたかの山はあれともあさ日さす富士の神山たふとくそある
大和 染山たか子
日の本のうごきなき代もみゆるかなそらにそびゆるふしの芝山
沖繩 仁保しま子
しろ妙の雪をかつきてさやかにもよそほひたてり不二のしば山
東京 岩谷あつさ子
大君のみいつにならふ富士の根をあふがさらめやよもの國ひと
筑前 中島たけ子
新高のやまはありともふたつなき國のしづめのやまはこのやま
筑前 中島よしみ子
いつ見てもかはらぬふしの神山はゆるぎなき世のすがたなりけり
函館 村上つる子
立ちのぼるけふりも今は絶ゑにけり治まる御代のしるしなるらん
東京 森田關子
似るものもしく物もなきふしのねの高きは國のすがたなるらむ
備中 久山まさよ子
久かたのくもの上なる不二のねはゆるかぬくにのすがたなりける
東京 それ女
大空に神さびたてる富士の根はうごかぬ御代のすがたなるらん

丙

山口 村上操子
白雲もたゆたふときくふしのねになみならぬほる世となりにけり
大分 村上とし子
大空に高くそびゆるふしのねはかはらぬみよのすがたなりけり
埼玉 前野錦賀子
とこしへの國の姿とあほぐかなあさ日にほへるふしのかみやま
東京 荒井あさ子
日の本の其なら高きふしのやまいくよかはらぬみねのしらゆき
出雲 岩倉より子
田子の浦に漕いでゝみよはるされはかすみにうかふ不二の大嶽
東京 平岩都子
勇ましき白衣の行者三人四人一の鳥居に富士なゝめなり
東京 荒井滿武子
とつ國にならふやまなきふしのねはうごかぬみよのしづめなりけり
東京 荒井幾久子
みるたびにいや尊くもあふぐかなかみ世ながらのふしの芝やま
東京 荒井こと子
不二のねの幾世かはらぬけたかさに心のくもゝちり失せにけり
東京 荒井千代子
白妙のふしのたかねのけたかさは國のひかりとゝもにひゝけり
東京 三好賢子
いつこより見るもかはらぬ日の本の國のすがたと仰ぐふしのね
東京 山内濱子
里人の神かせありと告けゝれは舞るゝなまたなむ富士の山つと
秋田 古瀬隆子
うたかひの雲は夜のまにはれゆきてあかぬながめのふしの白雪
三河 永井さい子

しら雲をふもとになしてそゝりたつやまそうへなきふしの神山　長野　小泉みつじ子

日の本のくにのたからとあふくかなたかくそひゆる富士の神山　長野　山本直枝子

ほの〳〵と朝日まはゆくあふくかなかみ代なからの富士の芝山　東京　三好珍子

神世よりつもり〳〵て朝日にもきえぬはふしのみゆきなりけり　長野　山本基子

雲のうへにたかくそひゆる不二の山とつくに人もあふきみる哉　神戸　井上品子

雲のへにそひゆる峯や富士のねにいまもかみ代の雪はのこれり　東京　敷島うた子

あめか下ならふ山こそなかりけれ名もふさはしき不二の高ねに　東京　大木椿子

雲の上に八重たつやまの上にまたわきてけたかきふしの神やま　宮城　大槻初音子

御代祝ふためしにひかる不二のねは神よなからのすかたなる覧　秋田　日野千萬世子

日の本の姿とや見む世のなかにならふものなきくもの上の富士　陸前　前田河千年子

とこしへにうこかぬ御代の姿ともあふくはふしの高根なりけり　東京　林環子

とつ國の人さへあふく富士のねはまことに國のしつめなりけり　兵庫　原田秀子

みれといふみれゆく雲のうへはれてあふけはたかきふしの芝山　埼玉　横田やな子

雲かゝるふしの高ねにのほり來てまつうちわたす三保のまつ原　宮城　大槻政子

仰き見るくもゐにそひゆ富士のねは動ぬ御代のすかたなるらん

神代より國のしつめとみるはかりきよくもたてる雪のふしの根　東京　林艶子

あまの下ならふやまこそなかりけれ雲にそひゆるふしの高ねは　伊豫　柳たけ子

うるはしくあやしきものはするかなるふしのたかねの霽のさま　松山　山崎政子

茜さす日かけとゝきてあか〳〵と富士の高嶺ゆ夜は明けにけり　備後　木村清江子

日の本のふしのたかねは名もたかく外國まても知られけるかな　群馬　脇坂義子

新島にたかねはあれと不二といふなに負ふ山はこれそこのやま　備中　大橋風江子

千早ふる神の御代よりうこきなき國のしつめとあほく不二のね　信濃　伊藤道子

清見潟清きなきさをこき來れはなみまにうつる富士のおほたけ　壬生　よしの子

いひしらぬなかめなりけり仄の〳〵とみゆるやふしの峯の白雪　壬生　松野みどり子

畫たくみにかゝせてしかなほの〳〵と三保の浦わに寫る富士の根　壬生　岩間菊野子

富士川の淺瀬わたりてみかへれはなみまにつもゝ富士の白ゆき　壬生　岩佐松江子

さかしまに白き扇をかけたりといひしもうへな富士のかみやま　壬生　三町初江子

いつこより見るもかはらて雲きりにかはるすかたのふしの芝山　東京　大町律子

富士の嶺のかすみはゝれて久方の雲ゐはるかにあらはれにけり　島根　岩倉なを子

日向　紀藤榮子

動きなき國のためしのふしのねに降りつむ雪もちとせなりけり　三河　白井よし子

あさ日さす富士のみ山のこのすがたとつくに人も仰がぬはなし　東京　山内なか子

峯の湖清きかゝみのみなそこにくも井の富士をうつしてそ見ゆ　埼玉　前野ふさ子

あまのとは雪よりあけてやへ雲の上にそひゆるふしのかみやま　東京　青木たま子

日の本の國ふりみせていやたかゝくもにそひゆるふしのしま山　和泉　藤原菫子

うつしゑも何かおよはんほの／＼とうへにそひゆるふしの神山　日向　紀藤のぶ子

ほがらかに朝日昇りてふしのねは神世ながらにゝほひいてけり　河内　竹内敬子

世のなかに秀てし不二の高ねこそ神つみくにのすがたなりけれ　東京　山内安子

くもりなき清きかゝみの峯の湖くも井の富士をみなそこに見つ　伯耆　樋口つる子

動きなきふしのたかねはよろつよもかはらぬ御世の姿なりけり　伊豫　山崎秀子

いつみても氣高きふしは幾年とせもかはらぬみよの姿なるらむ　備後　春木花子

君が代のつきぬ姿になそらへて只あふき見る富士のしはやま　埼玉　横田音羽子

天津日の影さかのほるかけよりもうへにそひゆるふしの神やま　東京　湯淺光子

あつま路になかめを競ふ富士がねは見るともつきぬ姿なりけり　東京　石川薫子

一とつらの雲もかゝらて今宵しもふしの根はるか月のかけすむ

まつ原の木の間／＼にふしみえて田子のうらなみけふは靜けし　埼玉　横田秋子

かみ代よりかへぬすがたの富士が根は皇御國のしつめなりけり　茨城　飯川幸子

萬代もかはらぬ國のためしかなたかくそひゆる富士のしはやま　備中　大橋采子

駿河なるふしの高ねの白ゆきはいつのみよゝりふりつもりけむ　陸前　前川河みさを子

日の本のしつめなるらんしろたへのくもゐにたかきふしの神山　肥後　德永[illegible]子

日の本のたからとなれるふしのねのゆきの姿は八千代かはらし　肥後　德永[illegible]子

外くにのひとにみせはやいつとてもかはりなきよのふしの神山　肥後　德永[illegible]子

夢にさへ見るも嬉しとよの人のことはにもれぬふしのかみやま　陸前　杉田哲子

いつみても頂き白きふしこそはやまのおきなといふへかりけれ　三河　服部鶴子

ふしの嶺の雲にそひゆる姿こそよもの見るめもかはらさりけれ　三河　鵜野くわ子

とゝめてもみまくほしきは東路のかなちにあかぬふしのたか山　三河　河合ぬひ子

あふきみる處かはれとかはらぬは空にそひえしゆきのふしのね　三河　藍原鉦子

いつみてもめかぬよそひやふしの嶺は雲の衣にゆきのしろたへ　吳　和佐千鶴子

外くにゝたくひもあらし日の本のはしきみやまのふしの高ねは　大阪　長野悅子

とつ國のひとも尊くあふくらんわかひのもとのふしのかみやま
東京 河田いし子
いつみても飽ぬ眺のふしのねはいひつくすへきことの葉もなし
大和 栗山俊子
春かすみすその〻はらにたちそめてひときはたかし不二のしは山
磐城 鈴木玉子
富士の山のほり〳〵て見下せはのほりしみちもくもとかはりぬ
磐城 鈴木たけ子
富士のやまみれの白ゆき消えさるにふもと遠近なつたちそめぬ
横須賀 岩橋花子
日の本のみいつとともにいや高くいく代かはらぬ不二の峰かな
福井 平田そう子
こまとめてふりさけ見れはすわの海の氷のうゑにふしのとう山
三河 榊原てる子
深雪つむふしの高根はとこしへに變らぬみ代のすかたなるらん
北見 中川伊代子
天つ日のひかりさしそふ日の本のくにのしつめの富士のかみ山
東京 山本茂子
ひの本にたふときものは敷島のやまとこゝろとふしのおほやま
秋田 小島いわ子
かち枕かされ〳〵しつれ〳〵に見ゆるもうれし富士のとほやま
秋田 椿村たが子
むら山は八重のかすみに埋れてひとりにほへるふしのしらゆき
秋田 椿村きよ子
世の中に秀てしふしのたかねこそ我か日の本のたからなりけれ
秋田 和田りつ子
たちこめしあしたのかすみはれゆきて長閑にふしの山をみる哉
尾張 後藤のふ子
都へとかよふ汽車路にいくちたひ見れともあかし雪のふしのね

京都 坪内りき子
ことさらに美しからんふしの山ゆきてもみたきゆきのあけほの
肥後 佐々小學子
朝な夕な見なれし雪の富士の山よにたくひなきけしきなりけり
肥後 佐々有耶子
けぬか上にまたもふりつむ富士かねは銀のことく雪そこほれる
肥後 岡山登茂子
天の原てる日にちかきふしの山いくよひさしくゆきはつむらん
東京 松村あさ子
大君のみいつと〻もに富士の根はとつ國までもきこえけるかな
横濱 飯島淳子
書にふみにはた人つての富士か峰は聞きゝにまさるなかめなり
加藤てる子
たくひなきみつほの國のふしのねはすめらみくにの姿とそみむ
上總 高石登代子
外國にたかきはあれとひとこゝろきよきすかたたの富士の神やま
長野 藤村よし子
仰きみて高しとおもひし天くも〻ふしの高ねにたちもおよはす
神奈川 笹子茂子
富士かねの雪とけそめてひんかしのみ空は高くはるめきにけり
常陸 山本廷枝
とこしへに國のしつめとたかき名はつみてたえせぬ富士の白雪
名古屋 藤原淑子
花のよしの月のあかしも何かあらん朝日に匂ふゆきのふしのね
熊本 田代艶子
島國のすかたとあふくふしのねのいや高き名はかくれさりけり
熊本 田代綾子
雲の上に高くそひえて動きなきみよのすかたをみするふしのね

ちりの世のちりはかゝらし久かたの雲井に高きふしのかみやま　熊本 日高かず子

富士の根に登りて見れは白雲のうへにあそへるこゝちこそすれ　攝津 鹽見文子

とつくににたくひまれなる君かよの姿を見するふしのかみやま　東京 八尾いへ子

みるたひに心きよくもなりにけり神代なからのふしのすかたを　伊豫 吉良貞子

さらぬたにあかぬなかめの富士の根のゆきに烟のたちしその上　信濃 今井喜子

ふしか根の雲をしのきて靜かなるすかたを己かこゝろともかな　信濃 今井政子

文ならて見まほしき哉そのうえのもえし盛りのふしのしはやま　信濃 今井喜子

聞きしより思ひしよりもうるはしき姿や富士のたかれなるらむ　神戸 今村竹子

たくひなきすかたなりけり久方の雲わけいつる富士のやまひめ　東京 山田ふみ子

うつしゑもいかて及はむ初日かけ雪にかゝやく不二のみやまは　名古屋 木下鶴子

（追加）

年のをのいつまて殘る寒さかなかすみもやらぬはるのよのつき　羽後 三浦ふさ子

大空はかすみもあへす雪ふりてふゆにかはらぬつきのかけかな　神戸 今村竹子

春立てとまたきさらきの空さえていとゝ身にしむ山の端の月　筑前 中島たけ子

大空はかすみもたゝす風さえてふゞきにくもりるはるの月かも　伊豫 渡部信子

外山にはまたしら雪のふかけれはいつるもさむしはるの夜の月　羽後 三浦はる子

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

雪中梅園にあそぶ

天

熊本市中坪井町七十七番地　日高かず子

夜半の嵐のいとさえ〳〵て、ゆき白う積りたる朝、軒端の梅の三ッ四ッ春しり顔なるに、名にし負ふあたり如何ならんなど思ひやる折しも、心合へる友一人二人訪ひ來ぬ、いと嬉しう、友の道は理ざりけりと、火桶とう出れば、あな老人のすさびよ、雪間の梅見んとて來つ、いざたまへとそゝのかす、今しも忍び居たるに、心いよゝいさみ、己も寒さ白雪の鶴の毛衣まとひつゝ行かましと小笠もとりあえず出立つ。野も山も白銀しき渡したる景色いはん方なく、人あと見えぬ道を我は顔にたどりつゝ、遠からぬ天滿の宮につく〳〵、雪柱たちたらん樣なる鳥居をくゞれは御社は梅の林に包まれたり、幾本となき老木若木枝さしかはし、龍にも似たる臥龍梅、鶯の宿りとならん鶯宿梅など　東風吹かばとまで、めでたまひし梅のかず〳〵、降りつむ雪をかざしたる、花の姿もか

くはとぞ思ふ、質に雪の梅梅の雪なりけり、埋みは果てぬ香をとめて、花やたづねんと彼方此方に立入れば、同じ心の人ならん、瓢携へありき、あるは草紙の様なるを持てる、歌などものするにやいと床し、山里よりはなかなかに、見じといふ人はあらじとおぼえてなむ。ちゝとなきて木傳ふ鶯の羽風に散る雪のあとを、ふと見れば、ほゝゑむ花の一輪、嬉しさを分たんと友さし招けば、彼方も呼ぶ、こもこの鳥のしるべなりけんかしといとをかし、梅の香うつる雪を、つとにと友の手に取れば、かつがつ消ゆるををかしと笑ひつゝ、我もと袖ふれしうつり香の、雪と共に消えぬ間にと、家路をいそぐ、清き梅が香身にしめて、そが操にならはんと、心もすがすがしうなりけるよ。

地

伊豫國松山 出淵町梯内 梯たけ子

白たへに降りつもりたる雪のあした、窓をしあけて眺むる折しも、ふとなつかしき梅が香のするに、心も心ならず、庭にをり立ちて、雪の上に、あたら下駄の跡つけつゝ、かをるそなたに何時しか足を運びゆけば、雪間よりけしきばみほゝゑめるに、いと嬉しうて、かなたこなたの梢の雪打拂へば、めざむるばかりに美しき紅梅の咲そろひたる、其風情の氣高さ何にかはたとへん、質にもわかぬ心地のせられて立去りかぬるまゝ、しばし木の下に遊びぬ、あはれ春まだ淺きに時を違へず、雪さへもしのぎて、匂ひ出たる其心の雄々しさよ、げに古より、四君子の一と數へらるゝも、ことわりなりかしと思ひ知らるゝにつけても、日頃寒し寒しとて埋火のもとにのみよりそひて、怠りがちなる身の、いといと恥かしき極みなるよ。

人

横濱市 戸部町 飯島淳子

あな面白の雪のあしたや。窓押し開いてながむれば向の山の薄化粧せる、四方の木々の時ならぬ花咲きたるいづれおとらぬをかしき眺めなるに暫し恍惚として、ありしが。ふと靜子の君と、雪のあしたは疾く起きいで、梅園に遊ばんと、約せしことを思ひ出でられたれば其のまゝ身仕度もせでおとづれ行けば君には、早待ち侍りぬとて共に出で立ぬ。あたりの

景色たへつゝ、雲踏わけていそぎ某梅園に至れば、うれしや未だ人はあらで、大きなる犬の足跡のみ、此處彼處に亂れ居りぬ。折しもいとろうたき聲のいづくともなく聞ゆるに互に顔見合せてほゝゑみつ。あはれ鶯の初音しかも雪の朝此梅園にきゝつることの嬉しさよ、と心あてにそなたに足を運び行けば、梅の小枝を彼方此方に飛びうつり雪を蹴立てゝは、二聲三聲うたひつゞくる様のあどけなさ、まして幾百株となき梅の梢の莟や、ほころびそめたるが雪に埋もれて恰も慈母の懷よりちごの無心にほゝゑみて顔出したるが如く清く高き香の洩るゝ、いひしらずめでたし、あゝ美しく、床しき姿よ、此寒さに、はた霜雪に能く耐へて雄々しく樹てる氣高き姿よ、美しき眺、いつまでもと思へども、童或は小女、中には同じ心の男女も數あれば、今はとて友と共に名殘はあとにのこれども、またの日を約して我家にかへりぬ。あゝ一點の汚れもなき白雪よ、霜雪の寒さにたゆまでゆたかにさける梅の花よ、實に婦人の鑑なる哉。

肥後　秋吉輝尾子

夜半より吹すさぶ木がらしに、心能くいれもやらず、今朝とく床をたち出で、妻戸おしあくれば四方の枯木にときならぬ、花さきて、わら屋も玉もてふける、白妙の銀の世界とはなりぬ、春たちそめしよりおぼつかなくも、咲出たる梅が枝にうすくつもれる、白雪の景色一としほあはれになつかし、まして金熊寺の梅樹林はさこそど思ひうかべつゝ、文案にむかへど冊をひもどく心もいでず、折から柴の戸音づれたまひしはかれての友達たれかれの君にて、あなりきかの寺院にといひたまふまゝにいざと思立て、直に樂しみし梅園にあそびぬ、かゞなふよしもなき、幾千の梅林風のさそひしよりは、さえかへる寒さをしのぎて、ひとしほ咲出たる、小枝にまばらにかゝりし白雪のながめえもいはれず、いと妙なる景色になん、思ひきやかゝるうろはしき梅園ならんとは、遙に月が瀨岡本などのおよぶべくもあらず、或人の梅の花ばかり、はづかしきはあらじ、とはかゝる折なるべし、いかで姿も一首と思へど、才なきをいかにせん、友達の詠を聞てよりはしなく歌をならべぬ

しら雪のうすくつもれる小えだより
　にほひあふるゝそのゝうめがゝ

白たへににほひ出たるうめのはな
　けしきをゆきのふでにうつさん

中にも一年の中にさきかけて咲出れば、櫻にもまさりつらん、かの鶯宿てふ故事も思ひ出られ、菅原大臣の此上なう、めで給ひしもこの花ときゝては、いやましにゆかしくてなん、いみじき霜雪をも堪て、早く咲出でこそ萬花の魁と、めでたくかぞへらるれ、人も一度志をたてゝ後は、如何なる艱苦をも、堪へしのびなば、遂に梅花にもまさりて香高く、名を千歳までものこすならん、と語りつゝ、ふとみれば、さと吹來る風にふたつみつ、散くるもをゆかしくあはれに、鶯の音つれたらんには、をかしからんものを、

熊本　田代綾子

明ぬとて、まどおしひらけば、よべよりの、雪に、野山、皆、一面の銀世界となりて、朝日にかゝやくあり様、げに、艶なりけり、かゝるを、ひとり、見はやさんもいとほいなき、某なれば、某の戸たたく、友もがなと、思ふをりから、うれしや、その人はとひ来ぬ、しばし興しけるほとそ、ともの、いふ様、某の梅園こそ雪のけしきも、一しほ、をかしかるべけれ、と、にはかに、相つれて、出立ちぬ、寸余に、つもれる、白雪とて、なか〱に、道はかどらず、やうやう、心あての、そのには、つきぬ、名にしおふ、梅園とて、いと、広やかなる、園内に、数へもつきぬ、大小の、梅樹、さきて、かすみと、まがふべし、また、咲そろはぬげ、なれども、幾本か、ほゝゑみつらん、をかしき香り、雪間ながらに、もれくるぞうれしき　されどましろに、つもれる、雪ぞ、香こそ、かくれね、なつかしき、花の色がほは、見るよしもなく、いづれが、雪か、花かと、たゞまがふばかりなり、さあれ、この、雪の中に、うつもれて、なほかく、春しめがほに、ゑめる梅よ、花てふ花は、多けれど、雪にもたはまぬ、その、みさをぞ、たくひ少なき、あはれ、おのれも、うるはしき、梅の心を心となしてん、とちかふ、梅が枝そ、珍しや、鶯の、初聲二つ、みつ。

熊本　田代艶子

ちぎりおきし友どちそゝのかしつ、たどるはいづこ、池田の里、鶯ならねども、梅が香たづねんとて。げにや、百梅園てふ、名にし負ひて若木、老木の数しれず、直き、曲れる、とり〱に、ゑならぬ香りを放ちつゝ、ほゝ笑みたるさま、優にやさしく、たが手すさびにや、短冊あまた、まとひつゝ、色をも香をも、知る人にこそと、いはまほしげなる、いはん方なし。霜雪を、しのぎ〱て、やう〱に、花さく春にあへる梅よ、いかに、けだかく、とうとくて、げに、このかみの花はあらじと、一人がいへば、いでや君子たる梅の君に、あやからん為め、おのれも腰折さゝげてん、など、ひなに、そだちし村雀の、口ぐちにのゝじる、折から、花があらぬか、幾ひら、袂のあたり、か

すむるもあやしく、花なき梢の見るまに花さきそへしも、いと〱くすしきや、仰げば大空かきくもりて、さきのけはひもなく、白きもののみ、いよ〱降りまされるよ、雪なんめりと、何れも、主の君のたまふまゝに、端近う立よる。見渡せば梅の梢はや雪の衣につゝまれて花か雪か、雪か花かと、うたがはれ、只見る、白銀の世界と化しさらんやうなり、さるが中にも、埋れで、尚かぐはしき、かをり匂ふは、げにこそ、梅の操なりけれど、いとうれしや、あはれおのれも数なれども大和の女郎花、よしや西比利亞の雪はふますとも、此雪をたふみおきて、事だにあらん其折は、梅におとらぬ心もて、御國の為に盡さばやと、かたみにはげみ、はげましつゝ、雪をおかして、家路をたどりぬ。

東京　松田壽子

春風に霞みし雪の二度さえかへり、夕べの雪のふりつみし、珍しさいかにと、朝とくやり戸明て眺れば、築山のあなたこなた見渡すかぎり白布引たる如く、けしきことにをかしければ、寒さもわすれ弟妹みちびき、庭におりたち氷れる池のあなたなる、園の梅なかば咲たるもいかにうづもれん、とあゆみうつしけるになん、紅梅は色ことにあざやかに、白きはそこともしらず雪の下より匂ひこぼるゝあたり、絵にもかゝせまほしく、ながむるに、妹は下枝を手折花つむは、雛遊びに物せんとか、弟は、白雪かきよせうさぎ造るなど寒もよそに打興じ、野邊に若なつむ、それとはさま替りて、めづらかなるかくもいみじき有さまも、のどけき日影にあとなく、消なんことのいとをしく、今日は光りの出ずもがなと、ながめつゝ、實に雪の日は梅の本こそ又なくをかしけれとあかず、此園に心つなぎてなん

筑前　中島たけ子

今年も早や四日五日と打過ぎて、公のいとまもあと一日を餘す許りなり、早やかるたにもあきたり、明日はつとめて大宰府にまうでなんとしたしき友がき一人二人打かたらひつゝ前夜よりこれかれ支度す、今朝つとめて起き出れば庭の枯木の夕より降りける雪に時ならぬ、花な

さかせり。汽車の便なかるに何程の隙りかあらん、かゝる折にはとづきん、コートなどよそほひつゝ出立す、四方のけしきいはん方なし、二日市より鐵道馬車に打のり大町につきたるは午前八時なりけり、また早ければ雪に詣でたる人の跡もなし、御池のそり橋からくも打渡りやがて神の御前にぬかづきぬ。

東風吹かばと命じたまひしかの梅は雪の下にありてまだ、つぼめりとも見ねず、千本八千本老木若木を打交へてこの木の限り植ゑ渡したる神の御苑、色こそ見えれ香やはかくるゝと東の苑西の苑と打ありけど人のとがむる香だになし、御瀧の水も氷り居れば噴水の下なる丹頂の鶴のつがひの雪の色にまがひたるなど見ありくに、ふと一人の友の見出したるはいともの〳〵しげなる、古木の幹より繪にも見まほしき枝のさし出でたる雪の下より、いと紅き紅梅の匂ひをこぼして咲き出でたるが、まだうら若き少女のほゝゑめる唇にも似ていひしらぬさまなりけり、あたりの東屋に打やすらひ名物の梅の枝など命じて打あたゝまりつゝながむれば、日は早や晴れ渡りて竈門の連山鏡の如く朝日にてりかゞやきて御苑の雪のけしき、又なくをかし。

年ごとに梅のま盛りにはふりはへて詣で來れど、雪のけしきをめづるは初めなりけり、花はさかりに月はくまなきをといひけん古語など思ひ出でられていとあかぬ心地のせらるれば料紙とり出して、歌したゝむるもありあるはかの木の寫生などするもあり、やがて携へ來たりしびろの物どもものし了りて、汽車の時刻におくれじとあかぬ名殘りを惜しみつゝ出立つ。

羽前　菅よそ子

大御代の年の始めとて、空うらゝかに霞棚引き綠りの松竹立わたし家々にては歌加留多の聲いと〳〵樂しげに聞くぞかし、されど暮年より積みにけん深雪とて、かゝる日の本の空は見渡すかぎり銀世界とこそ疑はれにけれ

白金をしき渡すかと見ゆるかな
雪は貢の國よりやふる

月日流るゝ如くにて、樂しきなど語りつゝありし、初空月もいつのまにや過ぎ行きて今は雪消月ともなりにける、兩三日は日和續けども深雪のため庭前の梅花未だ笑ひ初めず、折しも徒然のあまり、不圖思ひ立ち友人、とめ子の君に遊歩がた〳〵西村園の盆栽の梅見は、どうでございますかと、粗狀を差上しに、君には同意なりとて早速仕度せられて、我家を問せ給ふ、我、君と、一行して、道すがら、四方山のむつみ語りなどしつゝ、彼の所に到る、主人出でゝ我等の、きたるをよろこび、早速、ひきいれられて奥に到たれば、美ごとなるかな數しれがたき鉢に見渡すがぎりの梅花は今を盛りと、咲きにけり、嗚呼花は半開を、たつとぶと古人の云はれし如く、此花二三日前にや、いかばかり、みごとなりしやと、笑ひつゝ、此の如き名花を、たれや、惡みけん。菅公のかく愛せられしもげにことわりなど、語り且つ戲れつつありし中に、少女一人出で來て、一寸梅花ぞ手折て我が頭にかざしけるこそをかしくてなん。

松山　うたか

降り積る白雪にとう人もなく、淋しさいはむ方なき折柄親しき友より便して我が別莊の梅の花咲きそろひたればみ雪をわけて、とひませよとの音の葉にうれしさ、いはむ方なく、心合ひし友垣五六人、打ち連れだち別莊へと行きぬ、實に主の君心し給ひしかひ有て、廣々としたる庭の梅の花、積れる雪にまがひて、咲き出で折々紅梅の雪間よりチラ〳〵と見ゆる風情えもいえぬ花の香ゆかしうさながら、天園の銀世界に遊ぶ心地して音の葉も、出ず打眺めゐたりぬ、主の君出給ひいふは里の子を集め雪なげの遊び御目に懸む、君達も共に助け給へと云はせもあへずはら〳〵と右より左より、あまたのうなひ子、立出蹤十字に後八卷の雄々しきいでたち、白布の如き庭の面に雪戰ひは初まりぬ進め〳〵頁な勝よ雪は小止みなく降り、出で戰ひはたけなに打くるつぶてに梢の白玉打碎け梅の香りいよ〳〵高し、やがて萬歳と共に雪つぶては止ぬ我等の心づくしの雪だるまの獨り所えがほなり折しも、聞ゆる友の妙なる、小琴のひゞきに心も魂もいつこをたどるやら作りし

雪だるまはいよく〳〵降りつむ雪にうづもるゝのみ。

肥後　徳永旋子

春とはいへど、降つゞきたる、白雪の、今朝は、一入の深さにて、草木の萌出なん様も見えぬを、小竹園の師大人の御消給りければ、何事におはすらんと、披き見れば、梅迷軒の雪の景色に、いざとく来ませとの仰せなりければ、いたくよろこび、いさみて参りける、かれていとしづけき御すまゐなるに、今日は塵芥をよそにて、白銀の世界と見ね、幾千本ともしらぬ梅株の花は、雪にまがふまで色香めでたくほゝ笑みぬ、まことに鶯の宿も理なりや、かゝるをりから、師大人の妻君の小琴調べさせたまひて、梅が枝とかいへる歌かきならし給ひければ、感深う覚ゆ侍りて、

しら雪もともにゝほひにこもりけり　こゝろゆかしきうめのはなかな

など口ずさみぬ、あはれ梅よかゝる、さむさに堪しのびてこそ、四君子の中にもかぞへられつれ、處女の第一鑑ならずや、かの菅原大臣の、東風ふかばにほひおこせよ梅の花、あるじなしとて春なわすれぞと、詠みたまひけん、故跡は今も筑紫の飛梅とて、世に名高く其操の百花の長たるもうべならずやと称てあそびくらす、夕まぐれ籬のうちより、鶯の一と聲らしぬるも、かりにふれていとゆかし。

和泉　福原菫子

見渡すかぎりげになつかしきは雪の景色になん、日頃目馴れたる園としもおぼえぬ許りに、朝日にてりて立ちつゞける幾十株の梅はなべて、白銀の花咲き出でたらんがごと、きらく〳〵しう何れを梅花と見わけかぬるなかしさ、されど其伽羅沈香にもまさる、床しき匂ひはさすがに雪にも埋れず、たもとにかをりてすがく〳〵しう、心地よさかぎりなうよりく〳〵彼方には、鶯の美しき聲さへして、風も吹かぬにはらく〳〵と雪の乱れ散る梅中々に清げなり、あはれ此雪の中を憚せず、咲き香ふてふ梅花の操ある人は、そも今の世に幾人かある、尊きは汝と、雪を拂ひて一枝ををりぬ。

島根　岩倉なを子

此頃は、園の梅も綻び初めぬれば、いかで諸共にめではやさばやと祖父君のせちに招かせ給ふにさらばおとづれ参らせんと出たつ、春とは云へど未だ鶯の聲も聞えず、衣手寒う吹く風にまじりて、はらく〳〵と軒にかゝるは、雪の細々に降るなりき、見わたせば、わざと茅葺の庵より、茶室などのおもしろふたてつゞきしかたへとかゝる、垣もひくゝ門は蔀を結ふ縄にて結びそへたるなど、ことに、梅は造られど猶よう林に成しもあり、又は老木の池の面に水鏡を見たらむ如く、たなるゝ許りかざせしも有り、雪げの島に若菁う出でゝ、小ぎはを流る小川には根芹なども生へて見ゆ、やうく〳〵にたどり付ば、祖父君のむかへ給ふ、うれしき哉、昔し小宰相が宿の梅もかくばかり、うるはしくは有らざらましやはと、云へば、打笑み給ひつゝ、鋏など取り出してたまふ、さすがに切なは、鶯の宿はと問はゞいかに答へましと、得手枝らず、彼方此方と、眺むる内に、あやにく雪の降りくれば袖にえならむ香の薫るもいとうれし。

長野　松澤まつ子

いつしかと待ちし園の梅の蕾をおかしくて、三ツ四ツ二ツほころびそめつるを見るにつけても、いとゞ某梅園のけしき思ひやられて、今日しも幼きいとこを伴ふて、出でたつ、道の程わしきつめたらん如きに、二の字々々のあとつけて漸くにたどりつきぬ、折しもこそあれ、そよふく風にえならぬ、香りおこすに、身も心も空になりつゝながむれどく〳〵六ツの花こちたく咲くからに、何れが誠の花なるかえ分くべくもあらで、あはれ鶯のしるべもがなと思ふ心や、谷の古巣に通ひけん忽ち名のる、鶯のまだうら若き二聲三聲、アといふ聲を呑みこみて節にく〳〵立ちよれば嬉しやなつかしや、南の岡の二本三本に白梅の春にさきがけ、にほひいでたる雄々しさよ、さればぞ、古より歌にもよまれふみにもかゝれてめでにやさるゝなんめれなど語らひ交す程に、時もいたく過ぎければ、いざとて歸る さに心なき業ながら、少さき一枝を手折りて、いとこの前がみにさしつ、あはれ御身よ、梅のあでなる

姿にには似難はずとも、此花の如く操をまもりて、名をもあげ給へやとて其を手とりて、見返りがちに家路につきぬ。

日向　紀藤栄子

いつしかと待ち渡りつる、岡垣の梅の、南の枝に二つ三つ四つほころび初めしものから、思ふどち尋れし去年の梅園の思ひ出でられて、いかで今年もと、友どちそゝのかして、立ち出づ、今朝しも置き渡したる白金の、艶なるにさそはれいつしか梅園に来にけり、やがて見ありくに、高く築きなされし小山の下に、鏡の如き池あり、一株の梅樹、さながら、龍の池水を呑むらん如く、枝茂く、池上にたれて、そが雄々しき影を水に映すなど、えも云はれず、ところ〴〵に魚どもの溌溂として、行きかふなど、いと優し、此処らに立てる梅どもの大方は年経りたり、花の疎なるもの、密なるもの、群れるもの、枝打ちたれたるは、なよ〳〵しく、花の亜きにえ堪えぬ如きは、凛々しく見ゆ近きものは踏まほしげに、遠きものは招かむが如く、まして、近き花は、見分けぬれど、遠き花は、降りつみし雪に見え分かず、彼方此方木づたふ鶯の初音いと艶なり、猶木の間の月も床しけれど、名残り惜みつゝも家路に辿りつきぬ。

日向　紀藤のぶ子

夜一夜、吹きすさびし風も凪ぎぬ、降りしきりし、雪もやみぬ、今日しも空の艶なるに催されて思ふどち、伴ひつゝ名に高き、某園の梅見になむものしける、哀れ、美しきは白金の中より、咲き出でし梅花になん、枝もたはゝに咲き乱れたる色香に、木傳ふ鶯の初音床しう、云ひ知らぬ、眺めにそことなくあこがれて、いつしか時のうつるもおもほえず、やがて黄昏にも成りぬれば、猶木の間の月も戀しけれど、あかぬ心をはげまして、立ち返へりぬ。

降る雪になほ埋もれても梅の花
時しり顔に咲きほこりけり

肥後　佐々有郷子

ふりしきる雪は花ひらにまがひて、風の心にまかせ筒、窓のうら外一面につもりければ、銀世界とも覚しくなりぬ、かゝるうるはしき景色なれば、梅築園にあそびて、見わたしたらば、いかばかりたのしからんとおもふものから、小間使の松女を、はしらして、友達二人三人に消息まゐらせつれば、使者とともにうちつれ立て、車をはしらせ、訪来ませば、妾は歩行より、新意匠の羽衣コートに、小町印の絆朱鞘をはきてぞ出たちぬ、そも〳〵、今日は花にまがひて、雪のふりかゝるを、蝙蝠傘を以てふせぎ、さむさをば衣の袖につゝみて、車引人におくれじと、つとめれば、梅築園につきぬる時は、汗さへいづべくなりぬ、園主の婦人は、我師の君のはらからなれば、ことの外、よろこばれて火桶とりいで給ひ、雪の花見もこれなくてはと、桜炭かきおこしたまひ、君ばれながらも、若人たちに先こされては、口も氷りで出かぬべければと、筑紫琴とり出て、梅が枝の曲をぞ調たまへる、学山しらぬ姿どもは、題を踏て、鶯宿梅といふことをよめる、若子君はいちはやく、

雪のはなかざしてきなくうぐひすは
このうめが枝ややどりなるらん

とうたひ出たまへば、末席をしめられる、岱子君が今日の歌題は、鶯の宿はと問はばいかがこたへんといふ、古歌の意なるべければ如何にとありければ、衆人、とり〴〵論あれど、雪の花見の遊びなれば、雪もろともに打とけたまへと主婦の君のさとしなれば、茶菓のもてなしに興をそへ、夕日の影に雪もあとなく消ぬれば、亦の雪降にこそと、袂をつらねて立いでぬ。

但馬　田尻保代子

春としいへば、雪気の空も何となくのどやかに覚ゆる折柄、親しき友のふりはへて、社頭の梅見にとそゝのかすまゝに、打連て出立つ、もし咲かぬ程ならば如何はせんなど、語らひつゝゆき〳〵て社前に詣れば、吹来る風にたぐへて、えならぬ香のすゝに、いとゞ心のときめきせられてなむ、いそぎ幣奉り給へて御園生の方へと行けば、木々の梢にふりかゝれる雪の、花を欺く風情いひしらずをかし、されどなほ何れ

が試の花ならんと、木間〳〵經めぐりて、け近う見れば、只雨にかたよりたる、所々の枝に氣色ばかりづゝ、ほゝゑみそめしのみなれど、其香は遠方人の袖さへかをるばかり、雪にこもれる中よりいみじう匂ふなり、されば世の人此花をしく四君子の一つに數まへて、めで尊ぶもうべと、いとゆかしう覺えて、女の行も斯てこそなど、そゞろにかへり見せらるゝ折柄、さと吹く風の又もや雪さへ誘ひきぬれば、

ゆきならて梅のたよりをうくひすの
谷のふる巣にさそひゆかなむ

呉　和住千鶴子

それがし梅園の花、昨日けふ盛なりとの、おとづれありしかば、あけての朝行かんと、二人三人の友を誘ひたきて臥戸に入りぬ、閨のふすまのさえわたりて、ねられぬまゝ、起き出つれば、夜半にや降りいでけん、しら雪の積りたるさま、打見やる、遠山は、彌生の花の匂ひいでしかと思ふゝばかり、庭の松竹までも、時ならぬ花のこぼるゝばかり、いと床しきに、そゞろ立ち出てぬ、霞をさそふ春風も降る白雪にさそはれて、さながへる嵐のたへがたきを忍びつゝ、えんなる追風にのみ、あくがれて友を誘ひ幾度かまろばんとして助けあひつ、やう〳〵きつきぬ、眺むれば、千本の梅の花も香も雪にまじりて見え分かず、いと口惜しきまゝ、木毎さまよひやう〳〵に、見出でし一木紅梅の下枝に積る淡雪の下に艶なる花の面影、うるはしとも美はしどもげにたとしへなき、雪間をもるゝ清き香は、わが衣まで移りけん。こをば手折りて雪のまゝわざへの床の花瓶に挿して日毎に眺めなば、いかに、樂しからんなど打興じける、時しも空はいみじう曇り、さむけさもいとなん増さりぬれば、たらちねの待ちわびてぞ、おはすらむいざ歸りなんと袖うちはらひしろがねの道たどり〳〵て、やがて、きつきぬ。

伊豫　宇高松子

隙て契りし友のいさとて催すも嬉しく、打連れて家をいづ、朝早ければ大路に雪かく人の影も見えず、さながら白布を敷ける樣なるに、たゞ二人のあとをのみのこしつゝ、思はずも雪中の梅見となりし嬉しさなど語りつゝ行く程もなくいたりつく、園守の翁もやう〳〵起きいでて、笠の下に柴折くべしところとおぼしく悲しからぬ涙を拂ひつゝよくこそ來ませし、お歸には立寄りてお茶きこしめせよなどいふを後に聞きつゝ分け入るに早やあたりも匂ふばかりのなつかしき、香は靜けく淸らけき朝の氣とあひにあひて、神々しきまでにぞ覺ゆる見渡す限り枝も梢も六つの花咲きみちていづれをまことの花とや見ん、聞きわくべき鶯だにも鳴かねば隱れぬかをりをしるべに、そこはかとなく尋ねありくにとある一木の木こぶりをかしきが匂ことに覺えしかば、近う立ちよりて見るにむべや香のみかは色さへかくれぬ、紅梅の雪間ほのかに匂へる例へは逆境に立ちて、雄々しくほゝゑめる女丈夫にも似てめでたさいはん方なし、春雨になやめる花の哀れに艶ならぬにはあられど浪風しげき世を渡るべき身は、常にこの花をこそなど隔てぬ中とてかたみに語りあひつゝ時の移つるも知らざりしに、いつの間にかとめ來にけんほゝとなく鶯の音に驚き見上ぐる、梢の雪のはら〳〵と羽風にちる下より今こそあらはに三つ四つ二つ折柄さし出づる、朝日の光に照り合ひたる花の匂何にかはたとへん。

東京　篠田園子

衣更着の空冴かへり鶯のとけし涙も又氷る寒さに、夜半より雪さへふりいでゝ今朝は又野邊も山邊も一面に白布しきたらむ如くなりぬ、雪のけしきを徒に家に籠りて暮さむも惜しければと、鶯に魁して早咲の梅の園生におとづれむとす、我が物と思へばさして重くもあらぬ傘に雪積りもあへず心ありけにふりやみぬ、程なく園生に至りつけばさすがに風にそこはかとなく香に匂へるいとゆかし、

園守もかゝる雪の日にふりはへてとはせ給へるは、いともみやびやかなる君にもある哉、花もさこそは面目あらめ、鶯だに未だ音づれそめぬにと匂ひこぼるゝ溫き情もて招じ入るゝに塞さもうちとけて、いと懷かしうなむ覺ゆる、花はそれとも見わかれどふりつみし雪も一つに薫りきて中々にさきまさりたらむ心地しけるそをかしかりける、哀梅

こそはなゝしかりけれ、よく風にたへ、霜を凌ぎて、あまつさへ雪にも咲き頽ふけしきの露みえざるはまこと雪をおかして、殊更に杖をひきたるかひありけりなど一人興に入りてながむる程、木傳ふ風のいつか告けけむ鶯のおくれすがほにうちとけてなく聲きこゆ。

東京　それ女

雪いみじうつもれるあした親しき學びやの友垣にいざなはれて、近きわたりの、さゝやかなる梅園に物しつ、集ひしは、美代子の君と我と打ち交へて六人ばかりなり、常にはあまり廣からじと見つる園も、今日のみはいといたうひろ〴〵とぞ見渡されぬる、花の雪を地にしける如きに、空さりげなく打ちはれて、天津日影華やかに時ならぬ梅花に輝き渡るさま、例へつべき物もあらじな、雪打ち拂ひて咲きいづる梅の花も、けふは雪と共に咲きいでしよ、さと吹きくる風の、うるはしき香を、送りしとおぼえしも、心の迷なりしか、そこゝに、散りたる花とも見ゆるばかりなる、犬の足跡つきたる、さては、思ひもかけぬ中空に、富士の高根の天そゝり聳えているくに匂へる姿など、とりどりにめでたし、げに降りつもりたる雪のあしたこそ、一しほあかぬ眺めなれ、かくて景色をめでつゝそこはかとなくさまよふほどに、美代子の君の、女子にはふさはしからずとこそいふめれど、雪うちも武を好む島國のふりなればすて難きに、いかでなどすゝめ給ふ、さるに他の君の、否とよ學びの庭にてはよかるめれどかゝる所にては、と宣ふに、已れも如何にせむとおぼゆる折しも、美代子の君の雪も來りて、妾にうちつけられしに、霜ならぬ雪の、頭にふりかゝりて、いとど時ゆまに老いたるよなど、笑はる、おのれもまけじと手にとりて投ぐる程に、かたへにありし友どちも、いみじう面白き事とやおぼされけん、各二人づゝ加はりて、はしなくも、雪合戰とはなりぬ、かたみにまけじおとらじと、雪を矢玉にかへなして戰ふ程に、此方は追ひかけ追ひかけられて、身はさながら落花のふりかゝりたるやうになむ、雪をとらんとすれば、美代子の君の雪もち來りて、衿の中に押込めらるゝ、その冷やかさ、口惜しさ、かくてはならじと心はげまして打ち向へば、とみに勢加はりて、こたびは、此方より追ひかくる程に、さしも強かりし敵もかなはずして降りぬ、心地よき事云ふばかりなし、かゝる程に、各疲れしと云ふに、さらばとてやめぬ、かくて味方も、敵も、かたみに打ち興じつゝ、再び、すゞろあるきす、いと心ゆく眺めに、目かれせでなむ、あはれ樂しかりしよげに美しかりしよ、雪の梅園。いでや、此の世に生れしからには、學びの道をいそしみて、けふの、此の園の景色のごと、人にめではやされたしとこそ、おぼえしか。

春日局の傳を讀みて

人

和泉國泉北郡深井村　稲原菫子

徳川二代將軍の賢君なるは大婆公預つて大に力あるが如く、三代の家光公の聰明果斷の良將たるも亦乳母春日局の影響を及ぼせる事大なりとす、局初名は阿福父は齋藤利三、母は稲葉通明の女、阿福長して稲葉正成に嫁し三子を生む後故ありて正成致仕し美濃に隱る、家光公降誕するに及びて、局請ひて乳母とゆるされ、保護撫養いと密なりければ、幕府悦びて夫正成を徴し祿せんとせしに、正成固く辭して臣不肖なれど、家人に縁りて進むものならんやと、三子を局に與へて婚を絶ちしと。局は英膽智ありて、閨閣中

の人にはあらざりき。其夫家にあるや一夜强盗數人入りしも局立ろに刀を揮ひて二人を斬りしかば餘はみなのがれうせしと、また乳媼となりて、秀忠公夫人の次子國千代を鍾愛し給ひければ附侍の者爭て之を奉承し爲めに、世上動揺の説あるに局之を憂ひて遂に家康公に其故を述べまゐらせて、儲子介弟のけぢめを明かにせしめでたさ。また局の其君を思ふ事のいかにまめなりしかは、公の痘を患へ給ふや、局みづから、家康公の廟に禱りて曰く、大君不豫にてあやふし願くは身之に代らん。もし御靈によりて癒るを獲ば妾病むとも醫藥を近づけずとのねぎとにても明なり。はたして後病にかゝりしかども醫藥を近づけず、家光公より賜はりし藥は其恩に忤らぬやう又誓言を破らざるやう、之を啜りて後悉く唇より吻出せりと、あはれ其ちかひ事を食まざる局の德のたふときをおぼえぬ、死を前にしながらも、家光公の請あるをも入れずして曰く正利は凶悍不忠老妾愛を割て放ちしも、殿下に不利なるを慮ればなり、老妾死すとも子を愛して君を後にすべけんや、殿下憐し其罪をゆるして之を召さば、老妾怨を泉下に抱かんと遂に年六十五をもてかへらぬ客とおもむきしとか、あはれ其正氣のきよらなる氣高さを思へば、われも文讀む道をつとめてあはれ日本女子の名をもけがさじ、春日局と、後水尾天皇陛下より賜はりし烈婦の其人は死せしも、其名の今に匂ひつゝ朽ちざるぞ、うべなりや。

優等

肥後　德永成子

代々をへて、今の世にほまれを殘せし人も、多が中に、別てなづかしきは、春日局になん有ける、此局は、齋藤利三の女にて、稻葉正成にとつぎけるが、三人の男子さへ、産つる後に、稻葉氏は浪人の身と成りしを、局は花さく春のなりや有んと、子供等の養育に心をつくし、夫に立し、みさをの色さへあせぬものから、德川二代將軍源秀忠の嫡子竹千代の守役乳母にあげられて後はひたすら忠を以て敎へ、義を以て勵まし、朝夕につくせし心はいかなる勇士も及ばざりけり、あはれやさしき女郎花に、立交りし園の竹の兒のかくもすなほに、猛く立のびて、天下に稱れなる、大將軍になりしは、此の局のいさをにて、世にたぐひなき女なり、面は靑柳の風になびくがごとく、心の内は金石よりもかたき、ふるまひなりしならん、いとゆかしや、かゝる人の、明治の御代に出なば、いと〳〵皇國のほまれなるべき、姿のごときふがひなき者のみ多からば、いとど口惜き次第なりしか、

肥後　佐々有鄰子

春日局は齋藤利三の女なり、稻葉正成の妻となりて、三人の男子を生

めり、徳川秀忠將軍は幼子竹千代を擧げければ、乳母を京都に求めけり、なりしも故鄕美濃國より京に上り、板倉勝重に就きて給仕をこひければ、苦しかるまじと許して、關東にぞ下しける、それより春日局はひたすら、竹千代を養育して心をつくさずと、いふことなかりき、寛永のはじめ京にのぼり、大内にまゐり、天顏を拜み奉ることをゆるされ二位に叙せられしとぞ、これより先に家光將軍痘瘡をやみて危篤なりければ、局いたくうれひかなしみ、東照宮に參詣て祈りけらく、幸に御乳母とも成て、養ひ奉りしちなみも侍れば、妾の身を以てかはりに立たしめたまへかしと、誠意をこめて、祈禱ければ、將軍の病は日にまし快よくなりぬとぞいふなる、寛永の末つかたより、局の心ちれいならずなりければ、將軍自身、藥を捧げ、己が與ふる所なり、辭むことなかれとて、懇にすゝめけり、局は君の自ら下し給ふ藥なればいただきて飮みほしぬ、つひに寛永二十年九月十四日みまかりぬ、年は六十五となんいへる、如是の忠貞あつき局の傳を讀みては、母として子女の教育鑑となし、處女として君夫に仕る掟と、なさまくほしくこそ

長野　松澤まつ子

まことやげに、才いみじければ其德全からず、雄々しければ慈愍の心うすしとかや、さるは春日の局の如き、才も德も全き婦人とやいふべし、

德川三代將軍家光公のいとけなき頃より仕へ奉りて、あつぱれの大將軍になし奉らんと、其昔美濃の谷口のわび住居にて夫より感化されし雄々しうも、清らなる心もて、ひが事はいましめ、かつて三人の子等にそゝぎし愛の泉もて、直なる道にみちびくなんと、一ツとして誠の心よりいでざるはなく、あはや、儲位の動かんとしけるを、おさへとどめて、德川の御家、長しへに動かぬ根ざしかためしいさほしやげに大なりといふべし、三人の子等は其德によりて召し出だされて、いとも榮ある職をたまはりしとなんげに情深き母なるぞかし、

夫佐渡の守は妻の出世によりて身を立つるを望まじとて、局を離別しつるも元より同じ德川のめぐみのつゆにうるほふなれば、公に忠なるこそ、やがて夫に眞なりとさかしきつぼねは、思ひさだめしならん。さればそ、

申すもかしこき邊りより春日の局の號を賜はりて、從二位に叙せられ緋の袴着する事を許されたる宜なりといふべし、

六十五歳にして長きねむりにつきしとよ、而も身は公に代りて神にささげあればとて、公手づから賜ふとも藥をふくせざりしとよ、あゝ何ぞ其忠にしていさぎよきや、

あはれ身は湯島麟祥院の御墓の土と、なりつるともかゝぐはしき名は萬代かけてくちざるべし、すかの根の長き春日に友も訪ひ來ぬつれづれに春日の局の傳記をば讀て感ぜしまゝに拙き筆もてかくなん

兵庫　原田秀子

降りみふらずみ打もるに、心の中さへしめりはてゝ、いと物うき折柄机の上なる書とり出て、些か心をなぐさめんと、ひもときそめぬ、今は昔德川家光公の頃にか、春日の局と云けん、女官ありきとかや、齋藤利三の娘なるが、稻葉正成にかして後、家光公のめのとに上られし人なり、品位あり忠順にして、寛恕の心ふかく、節儉を重んじて、常に人におしへ給ひしとかや、家光公に事へ、よろづ至らざる事なしと、依て、時の帝より、御盃を賜ひ、爵二位に叙せられ、春日局の號を賜はれりと、見へける、げに、雨にやもろき、風にやつらき、散ればぞ誘ふ、誘へばぞちると、云へば何れをうらまん由なく、巳が心さへ散々になりぬるぞうたてき、げに人の心ばかりあやしき物はあらじ、一心に書の林に分け入りつゝ「思へ人、つかふも人の思ひ子ぞ、わが思ひ子に、思ひくらべて」、と古歌に見たり、げにことはりとこそおもほへて、いで之よりは此書の如き益ある書を友として、よく學び、よく勉め、其折々にしたがひて、女の德をみがき、霜にもおとらぬ菊の操に、まさるやう、なさまほしうなん。

心の中に浮びしまゝかきつけぬな。



○宮中御講書始

去月十八日は三十七年度宮中御講書始にて特に進講題目何れも時節柄目出度き節おればにや陪聴の宮内官も例年よりは多かりける細川南摩木村の三進講者は通常禮服(燕尾服)に略綬を帶し午前九時五十分參内、御式場たる鳳凰間には田中大臣、花房次官以下各書記官參殿 陛下には大元師の御略裝に略綬を佩びさせ玉ひ岩倉侍從職幹事、岡澤侍從武官長各侍從、岡侍醫局長、各侍從武官等扈從、十時玉座に着御あり先づ文事秘書官長男爵細川潤次郎氏御前より十歩の所に在る講座に着き豫て奏上したる進講題目「英人のゼ、インヴインシーブル、アーメダ殲滅始末」に付數刻間の進講あり本題は時節柄の好題目なるを以て 陛下にも一層天顔麗はしく御傾聽あらせられたる由其概要を記せば細川男は初めに英國帝室の略系よりチユードル王統に及び顯理八世に次ぎエドワード第六世十歳にして即位したる事よりノーサンバーランド侯ソマーセットの斬首、顯理八世の女メリーを女王と爲し新舊兩教の爭論、西班牙王ヒリツプ第二世との結婚佛國に於ける第一の根據地カレーを失ひし事、賢明なるエリサベス女王の即位ロード、バーレル、フランシス、ワルシンハム等出で丶女王を助け國を富まし兵を強くしたる事、シユープレマシー、ビル及びアクト、オブ、ユニフオーミチーの布告、メリーの佛國フランシス第二世と結婚の事、千五百八十七年メリー斬罪の事を縷述し且つ曰くエリサベズ女王は既に新教を國内に設立し進んで大陸の新教徒を保護しニユーゼルランドに於てレースター侯英兵を率ゐ西班牙に抵抗するのみならず英の船舶は屢海上に在りて西班牙國の貿易を

妨礙しければ西班牙王ヒリップ第二世は此に英國征伐に決心し三年間國中に戒嚴令を傳へ戰備に汲々し大に海軍を整へ遂にインヴインシーブル、アーメダ（全勝艦隊）成りたれば英國にては此國難に當る爲め新舊教徒を論ずるの暇なく擧國一致の實を擧げ何れもエリサベス王の麾下に集まり大に防禦の計を講じロルド、ホワードを英國防軍の艦隊司令官に任じ日夜戰備に怠らざりしが千五百八十八年新月の形を作り長さ七英里に亘る優勢の西班牙國艦隊一百四十隻はプリマウス海岸より漸く陸上に近づかんと迫り沿岸一帶の地全く硝煙彈雨の地と化し去りたり英國艦隊之を見るや近海より直に輻湊し激戰七日間、西國の艦隊遂に利あらずして流石に優勢の艦隊も佛國カレー港に引揚ぐるの止むを得ざるに至りたり英國海軍は尚之を追擊し夜に乘じ大艦を放ち敵艦數隻を燒き且つ沈めたれば西國艦隊の狼狽一方ならず艦隊司令官メジナ、シドニヤ侯の如き今は幾んど百計盡き唯だ遁逃するを得ざるを恐れ蘇格蘭の海岸より迂回歸航を計りたるも途中更に暴風雨の爲め檣折れ楫挫け船艦の沈沒する者其數を知らず本國に歸航して此大敗報をヒリップ王に致すを得たる者僅かに當初里斯本を解纜したる全艦隊三分の一に過ぎざりしと云ふ右の海戰の結果英國は全然海上に主權を占め和蘭は獨立を鞏固にし佛國の新教徒は勢を增し西班牙の國勢漸く衰運に赴きたりエリサベス王時代には通商大に開け遠洋航海の業亦盛んなりサー、ウオルター、ラレーの如きは大西洋を超えヴアジニヤに殖民地を開き千六百年には東印度會社起り遠く利を東方印度に獲得したり是れ實に英領印度の開基なり斯くしてエリサベス王は七十の長壽を保ち千六百三年三月二十四日崩じたりと演述し次に南摩綱紀氏は論語顔淵篇の一章「子貢政を問ふ子曰く食を足し兵を足す民之を信ず矣」に付古今儒家の說を引き兵備を充實して殖産興業の道を講ずるは王者の政道なりと結論し次に木村博士は萬葉集卷の一に在る藤原宮役民作歌に付進講したるに引例該博、四筵森と

して謹聽したりと云ふ斯て十一時四十五分進講結了するや　陛下には各供奉員を從へさせられ入御あらせられ三進講者には別殿に於て酒肴を賜はりたり。

○歌御會始

豫て仰出されし如く去月二十日午前十時　聖上鳳凰の間に出御あらせられて三十七年歌御會始の式を行はせられたり當日の所役は左の如し

題者點者	御歌所長男爵	高橋正風
讀師	侯爵	中山孝麿
讀師控	子爵	高辻修長
講師	子爵	堤功長
發聲	子爵	綾小路有良
講頌	伯爵	大原重朝
同	子爵	前田利鬯
同	正五位	長谷信道
同	從五位	滋野井實麗
奉行	伯爵	松浦詮
同	正八位	千葉胤明

御式場の舖設全く了りて以上所役を始じめ特に召されたる清浦農商務大臣、東久世樞密院副議長、渡邊內藏頭並に拜觀を許されたる星野大學敎授、栁澤子（德忠）荻野大學敎授、川上主馬助、八田學習院敎授丸山陸軍敎授、和田學習院敎授及び皇后陛下御使香川大夫、高辻讀師控、其他御歌所諸員定めの席に著床したる時　聖上には田中宮內大臣、岩倉侍從職幹事、花房宮內次官、岡澤侍從武官長、北條、廣幡、澤、慈光寺各侍從、井上、鷹司、宮本各侍從武官、山內、吉田、栗原各書記官を從へさせられて出御あり是に於て讀師は被講の床に進み講師發聲講頌の諸員も進みて著床斯くて讀師は懷紙を左方に御硯蓋を仰向けて其上に懷紙を御前に向けて下臈より引延ばし置き講師は「年の始めに巖上松」と云へることを仰言によつて詠める歌」と高らかに述べて句讀明白に其歌を讀み次で發聲其初句を朗詠すれば講頌は同音に第二句より朗詠斯くの如きを各一反にして漸次上臈に至りて東宮兩殿下に及び兩殿下の御歌は別の案上に置かれたるを講師發聲以下起立拜見復席し

て講頌二反ありたり
斯くて讀師は　皇后陛下御使香川大夫の前に參進御
懐紙を拜受し復床して之れを御硯蓋の上に置き講師
發聲以下起立して拜見復床して講頌すること三反此
間參列諸員起立讀師より之を返上して次で讀師は聖
上の御前に參進して御懐紙を賜はり復床して御硯蓋
の上に置き之れを講師、く向く發聲講頌以下諸員　悉
く起立して拜見の後復床講頌すること五反講頌終つ
て讀師より返上當日の式を終らせられたり　聖上の
入御ありしは同十一時にして式後所役參列員等には
酒饌を賜はれり御製を始め披講の歌は左の如し

御製

苔むせる　岩根の松の
よろつよも
うこきなき世は
神そもるらむ

皇后宮御歌

大内の　山の岩根に
しけりゆく
こまつの千代も
みそなはすらむ

東宮御歌

ふきさわく　嵐の山の
いはね松
うこかぬ千代の
いろそしつけき

東宮妃御歌

うこきなく　さかゆる御代を
岩の上の
松にたとえて
誰か仰かぬ

宮内大臣陸軍少將議定官従二位勳一等子爵臣　藤原朝臣光顯上　田中

大空にそひゆく松の根をしめて
　苔むすいはほかけすくつれす

農商務大臣従二位勳一等男爵臣　源　朝臣奎吾上　清浦

雲かゝる山のいはほのひとつ松
　かみの降しゝ種にかあるらむ

樞密院副議長正二位勳一等伯爵臣　源　朝臣通禧上　東久世

よろつよもかけすくつれぬ岩の上に
　姿かはらてたてるおい松

題者點者

樞密顧問官兼御歌所長正三位勳一等男爵臣　藤原朝臣正風上　高崎

うこきなきやまと嶋根の岩根松
　なみはうつとも風はふくとも

内藏頭正三位勳一等男爵臣　源　朝臣千秋上　渡邊

うちよする浪はいはほにくたかれて
　跡しつかなりいその松風

讀師

帝室會計審査局長正三位勳一等侯爵臣　藤原朝臣孝麿上　中山

君かよにたくへてそみむ動きなき
　岩ほにおふる松のさかえを

奉行

御歌所参候従二位勳三等伯爵臣　源　朝臣詮上　松浦

うこきなきみよのためしの岩根松
　いはねとしるき千代の陰哉

講頌

正三位伯爵臣　源　朝臣重朝上　大原

岩の上に根さしかためし老松の
　やちよは君かやちよなるらむ

發聲

御歌所参候雅樂部長正三位勳五等子爵臣　源　朝臣有良上　綾小路

かめ遊ふ磯のいはほによろつよの
　根さしかためてたてる松哉

講頌

御歌所参候正三位子爵臣　菅原朝臣利鬯上　前田

かたふきてみゆる海への岩ほにも
　根さしかためてたてる松哉

講師

正三位子爵臣　藤原朝臣功長上　堤

年ことにしけりさかえて動きなき
　いはほのうへの松は幾千代

講頌

殿掌正五位臣　平　朝臣信道上　長谷

とし〳〵に種のこほれて岩の上に
　おひそふ松の數もしられす

奉行

御歌所参候臣　平　朝臣胤明上　千葉

うるはしく松こそしけれあらかねの
　土はありともみえぬ岩ほに

講頌

従五位臣　藤原朝臣實麗上　滋野井

苔むしろよゝを重ねて岩か根を
　千代のところと松はおひけむ

選歌　雅樂師正八位勳八等　豐時鄰　上

わら浪のよするいそへの岩の上に
ことそともなくたてる松哉

選歌　臺灣總督府鐵道部書記　竹下種長　上

はひかゝる蔦のかつらを注連にして
神さひたてり岩の上の松

選歌　東京府士族　松浦辰男　上

年をへし松もこまつとみゆる哉
ねさす岩ほのかけたかくして

選歌　京都府士族　進藤朔子　上

なみ風をしのきてたてる海中の
いはほの松をこゝろともかな

選歌　大阪府平民　藤村叡運　上

わたなかのいはほにたてるひとつ松
常世の波や種はよせけむ

選歌　石川縣平民　北川すゝ子　上

さかえゆく春のみ山の岩の上に
生ひそふ小松かすもしられす

選歌　鹿兒島縣士族　宇都宮村雄　上

ちはやふる神代の松か島つ鳥
鵜戸のいはやのうへにたてるは

○詠進歌數　同日宮中に行はせられたる歌御會始に皇族の御詠進、臣民の詠進に係る懷紙竪詠草の數は左の如くにして内臣民の詠進は一萬七千五百二十五枚之を前年に比すれば三千百十五枚の増加なり

皇族御詠進

懷紙

臣民詠進懷紙

御前披講	二一
高等官	一二
華族	一八
女官	一四
御歌所	一六
神宮職員	一二
華族女學校	一七
向陽會	二一
有位者及判任官	一一
計	一四二

臣民詠進竪詠草

高等官	三四〇
華族	三八
華族女學校	五七
女子高等師範學校	二一
東京高等女學校	一八
京都高等女學校	一〇一
日本女子大學	五八
跡見女學校	七六
大日本女學會	三五四
大日本歌道奨勵會	一、〇二二

東京府	九二九
京都府	五七八
大阪府	五六五
神奈川縣	一五三
兵庫縣	三〇四
長崎縣	三一二
新潟縣	三四六
埼玉縣	二一六
群馬縣	二〇九
千葉縣	三二八
茨城縣	三四四
栃木縣	一三四
奈良縣	一二九
三重縣	五六一
愛知縣	一、三四一
靜岡縣	三二九
山梨縣	二六八
滋賀縣	三八二
岐阜縣	四一一
長野縣	八〇三
宮城縣	三四二
福島縣	三一一
岩手縣	一七四
青森縣	二二二
山形縣	三九五

秋田縣	三八四	熊本縣	四五九
福井縣	一三二	宮崎縣	八九
石川縣	一六五	鹿児島縣	二七二
富山縣	一九九	沖繩縣	二六
鳥取縣	一一六	北海道	一八六
島根縣	二六八	臺灣	三三
岡山縣	三五五	米國在住者	二
廣島縣	三一九	清國在住者	三
山口縣	四二八	韓國在住者	一〇
和歌山縣	一一三	計	一六、八二九
德島縣	一三五	外に長歌	七
香川縣	一〇三	違式	五五九
愛媛縣	二一七	期日後着	二二
高知縣	七〇	計	五八八
福岡縣	二二七		
大分縣	二〇二	總計	一七、五六五
佐賀縣	一四四		

○歌御會始預選者　一萬六千餘の詠進者中御前披講の榮を得たる七首は別項の如くなるが此の預選歌詠進者の住所を詳記すれば左の如し

東京市牛込區南榎町二番地	豐　時鄕
滋北北門外街鐵道部官舍	竹下種長
東京市牛込區田町一丁目	松浦辰男
京都市上京區室町通長者町南	進藤朔子
大阪市南區生玉町持明院	藤村叡運
加賀國美川町仲町廿五番地	北川スヾ子
大隅國肝屬郡高山村	宇都宮村雄

○預選の女子　歌御會始に預選の榮を得たる京都府士族進藤朔子は進藤爲名氏の二女幼にして歌道に志し父母は其通學を修めしむるに急にして詠歌に時を費すを欲せざりしかば深更密に歌書を繙き研修怠りなかりし京都府師範學校を卒りて後五ヶ年間服務して職を辭し夫より上京して久邇宮御別邸(鳥居坂)に奉仕し妃殿下に仕侍すること數年去三十四年御暇を乞ふて京都に歸り專ら家事の手傳ひをなし傍歌人則武正副翁(昨年預選の榮を得し人)に師事す家事多忙のため詠歌の暇なかりしも本月五日不圖名詠の浮び出でしまゝ師翁の一見を經て詠進せしなりとぞ父の爲名氏は主殿寮に殿部を勤め進藤加賀守は千尋と名乘りて維新の當時歌道界に名を知られたる人女史の齡二十五

○愛國婦人會の慰問　愛國婦人會總裁閑院宮妃智惠子殿下には今回在佐世保軍艦慰問の爲め同御使として松平子爵(直平)夫人久子濱尾貴族院議員夫人作子兩氏を同地に派遣せらるゝと爲り兩氏は去る五日同地に向け出發せり

○故近衛公と乳母

故近衛公の乳母に内藤モトといふ廿三の時公の乳母となり五ケ年間乳母の任に當れりモト今や京都下加茂に住りて長男をして米穀店を開業せしめ有福に暮し居れるが頃日當年の昔を偲びて曰く

ハイ妾は今年六十五になりました、お上(近衛家)へ上りましたのは二十三のときで油小路一條上る加治さんの宅で五年櫻木御殿へ上つてから二年居りました加治さんの奥さんは大層好い方でしたが篤様(故近衛公)と同じ年の子がありまして子供心で貴賤の差別がありませんから時々喧嘩を致しますので妾は喧嘩をなされると腹が立ちて耐りませんから毎日篤さまを抱へて外に遊びに參りましたお五歳におなりになるのに何時までも篤様處に居てはお爲めにならぬと思ひましたから或時大格子様(忠熙公と指す大旦那の意)に申上げまして櫻木御殿の方へ御引上げになりましたので御座います

其後お兄様(忠房公)へお千阪さんが又上ることとになりましたが一體千阪さんは温順な方で他の方の様に女中同志で口論などしたことはありません夫に篤様は千阪さんと瓜二ツといふお顔ですから可愛ふて耐らんのですが表面が大格子様の御子といふのですから生の母らしい素振は毫丈けでも出來ぬので人の居らぬときには密と篤様の處へ來てお顔を嬉しさうに見て居ることなどもありましたが人の足音がすると屹として他を向いて素知らぬ風を装ふてお出でゝした又お兄様(忠房公)も御本殿(御所の西北隅にありし)から隔日位に御成りになるのですが其度毎に妾は篤さまを連れて玄關にお迎ひ致しますと其兄様の篤さまを御覧遊ばしたときの嬉しさうな顔付といつたらなかつたので御座います左右する内にお姫様(弘子今徳川家達公に嫁す)がお生れになつたのですがお千阪さんの公然のお子で御座います篤さまの御幼少と申したらそれはまう御發明で妾のことを傍のものが

惡くでも申しますと口惜しがつて下すつて歯をキリ〳〵と噛み兩方の爪をパチ〳〵擦きながら泣て下さいましたけれどお泣になるのも決して聲をお上げになつたことはありません夫に大格子樣がお乳母の恩を忘れてはならぬと仰せられたとて乳母や私が成長くなると斯いふ（兩手の指にて小判の形を作る）お金を澤山遣るよなど丶仰せになりました度々斯いふ優しいことを仰しやられる者ですから可愛いふて〳〵耐りませんで嬉し泣に何程泣たか知れません此節でも京都へ御越になりますと第一番にお乳母を呼べと仰せられて御旅館へ上りますが盆暮にはお金を五圓と淺草海苔と着物とを毎年贈つて下さいます此度も御病氣のことを聞きましたから悴共に御容態を尋ねますと追々お快い方であるとのみ申して新聞にあることを隱して妾に話して呉れませぬダカラ如何に驚いたか知れません想ひ出しては泣き最う思ひ出すまいと思つては又想ひ出して毎日泣てばかり居りました先々月で御座いましたよ鶴樣にお目にかゝりいろ〳〵とお言葉を下すつた夢を見ましたが今思出しますとそれが虫の知らせで御座いましたかも知れません御逝去後はまうゲッソリ氣力も衰へて仕舞ひました

○曾禰藏相が母堂の事ども

此程逝去されたる曾禰藏相の母堂すみ子刀自が一生の言行と藏相を始めその一家の母堂に對する孝養に就きては傳ふべき事の多き中に知る人の最も嘆稱措かざるは刀自が長き病臥中の事なり刀自は人生の春未だ酣ならざる十九歳の折不圖肺を病み初め爾來は暑さ寒さを厭ふ身となり心細き其日を送り居たる内三十五六歳の頃よりは全く病の床に横はるの身となりそれより七十八歳の今日まで空しく春花秋月に背く事四十幾年傍より見れば極めて味氣なき生涯と思はるゝならんも刀自に於ては然らでいよ〳〵世に時めく令息の出世を見るにつけ且つは藏相が官務の益々劇くなりても毎土曜日には必ず病床を訪れて何

呉となく看護する孝養に轉た病の身に在るを忘れ或は歌を詠み三絃など奏で、面白く暮し居られたるは長く浮世に遠かられし人とも思はれず是れ實に刀自が修養達德の至りとは云へ亦實に藏相夫妻初め兒孫等の方の心盡し至れるに寄るなりとて此回の訃を聞き今更の如く嘆美の聲を發つ知人多しと聞も嬉し

◯安井哲子女史の送別會　豫て記す所ありし暹羅國政府御雇となりて同國華族女學校創立の爲め渡航する安井哲子女史の爲め東洋婦人會大日本婦人教育會女子教育會、女學會の四婦人會發起となり其の送別會を去十五日午後三時より上野精養軒にて開會せり當日參會の主なる人々は鍋島侯爵夫人、岡部子爵夫人、松平子爵夫人、(久子)毛利男爵夫人、大村男爵夫人、鳩山、高木、山脇各夫人其他四十餘名にて木場文部次官、辻教育會長等も臨席し松平子爵夫人先づ開會の趣旨に次で安井女史の今回の渡暹は東洋婦人會の事業に少なからざる勢力を加へたるものにて東洋婦人會は茲に一大支部を樹立したる如き結果となりたり今後日暹婦人の交誼は女史によりて一層深く厚き結合を見るに至らん事を望むと其の行を餞けし會食中辻氏山脇夫人等の送別の辭あり近來珍らしき盛會なりしといふ

○善行美譚

◎孝行兄妹　孝は百行の本と修身科の講義を一週に二度三度耳の穴から注ぎ込まれても學校の門を出るや否や塒の烏に石を投げて反哺の孝ある烏を困じめ、孝行と云へば大きくなつて自分計り魚肉に飽き親には香の物を食べさせる事と誤解する坊様嬢様の多き世の中に聞も感心なる孝行兄妹は横濱市伊勢町三丁目八十番地に屋號を末廣屋とて白米小賣を營業とする和田除助長男文質(廿二)長女なか(十七)にて兩人共十分に學校教育を受けねど生れながらにして孝心深く今より五年前母が病氣に罹りたる後醫者よ藥よと種々に手を盡したれども病狀次第に重るのみにて何の効驗も見えず母は日一日と弱りて遂に

は起居も不自由になりたれば文質は得意先へ白米の持運び店の取片付帳場の締括迄一身に引受け主人ともなり擣屋ともなりて熱心に家業を勉強する傍ら病衰の母を忘るゝ間無く湯に入りたしと云へば自ら背負て送迎を爲し寒中の寒さ堪難き時は炬燵湯婆は病人に害ありとて妹と共に交る〳〵母の寢床に入り肌身を添へて温め只管孝養怠り無かりしが天命か定命か母は四十二歳にて昨年十二月三十日終に歸らぬ旅へ赴きたれば兄妹は悲歎遣る方無く親類達の年内に早く葬送せんと云ふを聞き入れず來年になりてと云ひて年を越しさて正月となれば松の取れて後と云ひて七草の過る迄棺を座敷に据え宛然生きたる母に仕ふる如く朝夕其傍を離れず生前死後孝養の志聊か變る事なかりしが軈て八日とはなり近所隣の松飾も跡方なくなりたれば何時迄斯て在るべきに非ず泣く〳〵野邊の送を濟して白き位牌の前に今も朝夕の手向を怠らず尚飽足らで人に遇ふ度毎孝養の足らざりしを語りて悔悲み居ると云ふ

◎孝子　岡山縣上道郡芳野村長瀬周は資性温順にて幼より孝悌の心篤く一家赤貧にして農事に勤勉し今を距る七ヶ年父惠三郎病に罹り獨力一家糊口の道を求め醫藥の資盡くる時は嚴冬衣を脱して其の資に充て以て看護を怠らず父死亡の後は一家の經營を一身に擔ひ老母に奉じて孝養を盡し幼弟を遇する愛撫至らざるなく常に形容を粧はで嗜好を言はず終に父の負債をも償却する等德行卓絶なるを以て同縣知事は其の賞として金五圓を下賜せりと云ふ

◎又　石川縣能登國羽咋郡西海村柿本八次郎は資性温良にして父を喪ひ爾來母ミヨに事へ孝養怠りなく去る十九年ミヨ病に罹り身體不隨の不治症となりたるより身貧困なれども益々奮つて家業を勵み妻シナと力を協せ一意專心醫藥を供し或は母を背負ひて佛參し其の心を慰むる等玆に十有九年の久しき一日も變る事なし洵に奇特なるより同縣知事は賞として金二圓を下賜せり

◎忠僕　同縣加賀國江沼郡橋立村濱中勘兵衛は順

厚にして少壯より久保彦兵衞に仕へ水夫より進んで船長となり督勵甚だ努む其の主家に對するや忠實部下に對するや懇切志操の堅き事四十餘年一日の如くなるより其の賞として縣知事より木盃一個を下賜されたりと云ふ

◎孝行　愛媛縣北宇和郡蕨淵村字高助の赤松善八は孝心深く八十餘歳の兩親に事ふる事一日も變る事なし其の一斑を擧ぐれば善八は大網業と商業を兼ね居り終日家に在る事稀れなれど他出せざる時は三度の食事は身躬ら調進し父母の快く食するを見て此上なく喜び出づる時は妻を戒め又近隣の者にも賴み歸宅の際は父母の好物を購ひ來たりて侑むる等孝養至らぬ限もなきにぞ兩親の喜び言ふまでもなく近隣の者まで其の孝心に感じ居れりとなり

◎又　島根縣邑智郡日貫村駐在巡査藤井由太郎は多年警察界に在りて老練着實にして寬嚴其の宜しきを得たるより部民の信賴厚しと云ふが尚芳ばしきは同人の義母に古稀の老嫗あり嫗の氣色の健かなるを見るにあらざれば家を出でず居常和氣藹然美味相供し奉養怠る事なく若し他家に招せらるれば箸を著けずして攜へ歸り母に供し起居一切の勞は悉く自ら行ふ洵に公私善能の良警官と尊まれ居れり

◎又　次も亦同所にて准士官香川喜三郎と云へるかあり昨年豫備を以て鄕里に歸る此の人天資磊落小事に拘泥せず經濟の如き皆其の妻操に一任し己は兵學の研鑽友人の交際に餘念なきが开は第二にして米壽に近き老祖母に事ゆる事亡き父母にも勝る恩愛の人として明け暮れ定省承歡嗜好する物は必ず供し大小便の通ひには手を取り腰を抱き須臾も老嫗の氣の安んぜん事をのみ心掛け入浴の時は背に負ひ又佛參にも曾つて人を賴まず自ら負ひて行くと云ふ此の二官人の行動の特稱なる人々感賞せざるはなしと

◎篤行者　德久廣島縣知事は去月十四日廣島縣安藝國安藝郡仁保島村後藤増平が資性溫厚幼にして父を失ひ能く母に事へ明治十一年中始めて疾に罹るや窮困を顧みず專ら湯藥を薦む後其病勢漸やく亢進し

己れ漁業に從ふの故を以て遠く膝下を離るゝを憾み運送業に轉業し以て生計を營むの傍ら夙夜之れが看護に努め時には之を負ひて寺院に參詣し或は道話を聞かしめて之を慰め又病悶の餘横恣の命あるも毎に唯々として之れを遵奉し承歡怠らず去る三十五年中其死亡に至る迄二十有五年の久しき一日の如くなりし篤行遠近に聞へ洵に奇特なりとて賞金十圓を下賜せられたりと

○兵士　高知歩兵四十四聯隊の兵士武内政道は長岡郡大津村の產にて家貧く父は大津より下知通ひの船乘を業として僅に生計を營み居れり然るに母大病との報知あり一日政道歸省し憂慮措く能はず其より營中にて僅に受くる手當を餘し持歸りて先藥餌を購ひ次に白米一斗炭一俵を買來りて一時の急を救ひ一人の妹に呉れ〴〵も看護を頼みて歸營し其後は十錢にても二十錢にても貯へさへすれば必ず送りて母の好めるものを購はしめ居れり然るに此の新年の如き隣家の娘が聯隊附近に赴かんとして途中にて政道が隣地に馳來るに逢ひけるが政道は此處にて逢ひたるは天の祐けと打喜び元日營所にて戴きたる切餅並に燒肴あれば之を母に供したく之まで來りたり今は時間の都合惡く自宅に歸るの暇なし近頃御迷惑ながら持行き下されと頼みし事もあり母は此を受けて嬉し涙に言葉もなかりしと

○小學生徒の軍資献納　名古屋市協同關治尋常小學校第三學年生徒三田英吉(九つ)は左の願書に金廿五圓を添へ去廿日軍資献納方を大藏大臣に願ひ出でたり願書は眞率にして忠愛の情溢るゝばかりなり、其願書に曰く

一金貳拾五圓也

右の金は私が度々伯父さんや伯母さんや祖父さんやから十錢廿錢を貰ひました錢を貯金しておきまして今日で利子ともに前の金高になりましたものであります私は學校で修身の時間に二十七八年の役のとき大阪府に十二歲になる小學兒童が貯めておいた金を御上へ差上げました話を聞きまして感心をして居りましたところ今日世の中で話のある日本とロシヤとの事を聞きまして若し戰爭にでもなつたらば私は小さいで戰爭に行けませぬから鐵砲玉でも買て兵士に立派に戰爭をして貰ひたいと思ひまして此の貯金を御上へ差上たいとおとうさんに申しましたら夫れは誠によろしいといふとでありますからどうぞ御ゆるしになる様に御願ひ申し上ます

○少女の美擧　軍隊へ草鞋を造りて獻せんとしたる少年の美談と共に今又感ずべき一少女あり大阪西區第一高等小學校第二學年米津ぎん(年十三)は南堀江上通二丁目飛白屋米津某の娘なるが此程より兩親に賴みて飛白の裂片を貰ひ受け毎夜其を糠袋に仕立上げて其數二百に達したれば松島字松の鼻の温泉へ持ち行きて金に換へたるに一圓餘を受け得たるより雀躍して喜び直に其金を學校に携へ往きて受持敎師西尾喜太郎氏に差出し軍資獻納の手續を賴みたるに受持敎師は校長藤原鹿太郎氏に談じて金の由來を尋ねたるに前記の事實分りしかば何れも感じて其手續に及びたりと尙ぎん女は引續き糠袋を製し居れば近日更に一圓を持參すべしと述べたるよし

○少年少女の義擧　目下時局の切迫せる際香川縣私立高松和洋女學校の生徒磯村とめ(十三)と云ふは草鞋三十足を軍人に獻じ度旨同地の日本赤十字社々員なる平野秋平氏の許まで願出たる所同氏は直に取次の事を承諾したるにぞとめの喜び一方ならず歸校するやその事を平素親しく交はる同じ女生徒等に物語りたれば全般の女生等も聞傳へ我れも我もと總代の手を經て同じく三百三十五足を獻納したき旨を申出たる由尙ほ高松高等小學校三學年の生徒四十四名の者等も自ら二足づゝの草鞋を作りて都合八十八足を取纏め之れまた獻納を申出しとの事なるが惡戯盛りの年齢なるにも拘はらずかゝる志しを起せしとは感ずべきの至りにこそ

○在英本邦婦人の感謝狀　過般米國サージョン陸軍看護婦隊監督ドクトル、マギー女史が日露兩國若し開戰の場合には六百名の看護婦を率ひて從軍したき旨を我駐米公使の許迄申込みたる事ありしが右に付倫敦在留の日本婦人二十餘名は集會の上林公使夫人を會長として評議する所あり米國婦人の博愛的友誼心を感謝するの意を表する書狀を贈りたりと云ふ

○貯金管理所と女子　近來銀行會社其他諸官署に於て女子を採用すること一般に流行せるが殊に貯金管理所の如きは現に女子二百餘名を使雇し居りて

今其成蹟に付き當該吏の語る所を聽くに第一俸給の點に於て男子よりも四割減にて採用し得るを以て經費の點に於て利あり第二に事務上の成蹟は各其性能に依り敏不敏ありと雖も員數的及帳簿整理等其緻密を要するものにありては寧ろ女子の方一般に適當なりされば將來女子の需要は倍々一般に高まるべき傾あり云々と

○薙刀體操　日本女子の武藝たる薙刀の技は維新後久しく世人の注意を惹かなかつたが近來敎育家が之を女子の體育に利用せんとて研究した結果兩三年前東京の小澤某が薙刀體操法を案出して世に公にするに至つた、大阪にては東區の第一高等南區の育英女子の兩校で遣つて居るが其技は普通體操と舊來の薙刀術とを折衷した樣なもので上肢と下肢と左體と右體と皆滿遍に動作することを主意として元氣に一二三抔の掛聲を上げ活潑に手足を働かせるから體育の目的の外に心を養ひ、膽を練り、機敏の性を造る助けとなる中々凜々しい、六箇月間遣つた生徒の成績を他の普通體操のものに較ぶるに即ち身長は一寸六分八厘、體量は一貫二百七十七匁多い、尤も市役所は之を本科の生徒に課することを許さないので同校では裁縫生徒に限つて遣つて居るさうな、いよいよ成績が可いと極つたら廣く一般に行うて然るべしと思ふ

○施本　越後國西蒲原郡曾根村大字曾根施本傳道會にては此度「人の人たる道」と「安心立命の福音」との二書を一人につき各一部即二冊づゝを限り普く施與するよしなるが「人の人たる道」の所載要項は父母十恩の歌を始め佛陀の敎訓集東西賢哲の格言叢等數十篇にて且つ有益なる附錄あり「安心立命の福音」は蓮池大師の原著を基礎として遮惡進善の方法を委細に訓誡せるものにて功過格目表をも添へたれば、その世道人心に裨補を與ふる蓋し尠からざらん送料として貳錢郵劵壹枚を封入し同會へ宛て申込むときは直ちに右二書（合せて五十頁程）を贈呈すべしといふ

○少女の美擧　軍隊へ草鞋を造りて獻せんとしたる少年の美談と共に今又感ずべき一少女あり大阪西區第一高等小學校第二學年米津ぎん(十三)は南堀江上通二丁目飛白屋米津某の娘なるが此程より兩親に賴みて飛白の裂片を貰ひ受け毎夜其を糠袋に仕立上げて其數二百に達したれば松島字松の鼻の温泉へ持ち行きて金に換へたるに一圓餘を受け得たるより雀躍して喜び直に其金を學校に携へ往きて受持敎師西尾喜太郎氏に差出し軍資獻納の手續を賴みたるに受持敎師は校長藤原鹿太郎氏に談じて金の由來を尋ねたるに前記の事實分りしかば何れも感じて其手續に及びたりと尙ぎん女は引續き糠袋を製し居れば近日更に一圓を持參すべしと述べたるよし

○少年少女の義擧　目下時局の切迫せる際香川縣私立高松和洋女學校の生徒磯村とめ(十三)と云ふは草鞋三十足を軍人に獻じ度旨同地の日本赤十字社々員なる平野秋平氏の許まで願出たる所同氏は直に取次の事を承諾したるにぞとめの喜び一方ならず歸校するやその事を平素親しく交はる同じ女生徒等に物語りたれば全般の女生等も聞傳へ我れも我もと總代の手を經て同じく三百三十五足を獻納したき旨を申出たる由尙ほ高松高等小學校三學年の生徒四十四名の者等も自ら二足づゝの草鞋を作りて都合八十八足を取纏め之れまた獻納を申出しとの事なるが惡戲盛りの年齡なるにも拘はらずかゝる志しを起せしとは感ずべきの至りにこそ

○在英本邦婦人の感謝狀　過般米國サージョン陸軍看護婦隊監督ドクトル、マギー女史が日露兩國若し開戰の場合には六百名の看護婦を率ひて從軍したき旨を我駐米公使の許迄申込みたる事ありしが右に付倫敦在留の日本婦人二十餘名は集會の上林公使夫人を會長として評議する所あり米國婦人の博愛的友誼心を感謝するの意を表する書狀を贈りたりと云ふ

○貯金管理所と女子　近來銀行會社其他諸官署に於て女子を採用すること一般に流行せるが殊に貯金管理所の如きは現に女子二百餘名を使雇し居りて

今其成績に付き當該吏の語る所を聽くに第一俸給の點に於て男子よりも四割減にて採用し得るを以て經費の點に於て利あり第二に事務上の成績は各其性能に依り敏不敏ありと雖も員數的及帳簿整理等其緻密を要するものにありては寧ろ女子の方一般に適當なりされば將來女子の需要は倍々一般に高まるべき傾あり云々と

○薙刀體操　日本女子の武藝たる薙刀の技は維新後久しく世人の注意を惹かなかつたが近來敎育家が之を女子の體育に利用せんとて研究した結果兩三年前東京の小澤某が薙刀體操法を案出して世に公にするに至つた、大阪にては東區の第一高等南區の育英女子の兩校で遣つて居るが其技は普通體操と舊來の薙刀術とを折衷した樣なもので上肢と下肢と左體と右體と普く滿遍に動作することを主意として元氣に一二三杯の掛聲を上げ活潑に手足を働かせるから體育の目的の外に心を養ひ、膽を練り、機敏の性を造る助けとなる中々凜々しい、六箇月間遣つた生徒の成績を他の普通體操のものに較ぶるに即ち身長は一寸六分八厘、體量は一貫二百七十七匁多い、尤も市役所は之を本科の生徒に課することを許さないので同校では裁縫生徒に限つて遣つて居るさうな、いよいよ成績が可いと極つたら廣く一般に行うて然るべしと思ふ

○施本　越後國西蒲原郡曾根村大字曾根施本傳道會にては此度「人の人たる道」と「安心立命の福音」との二書を一人につき各一部即ち二冊づゝを限り普く施與するよしなるが「人の人たる道」の所載要項は父母十恩の歌を始め佛陀の敎訓集東西賢哲の格言叢等數十篇にて且つ有益なる附錄あり「安心立命の福音」は蓮池大師の原著を基礎として遮惡進善の方法を委細に訓誡せるものにて功過格目表をも添へたれば、その世道人心に裨補を與ふる蓋し尠からざらん送料として貳錢郵券壹枚を封入し同會へ宛て申込むときは直ちに右二書（合せて五十頁程）を贈呈すべしといふ

○少女の美擧　軍隊へ草鞋を造りて獻せんとしたる少年の美談と共に今又感ずべき一少女あり大阪西區第一高等小學校第二學年米津ぎん(年十三)は南堀江上通二丁目飛白屋米津某の娘なるが此程より兩親に賴みて飛白の裂片を貰ひ受け每夜其を糠袋に仕立上げて其數二百に達したれば松島字松の鼻の温泉へ持ち行きて金に換へたるに一圓餘を受け得たるより雀躍して喜び直に其金を學校に携へ往きて受持教師西尾喜太郎氏に差出し軍資獻納の手續を賴みたるに受持教師は校長藤原鹿太郎氏に談じて金の由來を尋ねたるに前記の事實分りしかば何れも感じて其手續に及びたりと尙ぎん女は引續き糠袋を製し居れば近日更に一圓を持參すべしと述べたるよし

○少年少女の義擧　目下時局の切迫せる際香川縣私立高松和洋女學校の生徒磯村とめ(十三)と云ふは草鞋三十足を軍人に獻じ度旨同地の日本赤十字社々員なる平野秋平氏の許まで願出たる所同氏は直に取次の事を承諾したるにぞとめの喜び一方ならず歸校するやその事を平素親しく交はる同じ女生徒等に物語りたれば全般の女生等も聞傳へ我れも我もと惣代の手を經て同じく三百三十五足を獻納したき旨を申出たる由尙ほ高松高等小學校三學年の生徒四十四名の者等も自ら二足づゝの草鞋を作りて都合八十八足を取纏め之れまた獻納を申出しとの事なるが惡戯盛りの年齡なるにも拘はらずかゝる志しを起せしとは感ずべきの至りにこそ

○在英本邦婦人の感謝狀　過般米國サージヨン陸軍看護婦隊監督ドクトル、マギー女史が日露兩國若し開戰の場合には六百名の看護婦を率ひて從軍したき旨を我駐米公使の許迄申込みたる事ありしが右に付倫敦在留の日本婦人二十餘名は集會の上林公使夫人を會長として評議する所あり米國婦人の博愛的友誼心を感謝するの意を表する書狀を贈りたりと云ふ

○貯金管理所と女子　近來銀行會社其他諸官署に於て女子を採用すること一般に流行せるが殊に貯金管理所の如きは現に女子二百餘名を使雇し居りて

今其成蹟に付き當該吏の語る所を聽くに第一俸給の點に於て男子よりも四割減にて採用し得るを以て經費の點に於て利あり第二に事務上の成蹟は各其性能に依り敏不敏ありと雖も員數的及帳簿整理等其緻密を要するものにありては寧ろ女子の方一般に適當なりされば將來女子の需要は倍々一般に高まるべき傾あり云々と

○薙刀體操　日本女子の武藝たる薙刀の技は維新後久しく世人の注意を惹かなかつたが近來教育家が之を女子の體育に利用せんとて研究した結果兩三年前東京の小澤某が薙刀體操法を案出して世に公にするに至つた、大阪にては東區の第一高等南區の育英女子の兩校で遣つて居るが其技は普通體操と舊來の薙刀術とを折衷した樣なもので上肢と下肢と左體と右體と㑨滿遍に動作することを主意として元氣に一二三抔の掛聲を上げ活潑に手足を働かせるから體育の目的の外に心を養ひ、膽を練り、機敏の性を造る助けとなる中々凛々しい、六箇月間遣つた生徒の成績を他の普通體操のものに較ぶるに即ち身長は一寸六分八厘、體量は一貫二百七十七匁多い、尤も市役所は之を本科の生徒に課することを許さないので同校では裁縫生徒に限つて遣つて居るさうな、いよいよ成績が可いと極つたら廣く一般に行うて然るべしと思ふ

○施本　越後國西蒲原郡曾根村大字曾根施本傳道會にては此度「人の人たる道」と「安心立命の福音」との二書を一人につき各一部即二冊づゝを限り普く施與するよしなるが「人の人たる道」の所載要項は父母十恩の歌を始め佛陀の教訓集東西賢哲の格言叢等數十篇にて且つ有益なる附錄あり「安心立命の福音」は蓮池大師の原著を基礎として遮惡進善の方法を委細に訓誡せるものにて功過格目表をも添へたれば、その世道人心に裨補を與ふる蓋し尠からざらん送料として貳錢郵券壹枚を封入し同會へ宛て申込むときは直ちに右二書（合せて五十頁程）を贈呈すべしといふ

新刊批評

○日本文法論（文學博士金澤庄三郎著　金港堂發行）

文學論、聲音論、單語論、文章論の四大綱に頒ちて巨細に日本文法を評論せしものにて品詞の分類及び術語の如きは大槻氏の廣日本文典を參考としたるものなりと云ふ頁數二百六十三頁（但四號活字）ありて文法上近來の好著なり（定價金七十五錢）

○美姫遺蹟（池邊義象、增田于信著　金港堂發行）

婦女子の讀物にせむとて我國古來有名の婦人十二人の事蹟を記したるものにて一は歷史をおぼえ一は文章の補習にもせんとて編述したるものなりといふ戀塚、嵯峨野、掘野蹤、浦の煙、吉野化など一讀して昔を偲ふべし製本美麗、五百頁を有する大册子なり（定價金壹圓參拾五錢）

○女子教育（下田次郎氏主筆　明治書院發刊）

大日本女子教育會の機關にして本年一月一日を以て初號を發刊したるものなり女子教育當局者の參考としては上乘のものなるべし（定價一册十五錢）

○學報第二號（日本女子大學校）

進歩主義女子教育の一端と題せる議論を卷首に揭げて女子大學の主義方針ともいふべきものを明かにしたるは多とすべし西園寺公爵、成瀨校長、橫井時雄氏の講演等何れも一讀の値あり口繪には故近衞公爵を始め同校創立委員の肖像、各種體操の寫眞などあり（定價金十五錢）

○新渡米（宮本勘次郎著　神田五軒町出版協會發刊）

學生、農家、職工、商人、漁業家、婦人其他あらゆる渡米者の爲めに問答體に書き記しあれば米國渡航者にとりては必讀の案內書なり旅行劵下附手續、米國移民制限法等を卷末に揭げて親切に出發に要する諸準備をも注意しあるは用意周到なりと云ふべし（定價金十五錢）

○みやこぶり（三井吳服店發行）

三井吳服店の案內記ともいふべきものなり同店に陳列せる新しき模樣を或は彩色摺となし或は寫眞版に取りて流行の一班を示せるは花か紅葉かとも思はれて如何にも奇麗なり（定價不詳）

○蝶の魔法（中島孤島編　富山房發刊）

面白き少年お伽談にて象の鼻、カンガールの歌、蟹の惡戯等の話もあり少年世界文學の第十五編なり（定價金十二錢）

○女子の心得（下田歌子著　富山房發行）

全編を分つて、心のといのへと形のといのへとの二編となし女子の心得となるべき萬の事を各條項の下に明細に說明したるは悅ぶべし著者の旨の如く每年學業を卒へて代るがはる別れ往く若き女子達の斯く々の場合にはいかに心得てよろしきかに苦しむときの參考として有益の書籍なるべし（定價金三十五錢）

○花外詩集（兒玉傳八著　東京堂發賣）

兒玉花外氏の近作新體詩を集めたるものにて甞に發賣を禁止せられたる『社會主義詩集』にありしものをも收めたり卷尾には同情錄といふがありて知名諸氏の寄輸を登載せり（定價金三十錢）

本號卷頭の是正

皇后宮御歌富里三木枝子著とあるは謹書の誤りなれば謹で玆に是正す

投稿募集

短歌 今様 短文

各題随意

右今回より毎月募集す投稿規定は左の如し

一、用紙は郵便端書とす

一、今様、及短歌は一人一首若くは二首を限りとし今様は毎句中二音の漢字二字を入れ和歌は一首中同三字を入るべし

一、今様、短歌短文とも各其用紙を別にすべし

一、短文は簡潔を主とし毎行十五字として十五行を越ゆべからず

一、原稿は各添删を施して之を女鑑紙上に掲ぐべし但し各種毎に其秀逸を抜萃すること兼題に同じ

一、〆切期限其の他の諸規則は兼題投稿心得に據る

兼題投稿心得

一投稿歌文は　女子は何人にても随意投稿することを得べし

一投稿用紙は　文は半紙又は罫紙二つ折和歌は郵便端書に限る事

一題目の下　には必ず住所姓名を明記すべし

一文字は　必ず楷書にて句讀點を施し鮮明を主とすべし若し二葉に渉るときは必ず紙捻にて綴り置くべし

一文は　題毎に用紙を別にし一行十五字詰に認め三十行を越ゆべからず

一歌は　一人一首若くは二首を限りとし上下句中二音の漢字三字を入れ其の他は悉く平假名にて認むべし

一投稿宛名は　國光社女鑑編輯局とすべし

一總て以上所記の規定に違ひたるもの及び〆切期限に後れたるものは採用せず

一原稿〆切期日は　雜誌發行日の廿日前則ち四月分は三月十日五月分は四月十日とす

一當撰者には　文は一圓(天)五十錢(地)三十錢(人)歌は其半數に當る計算を以て各代價相當の書籍を呈す

明治三十七年 女鑑月並兼題豫告

歌

三月｛旅行
　　　春雨

四月｛海上雲
　　　遠山花

五月｛猿
　　　夏朝

六月｛親友
　　　郭公

文

｛春季運動會の記
　月夜櫻花を賞して
〆切二月二十日

｛故郷の友に試驗成績を報ずる文
　春を惜む詞
〆切三月十日

｛硯
　吾が常に愛讀する書籍に就て
〆切四月十日

｛藤花を贈る
　梅雨中日記の一節
〆切五月十日

定價

一册		金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金	金五拾七錢
六册半年分	前金	金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金	金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

一行	五號活字廿三字詰	金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に差錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附ありたし

明治三十七年二月十日印刷
明治三十七年二月十一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊森一
東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

弘田正郎編

豪吟集

嗚呼斷腸の詞、絶命の辭みな是れ當年の志士仁人が義を唱へ身を殺して國家の爲に灑きたる熱血の餘沫にあらざるなし之を秋風落日の前に吟じ之を寒月冷烟の中に誦じなば焉んぞ父豪懐壯圖の勃然として起らざるを得んや

安部正人編纂

泥舟遺稿

定價四十五錢

郵税八錢

菊判洋裝大和綴

高橋泥舟先生は幕末の名士にして、また明治昭代の逸民也。其の言行の超凡脫俗なる、誰れか嘆賞せざらむや、先生徵さるれども朝に仕へず亦貧に安んじて志を高うし、首陽の蕨、逕の菊を友として、詩文和歌に思を遣ること三十有餘年、本書は則ち其の全集にして、一面には先生の非凡の高士なるを窺ひ得べきと共に。又一面には幕末の眞事情を知るを得べし。加ふるに先生の經歷及び逸事等、編者先生に親炙して聞きしところのものを掲げたれば、先生の面目風采の躍如として紙上に顯はるゝを見るべし

村上濁浪譯述

鐵血宰相語錄

四六判洋裝定價卅錢郵税四錢

●本書は公の一世における逸事を網羅したるものにて或は「ヂスレリー」と握手し或は「ゴルチヤコフ」を籠絡し或は「ナポレオン」を揶揄し忽ちにして熱火の修羅場となり忽ちにして穏和の和局を現し忽にして閑雅なる家庭となる其間躍如として公の風丰面目を描き出して餘あり

宮崎滔天著

三十三年の夢

●滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異樣の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する哲學的理想に據て直に地上に施かんと欲し運籌畫策する所一二にして足らざる也惟憾む天時人事共に未だ可ならず菲島の獨立に參與して一蹶し惠州に捲いて再蹶し半夜燈前斷端失笑して曰く半生夢覺めて落花を懷ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す(定價卅三錢郵税八錢)

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

棚橋絢子刀自著

新刊

女道叢話

著者棚橋絢子女史の現今女子教育界に於ける位地、名望及學識の如何は世の熟知せらるゝところなり、本書は女史が女子道に對する抱懷を記されたるものにして、女學生は勿論兒女を有する父母の必ず一讀せざるべからざる良書たるはまた多言を要せざるべし。

弊社は三輪田眞佐子刀自の『女子の本分』及び『女子處世論』と共に本書を出版して女性諸子に紹介するを以て大なる光榮と信ずるものなり。

菊判和裝美本
定價金三十錢
郵稅金六錢

發兌元　東京築地　株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十七版出來

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八●●二六九三番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿園著

歴史小説

小牧合戰

再版

小堀鞆音 鏑木清方畫

菊判洋裝定價五十五錢郵税十錢

七版

紅塵庵俗禪譯

獄之花

彩色優美口繪挿入
總クロース菊版美本
正價金五十錢
郵税金八錢

豐太閤を龍に譬ふれば東照公は以て虎に比すべし、龍吟すれば雲起り、虎嘯けば風生ず、小牧山大合戰は此の獰龍猛虎の拏攫なり、山岳震撼して波濤洶湧せるの壯觀は決して他人の能く萬分が一をも寫し得る所にあらず、塚原澁柿先生學問該博にして最も近古の戰史に精しく豐臣德川兩公の事蹟に深く意を注ぎ闡幽顯微の功一にして足らず、前古未發の秘密を探索し以て正史の遺漏を補ふ、特に長久手の大殺を以て其原因嬋娟たる一位の美人にありとせる如き奇想天外より來れるものと謂ふべし、且其口繪は目下歷史畫界の泰斗と仰がるゝ小堀鞆音氏挿畫は同鏑木清方氏の筆になるもの、文章と相須て英雄美人の眞面目を發揮せり。

((各新聞大好評を博す))

三版

山崎忠和君

三版

文久物語

菊判洋裝
定價廿八錢
郵税六錢

發兌元 東京築地 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

伯爵東久世通禧君題字
高等教育會々議員湯本武比古君序
東京感化院長高瀬眞剛講述

學校家庭

修身一夕話

菊版洋裝美本上製定價金六十錢郵稅八錢 並製定價三十八錢郵稅六錢

本書は修身倫理の大綱を說き東西古今の偉人碩儒の事蹟を言文一致體に叙述せしものにて、趣味饒多近來稀有の好書なり

伯爵副島種臣題辭
從二位尾崎忠治題辭
鹿川宮内默藏著述

王學指掌

菊版總クロース全一冊
定價金壹圓郵稅金拾錢

王學の吾人心身の修養に大益あることは既に天下識者の認むる所にして。今更論辯を要せじ。而るに從來この學に志すもの。三輪執齋考定本の傳習錄に由りてこれを講究すと雖。奈何せむ該書は雜錄體にして。初學この學の統緒を繹ぬるに便ならず。本書は著者が古傳習錄及文錄等より。この學の講究に最も必要なる條項を擇び。系統的にこれを編纂し。部門を道體學術の二類に分ち。その內又各目を種別し。これが義解と評語とを施したれば。一讀の下直ちにその要領と下手の方法を理會するを得べし。且つ開卷には王子の本傳を擧げて。子の人となりとその事功の詳なるを記す實に近世王學を修むるもの丶一大好書なり。世の志士幸に一讀の榮を賜へ



內藤耻叟序文學博士栗田寬著

天朝正學

菊判洋裝 定價三十五錢 郵稅四錢

紫洲甲秀輔編

德川の孔明

定價郵稅共十五錢

發行所 東京築地二丁目 國光社

華族女學校講師

大宮兵馬著

中等日本文典

菊判總クロース美本

定價五十五錢郵稅八錢

本書は、文典初歩及文典の二冊を以て合本とし、中學程度の教科用に供せんとす。書中編述の事項は現今の普通文に向ひて直に之を應用せしむべき方法を以て各條を規定し併せて之を通俗言語と比較して其差異ある諸點をも會得せしめんと努めたり。其程度配置の如きは著者が授業上の經驗を以て基礎とすと雖もまた明治廿五年二月の發表の中學校教授要目にも準則することと勿論なり、委しくは本書を閲讀して知るべし。

大宮兵馬著

●國語漢文假字遣ひ法

菊判大和綴 定價十八錢 郵稅四錢

大林弘一郞著

●中等國文學史

菊判總クロース 定價六十錢 郵稅八錢

新潟縣師範學校教諭 平野秀吉著

●國語聲音學

菊判總クロース 定價六拾錢 郵稅八錢

華族女學校編纂

●國語假名遣ひ一覽

四六倍三切折本裝本定價拾貳錢郵稅貳錢

井上頼圀校訂 小澤政胤著

國學家略傳

（菊判洋裝總クロース美本 定價一圓五十錢郵稅十錢）

本書載する所は、慶長以來明治二十八年までの有識故實家、神道家、[illegible]學者、[illegible]人、歌人等五百四十名、人名の末には、其の著書目録をあげ、かつ引用書目を明示したり。或は之れを國學者人名辭書ともいふべく、また列傳體國學史とも稱すべし。本書一たび出ても、國學研究者は、暗夜に電燈を得たるの思ひあらん。師範學校、小學校、高等女學校、其他各種ノ學校に於ては、無二の參考用書たるべし。

發行所 東京京橋區築地 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

明治三十七年二月十一日發行　毎月一回一日發行　第拾四年第參號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷